薔薇のマリア Ver3

君在りし日の夢はつかの間に

十文字青
Ao Jyumonji



角川スニーカー文庫


n'ebula story 恋情編
べつに用なんかなくても、
話すくらいよくない?
内心そう思っても、あの視線にさらされると、
とても言えない。
だいたい何か適当に用件をでっちあげて、
当然どうでもいいようなことだから、
冷淡にあしらわれておしまいだ。
結局さぁ。
惚れたほうが負けなんだよねぇ。
A BRAVE HEART OF RED ROSE
Even in the transient reality, we all have our own lives worth loving, protecting, and respecting.
Ver3
Azian (master of "LunchTime")



Azian,Klanny,Kinuko&Michelangelo



Betty (Nazriel Michiko Fond'o'Fond'o'Liesa MEGAS-ALBA)

n'ebula story 事情編

何のためらいもなく人殺しをするような人間は今まで大勢見てきたが、
こいつはなんだか違う。
おそらく、こいつはわかっている。
自分には何かが欠けていると。
それは大事なもので、
決定的ですらあって、
それを持たない自分は不全なのだろうと考えている……。



Azian&Klanny


n'ebula story 純情編
たとえお前が嫌がっても、お前から離れない。
お前は昼飯時(ランチタイム)そのものだからだ。
お前がいないと、昼飯時(ランチタイム)は成り立たない。
お前がどういう男かなんて、関係ないんだ。
Kay,Betty,Micsilia,Darierro,Victoria,Lykiel,Natsuko&Azian

薔薇のマリア Ver3

君在りし日の夢はつかの間に

十文字　青

角川スニーカー文庫

A BRAVE HEART OF RED ROSE Ver3

—n'ebula story—

First published 2007 in Japan
By
Kadokawa Shoten Publishing Co.,Ltd.

illustration ： *BUNBUN*
design work ： *design CREST*

A BRAVE HEART OF RED ROSE Ver3

CONTENTS

CONTENTS

A BRAVE HEART OF RED ROSE Ver3

MAIN CHARACTERS



Betty
ベティ

天才魔術士。疑惑の胸元。



Azian
アジアン

黒様。



Clara
クララ

ナイスバディな高利貸し。



Kay
カイ

粉砕女。



Victoria
ヴィクトリア

医術士。体重秘密。



Lykiel
リキエル

マスクマン。



Natsuko
ナツコ

医術士。ヴィクトリアの妹。



Klanny
クラニィ

取り立て屋。



Darierro
ダリエロ

クラン〈蛇蝎〉頭領。最悪。



Micsilia
ミシーリャ

ぽんぴゅらぽりょりゅんぱー。



Rogan
ローガン

「ミケランジェロ」の雑用係。



Regina
レジーナ

ウェイトレス。



Michelangelo
ミケランジェロ

「ミケランジェロ」店主。



Norika
祝花

匂いフェチ。引っ込み思案。

and the others

Yog Floo-Yo Maid'orf Psychengren'Meiselch
ヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒ

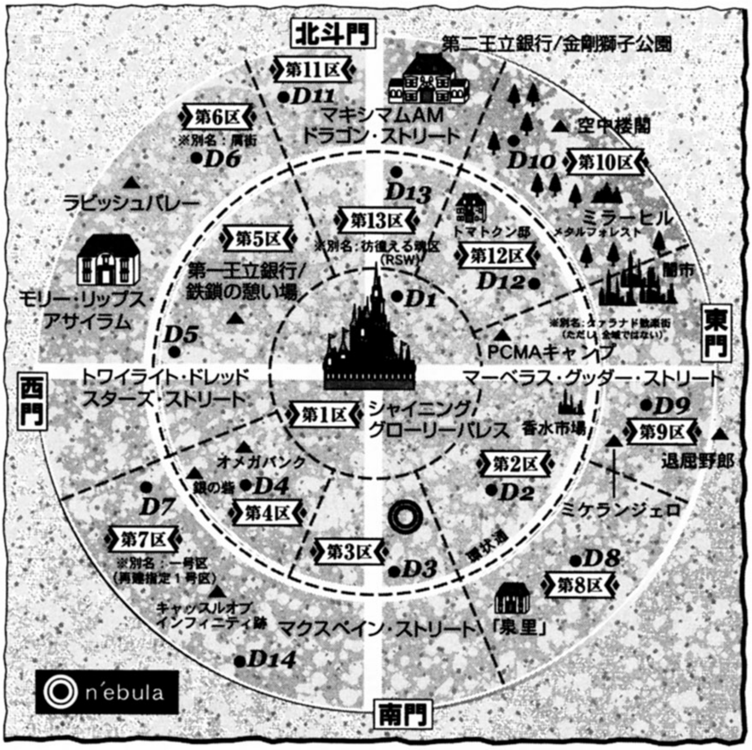
Brother Rage&Sister Rage
レイジ兄妹

Raikiri&Mr.Mou
雷切&ミスター・毛

Kinuko,Otomi,Katsuwo&B·B
キヌコ、オトミ、カツヲ、B·B

and etc.

The World of “A BRAVE HEART OF RED ROSE”



Elden : the Metropolitan area of Sunland Unreign Kingdom
サンランド無統治王国 首都エルデン

MAP製作／On Graphics

nebula story
ネビュラ・ストーリー

切情編

「いっそ、クランでも作ってしまったらどうかな」

　ダリエロが酒を噴ふきだしたのもやむをえないだろう。ベティは目を瞠みはって、へえ、と意味がわかるようなわからないような相あい槌づちを打ち、クラニィはウイスキーが変なところに入ったのか咳せきこんで、リキエルは仮面の奥で低く唸うなり、クァラナド歓かん楽らく街がい八丁目にある「ミケランジェロ」は水を打ったように静まりかえった。

「──と思ったんだけど、ボクは何かおかしなことを言ったかな」

「いやあ」

　ローガンも思わずグラスをふく手が止まっていた。額にどんどん汗あせがにじみだしてくる。妙みょうな汗だ。自分はひどくうろたえているらしい。

「べつに、おかしなことだとは思わないけどね。うん。でも、ちょっとさ、ほら……どう言ったらいいのか、つまり、突とつ然ぜんだったから」

「そうかな」

　アジアンの顔が赤らんでいる。うわあ、とローガンはさらに動どう揺ようしてしまった。アジアンがこの店にくるようになってからもう結構経たつが、初めて見る。もしかしてあれは、恥はずかしがっているのだろうか。クラニィ、ダリエロ、ベティ、リキエルの、毎日のようにカウンターを占せん領りようしている常連客組だけではない。店の女の子たちや、店主のミケランジェロまで、たいそう珍めずらしがってアジアンをじろじろ見つめている。少し気の毒なくらいだ。

「ま、まあ……でも、さ、クランっていうのもおもしろいかもしれないよね。みんな、いつも店にきてくれてるしね。おれはよく知らないけど、クランっていうのもいろいろあるんだろう。そういう集まりがあってもいいのかもしれないよね」

「馬ば鹿か野や郎ろう」

　ダリエロが口の周りを袖そでででぬぐいながら酒さけ浸びたしのカ

ウンターにグラスを置いた。

「何が、いいかもしれないよね、だ、ハゲ。クランだと？　阿あ呆ほなことぬかしてんじゃねぇよ、塵ゴミ屑クズ野郎が。だいたいああいうのはな、目的っていうかよ、共通の利害とかな、そういうのがねぇとまとまれるもんじゃねぇんだ。まとまれもしねぇならやる価値はねぇ。ようするに、無意味ってことだ」

「あんた、意外とまともなこと言ったりするのね」

「黙だまれ、ニセチチ女。犯やっちまうぞ」

「その前に殺やってあげましょうか？」

「殺れるもんなら殺ってみろよ、ああ？」

「弱い犬ほどよく吠ほえるらしいわね」

「糞くそ生意気なメス犬ほどよくよがるみてぇだよな」

「そのへんにしとけ、酒がまずくなる」

　クラニィが頭を引っかきながらため息をついてみせ、天てん井じようを仰あおいだ。

「──クラン、なあ。俺の記き憶おく違ちがいじゃなけりゃ、たしか、いつだったか、アジアン、お前さんにそれらしいことを言ったような気もするな」

「そうだったかな」

　アジアンはもう平静を取り戻もどしたようだ。いや、グラスになみなみとつがれていたウイスキーを一息で飲み干して、すかさずおかわりを要求したあたりからすると、そうでもないのか。以前はどうせ酔よわないくせにむきになって飲んでいたようなきらいもあったが、最近はつきあい程度だ。それにしても、クランなんて。単なる思いつきなのか。それとも、ずっと考えていたことなのか。ローガンにはよくわからないが、少なくとも冗じよう談だんのつもりではなさそうだ。

「覚えてないヨ。キミが何か言ったからとか、べつに関係ない」

「じゃあ、あくまでお前さんの意志ってことでいいか」

「ただの提案サ」

「俺はいいと思うがな」

　クラニィは全員を見まわして肩かたをすくめた。その全員にはローガンもふくまれていた。

「たしかに、ダリエロの言うことにも一理ある。でもな。たとえば利害が共通してるやつらで集まったとしても、その利害ってのがずっと固定されてるものだって保証はない。何かが変わっちまったらそれでお終しまいってのもありだろうが、俺は御ご免めんだな。変わったっていい。気にくわないことがあったら、たまにはぶん殴なぐりあったっていい。それでも、まあ、酒くらいは一いつ緒しょに飲める。そんなクランなら、あっても邪じゃ魔まにはならんしな」

「糞が。なくたって同じだろうが、そんなもんはよ」

「あるってだけで違うもんさ」

「てめぇのぬかすことは戯たわけすぎてて意味不明だ」

「そうかね」

「俺は」

　突然、口を挟はさんできたのは、それまで皆みなの話を黙って聞いていたリキエルだった。

「酒を飲まない。下げ戸こだ。俺のような者はどうすればいい」

「それ以前にてめぇはそのマスクをどうにかしろよ。服も着ろ。てめぇときたら冬でもその恰かっ好こうだろうが。見てるだけで寒々しくてかなわねぇんだよ」

「これは俺のスタイルだ」

「ひでぇスタイルもあったもんだぜ」

「あんただって人のことは言えないでしょうに」

「ハッ、貧ひん乳にゆう女には言われたかねぇ」

「それとこれとはぜんぜん関係ないじゃない！」

「ねぇもんをあるように見せようとしてるだけでバランスってもんが崩くずれてんだよ！」

「あんたにバランスを云うん々ぬんする資格があるとはとても思えないわね！」

「真の均きん衡こうってやつは不均衡の中に隠かくれてるってことがわからねぇ頭の悪い女に口出しされたかねぇなあ！」

「あたしの頭が悪いですって！」

「まさかてめぇ、自分の頭の出来がいいとでも思ってやがったのか！　阿呆が！　それこそがてめぇの救えねぇ間ま抜ぬけさ加減の証明だよ！」

「言ってくれるじゃない」

　急に室温が低下したように感じた。今の今までダリエロに向かって声を荒あららげていたベティが、なんだか気味が悪いほど落ち着きはらって薄うす笑わらいを浮うかべている。まずい。危険な兆ちよう候こうだ。ベティとダリエロが口だけでなく手まで出してやりあいはじめたら、すぐに刃は物ものやら魔ま術じゆつやらが飛び交かう事態に発展するので、そう簡単には止められない。その前になんとか仲ちゆう裁さいに入りたいところだが、ローガンが何か言って聞くような二人だとも思えないから、どうも腰こしが引けてしまう。クラニィも勝手にやってろみたいな呆あきれ顔だし、リキエルは仮面の奥で何を考えているのかわからないし、さて、どうしたものか。

「やっぱり」

　アジアンがぽつりと呟つぶやいた。

「意味がないかな、クランなんて」

　何もそんなに寂さびしそうな声で言わなくても。いや、見れば、アジアンの表情はいつもどおりだし、あらためて考えてみると、そこまでしょんぼりした声こわ音ねだったかといえば、そうでもな

かったような気もするが、その一言で場が妙みようにしんみりしてしまったことは事実だ。ベティとダリエロも気勢をそがれた様子で、矛ほこを収めておとなしくなった。ローガンとしては、ほっと胸を撫なで下ろしながらも、早く誰だれか何か言ってくれないかな、と気が気でない。単なる店員にすぎないおれが口を出すようなことでもないし。そうかといって、ずっと黙だまっていられると、何か話さないといけないような気分になるし。

「いいじゃない」

　だから、ややあってベティが口を開いたときは、今度こそ心の底から安あん堵どして、思わずうんうんと何度もうなずいてしまった。

「いいよ。うん。いいと思うよ。おれも」

「まあ、偉えらそうにどこかで聞いたような手て垢あかのついた理り屈くつをこねて文句ばっかりごちゃごちゃうるさいやつなんか無視して放ほうっておけばいいのよ」

「俺はただ、人間同士がかたまって何かするってだけで、いろいろと面めん倒どうが多いって言ってるだけだろうが」

「いつもいつもこうして面つら突つきあわせて飲んでるわりに、たいして問題もないがな」

　クラニィがそう言って唇くちびるの端はしをゆがめてみせると、ダリエロは渋しぶい顔で舌打ちをした。

「ふざけるんじゃねぇ。俺がたまたまくる店に、糞くそ生意気にも毎度毎度てめぇらが雁がん首くびそろえてやがるだけじゃねぇか」

「そいつはさすがに苦しい言い訳だと思うがね」

「うるせぇ！」

「ところで、俺は下戸だ」

「うるせぇっつってんだろうが、この独う活どの大木が！」

「それは八つ当たり以外の何ものでもない」

「ああ、そうだよ、悪いかよ！　だいたいてめぇ、なんで酒も飲めねぇくせにこんな店きてやがるんだ！　でかい図ずう体たいに似合わねぇストローでちゅーちゅーミルクなんざ飲みやがって、乳ちち離ばなれのできねぇ餓が鬼きでもあるまいし、胸むな糞くそ悪わるい！」

「この店にはアジアンがくるからだ。それ以外の理由はない」

「は、は、恥はずかしい野や郎ろうだな……！　何だ、その理由は、てめぇ、それでも男かよ！」

「ああ。男だ」

　たしかに、リキエルは男らしいといえば男らしいが、それよりも顔を赤らめているダリエロが先ほど赤面していたアジアンにまさるとも劣おとらないくらい珍めずらしくて、今日はちょっと特別な日かもしれないとローガンは嬉うれしくなった。生きていれば、自分のごとき者にも特別な日が訪おとずれる、その事実を受け入れることができそうな今の自分があるのも、この店の主であるミケランジェロと、誰よりもクラニィのおかげだ。

　いつか、クラニィ、きみを友と呼ぶことができたら、それはおれのどうしようもなく傍はた迷めい惑わくな生しよう涯がいで一番特別な日になるだろう。

　もしかしたら、今日は二番目かもしれない。

「べつに、一いつ緒しよに酒を飲むんじゃなくたっていいだろう」

　クラニィが空になったグラスを振ふってみせると、ベティがぷっくりした唇を微笑ほほえませた。

「そうね。お昼ご飯だっていいわけだし」

「それならば下戸の俺でも可能だ」

「みんなで仲よく昼ラン飯チタ時イムをご一緒にすごしましょう、ってか。鳥とり肌はだ物だな。糞くだらなくて、やってられねぇ」

「昼ラン飯チタ時イム、か」

アジアンがほっそりした指で尖とがった顎あごをつまんだ。

「悪くないネ」

「おい、アジアン、てめぇ冗じよう談だんじゃねぇぞ。何が悪くねぇんだよ」

「名前だヨ。クランの」

「センスってものがねぇのか、てめぇには。どこが悪くねぇんだ。最悪じゃねぇか。ちょっと考えただけで、もっとマシなのがいくらでも思いつきそうなもんだろうが」

「蛇だ蝎かつよりは千倍マシじゃないの？　いいわよ、昼ラン飯チタ時イム。軽いかんじで、覚えやすそうだし、意味もちゃんとあって。それに、同じ名前のクランもなさそうだわ」

「だからって昼ラン飯チタ時イムはねぇだろ、昼ラン飯チタ時イムは！」

「あら。ダリエロ。あんたも仲間に入れて欲しいの？」

「だ、誰が……！」

「じゃあ、どんな名前だろうと、あんたには関係ないじゃない」

「か、関係ねぇよ！　関係ねぇから何だってんだ！」

「何だって言われても、ねえ？」

「そういじめてやるなよ、ベティ。そいつはそいつで寂さびしがり屋だったりもしてな。素す直なおになれないだけなのさ」

「てめぇ、クラニィ！　この俺が寂しがり屋なわけねぇだろうが！」

「頭が必要だな」

リキエルの太い声は過か剰じようなほど重々しくて、厳おごそかささえ感じさせた。

「俺の故郷でも部族には必ず長おさがいた。クランにも頭領マスターが必要だ」

「さいわい人数が少ないからな。指名制でぱっぱと決めちまうか」

　クラニィは隣となりに座っているアジアンの肩かたを抱だくようにして叩たたいた。

「というわけで、俺はお前さんに一票だ」

「あたしもアジアンに一票」

「むろん、俺も〝彷ワ徨ンえダるリ星ン神グソオル〟の名においてアジアンだ」

「言い出しっぺだからな。アジアン、てめぇがやれ」

　さりげなく指名に参加したダリエロに、ベティが意味ありげな視線を向けたものの、口に出しては何も言わなかった。

　ベティが声をかけたのはローガンだった。

「あんたは？」

「へ？」

「ああ、結果はもう出ちまってるけどな。てめぇもさっさと指名しやがれ」

「そうだな」

「……お、おれも？」

　自分を指さしながら、クラニィを見た。クラニィは笑っていた。でも、おれはただの店員だし。おれは、みんながくる店の従業員なだけで。それは、店が終わったあと、みんなと一緒に飲むこともあるけど。それは、おれがたまたまこの店で働いているからで。

　深呼吸をした。

　いい年して、みっともないね。

　そうじゃなくて、きっと年のせいだよ。最近どうもいろんな場所がゆるんできてさ。

「おれも、アジアンかな」

「決まりだな」

　クラニィがアジアンの肩を揺ゆすって、頭を撫なでた。

「今日からお前さんがクラン昼ラン飯チタ時イムの頭領マスターだ。せいぜいしっかりやれよ」



「──え……ボクが……いや、でも、こういうのは、むしろキミのほうが」

「お前さんが俺に一票入れたとしても、五対一だ。ぜんぜん足りねえよ。ようするに、お前さんと違ちがって俺には人徳ってものがないんだろうさ」

「そんな、ボクにだって──」

「あきらめなさいな。がんばってね、頭領マスター」

「何も心配することはない。頭領マスターの命令に従わない不届き者は俺が斬きり伏ふせる」

「誰だれが斬られるかよ。だいたいこの俺に命令なんざしてみやがれ。即そく座ざに殺してやる」

「いやあ、先が思いやられるね」

　ローガンはそう言いながらも、歩きはじめたばかりの道の行く先を案じてなどいなかった。たとえ断だん崖がいに突つき当たっても、今こうして踏ふみしめている地面の感かん触しよくを忘れることは決してないだろう。その記き憶おくを抱いだいているだけで、笑って目を閉じられる気がする。願わくばいつまでも彼らと歩いてゆければと思うが、贅ぜい沢たくを言えばきりがない。

　だから、今だけでいい。

　今だけは何も考えず、この胸を一いつ杯ぱいにしていよう。

nebula story
ネビュラ・ストーリー

事情編

1

餓が鬼きのころの話だ。

自分より年上で遥はるかに身体からだのでかい餓鬼の耳を、ゴリッギュシャッと噛かみちぎってやった。

そいつはとある慈じ善ぜん家かぶった偽ぎ善ぜん者しやの貴族が運営していた糞ふん尿にようくさい孤こ児じ院いんの中の暴君だった。誰彼かまわず性的あるいはそれ以外の暴行を思うままにふるう、先天的サディストで反社会的人格者で変態の糞くそ餓鬼だった。

そいつの両耳を食いちぎった俺は孤児院のヒーローになった。

次の瞬しゆん間かんには新しい暴君と化した。

俺は奴やつ以上のサディストで反社会的人格者で変態の糞畜ちく生しよう餓鬼だった。

孤児院は俺の王国になった。

餓鬼のころの話だ。

汚お濁だくをたっぷりしみこませた塵ちりが空から降ってくる夜明け前のサンランド無統治王国首都エルデン第九区、このクァラナド歓かん楽らく街がいの外れから遠く離はなれた街に捨ててきた、くだらない、惜おしくもない、どうでもいい思い出だ。

「しかし、なかなかに悪くねえ女だったし、犯やったあとに殺やっちまったのはちょっともったいなかったですかねぇ」

逆モヒカンのギンジーが顎あごをなでながらヘラヘラ笑っている。それなりに残ざん虐ぎやくな野や郎ろうだが、笑い声に媚こびがあってどうにも不快だ。ギンジーの隣となりで手を叩きながらアキャキャキャ奇き声せいを発している辮べん髪ぱつのジョン・ビーにしても、それは変わらない。

「けどさァ、仕方ねィよ。あの女、アフターのサービスってのがわかってねィんだもん。言うこと聞かねィ女は犯ったら殺っちまうにかぎるって。ほっとくとつけあがッからなァ。思い知らせてやらねィとさァ？」

「ボケ！　思い知ったって死んだら意味ねえじゃん！　ウヘハハハヘハァッ！」

「そりャそゥだ！　アキャキャ！」

「まったくジョン・ビー、てめえはドアホだな」

「うっせィなギンジー、てめィにゃゆわれたかねィッつんだよォ」

「いいや。てめえほどのアホはそうそういやしねえよ。ねえ、ボスもそう思いませんか」

「そ、そそそそォんなことないッスよねィ、ボス？」

　ギンジーはジョン・ビーをおとしめることで自分をいくらかでもマシに見せようとして、ジョン・ビーはギンジーにからかわれてやって憎にくめないお調子者的な役割を演じようとしている。二人とも根っからの殺人者のくせに、飼い馴ならされた犬みたいなこのザマはなんだ。

　ふと思う。殺っちまうか。

　そうやって俺は繰くり返す。支配して、手に入れては嫌いや気けが差し、壊こわして、また餓うえる。こんなはずじゃなかった。そんなうざったい思いが始終つきまとっている。俺が欲しかったのはこんなものじゃない。じゃあ、何だ？　俺はいったい何が欲しいんだ……？

「ジョン・ビー」

　名を呼ばれると、ジョン・ビーはビキビキ顔を引きつらせて生なま唾つばを飲みこんだ。

　それを見て期待に目を光らせたギンジーは、毛虫以下の害虫にも劣おとる臭くさくて臭くてたまらない生ゴミ野郎に違いない。

「ギンジー、てめぇもだ。アホだよ。てめぇらは。ミジンコより下

等な塵ゴミ屑クズだ」

　ジョン・ビーとギンジーは一瞬目を見あわせてから、ぎこちなくて不細工な愛想笑いを浮うかべた。すんません、そうッスよねィ、と、二人してペコペコ頭を下げて冗じよう談だんにまぎらそうとしているが、びっしょり汗あせをかいているし、身体がガタガタ震ふるえている。媚びへつらいやがって。クソうぜぇ。畜生め。くだらねぇ。ああ、くだらねぇ。何もかもくだらねぇ。くだらなすぎて、殺意を覚えずにはいられない。そうだ。殺せ。殺せ。殺しちまえ。

　舌なめずりをして首を傾かしげると、二人が後ずさった。だが、奴らは命拾いした。

「──白はく髪はつ。左右非ひ対たい称しようの妙みような服。引きつったような顔。右目は青くて、左目は黒。わかりやすくて間ま違ちがえようがない」

　前だ。

　そいつは十メーテルほど先の角から進みでてきて、道のど真ん中で立ち止まった。

　膝ひざ丈たけのコートを身につけ、無ぶ精しよう髭ひげを生やして、眉まゆ尻じりが下がっている男だ。

「〝蛇だ蝎かつ〟のダリエロだな」

「な、何だテメエ！」

「ナニモンだ！」

　ギンジーとジョン・ビーが即そく座ざに得物を抜ぬいて身構えた。ただ、二人とも、内心ではむしろほっとしているかもしれない。奴が現れなければ、今ごろどうなっていたことか。俺は──たぶん、ギンジーとジョン・ビーの息の根を止めただろう。しかし、そんなことをしたところで何がどうなるわけでもない。ちょっとした気晴らしにしかならない。

　ダリエロ。

　たしかにそれは俺の名だ。

　ダリエロは右目をすぼめて、左目を一いつ杯ぱいに見開いた。

「だったらどうだってんだ」

「金を返してもらいにきた」

「金ぇ……？」

「ああ」

　奴やつはコートのポケットからくしゃくしゃの紙切れをとりだして広げ、地面に放ほうった。

「請せい求きゆう書しよだ。仕事なんでね。一応作ることにしてる」

「心当たりがねぇな」

　ダリエロはギンジーとジョン・ビーを押しのけて、紙切れを踏ふみつけた。

「借金はしねぇ主義だ」

「だろうな。お前さんみたいな人種は、借りるくらいなら奪うばう。そうだろ？」

　奴は薄うす笑わらいを浮かべて腰こしの後ろに両手を回した。やるつもりか。

「わかってるよ。俺は取り立て屋だが、必ずしも借金取りってわけじゃない。返してもらいたいのは、六日前、お前さんとお前さんの手下がある男を殺して奪った金だ。男の名はウェイ・ルーズ。侵クラ入ツカ者ー稼か業ぎようでせっかく稼かせいだ金を、毎度毎度博打ばくちですっちまうろくでなしさ。髪かみの色はブラウン。目はくすんだ青。顎が割れてて、鼻がでかい。身長は約百七十六サンチメーテル。体重は正確にはわからんが──」

「この野郎、わけのわからねえことをごちゃごちゃと！」

「黙だまらせてやる……！」

　ギンジーとジョン・ビーが男に飛びかかっていった瞬しゆん間か

ん、こんな雑ざ魚こどもを手下にしている自分にむかっ腹が立った。相手は一人で三人を向こうに回し、悠ゆう然ぜんと構えている男だ。それだけでも只ただ者ものじゃないことは見てとれるし、身のこなしにまったく隙すきがない。明らかに玄人くろうとだ。

　それなのに、あの阿あ呆ほどもときたら、創意も工夫もへったくれもなく、ただまっすぐ突つっこんでいきやがった。一見、さして風ふう采さいの上がらない男だし、二人でかかればいちころだろうとたかをくくったのか。だとしたら、使いものにならない大おお馬ば鹿かっぷりだし、その救いがたい愚ぐ劣れつさに相そう応おうの報むくいを奴らは受けることになるだろう。

「──ひぐッ」「あげどッ……！」

　果たして、二匹ひきの阿呆は、あの男が腰の後ろから抜いた棍こん棒ぼうで横っ面つらを殴なぐられ、無ぶ様ざまに転てん倒とうする羽目になった。左手にその棍棒、右手には短めのモトロール刀を持っての二本使いか。だが、奴は阿呆どもを斬きらなかった。左手の棍棒だけであっさり処理してみせた。今、奴はどう動いた？　決して遅おそくはなかったが、それほど速くは見えなかった。とくに圧力のようなものも感じなかった。二人はまるで、自分から奴の棍棒に向かっていったかのようだった。奇き妙みような話だが、そんなことがごく自然に行われたのだ。どういう男なんだ。

「てめぇ、おかしな技わざを使いやがるな」

「そうでもないさ。〝蛇蝎〟のダリエロ。あんたは暗器使いだそうだが」

「ああ」

　ダリエロが右みぎ腕うでを下から振ふり上げると、袖そでから勢いよく何かが飛びだした。鎖くさりだ。先せん端たんに分銅がついている。男は身をよじってとっさに分銅をよけたが、ダリエロの狙ねらいは最初から奴ではなかった。奴が右手に持っている刀だった。

「そのとおりだ」

　うまく刀に巻きついてくれた鎖をつかんで、思いきり引っぱった。奴が刀を手放さなくてもよかった。少しだけ奴の体勢が崩くず

れた。それだけで十分だった。

　ダリエロは突とつ進しんした。奴は棍棒でダリエロの横っ面を狙ってきたが、そんなものは右の前ぜん腕わんに仕込んであるプロテクターであっさり弾はじいてやった。懐ふところに入りこんで奴をぶん殴ると見せかけ、さらに距きよ離りをつめた。身をかわしかけた奴に組みついて、頭ず突つきをぶちかまそうとした。できなかった。

　いつの間にか、奴はダリエロに背中を向けていた。

　奴の後頭部を見た。

　その瞬間だった。

　ダリエロは浮ういていた。

　投げられたのか。わけがわからねぇ。やっぱり奇妙な技を使いやがる。ダリエロは笑った。笑いながら身体からだをひねってなんとか受け身をとろうとした。それを見み越こして、奴がグッと鎖を引っぱりやがった。おかげでダリエロは肩かたから地面に叩たたきつけられた。

　殺やられる、と思った。

　久しぶりの感覚だった。

　自分は間違いなく生きている。

　ここで、この世界で、息をしている。

　しばらく忘れていた。今、思い出した。

　ダリエロは両りよう眼めを思いきり見開いて、おのれが置かれている状じよう況きようを即そく座ざに完全に把は握あくした。鎖はもう切られている。俺は右肩を下にした無様な恰かつ好こうで地面に倒たおれこんでいて、すぐ目の前に奴がいて、今まさに刀を振り下ろそうとしている。一秒後の俺は、奴の刀に頭をかち割られて、脳のう漿しようや脳みそをぶちまけ、アヒャヒャヒャ嗤わらいながら死ぬってのはこんなものかと考えているに違ちがいない。このままだとそうなる。

いいや、ならねぇ。

ダリエロは左の奥歯を嚙かみ砕くだいた。作り物の奥歯の中に仕込まれていたピチコート11が唾だ液えきと大気に反応して、大量の真っ赤な粘ねん液えきに変化し、口こう腔こう内を満たしてすぐにあふれた。ダリエロはそれを奴めがけて吹ふきかけてやった。

「──なッ……！」

顔面をふくめた上半身に赤い粘液を浴びて、奴の動きが一瞬止まった。もちろん刀もだった。ダリエロはその隙に起きあがりつつ、左手を鋭するどく振って刀とう子すを投げた。奴は、だが、目め潰つぶしを食くらっているのにもかかわらず、刀子をよけた。見えるはずがないのに、見えているかのようだった。どうやって感じてやがるんだ。どうでもいい。

ダリエロは両手のプロテクターを拳こぶしが隠かくれる位置まで押しあげて、奴につめよろうとした。奴は下がった。まっすぐじゃない。目の周りの粘液をコートの袖でぬぐいながら、右へ左へのらりくらりと後退してダリエロを近づけさせない。苛いらつく動きだ。とらえどころがない。だったら、とらえてしまえばいい。

ダリエロはベルトから両りよう端たんに分銅がついた短いワイヤーを抜ぬくなり、奴やつの足あし許もとめがけて投げつけた。

一本目は囮おとりだった。

二本目が本命と見せかけて、三本目を奴の右足に絡からみつかせることに成功した。

しかも、分銅がうまい具合に奴の左足を強打した。

奴はバランスを崩しかけた。

「チィッ……！」

「フハハアァァッ……！」

懐に入りこもうとするダリエロに向けて奴が突きだしてきた刀の切っ先は鈍にぶく、頰ほおの皮ひ膚ふを浅く斬きり裂さいただけだった。棍こん棒ぼうの一いち撃げきは右肩にズンと重く響ひびいたが、わざとまともに食らってやったのだ。ダリエロは舌なめずり

しながら奴の両腕をわしづかみにして、頭突きを見み舞まった。一発。二発。奴は、ぐっ、がっ、と呻うめいて刀と棍棒を取り落とした。

　そう思った。

　違った。

　奴は落としたんじゃない。

　あえて手放したのだ。

　両手を自由にするために。

「──ハッ……ガ……アッ……！」

　何をされたんだ。俺は、いったい何を。

　左右の脇わき腹ばらだ。両側に何かを押しつけられて、そこから何かが流れこんできた。それは熱とも振しん動どうともつかないものだった。とにかく強きよう烈れつだった。奴の手だ。奴が何かしやがった。フハハッ。おもしれぇ。やりやがったな、畜ちく生しょう。足がふらつきやがる。目の前がぐらぐらしている。倒れちまいそうだ。身体に力が入らねぇ。入らねぇだと？　糞くそが。ふざけるな。

　ダリエロはかまわず奴に殴なぐりかかった。こうして何人も殴り殺してきたのに、奴はダリエロを軽くあしらってみせた。まるで大人と子供だ。俺が餓が鬼きで奴が大人か。ありえねぇ。冗じよう談だんはやめろ。認めねぇ。ダリエロは舌を少しだけ嚙みちぎった。気合いが入った。奴は涼すずしい顔でもう俺を制圧できた気でいるだろう。とんだ勘かん違ちがいだ。思い知らせてやる。

　ダリエロはふらふらしながら奴に迫せまってゆき、不意にしゃがんで奴に足あし払ばらいをかけた。まんまと引っかかりやがった奴に飛びかかり、叫さけびながら拳を浴びせた。棘とげつきの指輪を嵌はめたダリエロの拳は見る間に奴の顔面を血ち塗まみれにした。奴も応戦してきた。奴に関節をつかまれるとなぜか力が抜けた。知ったことかと奴をぶん殴った。顎あごの先に拳げん骨こつを食らって気が遠くなりかけた。喉のど仏ぼとけに肘ひじ打うちを見舞われたときは苦しくて死ぬかと思った。死ぬ。俺が死ぬ。死ぬのか。やだね。まだ死なねぇよ。俺は死なねぇ。ダリエロはむしゃぶ

りつくようにして奴を殴りつけ、蹴けったくって、嚙みつき、殴おう打だされ、蹴飛ばされて、投げ飛ばされた。奴が、いいかげんにしろよ、と言いながら、ダリエロの左目に妙みような形で握にぎった拳を叩きつけた。一いつ瞬しゅん、何も見えなくなったが、いいかげんにしねぇよ。そう答えながら、ダリエロは奴に突っかかっていった。

2

「……そ……ったれ……割りに、あわねえぞ……」

　限界だ。とてもじゃないが、これ以上は歩けそうもない。とりあえず、少し休むか。いや、もう身体が勝手に前へ傾かたむいていっている。とっさに身をよじって、横向きに倒れるのがやっとだった。まいったな。しばらくは立てそうにない。外れのほうだとはいえ、ここはクァラナド歓かん楽らく街がいだ。酔よい潰つぶれた阿あ呆ほどもの身ぐるみを剝はぐのが専門の小悪党も大勢うろついている。死んだふりでもしているか。同じことだな。連中にとっては、相手が生きていようが死んでいようが関係ない。抵てい抗こうされたら息の根を止めればいいという考えの者も中にはいるだろう。何しろ、エルデンだしな。つまり、情にほだされてつい糞餓が鬼きの馬ば鹿かげた依い頼らいなんぞ受けちまい、金にもならねえのにあんなタフな野や郎ろうとやりあう羽目になって、こんな襤ぼ褸ろ雑ぞう巾きんみたいな有あり様さまに成り果てた俺がとことん間抜けだってことだ。

「……あの野郎……笑って、やがったからな……」

　眼球が飛びだすほど殴られまくって、何がおもしろいのか知らないが、とにかく半はん端ぱじゃなかった。〝蛇だ蝎かつ〟のダリエロ。チンピラどもにかつがれているお山の大将だというのが世間の評判みたいだし、実際、手下には恵めぐまれていないようだが、あの迫はく力りょくとしぶとさは並なみ大たい抵ていじゃない。十人かそこらの小さなクランの頭に収まっているのが不思議なくらいだ。

「……誰だれも……ここまでとは、思わねえ……よ……」

やってられねえ。

冷たい地面が意外と気持ちいい。

酒でも飲みたいところだ。

行きつけの店でも行くか。

どうやって？

「……さて、ね……」

考えている間に日が昇のぼりそうだ。朝まで生きていられたらの話だけどな。保証はない。というより、かなりやばそうだ。糞餓鬼め。面めん倒どうな仕事頼たのみやがって。だから餓鬼は嫌きらいなんだ。ある日、突とつ然ぜん、保護者を失った餓鬼のツラを見るのがとてつもなくいやだ。あいつらの哀あわれっぽい顔から目をそむける自分が。抵抗されたから仕方なかった。殺すつもりはなかった。運が悪かったんだ。俺が悪いんじゃない。じゃあ、何が？　強しいて言えば、社会か。世の中の仕組みが悪い。全員が犠ぎ牲せい者しやだ。犯罪者組織の末まつ端たんの末端にぶらさがって治安維い持じ騎き士し団だんに睨にらまれたお前さんの父親も。それで自宅に踏ふみこまれ、お前さんの父親は興奮したのか混乱したのか剣けんを振ふり回して、俺に殺された。俺はそいつに子供がいることは知っていたが、その息子の前でそいつをぶっ殺す羽目になるとは思っていなかった。俺はばつが悪かった。ものすごくいやなかんじだった。親おや父じを殺されたお前さんも、殺した俺も犠牲者だ。俺のせいじゃない。お前さんのせいじゃない。お前さんの親父のせいでもない。誰のせいでもない。

そんなわけがあるかよ。

足音が聞こえた。

人通りの少ない道だから、もしかしてなんとか大だい丈じよう夫ぶかも、と期待していなかったとはいわない。ただ、まあ、落らく胆たんするほど希望を持っていたわけでもなかった。一人か。静かな足音だ。近づいてくる。どうしたものか。やはり死んだふりでもしているか。せっかく奪うばい返した金もとられちまうだろうが、しょうがない。そもそも命まで懸かけるような仕事でもない。いざとなったら命いのち乞ごいでも何でもするさ。くだらなくてみじめ

な死に様ざまをさらすために、安定した職を捨ててエルデンくんだりまできたわけじゃねえんだ。薄うす目めを開けて足音のほうを見た。このあたりは暗いから、そいつの姿は遠くの明かりにぼんやりと浮うかんでいるだけだ。

　そいつは黒ずくめだった。

　細身だ。

　女みたいだと思うほど小こ柄がらではないが、男にしては華きや奢しやな部類に入るだろう。

　少し気が抜ぬけた。すぐに考えなおした。見かけで人を判断すると痛い目に遭あう。とくにエルデンではそうだ。子供のような形なりで、他ほかの国では何回処しよ刑けいされても足りないくらい悪事の限りを尽つくしている輩やからがいたりする。この国において善悪なんてものは戯ざれ言ごとに近い。油断するな。用心しろ。といったって、何ができるわけでもない。だけどな。金。金か。

　職業倫りん理りってやつなのか。どんな仕事だろうと仕事は仕事だ。受けた依頼は果たさないとならない。信用第一だしな。さあ、どうする。どうすりゃいい。

　黒ずくめの男が近づいてくる。

　左手をそっと腰こしの後ろにのばして棍こん棒ぼうを握にぎった。一見、握りがついたただの短いまっすぐな木の棒だが、金属の芯しんが埋うめこまれていて先のほうが重くなっている。バディエドと呼ばれるハッツフォー独立軍領治安維持騎士団の制式装備だ。いざとなったら、こいつを一発見み舞まって逃にげるか。無理だな。そんな体力は残っていない。それよりは、死にものぐるいで相手をぶち殺すほうがまだ現実味がある。どっちにしても、望みは薄そうだが。

　相手が悪い。

　あいつはやばい。

　たいした根こん拠きよはない。せいぜい勘かんとか直感とか、そんなたぐいのものだ。それなのに、はっきりと感じる。あんなほっそりした野郎が、とてつもなく危険だと。やつの危険性を頭より身体からだが察知している。猛もう獣じゆうに喉のどをがっちり嚙か

まれ、観念して食物連れん鎖さにおとなしく従うことを覚かく悟ごした子こ鹿じかみたいな状態だ。萎なえる。もういいんじゃないか、と思いそうになる。流れに任せろよ。ごちゃごちゃ考えるな。それが運命だ。そんなふうにすべてを諦あきらめさせようとするあの野郎は、いったい何ものなんだ……？

　やつは五メーテル手前で足を止めた。

　息ができない。これじゃあ値ね踏ぶみされている家か畜ちくだ。どいつが買われて食われるのか。選ばれても抵抗はできない。あらがっても無む駄だだからだ。どうせ食われる。というか、どいつもこいつもない。他に選せん択たく肢しなんかない。

　俺だけだ。

　やつが選ぶとしたら、俺しかない。

　もうやっちまうか。

　バディエドを握る手に少しだけ力をこめて、奥歯を嚙んだ。

　飛び起きる前に、やつがまた歩きはじめた。

　駄だ目めだ。きっかけが失われた。立てない。じっとしているしかない。あの野や郎ろう、わかってやっているんじゃないのか。だとしたら、そうとうタチが悪い。

　やつはさらに近づいてくる。

　落ち着きはらった、やはり静かな足どりだ。

　ひょっとして、死体だと思ってくれたのか。

　そうだ。行き倒だおれなんざエルデンでは珍めずらしくもない。俺は死体だ。粗そ大だいゴミだ。それでいい。そのままどこかへ行っちまえ。

　二メーテル。

　一メーテル。

　おい。

そこで止まるなよ。

頼たのむから、止まるなって。馬ば鹿か野郎。なんで止まる？

俺が震ふるえているせいか。

「……なあ」

知らずに声を出していた。

暗くてやつの顔は見えなかった。

なんとなく、殺されることはなさそうだ、と感じた。

なんとなく、だ。

「手を、貸してくれねえか」

どういうつもりなんだろうな、俺は。

自分自身を訝いぶかりながらも、左手をバディエドから離はなしてかすかに笑ってみせた。

「立つのも……億おつ劫くうでな。見てのとおり……まあ、自じ業ごう自得だがな」

黒ずくめの男は黙だまってこっちを見下ろしている。

目を閉じると、思い出したように身体中が痛みはじめ、呻うめき声をもらしそうになって、どうにかこらえた。くそったれ。ダリエロの野郎。殺しておけばよかったか。執しゆう念ねん深そうだしな。そのうち仕返しにくるに違ちがいない。あんな男につけ狙ねらわれたら、命がいくつあっても足りやしねえ。そうだ。殺せばよかった。殺すべきだった。やつは気絶するまで嬉き々きとして向かってきた。気色の悪い変態野郎だ。どうして殺さなかったんだ。

しょうがないさ。

俺は殺し屋じゃない。

取り立て屋だ。

仕事には領分ってものがある。人の息の根を止めるのは俺の仕事

じゃない。俺がやっているのはあくまでビジネスだ。金を取り立てて、金を稼かせいで、生きる。それだけだ。

　くだらねえ。

　正直、そう思わなくもない。

　でもな。

　どれほどくだらなくたって、這はいつくばって、転げまわって、どうにかこうにか生きているやつが、この街にはごまんといる。

　俺もその一人ってわけだ。

「て」

「……あ？」

　目を開けた。

　黒ずくめの男が身をかがめてこっちへ手をのばしていた。

「手を貸して欲しいんだろう」

　冷たい声だった。

　感情を押し殺しているのではなく、最初から情動が欠けつ如じよしているかのような、偽にせ物もののような、作り物のような、透とう明めいな、鋭えい利りな、妙みようにきれいな声こわ音ねだった。

　その声につられるようにして出した手を、男はためらう様子もなく握った。

　あっという間だった。

　男の手に引っぱられて、気がつくと立ちあがっていた。

「……悪いな」

「歩けるのかい」

「いや……どうかな」

　あまり自信はなかった。げんに、こうしていても足あし許もとがふらついて、立っているのがやっとだ。手足は骨折していないが、肋あばら骨ぼねは何本か折れているし、おそらく内臓にもダメージを受けている。頭部や顔面は打だ撲ぼくや創傷だらけで、出血の量もかなりのものだ。

　それなのに、男はすっと脇わきに身体からだを滑すべりこませて、肩かたを貸す体勢になった。

「どこかあてはあるの」

「……ああ、まあな。だが、お前さん――」

　何を言おうとしたのか忘れた。

　雲が風に流されて、かくれんぼうをしていた月が地上に銀色の光をふりまいた。

　男の顔が月明かりに照らされた。

　まじまじと見てしまった。

　その凍いてついた薄うす青あお色の瞳ひとみに自分の姿が映っているなんて信じられなかった。

　思わず目を疑った。

　声以上だ。

　なんてきれいな顔をしてやがるんだ。ありえねえ。

3

　第三区はある意味、エルデンの中では一番まともな街まち並なみだ。

　そこには老ろう若にやく男なん女によがひしめきあって暮らしていて、ごくごくあたりまえのありふれた生活がある。その生活とやらはあまりにも脆もろくてはかないが、大半の人間はそれにしがみ

つかないと生きてゆけない。人里離れた山の上で霞かすみを食くらって悠ゆう然ぜんと下界を眺ながめてすごす東方の仙せん人にんみたいな生き方は、誰だれにでもできるわけではないからだ。中には日がな一日盗ぬすんだり殺したり奪うばったりすることばかり考えている異常者もいるだろうが、そう多くはない。悪党バスターだの悪漢だの屑くずだのと呼ばれる連中も、たまにはほっと一息つける場所を欲ほっしていたりする。反へ吐どが出そうになるうんざりＳＩＣＫな生い立ちやら環かん境きようやら人間関係のせいで超最低ＳＵＣＫなクソ野郎モウフオに成り果てても、人が人であることからはなかなか離れられるものではないということだろう。

　その建物は第三区にあるピンからキリまでのキリに近いほうで、折り重なるように建ち並んでいる雑な補修に粗あらっぽい補修を重ねた古い二階建てのうちの一棟むねだった。とはいえ、すぐ近くに護衛付きの高級集合住宅がそびえ立っていたりするのが第三区で、そうした雑多な空気にまぎれて毎日をつつがなく暮らすのがこの街の住民たち、とくに決して裕ゆう福ふくではない連中の処世術だ。ウェイ・ルーズという男もそうして生きていたのだろうが、何かの拍ひよう子しで道を踏ふみ外してしまった。そうなれば、あとは崖がけから転げ落ちるだけだ。それが現実だ。

　金属製の階段はひどく錆さびていて、ところどころに穴があいていた。

　二階の奥の部屋にたどりつくためには、外廊ろう下かに積みあげられた大量のゴミの脇をすり抜ぬけなければならず、悪態よりもため息が出た。

　ドアは木製だった。あちこち黴かびているし、端はしのほうが腐くさっている。少し力を入れて叩たたいたらぶち破ってしまいそうだ。ノックしていいものかどうか迷っているうちに、ドアが開いた。出てきたのは、ふてくされたような顔をした餓が鬼きだった。焦こげ茶色の髪かみの毛がボサボサで、身につけた衣類も肌はだも垢あか染じみているが、利発そうな目をしている。ぎゅっと引き結ばれた唇くちびるが生意気そうで、同時に哀あわれだ。ありとあらゆることを我が慢まんしないといけなくて、押し潰つぶされたようにゆがんでいる。餓鬼は嫌きらいだ。

「よう」

「……何？」

「人に仕事頼たのんどいて、何、はないだろう」

一応、笑え顔がおを作ってみたが、餓鬼の疑わしげな眼まな差ざしに変化はない。まあ、誰でも彼でもすぐに信じて、うまい話に見境なく飛びつくよりはいいかもしれない。

「トミー・ルーズ」

コートのポケットに右手を突つっこんで封ふう筒とうをとりだし、餓鬼に差しだした。

封筒に目をやった餓鬼は、怯ひるんだように首をすくめた。

「確かく認にんしてくれ。取り返した金だ」

「……ほんとにやったんだ」

「仕事だからな。引き受けた以上はやるさ」

「馬ば鹿かじゃないの」

「そうきたか」

左手で額をボリボリ搔かいていると、今度は欠伸あくびみたいなため息が出た。ああ、面めん倒どうくせえ。これだから餓鬼は。何が悲しくて、無理やり封筒を握にぎらせ、開けろ、とうながすところまでやらないといけないのか。

餓鬼は渋しぶ々しぶといったかんじで封筒を開けてひっくり返し、まだ小さな掌てのひらで硬こう貨かを受け止めた。千ダラー金貨が二枚、五百ダラー銀貨が四枚、百ダラー真しん鍮ちゆう貨かが八枚、あとは五ダラー緑銅貨が一枚で、しめて四千八百五ダラー。大金ではない。端はした金がねといってもいいだろう。しかも、トミー・ルーズの父親ウェイ・ルーズは、その金が目的で殺されたわけではない。場末の酒場で大おお騒さわぎしていた連中を見て舌打ちをした。ウェイ・ルーズが殺される羽目になった直接の原因はそれだ。凶きよう暴ぼうで腕うで利ききの頭領の威いを借りていい気になっていた〝蛇だ蝎かつ〟の雑ざ魚こどものうちの一人が、その舌打ちを耳にした。運が悪かったのか、迂う闊かつだったのか、まあ、その両方だろうが、たったそれだけのことで、ウェイ・ルーズは私刑リンチされ、必死で命いのち乞ごいをして、ダリエロの前に引きだされ、やつの「うぜぇ、さっさと殺やれ」の一言で運命が決

まった。ウェイ・ルーズは撲ぼく殺さつされた。所持金は〝蛇蝎〟の雑魚が奪った。その金額を調べるのも手間だった。餓鬼の証言を参考にして、父親の行きつけの店を何なん軒けんも回った。馬鹿げた仕事だった。

「封筒の中にな。明細が入ってる。そう、その紙切れだ。読めるか」

「……少しは」

「そうか。最初に言ったように、手数料は四割だ。つまり、その金は親おや父じさんの所持金の六割ってことだ。四割はもう引いてある。七千八百五ダラーから、三千ダラー引いた。わかるか。本当は三千百二十二ダラーが俺の取り分だが、ちょっとだけおまけしてやった」

「何それ。もしかして、親切のつもり？」

「くだらんことをぬかすな。俺がお前さんなんぞに親切にして、何かいいことでもあると思うか。上客にはなりそうもないしな。ただ単に細かいのは面倒だからさ」

「そんなことだろうと思った」

「だったらいちいちきくなよ」

　餓鬼のくせに顔を引きつらせるようにゆがめて笑うのを見て、こっちまで苦く笑しようしてしまった。

　父親を失ったトミーは一人きりだ。母親の顔は覚えてもいないという。死んだのか、行方ゆくえをくらましたのか、それさえも不明らしい。トミーはたった一人の肉親である父親を嫌って、恨うらみ、そして心配していた。酒飲みで博打ばくち好きでだらしないろくでなしでも、トミーにとっては代えのきかない父親だった。

　俺はもう目をそらさない。

　せめてその視線を受け止めてやる。

　俺がそうしたいから、そうするだけだ。



「トミー」

「……何だよ」

「第六区にな。アサイラムってところがある。聞いたことはあるか」

「ないよ。知らない」

「一人でやっていくのが面倒になったら、行ってみろ。飯くらいは食わせてくれるぞ」

「行かないよ、そんなとこ。自分のことは自分でなんとかする」

「そうか」

　トミーの頭を撫なでてやった。小さな頭だった。文句を言われそうだったから、すぐに手を引っこめて踵きびすを返した。一度、立ち止まって、また何かあったら、と言おうとしてやめた。相手は餓鬼だ。それに、何もないほうがいいに決まっている。

「じゃあな」

　振ふり向かずに手を振って、外そと廊ろう下かをふさぎかけているゴミの山に向かおうとしたら、元依い頼らい人にんが、あのさ、と声をかけてきた。

「あんた、ちょっと有名だよ。お人ひと好よしだって。僕みたいな餓鬼でも知ってるくらいだもん。そんなことやってたら、ろくな目に遭あわないよ。かっこつけてさ。馬鹿みたいだ」

　まあ、馬鹿なのかもな、と思いながら、返事はしなかった。ただ働きをしたあげく罵ののしられ、身体からだを横向きにしてゴミの山の脇わきを通り抜ける、か。ひどいざまだ。もっとも、一人息子に四千八百五ダラーしか残してやれなかった男よりは、いくらかマシかもしれないが。

4

　最初きたときはいったい何事だと思ったものだが、慣れてしまうとかえって落ちつくのだから奇き妙みょうなものだ。

　黒い頭とう髪はつをマッシュルームみたいな形に整えて、金色のタートルネックに白いスパッツをあわせ、鳶とび色いろの編み上げブーツを履はいて、銀ぎん縁ぶちの眼鏡めがねをかけている店主の

ミケランジェロは、いつもどおり窓まど際ぎわで奇き怪かいな絵を描かいている。

　この店はミケランジェロが制作した絵だの彫ちよう刻こくだのであふれていて、内装もやつが自分の手で行ったらしい。芸術だか美術だか何だか知らないが、一言で表すと不思議としかいいようがない空間だ。しかも、それはまだまだ発展途と上じようで、ミケランジェロが何か仕上げるごとに、店内はどんどん混こん沌とんとしてゆく。この前など、奥のテーブル席に人間だか動物だかよくわからない謎なぞの生き物が四体座っていて、ぎょっとしながらよく見てみたら、何のことはない、よくできた人形だった。人形は何日かするとなくなっていたので、さすがに邪じや魔まだから撤てつ去きよしたのかと尋たずねたら、ミケランジェロは涼すずしい顔で答えた。

「ああ、あれね。あれは売れたんジェロ」

　いくらで売れたのかは、あえてきかなかった。

　どうせとんでもない値段に違ちがいないからだ。

　どうやら、芸術家としてのミケランジェロにはそれなりに支持者がいるようで、やつが適当にこねくり回しただけの粘ねん土どさえ結構な価値があるらしい。

　わからない話だが、世の中のことをすべて理解しようとしても無む駄だだろう。

　まあ、そういうこともあるのかと納なつ得とくしておけばいい。

　自分が無知だから、不条理に感じるのだろうと。

「──それで、その助けてくれた男の人にこのお店のこと教えたの？」

「ああ、一応な」

　ほとんど指定席と化しているカウンターの一番奥でグラスを傾かたむけながら、いつも隣となりに座ってきて隙すきあらばしなだれかかってこようとする自分に気がありそうな女の従業員相手に、世間話の一つでもする。仕事のあとのちょっとした気晴らしとしては、上等なのか下等なのか。判断がつきづらいところだが、べつに

不満はない。

「妙な男でな。〝もぐりのボーガストートト〟のところまで一いつ緒しよだったんだが」

「トートってあの医術士のおじいちゃん？」

「もぐりだがね。腕うでは悪くない」

「知ってる知ってる。頼たのめば堕だ胎たいとかもぱぱっとやってくれるんだよねー。友だちが何回もお世話になったって」

「何回も、かよ」

「たしかぁ、四回か五回くらい？」

「ちょっとは気をつけたほうがいいんじゃないのか、そいつ……」

「無理無理。気をつけられるような娘こなら、そんなに何回も孕はらんでないってー」

　レジーナは二十二歳で、金髪碧へき眼がんの肉感的な美人だが、物事をあまり深く考えないあっけらかんとした軽けい薄はくさと乳くさい態度や仕し種ぐさのせいで、年よりも若く見える。この女と話していると、自分がやけにおっさんじみているように思えてたまらないが、相手にとってはそれが好ましいらしい。

「──とにかく、居所どころか名前も言わないで、そのままどっか行っちまいそうだったから、気が向いたらここにこいと言っておいた」

「ふーん。でも、クラニィがいないときにその人がきちゃったら、どうすればいいの？」

「好きなだけ飲ませてやればいい。俺のツケでな」

「だけど、その人だってわかんないかもよ？」

「わかるさ」

「名前も知らないのに？」

「見ればわかる」

「なんで？」

「顔だ」

　クラニィは首を傾けてグラスを軽く振ってみせた。

「見たらきっと驚おどろくぞ」

「どんな顔してる人なのー？」

「あんなツラをした男は生まれてこのかた見たことがない」

「すっごいの？」

「ああ。女が狂きよう喜き乱らん舞ぶしそうなツラだ」

「えー」

　レジーナが目を輝かがやかせた。素す直なおな女だ。悪い娘じゃないんだがな。

「でもぉ、あたしはやっぱりクラニィがいーな」

「そいつは嬉うれしいね」

　少しばかりうざったいのが難だが。

　クラニィは腕に絡からみついてこようとするレジーナをさりげなくよけて、空になったグラスをカウンターの向こうに突つきだした。

「ローガン、もう一いつ杯ぱいくれ」

「同じのでいいのかい」

　頭髪が薄うすくなりかけている中年の男が、グラスを拭ふいていた手を止めて、クラニィのグラスを受けとった。店主の名をとって「ミケランジェロ」と呼ばれているこの店で、表に出ている男の従業員はローガンだけだ。店主がデザインしたという、クラシックなのか斬ざん新しんなのかよくわからない露ろ出しゆつ度ど高めの制服を着せられている女の従業員たちの中で、蝶ちようネクタイにエプロン姿の小太りちょいハゲ中年男はかなり浮ういている。

　ただ、ローガンがいるといないとでは、この店の雰ふん囲い気きがまったく違ちがうことは事実だ。ローガンがいなければ、頭がおかしい芸術家のハーレムか、酒よりも女を売る店にしか見えないだろうが、やつがいることで、かろうじてあやしい酒場の域にとどまっている。

　それに、やつはこう見えて腕が立つ。立ちすぎるといってもいい。

　ついでに凶きよう状じよう持もちだからややこしいのだが、まあ、ここはミケランジェロの店だ。今も鋭えい意い作品制作中のあの男が、あんなことがあったのにもかかわらずやつを雇やといつづけるというのなら、文句を言う筋合いはない。

「あのね」

　ローガンから手て渡わたされたグラスにさっそく口をつけようとしたクラニィに、レジーナがまたすりよってきた。

　彼女にしては少々深刻そうな声こわ音ねだった。

「じつは、クラニィに聞いてもらいたい話があるんだけど」

「何だ」

「ここじゃあ、ちょっと……」

　レジーナは横目でローガンをちらりと見た。その視線に気づいたのだろう。ローガンが何かを思い出したような仕種をして厨ちゆう房ぼうに引っこんでいった。察しのいい男だ。

「あいつに関係のある話か」

「わかんないんだけどさ」

　レジーナはまだ厨房のほうを気にしているようだ。ローガンが聞き耳でも立てているのではないかとあやしんでいるのか。クラニィは肩かたをすくめ、グラスを持って立ちあがった。少し離はなれたテーブル席に移動すると、向かいではなく隣の椅い子すに腰こしを下ろしたレジーナが密着してきて辟へき易えきしたが、今回ばかりは内ない緒しよ話ばなしのためらしい。

「アニエスいるでしょ。もういないけど。死んじゃって。ていうか、殺されたんだけど」

「ああ」

　人が死んでいちいち驚いていてはエルデンで暮らしてゆけない。もっとも、それが行きつけの店の従業員であれば多少は記き憶おくに残るし、同どう僚りようならそれ以上だろう。

「もう一巡じゆん月げつくらい経たったのか。口下手で、控ひかえめな女だったな。クァラナドでは珍めずらしいタイプだったから、よく覚えてる」

「いい娘こだったよー。ほんと、珍しいかんじで。あたしはそんなに仲よくなかったけど。キヌコは親友っぽかったから、すごく落ちこんでた」

「そうらしいな」

　今は別のテーブル席で接客しているキヌコは、オークリッド首長国の出身で、チョコレート色の肌はだに黒い短たん髪ぱつがよく似合っている凜りんとした雰囲気の女だ。きれいな娘むすめだが、愛想はきわめて悪く、受け答えどころか挨あい拶さつさえ最小限度で、明らかに客商売には向いていない。それでいて人気はあるらしく、キヌコ目当てで店にくる客が結構いるようだ。

「お互たがい故郷は辺へん鄙ぴな場所なんだろう。何か通じあうものでもあったんじゃないのか」

「えー。そうなの？」

「なんでただの客にすぎない俺が知っていて、同僚のお前さんが知らないんだ」

「うーん。そういえば聞いたことあるかなーみたいなかんじ？　あんまり話とかちゃんと聞いてなかったのかも。そういうとこも、微び妙みようにあたしらしくない？」

「否定はしないがね」

「でしょ？」

「それで、アニエスがどうした」

「あ、そうそう、でね、四日か五日くらい前みたいなんだけど、また殺されたんだよね」

「……待て。またってのは何だ」

「またっていうのは、もう一度ってこと？」

「言葉の意味をきいてるんじゃない。誰だれが殺されたんだ」

「ポーラ」

「ポーラ……？」

　クラニィは顔をしかめて、この店で働いている従業員の名前を頭の中で挙げてみた。

　まずは目の前にいるレジーナ。それから、キヌコ。ローガン。

　あとは、男には好まれるが女にはとことん嫌きらわれそうな、自じ称しよう十六歳のジェシリア。

　大おお柄がらで派手な顔立ちのとにかく陽気なイレーヌ。

　美人だが酒乱の曄ヨウ蓮レン。

　豊満というより肥満しているマリリン。

　アニエスが死んだあと、新しく入ったベラという娘のことは、唇くちびるの右みぎ脇わきにほくろがあるということ以外はよくわからない。

　厨房には調理専門の従業員が一人いるが、そいつはたしか男で、名前はオズワルドだったはずだ。

　たいてい店にいるが、絵を描かいたり彫ちよう像ぞうを彫ほったりしているだけの店主ミケランジェロを除いて、総勢九名。

　クラニィが知っているかぎりでは、これで全員だ。

　それなりに繁はん盛じようしているが、決して大きな店ではないから、じつは顔をあわせたことのない従業員が他ほかにもまだいた

なんてことはたぶんないだろう。

「いいか、レジーナ。少なくとも今の俺は、お前さんの話を聞いてやる時間もないほど忙いそがしいわけじゃない。本日の営業は無事終しゆう了りようしたから酒を飲みにきてるわけだしな。ただ、話ってのは相手がわかるようにしなけりゃ意味がない。俺の言っていることがわかるか」

「えーと……なんとなく？」

「そうか。そいつはよかった。だったら、わかるように話せ。ポーラってのはどこの誰だ」

「あたしの知りあいなんだけど、今はどこにもいないかな？」

「死んじまったからだろう」

「うん。そうなの」

　レジーナは肩を落として、せつなげにため息をついた。

　ため息をつきたいのは、むしろこっちのほうだ。

「どういう知りあいだったんだ、そのポーラは」

「顔見知りかな？　一回だけ一緒に飲んだことがあって」

「たいして深い仲じゃなかったわけか」

「やだー、クラニィってば。あたし女の子も嫌いじゃないけど、好きなのは男だよ？」

「そんな話はしてない」

「あれ？　そうなの？　何の話だっけ？」

「ポーラだろう。殺された」

「そうそう、殺されちゃったんだよね、ポーラ。あんまり知らないけど、なんかちょっとやなかんじの女でさあ。顎あごとか割れてて。乳は超ちようでかかったけど。あからさまに豊胸してんだろ、みたいな。でも、殺されるほど悪い人じゃなかったとか思うんだよね。ね、クラニィだってそう思わない？」

「ああ、そうだな。あいにくそのポーラって女には会ったことがなさそうなんだがな」

「そんなのあたりまえじゃん。だって、クラニィじゃなくて、あたしの知りあいだもん」

　レジーナはむっとしたのか、餓が鬼きみたいに頬ほおを膨ふくらませて口を尖とがらせている。さすがに少々苛いらつかないでもなかったが、そのことについて何か言えば、よりいっそう話がそれてゆくに違ちがいない。クラニィはウイスキーを一口飲んだ。

「とりあえず、お前さんの知りあいのポーラが四、五日前に殺されたってことまではわかった。俺に聞かせたい話ってのはそれで終わりか。一いつ緒しよにポーラの死を悼いたんで欲しいのか」

「ぜんぜん。そりゃあちょっとかわいそうだけど、べつに仲よかったわけじゃないし」

「じゃあ何だ」

「またって言ったでしょ」

「言ったな。さいわい覚えてる」

「アニエスと、ポーラと、それから」

「……おい、まだいるのか」

「うん。夢女島ユメシマのシャロン」

「夢女島？　この近くだな」

「えー。クラニィ、行ったことあるの？　あたしという者がありながら、この浮うわ気き者もの！」

「ちょっと待て。もしかして、ポーラもこのへんの店に勤めてた女なのか」

「あれ？　あたし言わなかったっけ？　ポーラはね、ゲッコにいたんだよ」

「同じ八丁目界かい隈わいか」

　エルデン第九区の大部分を占しめるクァラナド歓かん楽らく街がいには、俗ぞくに三丁目、四丁目、六丁目、八丁目、十一丁目、十二丁目と呼ばれる地域がある。一丁目からきれいに並んでいないのは、時代の流れとともに道が潰つぶれたり新しい道ができたりして、街まち並なみが変化してきたせいだ。このミケランジェロも夢女島もゲッコもクァラナド八丁目にある。いわば隣となり近所だ。

「シャロンって女が殺されたのはいつだ」

「んー。どれくらいかな。ちょっと前だと思うけど。十日以上前かな？　ていうか、シャロンのことはよく知らないんだよね。顔くらいしか。友だちの友だちなだけだから」

「一巡じゅん月げつくらいの間に、このあたりで女が三人殺されたってことか」

「そう！　そうなの」

「まあ――」

　クラニィは首の骨をポキリと鳴らして片方の眉まゆをつり上げてみせた。

「よくあることだろう」

「そうなんだけどね」

「せいぜいお前さんも気をつけることだ。金。力。頼たよれる男。もちろん女でもいいがね。手段は問わん。自分の身を守れないやつは生きていけない。ここがそういう街だってことは、お前さんだってわかってるだろう」

「頼れる男」

　レジーナがクラニィを指さして、にんまり笑った。

　冗じよう談だんはよしてくれ。

「俺はただの取り立て屋さ。金のためにしか動かない」

「うそばっかり」

「仕事ならいくらでも引き受けるがな」

「取り分は、四割？」

「ああ」

「でも、クラニィはあたしの話をちゃんと聞いてくれるよ」

「酒飲み話だろう。暇ひまだからさ」

「ね」

　レジーナは下した唇くちびるを噛かんで、自分の膝ひざに両手を押しつけた。

　珍めずらしく、やけに真しん剣けんな顔つきだ。

「聞いて欲しい話っていうのは、ここから先なんだけど」

「何だ」

「アニエスたちを殺したのって、誰だれだと思う？」

「知るかよ」

「同じやつかな？」

「さてね。専門外だし、俺にはわからんな」

「クラニィは、昔、治安指示騎き士し団だんにいたんでしょ？」

「治安維持騎士団だ」

「それって悪いことをした人を捜さがして、つかまえたりする正義の味方なんだよね」

「そいつは違うな」

　クラニィは薄うすく笑ってウイスキーを呷あおった。

　もう空だ。

「何かが悪いことかどうかを決めるのは、たとえば国だったり王

だったり周りの人間だったりする。ようするに、その国や王や多数派の人間たちの都合にあわせて、どぶさらいをするのが俺のいた組織の役回りだ。ちなみに、お前さんの言う正義ってやつには、じつは序列ってものがあってな。簡単に言えば、一いつ般ぱん大衆の思う正義よりも、騎士の正義のほうが重視される。一騎士の正義なんぞ、大臣みたいなお偉えらいさんにはまるで通じない。そんな大臣の正義も、王様にはあっさり踏ふみにじられる」

「うーん……キング・グッダー？」

「そうだな。この国にも王はいる。いるだけだがね」

「じゃあ、ここでは誰の正義が一番正しいの？」

「そいつを決めるのはお前さんであり、俺だ」

「えっ。あたしなんかが決めていいの？」

「それがこの国の流りゆう儀ぎだからな」

「だったら決めた！　アニエスたちを殺したやつは悪いやつだよ。あたしはそう思うもん」

「お前さんがそう思うなら、そうなんだろうさ」

「だって、不安だよ。怖こわいじゃん。あたしだって殺されるかもしれないんだよ？」

「リスクは常にあるもんだ」

「クラニィは平気なの？　もし、あたしが殺されちゃったとしたら」

　すがるような眼まな差ざしをまともに受け止めてやる義理はないし、かすかに震ふるえた声に胸を打たれるほど純真じゃない。だいたい、そんな台詞せりふは恋こい人びとか家族にでも言うもので、常連の客に問うのなら、少なくとも冗談めかしてみせるべきだろう。

「平気じゃあない」

　クラニィはレジーナの肩かたを撫なでてやって、唇くちびるをゆ

がめた。

「何日かはさぞかし寂さびしいだろうな」

「それだけ？」

「不満か」

「うん。すっごく」

「お前さんがどう思ってるか知らんが、俺はこういう男だ」

「あたしはなーんか違ちがうと思うんだけどなあ。女の勘かんってやつ？」

「その勘とやらで、やつをあやしんでるわけか」

　もともとはそれがカウンターから離はなれた理由だ。レジーナはテーブルに両りよう肘ひじをついて背中を丸め、厨ちゆう房ぼうのほうを一いち瞥べつした。

「勘だけじゃないよ。あやしむだけの根こん拠きよっていうの？それはあるでしょ」

「まあな」

　ローガンには前科がある。レジーナの気持ちもわからないではない。

「だが、やつじゃないと思うぞ」

「どうして？」

「男の勘さ」

「クラニィ、もしかしてあたしのことバカにしてる？」

「いや」

　クラニィは首を振ふってレジーナから目をそらした。

「まあ、お前さんがそこまで心配してるなら、やつには俺が直接確かく認にんしておく。それでいいだろう」

「やったのってきいて、はいやりました、なんて言うのかな」

「やつなら正直に答える」

「クラニィ、あの人のこと好きなの？　そういう趣しゅ味みの人？」

「……なんでそうなるんだ」

「だって、あたしがどっか行こうとか誘さそっても、絶対断るし」

　俺にだって相手を選ぶ自由くらいある。

　クラニィはそう言いたい気持ちを抑おさえて、厨房から出てきたローガンに向けて空のグラスを振ってみせた。

「悪いな。これでも昼間は結構忙いそがしいんでね。貧びん乏ぼう暇ひま無なしってやつさ」

「あたしは夜でもいいよ？　お店終わったあととかでも」

「仕事が終わったら、一いつ杯ぱい飲やって、帰って寝ねればもう明日だ」

「じゃあ、一いつ緒しよに寝よ？」

「子守歌でも歌ってくれるのか」

「クラニィが歌って欲しいなら歌うけど」

「やかましいと眠ねむれないタチでね」

「だったら静かにしてる。だから、一緒に寝よ？」

「いつか、な」

「ほんとに？　絶対だよ？」

「十年後か、二十年後か……」

「何それ。あたし、そんなに待てないよ。おばさんになっちゃうじゃん」

レジーナは聞きわけのない子供のように、また頬ほおを膨ふくらませて口を尖とがらせた。憎にくめない女ではあるが、彼女とのやりとりはほとんど餓が鬼きをあやしているようなものだ。餓鬼相手に惚ほれた腫はれたもないだろうし、それがわからないレジーナとは、所しよ詮せん、酒を飲みながらたわいのない話をする客と接客従業員以外の関係にはなりようがない。

「お待たせ」

ローガンがウイスキー入りのグラスを持ってくると、レジーナはかすかに身を硬かたくして、視線を送ることすらしなかった。あからさまに警けい戒かいしている態度だ。クラニィはローガンに空のグラスを渡わたし、肩をすくめてみせた。

「あとでちょっとつきあえ、ローガン」

「閉店まで抜ぬけられないけど、いいかい」

「かまわん。店が終わるまで飲んでるさ」

「じゃあ、あとでね」

「ああ」

人のよさそうな顔に戸と惑まどったような微び苦く笑しようを浮うかべて踵きびすを返したローガンの背中は、なんだか物寂しげだった。

レジーナは信じないだろうが、おそらくローガンはローガンなりに必死でやってきたのだ。やつにそのためのチャンスを与あたえたのは、ミケランジェロであり、クラニィだった。

ローガンがいわゆる善人だとはクラニィも思わない。ただ、たとえばクラニィの祖国で善人といわれる連中が、本当に善人と呼ばれるに値あたいする人間なのかどうか。もちろん、聖人君子のごとき者もいるのだろうが、多くの人は過あやまちを犯おかす。ときには償つぐないきれない過ちを。一方で、謝ればすむようなちっぽけな過ちがもとで、命を落とす不運な輩やからもいる。

俺が殺したあの餓鬼の父親は、果たして俺に殺されなければならなかったほどの悪人だったのか。そうとは思えない。それなのに、俺は罪に問われることもなく、それどころかよくやったと誉ほめら

れて、あの餓鬼がどんな末路をたどったのかも知らず、職を放ほうりだして、故郷を捨て、くだらない仕事で日銭を稼かせいで、こうしてのうのうと生きている。

　俺を赦ゆるしてくれなんて、誰だれかに、何かに求めるつもりはない。

　人は赦されなくても、誰かを、何かを赦さなくても、生きてゆける。

　すがるものを探そうとしてたどりついた街で、クラニィが見つけたものは、何かによりかからなくてもどうにかこうにか立っている、自分自身の後ろ姿だった。

　たまには誰かに手助けしてもらうことだってあるだろうが、俺は一人でも立っていられる。国も、肩かた書がきも、正義も、必要ない。その気になれば、自分の意志で誰かに手を貸すことだってできる。自分の責任において見捨てることもできる。救うこともできる。傷つけることもできる。汚よごすこともできる。与えることもできる。奪うばうこともできる。何だってできる。

　今の俺なら、あの父親を殺さないだろう。

　小悪党のくせに治安維い持じ騎き士しにあらがおうとする往おう生じよう際ぎわの悪い不届き者は、その場で処断するのが習いだ。生かして捕ほ縛ばくする旨むねの命令がないかぎり、手心を加えれば、仲間に嘲ちよう弄ろうされ、場合によっては処しよ罰ばつされる。それが職務上正当で、必然で、義務だから、俺は殺した。俺の意志とは関係なかった。巨きよ大だいな組織の中に埋まい没ぼつしていると、俺のようなちっぽけな存在には何もできない。できないと思っていた。思いこんでいた。だが、巨大な組織だと……？

　治安維持騎士団。たしかに、ハッツフォーの国内では大きな権限を持っていた。建前上は独立剽ひよう騎き士し団長でさえ逮たい捕ほできることになっている。逆らう者は公務執しつ行こう妨ぼう害がいでどんどん豚ぶた箱ばこに放ほうりこめた。この手に力を握にぎっているという痺しびれるような感覚があった。

　阿あ呆ほらしい。そんな力とやらは国を一歩出ただけでたちまち消え失うせる。この街ではちょっとした箔はく付づけになれば上等といった程度だ。今となっては治安維持騎士団の名前を出すことさ

え気き恥はずかしい。

「あたしとはデートしてくれないのになあ」

　レジーナがそうぼやきながら肩に頭をのせてきた。

　よけてもよかったが、面めん倒どうなのでそのままにさせておいた。

「……でも、ほんとに、なんかやなかんじがするんだよね。気のせいなのかな。誰かに見られてるみたいな。たまに、だけど」

「見られてる……？」

「うん。ま、こういう仕事してると結構あるし、気にしすぎかも──」

　レジーナが口をつぐんでクラニィの肩から頭を離はなした。出入口の奇き怪かいな形のドアが開いて、何人かの従業員が「いらっしゃいませ」と言いかけたが、どの声も尻しりすぼみになった。レジーナも目を瞠みはって口をぽかんと開けている。それもやむをえまい。あの男の容姿はそれくらい現実離れしていた。ミケランジェロをあやしく彩いろどる抑おさえめの照明に照らされたあの男は、もはやこの世のものとはとうてい思えない奇き跡せき的な造形物に見えた。これが二度目だが、やはり驚きよう嘆たんせざるをえない。見慣れるまでいくらか時間がかかりそうだ。クラニィは椅い子すから立ちあがり、男に向かって手をあげてみせた。

「よう」

「やあ」

　気安い挨あい拶さつの言葉に違ちがいないのだが、ぜんぜんそう聞こえない。あくまで冷たい声こわ音ねのせいか。それとも、やつの冷れい淡たんすぎる態度のせいか。はたまた、たぐいまれな美び貌ぼうのせいか。



黒ずくめの男は従業員や客たちの視線をものともせず、まっすぐクラニィに向かって歩いてきた。慣れているのか。何しろあの形なりだ。他人に凝ぎよう視しされるたびにいちいち反応していてはきりがないだろう。やつはまるで周りの世界とは無関係に存在しているかのようだ。あまりに他ほかとはかけ離れていて、独立し、孤こ立りつしている。隔かく離りされてさえいる。それは、だが、果た

してやつがみずから望んでいることなのか。

「案外早く再会できたな」

　クラニィは微び笑しようを浮かべてみた。厄やつ介かいだ。こいつの前だと、どんな表情を作ってもさぞかし滑こつ稽けいに見えるだろうとつい思ってしまう。

「正直、くるとは思ってなかった」

「こいと言ったのはキミだろう」

　男はほんの少しだけ細い眉まゆをひそめた。もしかして、むっとしているのか。とはいえ、本当にわずかな変化だ。商売柄がら、他人をよくよく観察する癖くせがあるクラニィでも、間違いなくそうだとは断言できない。クラニィは右手を差しだした。

「あらためて自己紹しよう介かいといくか。お前さんの名前は聞いてないしな。俺はクラニィだ」

「アジアン」

　男は短く名乗ると、クラニィとレジーナの向かいの椅子にさっさと腰こしを下ろしてしまった。宙ぶらりんになった手を引っこめるのは、さして気まずくなかった。半ば予想していたからだ。しかし、アジアンか。聞いた覚えのある名だ。アジアン。まさか、あのアジアンか。

　クラニィは椅子に座って頭を掻かいた。真正面にあの顔があると、どうもやりづらい。隣となりを見ると、レジーナはまだ口を開けてアジアンをじっと見つめているというか、ほとんど呆ほうけている。さっきまで窓際で絵を描かいていたミケランジェロまで似たようなざまだ。平然としているのはローガンくらいか。なんとも破は壊かい力のある男だ。

「とりあえず、飲めよ。こう見えて、酒ならたいていのものはある」

「酒の銘めい柄がらはよく知らない」

「どんなのが好みだ」

「きつい酒を」

「ローガン、マッケンレーのカスクストレングスをロックで──」

「ストレートでいい」

「ん、そうか。ローガン、聞こえたか、ストレート──」

「ボトルごと持ってきてもらえるかな」

「──だ、そうだ。ローガン、ボトル……ボトルごと、だと？」

「今日はキミの奢おごりだろう」

「あ、ああ。そいつはもちろんだが……」

「好きなだけ飲んでいいのかな」

　そう感じただけかもしれないが、挑いどむような、試ためすような目つきだった。

　クラニィは両手を広げてうなずいてみせた。

「ああ。当然だ」

「だったら、ボトルごとで。グラスはショットグラスじゃなくて、タンブラーがいい」

「ローガン、マッケンレーのカスクストレングス、ボトルごと持ってこい。グラスはショットグラスとタンブラー一つずつだ」

　腹を決めた。どういうつもりか知らないが、とことんつきあってやる。だが、競きそうように飲みはじめてからたった十分かそこらで、クラニィは自分の完敗を悟さとらざるをえなかった。いったい何なんだ、こいつは。化ばけ物ものかよ。タンブラーになみなみとそそいだアルコール度数六十度近いウイスキーを、まるで水のようにごくごく飲みやがる。いくらショットグラスでカツカツ飲んでも追いつけるものではない。わずか十分あまりでボトル一本空けて、もう二本目が半分ほどなくなっている。下手をしたら、一時間で十本のペースだ。当然、クラニィの限界を遥はるかに超こえているが、アジアンは涼すずしい顔をしている。

「……強いな、お前さん」

「そうかな」

「普ふ通つう、死ぬぞ、そんな飲み方したら」

「ボクが普通じゃないとでも？」

「普通だと思ってるのか」

　アジアンは手を止めてテーブルの上に目を落とした。

　その唇くちびるの片かた端はしがわずかにゆがめられたように見えた。

「どうかな」

　妙みような男だ。

　本当にこいつが何度か噂うわさを聞いたことのある〝虐殺カーネイ人形ジドール〟なのか。それとも、名前が同じだけの別人か。

　エルデンにある男がいて、そいつが虐殺カーネイ人形ジドールと呼ばれるようになったのは、白昼堂々第五区でバル・バラという悪党クランを壊かい滅めつさせた事件がきっかけらしい。くわしいことは知らないが、下げ衆す外道下げ劣れつで知られるバル・バラの構成員がそいつに何やらちょっかいを出して、あっさり殺された。それでいきり立った他ほかの構成員たちも次々と殺やられ、仲間を呼んではまた殺され、結局、頭目マスターのロイ・ゴンドル以下二十四名が死亡する大惨さん事じになったという。その後も、バル・バラと敵対していた龍りゆう州しゆう系クランの昏フン効へー子ジに加盟を求められ、断ってまた一ひと悶もん着ちやくあったとか、経けい緯いは不明だが、カランブー・デッドとかいうクランの頭目マスターを殺害したとか、虐殺カーネイ人形ジドールにまつわる風説のたぐいは枚挙にいとまがない。

　言ってみれば、知る人ぞ知るちょっとした有名人だ。

　しかも、一年前には虐殺カーネイ人形ジドールなどという名は誰だれも知らなかった。最近だ。やつはごく短い間に数々の偉業を成し遂とげ、決して羨うらやましくはない、むしろ不ふ名めい誉よに近いかもしれないスターダムにのし上がった。

　確かめてみるべきか。簡単なことだ。お前さん、あの虐殺カーネイ人形ジドールか。返事を聞かなくても、表情を読む技術にはそれなりに自信がある。

　──いや。

「やめた」

　クラニィは首を傾かたむけて、ショットグラスをテーブルに置いた。アジアンが薄うす青あお色の瞳ひとみでこっちを見ている。そんなクラニィとアジアンを見比べながらおろおろしている隣のレジーナの背中を、軽く叩たたいた。

「氷とチェイサーを持ってきてくれ。グラスもだ」

「……あ、う、うん」

「ロックグラスだぞ」

「わかった。あと……他ほかには？」

「ああ、そうだな。軽い食い物でも頼たのむか。つまみになるようなやつでいい」

　レジーナを追い払はらってから、ショットグラスを一息で空けた。酔よいが回りはじめているものの、まだろれつがあやしくなるほどではない。頭も鈍にぶってはいるが、わけがわからなくはなっていないはずだ。

「これ以上、お前さんのペースにつきあってたら早晩潰つぶれちまいそうなんでな」

「そもそもつきあいきれていないだろう」

　アジアンがそっと息を吐はいた。ほんの少しだけ両りよう眼めがすぼめられている。こいつは無表情なんじゃない。ましてや無感情でもない。抑おさえているのか、うまく表現できないのか。いずれにしても、人形じゃないことだけはたしかだ。

「俺は俺の好きなように飲やらせてもらう。お前さんも好きに飲めよ」

もしこいつが虐殺カーネイ人形ジドールと呼ばれている男だとしても、それがどうした。確かく認にんする必要なんてない。俺が間ま違ちがいなく信じられるのは、この目で見たものだけだ。

「もうそうしている」

アジアンは髪かみをかきあげながら微かすかに眉まゆを上げた。

「そして、このままだと閉店までにキミは破産だ。ボクは酔わない。酒はきかないタチだ」

「そいつは羨ましいね。いや、酔いたくても酔えないわけだから、ある意味、不幸か」

「酔ったことがないからわからない」

「じゃあ、酔いもしないのに酒を飲むってのはどんな気分だ」

「何も感じない」

アジアンはやけにからっぽな目つきで、クラニィの後ろあたりを見た。

「同じだ。酒を飲むのも。人を殺すのも。そこには何もない。ただボクがいるだけだ」

正直、ぞっとしなかったと言ったら嘘うそになる。

たしかにこいつはこんな眼まな差ざしで手ずから殺した死体を見下ろすのだろう。何のためらいもなく人殺しをするような人間は今まで大勢見てきたが、こいつはなんだか違う。快楽殺人者でも、戦せん闘とう狂きようでも、もちろんサディストでもない。生まれつき罪悪感だの良心の呵か責しやくだのを感じる機能を持たない一部の異常者に似ているが、それとも異なっている気がする。

「気分なんて、ボクにはわからない」

アジアンは無表情で、だが、嘲あざけるように顎あごを上げてみせた。

おそらく、こいつはわかっている。自分には何かが欠けていると。それは大事なもので、決定的ですらあって、それを持たない自

分は不全なのだろうと考えている。

「アジアン」

　クラニィはテーブルに肘ひじをついて身を乗りだした。

「お前さんは命の恩人だ。あのときお前さんが通りがかって手を貸してくれなかったら、俺はチンピラに身ぐるみ剝はがされて息の根を止められていたかもしれん」

「大おお袈げ裟さだな」

「いいや。本当のことさ。ここはそういう街だ。お前さんだってわかってるだろう」

「くだらない街だ」

「そうだな。だが、俺は結構気に入ってる。頭を使えば商売の種はいくらでもあるしな。いろんなやつがいる。少なくとも、退たい屈くつはしない」

「そうかな」

「ああ。こうしてちょっと前まで見も知らぬ他人だった男と酒を飲んだりとかな」

「今だって見も知らぬ他人とさして変わらないだろう」

「俺もそう思うね。今はな。ただ、明日はどうかわからん。一年後のこととなると、もっとわからん。三年後の俺は、お前さんとつるんでクランでもやってるかもしれん」

「ありえないと思うけど」

「可能性の話さ。万に一つでも、可能性は可能性だ。そう考えると、だ――」

　レジーナがアイスバケツとグラスと何かの盛り合わせをトレイに載のせて持ってきた。さっきまでと様子が少々違う。アジアンの見み目め麗うるわしさに慣れたとは思えないが、いったん距きょ離りを置いたことで、切りかえはできたのだろう。

「何話してたの？」

「単なる世間話だ」

　クラニィは手を広げて首を振ふってみせた。

「世の中どんなことが起こってもおかしくはないって話をしてただけさ」

「じゃ、あたしとクラニィが幸せな家庭を築くっていう可能性もあるんだよね」

「それはない」

　クラニィが間かん髪はつを入れず否定すると、すぐさまアジアンにつっこまれた。

「万に一つでも、可能性は可能性なんだろう」

　なるほど。そう言ったのは他の誰だれでもない、俺自身だ。クラニィがため息をついて渋しぶ々しぶうなずくと、レジーナが歓かん声せいをあげて抱だきついてきた。可能性だぞ、あくまでただの可能性だ、とクラニィが力説しても、レジーナはもう聞く耳を持たない。あとはあたし次し第だいってことでしょ、だと？　俺次第でもあるだろうが。

　天てん井じようを仰あおいでからアジアンに目をやると、かすかに笑っているように見えた。

　視線に気づいてすぐに表情を隠かくしたが、たしかにやつは笑っていた。

5

　ミケランジェロにメアリーという名の従業員がいた。

　レジーナの言い方を借りれば、今はいない。もうどこにもいない。

彼女は死んだ。

同どう僚りように殺された。

メアリーは屈くつ託たくのない女で、わりあい奔ほん放ぽうな性格でもあり、無断欠勤の常習犯だったから、一日や二日、店にこないくらいでは誰もあやしまなかった。だが、それが三日になり、四日となって、五日になると、さすがにこれはおかしいという話になった。さては飛んだか。雇やとい主に何も言わず勝手に辞やめてしまう者など珍めずらしくもない。とくに、メアリーは辞めるとしたら飛ぶタイプの女だと見なされていた。器量はよく、人ひと懐なつっこいところのある女だったから、他ほかの店に好条件で引き抜ぬかれたのか。やや思いこみが激しい傾けい向こうもあったので、男でもできて、そいつと一いつ緒しよにここより物ぶつ騒そうじゃないどこか遠い街を目指して旅立ったのかもしれない。ともあれ、念のため、誰か事情を知っている者がいないか、とりあえず店の者全員に確認してみようということになって、ミケランジェロが仕事の合間に一人一人私室に呼び入れ、ごく簡単な質問をした。ミケランジェロに頼たのまれて、クラニィも同席した──というより、質問役はほとんどクラニィが務めたのだが、どうも悪い予感がしていた。それはあっさり的中した。

メアリーのことを何か知らないか、と尋たずねると、ローガンは淡たん々たんと答えた。

「知ってるよ。おれが殺した」

「……待て。俺の聞き違ちがいだといいんだが、お前さん、今、殺したって言わなかったか」

「言ったよ。メアリーはおれが殺した。好きだったんだ。年は離はなれていたけどね。彼女もおれを慕したってくれていたよ。彼女にとっては親子みたいなかんじだったのかもしれないね。でも、おれはそうじゃなかったんだ。恥はずかしいけど、愛してた」

「その──愛してたってのと殺したってのが、なんで繋つながるのか俺にはわからないんだが」

「だろうね。わからないだろうし、わかって欲しいとも思わないよ」

「どうして言わなかった──ってのもおかしいな」

「うん。誰にもきかれなかったしね。自分からすすんで話すようなことじゃないから」

「そうだな」

　クラニィは今でも鮮せん烈れつに記き憶おくしている。

「なんでだ。どうして好きな女を殺したりした」

　たぶん、答えが知りたいというよりもとにかく混乱していて、気分を落ちつけるためにもう一度尋ねた。そのときだった。ローガンは眉まゆと目を八の字にして、鼻に皺しわをよせ、唇くちびるを左右に思いきり広げて歯を剝むいた。怒いかりだったのか。いや、それよりも悲しみだった。ローガンは絞しぼりだすように、血ち反へ吐どを吐はくように、亡もう者じゃのごとき声を出した。

「どうせわからないよ。わかりっこない」

　やや動どう揺ようしていたとはいえ、クラニィは普ふ段だんどおりバディエドとモトロール刀を携けい帯たいしていて、ローガンは包丁一本を隠し持っていただけだった。ローガンの身のこなしや気配の消し方が常人のものではないことには前々から気づいていたし、半分用心棒代わりに雇っているとミケランジェロから聞かされてもいたので、警けい戒かいはしていた。だが、激げつ昂こうして襲おそいかかってきたローガンは手て強ごわかった。いや、それ以上だった。

　ミケランジェロの私室はあっという間に血みどろの修しゅ羅ら場ばと化した。ほとんどはクラニィの血だった。

　ローガンは天才だった。あれはどう考えても才能だ。ローガンが包丁を操あやつって切り、刺さして、剝く動作にはまったく無む駄だがなかった。それでいて、何らかのパターンも見いだせなかった。言ってみれば、ローガンにとって切り刻むことは本能なのだろう。すべて最初から身についていて、技術を磨みがく必要すらないのだ。ローガンのだらしないといってもいい少々肥満した身体からだつきがそれを物語っている。ローガンは自分を鍛きたえることなどしない。その必要性を感じることもないだろう。

　あとで聞いた話だが、ローガンが初めて人間を殺したのは餓が鬼

きのときで、相手は近所に住んでいた同年代の少女だったという。細切れにして方々に捨てた死体は見つからず、少女は神隠しに遭あったことになった。それから同じように数人殺して、結けつ婚こんした相手も手にかけた。愛する女を、どうしても殺さずにはいられなくなり、こらえきれずに殺してしまった。女にょう房ぼうの父親を呼んで事の次第を説明したが、当然、理解してもらえず、かっとなってそいつも殺した。

　悪いことをしたよ、とローガンは語った。愛する者を殺すのは必然でも、そうでない者を殺すことに対しては違い和わ感かんを覚えるのだとローガンは言う。これは違う、何か間違っている、と。それで、迷ったあげくローガンは逃とう亡ぼうし、サンランドに入国して、エルデンまできた。故郷でも安い食堂で働いていたので、クァラナドで職を求め、何度か店を変えた末に、ミケランジェロに雇われた。そこでメアリーと出会い、愛して、殺してしまった。

　長い長いとっくみあいの末、右みぎ腕うでを使いものにならなくされて、左目も抉えぐられ、土手っ腹をザクザク刻まれながらも、どうにか両りよう膝ひざやら肩かたやら手首やらを砕くだいて、ろくに動けないようにしてやった。それでもローガンは虫の息というかんじではなかった。クラニィのほうがよほどやばい状態だった。おれはおかしいんだよ、とローガンは呟つぶやいた。そうだな、とクラニィは答えた。人間とは思えん。そうだろうね。ああ。お前さんはしぶとすぎる。そっちかい、とローガンは低く笑った。

「おれのような人間は死なないと治らないね。いや、死んでも治らないだろうね。だから、消えるしかないんだよ。きみだってそう思うだろう、クラニィ」

「さあな。お前さんの問題だ。俺にきくなよ。餓鬼じゃないんだ。自分のことは自分でどうにかしろ」

「……自分ではどうしようもないんだよ。わかってはいるんだけどね。おれのやり方がーいつ般ぱん的じゃないってことは。相手も望んでいないってこともね。だとしたら、それは正しいことじゃないのかもしれないって、おれだって思うんだよ」

「だったらやめりゃあいい」

「我が慢まんしようとはするんだ。だけど、そのうちこらえきれなくなる」

「もっと我慢しろ」

「……抑おさえきれないんだ」

「甘ったれるんじゃねえ」

　あのときはクラニィもさすがに貧ひん血けつと激痛とで自制がきかなくなっていた。

「どっちなんだ。お前さんはどうしたい。好きな女を殺したい。殺したくなる。もちろん女は殺されたくなんかない。だからお前さんは我慢しようとする。そうだろう」

「……うん」

「だったらやり抜ぬけ。我慢しとおせ。阿あ呆ほが。くだらねえことをぬかすんじゃねえ。やばくなったら自分の手でも足でも切り落とせ。お前さんは得意だろう。見ろ。お前さんにやられた傷だ。見事と言うしかねえよ。そんななまくらな包丁でよくもここまでスッパリやれるもんだ。いいか。本当に我慢したいっていうなら、限界になったら自分で腹かっさばいて死ね。そこまでやりもしねえで、俺は我慢してるだと？　ふざけるな。あと一度、俺に向かってそんな戯たわけたことをぬかしてみやがれ。殺す前に拷ごう問もんしてやる。俺はそのための訓練を受けてるんでな。痛えぞ。死ぬよりもきつい。それとも、今、死にたいか。やっぱり俺には無理だとあきらめるか。いいぞ。それでも俺はかまわん。さっきも言ったように、お前さんの問題だからな。死にたいなら、殺してやらんでもない。面めん倒どうだがな」

　ローガンは、死にたい、とは言わなかった。巻きこまれていくらか怪け我がをしていたミケランジェロが、代わりの人を見つけないといけないジェロね、とため息をついた。だろうな、とクラニィは床ゆかにへたりこんだ。しばらくは妙みような噂うわさが立つだろうし、きてくれる女性がいるかどうか少し不安ジェロ。用心棒代わりなら、女じゃなくてもいいんじゃねえのか。ミケランジェロは首を傾かしげた。用心棒？　クラニィはローガンと顔を見あわせた。ミケランジェロはローガンに、うち辞やめるの？　と尋たずねた。ローガンは答えなかった。答えられなかったのだろう。やむをえず、クラニィがローガンの気持ちを代弁して確かく認にんしてやった。辞めなくていいのか。ミケランジェロは負傷した右手を高そうなハンカチでぬぐいながら薄うすく笑った。ねえ、ここはエルデン

だよ。それに、ローガンくんみたいな人、ワタシは嫌きらいじゃないしね。だって、なんだかおもしろいでしょう？

「──ミケランジェロさんには、感謝しているんだ」

　店が終わって、クラニィは第三区の集合住宅へ、ローガンは第四区の貸し宿へ、それぞれ帰る道すがらだった。野や郎ろう二人で肩を並べて夜道を歩くなんて色気のない話だし、用件が用件だけに心安い会話を楽しむ気にもなれない。おまけに、ローガンは完全に素面しらふだが、クラニィは足あし許もとが少々ふらつくほど酔よっている。アジアンの野郎。破産まではいかなかったものの、一ひと桁けた間ま違ちがってるんじゃねえかと疑いたくなるくらい飲みやがった。容よう赦しゃのねえ男だ。

「そりゃあ、お前さんにしてみたら、やつには足を向けて寝ねられんだろうな」

「うん。それから、きみにもね」

「やめてくれ。気色悪い」

「おれがこんなことを言ったら変に思うだろうけど、あれ以来、毎日いろいろな発見があるんだ。きっとおれは、自分がこうだってことを言い訳にしてたんだね。正当化してたんだ。クラニィが言ったとおりだよ。自分を甘やかしてた。変わりたいと思ってたけど、変わろうとはしてなかった」

「そう簡単じゃないしな。自分を変えるってのは」

「とても難しいことだね。でも、今は必ずしも不可能じゃないような気がしてるよ」

「ようするに、心がけ次し第だいだからな。お前さんにかぎらず、俺だってそうさ」

「アニエスのことかい？」

　ローガンは立ち止まってまっすぐクラニィを見すえた。

「違う？」

「いや、違わん」

「おれはやってないよ」

「わかってるさ」

「レジーナがおれをあやしんでるんだね」

「みたいだな」

「仕方ないことだと思うよ。でも、おれはやってない。信じてくれなくてもいいけど、きみやミケランジェロさんに対して嘘うそはつかないよ」

「ああ」

　クラニィは片かた眉まゆを上げて笑ってみせた。

「お前さんは嘘をついてない」

「ありがとう」

「だから、よせって。礼を言われるようなことは何もしてねえぞ」

「おれはそう思わないけどね」

「見解の相そう違いってやつだな」

「それぞれ違っていても、生きていけるしね」

「何しろ、ここはエルデンだからな」

「おれみたいなやつが平然とグラスを磨みがいたり皿洗いをしたりしていられる街が、素す敵てきかどうかは意見がわかれそうだけど」

「俺は嫌いじゃないがね」

「おれもだよ。他ほかでは生きていけそうもないしね」

「吹ふき溜だまりの掃はき溜め、か」

「ドラガン・ペンブローケンだね」

「だったかな」

欠伸あくびが出た。もう深夜というより早朝に近い。これから第三区までてくてく歩いて帰る道のりを考えると面倒だが、生きるということは案外そんなものなのだろう。

6

しがない取り立て屋の時間は駆かけ足で過ぎ去ってゆき、目の前を通りすぎれば二度と戻もどってこない。だからこそ時は金なりで、時間は何よりも貴重だなんて思う暇ひまもない。

回ってくる仕事は、回収の見込みがほとんどないか、あるとしても踏ふまなければならない手順がえらく面めん倒どうか、たいていそのどちらかだ。もっと正確に言えば、素人しろうとならそう思ってしまうような、もともとは自分のものだったのに今は手が届きそうもない金を、経験と機転と勘かんとたまには腕わん力りよくにものを言わせて取り返してやる。こっちの取り分は四割だからそう安くはないが、ゼロよりはマシだろう。耳をそろえて返してもらいたいのなら、最初から貸す相手をよくよく考えて選ぶか、そもそも貸さないことだ。そんな誰だれでもわかりそうなことをわかっていないやつがこの街にも結構いて、おかげで食いつなぐことができているのだから、取り立て屋としてはむしろ彼らの認識の甘さに感謝するべきなのだろうが。

ここ四日ほどは、エルデン中を転々としている何なに某がしを捜さがしだして貸し手のところまで連れてゆく仕事や、夜しかつかまらない借り手を見つけてふん縛じばって締しめあげる仕事が立てこんでいて、睡すい眠みん時間もろくにとれないほど忙いそがしかった。それなりの稼かせぎにはなったが、どうせ金など酒を飲むくらいしか使い道がない。その酒を飲む時間がないとなると、何のために金を稼いでいるのかわからない。

かなり前に引き受けたのだが、なかなか解決の糸口を見つけられない大きなヤマがらみの聞きこみは早々に切りあげることにした。

クラニィがミケランジェロに入ったのは十九時前で、なんだかがらんとしているような印象を受け、妙みようだと思ったが、とりあえずカウンターに座った。ミケランジェロの姿が見えなかった。女

の従業員はジェシリアとイレーヌとマリリンだけだった。ローガンが厨ちゅう房ぼうから出てきて、いらっしゃい、と控ひかえめに挨あい拶さつをした。様子が変だった。どうしたんだ、と尋たずねると、ローガンは、うん、とうなずいて、まいったな、と薄くなりかけている頭を撫なでた。先をうながすつもりで黙だまっていると、ローガンは、そういえば、と、ウイスキー入りのグラスを出してきた。やはりおかしい。たしかにクラニィの注文は決まりきっているが、何にする、と必ずきくのがローガンのやり方だ。

「なんだっけ。アジアンだったかな。あの人、一昨日おとといもきたよ。ボトル二本飲んで帰ったけど。もちろん、クラニィのツケで。店の女の子ともいくらか話してたし、この間よりはちょっとだけうちとけた雰ふん囲い気きだったかな」

「……ボトル二本だと？」

「前と同じマッケンレーのカスクストレングスだよ」

「頼たのむから次はもっと安い酒にしろと言っといてくれ。いや、問答無用で安い酒を出せ。やつに好きなだけ飲ませつづけてたら、冗じよう談だん抜ぬきで破産しちまう」

「言っておくよ。まあ、そのうちまた顔をあわせる機会もあるんじゃない？」

「どうだかな。正直、あの男のことはよくわからん。何かわかるほどの話もしてないしな」

「二度あることは三度あるっていうし、おれはまたくると思うけどね」

「どっちにしても、妙なやつだ。つんとすましてるように見えて、存外、こだわらないようなかんじもある。自分から人を遠ざけてるのかと思えば、近づいていってもわりと逃にげない。それでいて、すぐ向かいにいるのに、遥はるか遠くにいるみたいな顔をしてたりする」

「怖こわいんじゃないかな」

「怖い？　何がだ」

「よくわからないけど、たぶん、自分が」

　お人ひと好よしを絵に描かいたようなローガンの顔が、やけに弱々しく笑った。

「なんとなく、わかるような気がするんだよ。おれもそうだから。少なくとも、そうだった」

「怖い、か」

　クラニィはグラスを呷あおって熱い息を吐はいた。アジアン。虐殺カーネイ人形ジドール。あの美しいといってもいいくらいきれいな顔をした男が、頭の中で何を考え、胸の奥に何を隠かくしているのかなんて、どうでもいい。あれこれ詮せん索さくしたり口を出したりするような間あいだ柄がらではないどころか、見知らぬ他人から見知っている他人になった程度だ。互たがいに何かを共有しているわけでもないし、利害が一いつ致ちしているわけでもなく、対立しているわけでもない。ただ、どうも気になる。もしかしたらもう二度と会わないかもしれないが、それでもあの男のことは決して忘れないだろう。世の中にはたまにそういう人間がいる。他とは明らかに違ちがう、特別な人間が。

　もっとも、それが本人にとって幸せなことかどうか。

「凡ぼん人じんの俺には想像もつかんな」

「クラニィが凡人？」

　ローガンが心底驚おどろいたように目をまん丸くした。

「そういう発想はなかったよ。きみは結構変わってると思うけど。いい意味でね」

「平凡な男だぞ、俺は。見てくれもこのとおりだしな」

「でも、人は見かけじゃないって言うしさ」

「なんだ、そいつはつまり、俺のツラは十人並なみ以下ってことか？」

　クラニィは眉まゆをひそめてグラスを振ふってみせた。いや、そういうわけじゃ、と弁解するローガンの表情が、やはり冴さえない。たじたじになるほどきつく追つい及きゅうしているわけではないから、理由は別にあると考えるべきだろう。

「ところで」

　クラニィはグラスを置いて、店内をざっと見まわした。

「何かあったのか。そろそろ教えろ。いいかげん焦じれてきた」

　ローガンはうつむいて深々とため息をつき、驚かないでね、と念を押した。どうやら心構えが必要らしかった。だが、何を覚かく悟ごすればいい。わからないままうなずいたことを、少しだけ後こう悔かいする羽目になった。ローガンは申し訳なさそうな上うわ目め遣づかいでクラニィを見た。

「レジーナが死んだんだ」

7

　太陽の光を思うぞんぶん浴びられるというだけで十分だった。

　世界は見果てぬ夢よりも広いのだと知った。

　生きるということの本当の意味がここにはあるような気がした。

　それを見つけられれば、生きるために生きるだけのちっぽけな何か以外のものになることができるかもしれない。

　何かをするために生きてゆくことさえ、もしかしたらできるかもしれない。

　そこには自分とたいして違わない姿の人々が大勢いた。もちろん一人一人を見れば、自分もふくめて、それぞれ身体からだつきや顔の作りや頭とう髪はつ、肌はだ、目の色はばらばらだが、そうはいってもかなり似通っていた。穢けがされた地底の王国の住民たちとは根本的に異なっていた。穢れし者どもはみずから「人」と称しようしていたけれど、ひとくくりに「人」と呼ぶにはあまりに多様すぎた。地上にいる彼らこそまさしく「人」に違いなかった。

　果たして、自分は「人」なのか。

それともやはり、穢れし者なのか。

わからなかった。

ただ、「人」だと思いたかった。

あの国にいたころは、誰も自分を穢れし者とは見なさなかった。特別視されていた。皆みな、自分にひれ伏ふして、崇あがめ奉たてまつりさえした。下心は見えすいていた。特別なモノに慰なぐさめてもらいたい。生まれてきただけで負わされた傷を癒いやして欲しい。

救いを。

恵めぐみを。

その手で。

唇くちびるで。

全身で。

民たみを愛さなければなりません、と修道僧モンクたちが囁きさやいた。

真の王の御み子こたる貴方あなた様は民を心底より愛さなければなりません。民もまた貴方様を深く深く敬愛し奉ることでございましょう。貴方様の嘘うそ偽いつわりない愛と御ご威い光こうにより我が国はよく治まることでございましょう。千年の繁はん栄えいが我が国に約束されましょう。

自分はそのためにつくられた人形なのか。

人形などではございません。

断じて。断じて。

しかしながら、左様にございます。貴方様は我が国の繁栄のために真の王がおつくりになられた、大切な、えがたく、貴とうとき御子にございます。我が国の繁栄に全身全ぜん霊れいを捧ささげていただき誠心誠意ご尽じん力りよくいただくことは貴方様のお役目にございます。



誰だれが決めた。

真の王がお決めになられました。

受け入れない。

なりませぬ。

自分のことは自分で決める。

なりませぬ。

自分は――、

ボクは――。

誰だ。

何ものだ。

思いたかった。

自分は「人」なのだと。

おそらく、穢れし者どもの国の王子という、ありがたくも何ともない存在以外の何かになりたかったのだろう。

逃にげても、逃げても、逃げられない気がしていた。

こんなに明るいまばゆいばかりの光に充みち満ちた世界まで逃げてきても、自分は自分の望む何かになることができない。

そもそも、自分が何を望んでいるのかさえわからない。

すれ違ちがう「人」たちがこちらをじろじろ見ている。わざわざ通りすぎてから振り返る「人」もいる。物もの陰かげからこちらをうかがって、何人かの「人」が何か囁きあっている。こちらを指さして首を振る「人」がいる。自分はやはり「人」ではないのかもしれない。「人」から見れば、何か別のモノなのではないか。自分はとてもよく似ていると思うのだが、どうも彼らはそう感じていないらしい。

いったいどこへ行けばいいのか。

結局、自分は穢れし者どもの国のためにつくられた慰み人形でしかないのか。

それ以外の何かになどなりようがないのか。

光に満ちた泥どろ沼ぬまのような世界で見つけたものは、すくっても指の間をすり抜ぬけてゆく泥でい水すいのような希望で、掌てのひらに残った泥は絶望でしかないのか。

信じたくはなかった。せめて「人」であろうとした。「人」のように笑い、「人」みたいに語り、「人」のごとく振ふる舞まおうとした。「人」の集つどう街を求めてさまよった。「人」がたくさんいればいるほど、「人」の中に埋まい没ぼつできる。黙だまっていても「人」として生きていられる。まるで「人」と「人」のように接してくる「人」もいる。声をかけられる。「人」の真ま似ねをして答える。

なあ、きれいなツラしてんな、おまえ。相手してくれよ。金は弾はずむぜ。

相手？

そうだよ。まさか初めてってことはねえだろ。いいだろ、な……？

いきなり「人」に腕うでをつかまれた。「人」の生なま臭ぐさい息が顔にかかった。不快感というよりも恐きよう怖ふに近かった。「人」を振り払はらって突つき飛ばした。尻しり餅もちをついた「人」は目を剝むいて舌なめずりをした。「人」が起きあがって襲おそいかかってこようとしていることはすぐにわかった。殺意を感じた。いつか地底で互たがいに殺しあって貪むさぼり喰くらいあう生き物を見た。彼らは生きようとしていた。生きるために相手を殺していた。それは当然であり、必然だった。いのちとして自然の姿だった。そう思った。だから、あの生き物に向けて言った。生きるがいい。ボクも生きる。生きることでしか、ボクはボクを証明できない。

生きて何ものかになりたいが、それ以上に生きたかった。生きてゆきたい。生きてゆきたいから、ためらいなく生きてゆけるだけの、生きてゆくのに値あたいする何かになりたい。

この身は所しよ詮せん、みっともなく生に執しゆう着ちやくしているだけのあさましいいのちだ。いのちはいのちを喰らう。喰らって生きのびる。いのちはいのちを奪うばう。蹴け倒たおして生きてゆく。いのちはいのちを壊こわす。たやすく、呆あつ気けなく、やむなく、無造作に、無自覚に、いのちは壊されてゆく。まるでその

ためだけに生みだされたものであるかのように。

　命いのち乞ごいをする「人」に尋たずねたかった。

　キミがここで命拾いしたとして、ボクに何を保証してくれるのか。

　交わることのない無数のいのちの坩堝るつぼで立ちすくんでいた。

　いのちを握にぎり潰つぶして踏ふみ潰すたびに、心の内容物がこぼれ落ちてゆくかのようだ。

　狂くるおしいほど、むなしくて、たまらない。

8

　第九区から環かん状じよう通どおりを渡わたって第二区へ入ったあたりに香水セント市場マートと呼ばれる一帯がある。実際に市場が開かれているわけではない。主に第九区で働いている男女が住む集合住宅が密集しているせいで、どこもかしこも香水くさいというのがその名の由来だ。

　女は外がい壁へきに「アーバンフェアリーテイル」と装そう飾しよく過か剰じようの字体で書かれた建物と隣となりの建物との間の路地でうつぶせになっていた。首から上がない無残な状態だったが、女を発見したアーバンフェアリーテイルの住民は、服装や背せ恰かつ好こうからそれが誰かすぐにわかったという。女は外向的な性格で、性別を問わず友人が多く、近所づきあいもよかった。年少者は女を慕したい、年長者にはよく世話をしてもらっていたらしい。もちろん、女を嫌きらう者もいたが、その死を願うほどの恨うらみを買うような人物ではなかったと誰もが口をそろえて言った。贔屓ひいき目めかもしれないが、同感だった。悪い娘じゃなかった。自分のことはあまり語りたがらなかったが、それはネタになるようなおもしろい話がないからだと言い、親兄弟については覚えていないので、そもそも話しようがないと笑っていた。正直、男は飽あきたんだよね、と少しだけ真しん剣けんな顔つきで言ったかと思うと、もう死ぬほどやったし、と相そう好ごうを崩くずして、やっ

ぱりやるなら好きな男とだよね、とすりよってきた。何度も何度も口説かれた。あれは結局、冗じよう談だんだったのか、本気だったのか。今となってはわからないし、どうでもいい。レジーナはもういないのだ。

　ミケランジェロが葬そう式しきがわりにパーティーを開いた。生前、レジーナと縁えんのあった者がクァラナド歓かん楽らく街がい八丁目の「ミケランジェロ」を訪おとずれ、酒を酌くみ交かわして、語りあい、たまに口論が起こって、誰だれかが泣きながらそれを止めるなか、そこかしこで乾かん杯ぱいの音おん頭どが響ひびいた。レジーナの同どう僚りようで顔も身体からだつきもとにかく派手なイレーヌが、あの娘こはしめっぽいのとか嫌いだったから、と涙なみだぐみながらやや無理やり気味の笑え顔がおを作っていた。きっと喜んでるんじゃないの。死に方はアレだけどさ。死んじゃえばどうせ同じだしね。生きてるあたしらが何をどう思おうと、何しようと、生き返るわけじゃないしさ。そうだな、とうなずいて酒を飲んでいると、オークリッド出身のキヌコが近づいてきた。一いつ瞬しゆん、目を疑った。男顔負けのベリーショートがトレードマークといってもいいキヌコの髪かみの毛が長かったからだ。

「ウィッグ」

「……ヅラか」

「気分転てん換かん」

「なるほどな」

　単純な驚おどろき以外に既き視し感かんを覚えたような気もするが、黒くて長い髪の女なんていくらでもいる。キヌコは両手でグラスを握りしめていて、普ふ段だんからあまりいいとはいえない目つきがさらに悪かった。というか、目が据すわっている。かなり酔よっているらしい。

「レジーナは嫌いじゃなかった」

「そうか」

「好きでもなかったけど」

「ああ」

「クラニィは？」

　キヌコの口調は質問というよりも尋じん問もんに近かった。

「レジーナは本気だった。クラニィもわかってたはず」

「俺はただの客だぞ」

「客に惚ほれちゃいけない？」

「べつにそうは言わんがね」

「客は店の女と一いつ緒しよになっちゃだめ？」

「誰が誰とくっつこうがそいつの勝手だ」

「夜の女は所詮、安い女だと思ってる？」

「……おい、キヌコ。お前さん、俺の話をちゃんと聞いてるか」

「聞いてない」

「そうか」

「屑くず野や郎ろう。おまえの話なんか聞いてられるか」

　キヌコはそう言い捨てると、どこかへ行ってしまった。だいぶ酔っているし、そうとうこたえているようだ。それはそうだろう。一巡じゅん月げつ前に同僚が一人殺されて、また一人殺された。いくらここはエルデンで、クァラナドだといっても、異常な事態だ。いや、これは事件だ。

　クラニィは声をかけてくる知人に話をあわせながら、ミケランジェロに出入りする者たちの顔を一つ一つ脳のう裏りに焼きつけていた。俺は何をしようとしてるのか。そう自問しなければならないほど、自分自身を知らないわけではない。悪い癖くせだ、と笑い飛ばせる心境でもなかった。ローガンにレジーナの死を教えられたあと、アーバンフェアリーテイルまでわざわざ行って、変わり果てた女の姿を見た。おそらくレジーナは喜ばないだろうが、見ておかなければならなかった。

　レジーナは殺されたのだ。

　しかも、危険を感じていて、そのことをクラニィに打ち明けた直後の出来事だった。

　レジーナによると、一巡月ほど前、何者かに殺害されたアニエスだけでなく、同じ八丁目界かい隈わいにある「ゲッコ」のポーラ、「夢女島ユメシマ」のシャロンも変死を遂げているという。

　たしかアニエスの場合は、自室で絞こう殺さつされたうえ、暴行された形けい跡せきもあって、蘇そ生せいできないように鈍どん器きで頭部を何度も強打されていたはずだ。ポーラとシャロンについては知らないが、レジーナは自分の部屋に帰りつく前に、外で何者かに襲おそわれ、頸けい部ぶを切断されて、首から上は持ち去られた。暴行はされていなかった。抵てい抗こうした際にできる防ぼう御ぎょ創そうも見られなかったので、あるいは顔見知りがやったのか。そうでなくとも、あっという間にすませてしまえば、妙みょうにきれいな他殺体ができあがることはある。どちらにせよ、やり口が違ちがう。やったのは別人か。いや、そう考えるのは早い。まだ材料が不足している。というよりも、この件については何一つわかっていないと考えるべきだ。

　頭を白紙にしろ。

　本当にはっきりしていることだけを信じろ。

　あとはすべてまやかしだ。

　だいたいそんなものだ。

　間違いないと断言できることは、いつだってそう多くない。

　俺が知っている事実は何だ。

　アニエスが死んだ。

　そして、レジーナが死んだ。

　ポーラやシャロンのことは知らない。レジーナの口から聞いただけだ。

　クラニィはコートのポケットから手帳を出して開いた。現在、引き受けている仕事は八件で、そのうち三件はすぐにどうこうできる案件ではない。残りの五件中二件は貸付人の居場所が割れているか

ら、ちょっと気合いを入れて締しめあげれば、すぐに片をつけられそうだ。あとの三件は貸付人を探している最中で、すでに馴な染じみの情報屋や、つきあいのある玄人くろうと筋すじに話を通している。まずは二件、さっさと処理してから、あとの三件と並へい行こうしてポーラとシャロンの件についての情報を集める。もちろん、アニエスとレジーナの身辺も洗う。血けつ縁えん関係。交友関係。とくに、異性関係。そして、商しよう売ばい柄がら、やはり客だ。そう。今もミケランジェロに引きも切らず押しよせている者たち、とりわけ男だ。やつらの中の誰かがレジーナを殺していたとしても、まったく驚かない。それどころか、誰も彼もが殺人者に見える。何せ、ここはエルデンだ。

9

「一つきいてもいいかしら」

　ゲッコの用心棒だという女は、店の隅すみでぷっくりした唇くちびるを舌先で舐なめ、一見、甘ったるいかんじの垂れ目に抜ぬけ目のない眼光を宿らせた。

「いいかしら、なんて言っても、答えてくれないと何も話さないけど」

「何でもきいてくれ」

「何でも？」

「ああ」

　この女は曲くせ者ものだ。顔だけ見れば十代の小こ娘むすめといっても通用するだろうが、中身はどうか。腰こしに仰ぎよう々ぎようしい剣けんをさげているものの、腕わん力りよくにものを言わせるタイプとは思えない。それに、女が身につけている服はただの服ではないだろう。胸むなもとが大だい胆たんに開いていて、なかなか艶なまめかしいデザインだが、よく見ればあらゆる場所に物入れがついている。サン・ティエンヌ・ドゥ・シボーか。間違いない。魔ま術じゆつ士し衣いだ。

「そのかわり、俺の質問にも答えてくれないか」

「質問によるわね」

「たいしたことじゃない。お前さんの仕事に影えい響きようはないと思うが」

「あなたが決めることじゃないわ」

「そうだな」

「素す直なおなのね」

「魔術士相手に強気に出る度胸はないんでね」

「ピンからキリまでいるわよ。同じ魔術士でも」

「キリのほうに近いやつはそういうことを言わないもんだ」

「魔術にくわしいのかどうか知らないけど、まともな魔術士って少ないのよ」

「みたいだな。だが、いないわけじゃない」

「ええ。いることはいるわ」

「たとえば、俺の目の前とかな」

「どうかしら」

　女は人を食ったような笑えみを浮うかべて、肩かたをすくめてみせた。ゲッコの従業員に、ポーラについて尋たずねたいことがある、と耳打ちして、引きあわされたのが用心棒を名乗るこの女だった。ゲッコには半年ほどきていなかったが、目にすれば必ず覚えてしまいそうな容姿だから、その間に雇やとわれた女だということはとりあえず間違いない。以前は店内に何人もいた屈くつ強きような体格の男たちが今は一人しか見あたらないので、この女が連中の仕事を奪うばったというわけか。

「──で、何だ。俺にききたいことってのは」

「たいしたことじゃないわ」

「そいつはお前さんが決めることじゃない」

「いいえ。あたしが決めるのよ」

　女が言うとおり、まともな魔術士は少ない。魔術士としての力量もそうだが、人間として破は綻たんしている者がじつに多い。クラニィの経験からいっても、魔術士が絡からむ仕事はたいてい面めん倒どうだ。たとえば、連中は独自の理り屈くつでみずからの正当性を主張したりする。曰いわく、金は自分に借りられたことによってその性質が変化し、存在としてまったく異なるものとなったため、返すことは不可能である。現時点においては不可能だが、未来永えい劫ごうにわたって実現の可能性が皆かい無むであると断言はできないので、今後も試行錯さく誤ごを重ねてゆくことを誓せい約やくすることはやぶさかではない。ついては、その旨むねの書面を作成するべきだが、正確な文面を検討するための時間が必要であり、その時間を計算するにあたって──等々。魔術の訓練によるものか、肉体的な苦痛にはわりと耐たい性せいがあるので、多少締めあげたくらいでは効果がないし、精神的にも無む駄だに強きよう靭じんだったりする。手に負えない、少なくとも仕事上では関かかわりあいたくない人種だ。

　この女はどうも違ちがう。

　話が通じるという意味ではまともだが、口は達者そうだし、もちろん頭も切れそうだ。度胸もいい。腕うでにもさぞかし自信があるのだろう。こちらがつけあがれば徹てつ底てい的に叩たたき潰つぶされるに違いないし、かといって下手に出すぎればどこまでも侮あなどられる。あえて微び妙みような綱つな渡わたりを相手に強しいて、渡れないのなら知ったことかと叩き落とす。うまく渡りきったとしても、よくできましたと微び笑しようするだけで、ご褒ほう美びはそれでおしまいという可能性だってある。

　女は少しだけ首を傾けて目をすぼめた。

「何のための調べ物なの？」

「馴な染じみの店の女が殺された」

　クラニィは女の目を真正面から見た。

「ミケランジェロのレジーナって女だ」

「ご近所さんね」

「ああ」

「話は聞いてるわ。四人目ね。誰に殺されたのか調べてるわけ？」

「まあな」

「恋こい人びとだったの？」

「いや、違う」

「物好きね」

「どうだかな」

「あなたのこと、知っているわ。クラニィ」

　女は不意に壁かべ際ぎわから離はなれて歩きだした。カウンターの奥の席に腰を下ろすつもりらしい。クラニィは黙だまって女に従い、隣となりに座った。

「凄すご腕うでらしいわね。取り立て屋さん」

「それにしては儲もうかってないがね」

「連れん絡らく先さきと名前を書いた紙切れを第三区にある絶ホー望プレ公スパ園ークの求人掲けい示じ板ばんに貼はっておけば、あたしでもあなたに仕事を頼たのめるのかしら」

「悪いが、それだけじゃだめだ」

「そうね。赤い字で目立つように書いておかないと。CRY FOR ME」

「貸した金が戻もどってこないときはいつでも呼んでくれ」

「何かあればお願いするわ。ベティよ」

　女が右手を差しだしてきた。魔術士は本名を捨て去り、長たらしい真マ名ナの他ほかに短めの仮カ名ナを持っている。ベティ、か。ずいぶんとまあかわいらしい仮名だし、そんな名がそれなりに似合っていないこともない見てくれでもあるが、中身は果たしてどう

だろう。握にぎった手は意外に感じるほどやわらかく、同時につめたくて、思わず少し力をこめてしまった。

「自己紹しよう介かいは必要なさそうだな」

「ええ。何か飲む？」

「そうだな。お前さんは何がいい」

「仕事中よ」

「だったら、茶でももらうか」

　クラニィが肩をすくめてバーテンにバスク茶を二つ頼もうとしたら、ベティが止めた。

「やっぱりあたしはブランデーにして。ピスカでいいわ。同じでいい？」

「いや、俺はウイスキーをもらおう。マッケンレーをロックで」

　ベティに向かって頭を下げたバーテンの態度は慇いん懃ぎんなだけではなかった。表情が硬かたすぎる。恐おそれているのか。何をどう見せつけたのか知らないが、怖こわい女だ。

「仕事中なんじゃないのか」

「心配してくれなくても、頭が鈍にぶるほど飲まないから大だい丈じよう夫ぶよ」

「まさか、いくら飲んでもきかないタチだったりしないだろうな」

「どうかしらね」

　ベティは頬ほお杖づえをついて悪戯いたずらっぽく笑ってみせた。好きこのんで飲んだ酒で身を滅ほろぼすならまだしも、他人に酒を飲ませて身を滅ぼすのはできれば御ご免めんこうむりたいが、身から出た錆さびといえばそれまでだ。腹をくくるしかない。

「お前さんたちの酒代を稼かせぐために働くとなると、気合いが入らねえけどな……」

「たち？」

「こっちの話さ」

「たかられるタチなのね。なんとなくわかる気がするわ」

「そうかい」

「あなた、結構有名みたいよ。お人ひと好よしだって」

「らしいな。どこかの餓が鬼きにもそんなことを言われたよ。おそらく、同どう姓せい同名の別人がいるんだろうさ」

「商売も同じで？」

「偶ぐう然ぜんの一いつ致ちってやつだ」

「不思議なこともあるものね」

　ベティは唇くちびるの端はしをつりあげて、バーテンが持ってきたブランデーを一口飲んだ。一口といっても結構な量だ。この女もかなりいけるクチらしい。やれやれだ。

「ポーラの何を知りたいの」

「容姿。経歴。交友関係。何かおかしなことに巻きこまれてなかったか。そのあたりのことを誰だれかにもらしてなかったか。それから、どんなふうに死んだか。まあ、とりあえずはそんなところかな」

「身長は百六十五サンチくらい。体重は知らないわ。痩やせていたとは言えないわね。金きん髪ぱつで、目は青。二十四歳。美人といえば美人だったけど、たまに男と間ま違ちがえられて、もめごとを起こしたりもしていたみたいね」

「顎あごが割れてた」

「彼女を知ってるの？」

「直接は知らん。殺された女に聞いた」

「そう。仇あだ討うちってわけ？」

「さてね。ただ、殺される前に相談された。夢女島のシャロン。ミケランジェロのアニエス。そして、ポーラ。この界かい隈わいで三

人の女が殺された。なんだか不安だと言っていた。もし自分が殺されても平気かときかれもした」

「平気じゃなかったのね、取り立て屋さん」

「そうでもない」

　クラニィはウイスキーを呷あおって息をついた。

「何をどうしたところで、死んじまったやつが生き返るわけじゃないしな。だから、誰かのためにやってるんじゃない。自分のためだ。納なつ得とくしたいだけさ」

「納得したあとに、むなしさだけが残る結果になるかもしれないわよ」

「余計なお世話だろうが、俺が思うに、お前さんは頭がよすぎる。俺みたいな馬ば鹿かは、あとのことなんざそう考えてやしない。疲つかれるだろうから走らないってのは利口だけどな。ただ走りたくて走るときもある」

「そういう馬鹿は嫌きらいじゃないわ」

　ベティは本音か社交辞令か判断がつかないような口調でそう言い、上うわ目め遣づかいでクラニィを見て空のグラスを振ふってみせた。もう一いつ杯ぱい飲んじまったのかよ。

「話のつづきだけど、客受けはよかったわよ。同どう僚りようにはあまり好かれてなかったみたいね。でも、殺されるほど憎にくまれていたとは思えない。死体が見つかった場所は自宅近くの路地裏で、両手を縄なわか何かで縛しばられて暴行されたうえ、絞こう殺さつされて鈍どん器きで頭を強打されたらしいわ。どこの誰か知らないけど、男がやったことは間違いないでしょうね」

「ポーラが死んだあと、顔を見せなくなった客はいないか」

「調べさせる？」

「できれば頼たのみたい」

「いいわよ。しばらくただ酒が飲めそうね」

「当分この店にはこないほうがよさそうだな」

「ミケランジェロによくいるんでしょう。こっちから押しかけるわよ」

「ポーラを指名したことのある客と、客以外で個人的に親しかったやつがいれば、そいつの名も知りたい」

「破産の覚かく悟ごはできた？」

「店には言っておく。好きなだけ飲んでくれ」

「休みの日にでもうかがわせてもらうわ」

「しがない自営業の俺ほどじゃないだろうが、あまり休みのとれなさそうな職場だな」

「あながちそうでもないのよ？」

　ベティは二杯目のブランデーを持ってきたバーテンに小声で何事か命じた。どうやら交こう渉しよう成立ということらしいが、こうしてクラニィと話している間にも、ドアが開けば必ず確かく認にんするし、定期的に店内を見まわしている。たいした女だ。

「ところで──」

　クラニィはベティの胸むなもとをちらりと見た。あまりにも大だい胆たんに開いているものだから、つい目がいってしまっただけだが、「何？」ときき返してきたベティの声こわ音ねがやけにつめたかった。クラニィは、何でもない、と肩かたをすくめてグラスを傾かたむけた。おもしろい女だ。

10

　第六区で生まれ育った女が、生活のために十二、三歳で客をとりはじめる。それこそしがない自営業の最たるものだが、どこでも商売ができるわけじゃない。場所によってはその一帯の管理権を主張する組織があったりするし、知らずに誰かの縄なわ張ばりで通行人の袖そでを引いたりすると、手痛いしっぺ返しを食うかもしれない。面めん倒どうをさけたいのなら、思いきって組織の傘さん下かに入ってしまえばいい。ピンハネされるが、身の安全はそれなりに保障される。器量に自信があるのなら、いっそのことそうした組織に属している者の女になってしまうのも悪くない手だ。あるいは、クァラナドの店で働くか。やばい店も多いが、夜の社交場に毛が生えた程度の店も探せばないことはない。ただ、多くの店では副業禁止を言い渡わたされる。つまり、店での営業以外で個人的に客をとってはいけないということだ。とはいえ、従業員の行動を二十四時間監かん視しするわけにもゆかないから、中には副業に手を染める者もいる。とくに、第六区生まれの逞たくましい女は、おとなしめの店で働きながら金を持っていそうな客を物色し、これはと思う男を寝ね床どこに誘さそいこむ。何日も阿あ呆ほな客どもに愛あい嬌きようを振りまいてようやく稼かせぎだせる金を、たった数時間で手に入れることができるのだから、ぼろい儲もうけだ。

　夢女島のシャロンはそうした女の一人だったらしい。

　餓が鬼きのころからあどけない仕し種ぐさと表情で男をたらしこむ名人だったという。

　もっとも、客にも同業の女たちにもおおむね好感を持たれていた。シャロンには男に夢を見させるだけでなく、夢から覚まさせない才能もあった。シャロンは同僚の女に対して、この仕事は天職だ、とよく言っていたという。いろいろな男と寝るのが好きで、たとえそれが仮かり初そめでも男たちに愛されるのが楽しくて仕方ないと。楽天的で、遊び上手で、気前がよく、第六区育ちの後こう輩はいたちにも慕したわれていたらしい。後輩の一人は、ねえさんが死んだなんてまだ信じられない、と涙なみだ目めで語った。出勤しないシャロンの部屋を訪ねて、暴行されたうえ、後頭部を粉ふん砕

さいされた無残な死体を発見した同僚の女は、それ以来、悪夢にうなされるようになり、睡すい眠みん薬やくを手放せなくなったという。だが、つい最近、悪夢以外の夢を久しぶりに見た。シャロンが出てきて、彼女に謝ったらしい。実際、そういう女だったよ、と彼女は疲れた笑えみを浮うかべた。自分のことでは悩なやんだりしないからって、他人の心配ばかりしてた。それで殺されてりゃ世話ないよね。馬ば鹿かな女だよ。

夢女島のシャロン。身長約百五十八サンチ。肉づきはよかったが、太っているようには見えなかった。金きん髪ぱつ。目は濃こい青。二十一歳だったが、童顔で、十代でも通用した。殺されたのは二十二日前から二十一日前までの間だと思われる。

ゲッコのポーラ。百六十五サンチ。がっちりした体型。二十四歳。金髪。青い目。殺されたのは十二日前から十一日前の間。

ミケランジェロのアニエス。身長百六十七サンチ。どちらかといえば瘦やせ型がた。二十歳。黒くろ髪かみ。微かすかに緑色がかった青い目。殺されたのは三十八日前あたり。

そして、ミケランジェロのレジーナ。百六十二サンチくらいだったか。胸や腰こしには肉がついていたが、すらりとして見えた。二十二歳。金髪で、目は少し灰色っぽい青。殺されたのは三日前。

とりあえず、わかっている範はん囲いでは、まずアニエスが犠ぎ牲せいになり、十六、七日してシャロンが殺され、約十日後にポーラが、さらに八、九日あけてレジーナが命を奪うばわれた。

四人を殺したのは同一人物なのか。

手口から考えると、アニエスとシャロン、ポーラについてはほぼ一いつ致ちしている。レジーナだけは頭部を持ちさられているし、暴行もされていないから、別口だと見なすのが妥だ当とうかもしれない。

とはいえ、決めつけるのは早いだろう。四人はこの八丁目界かい隈わいで働いていた。それに、調べたところでは、四人とも香水セント市場マートに住んでいた。共通点はある。他ほかにもまだあるかもしれないし、生活圏けんが重なれば、おのずと接せつ触しょくする人間も重なる。

　たとえば、仮にレジーナを外したとしても、夢女島、ミケランジェロ、ゲッコと、この事件には三つの店が絡からんでいる。隣となり近所といってもいい商売敵がたき同士の三つの店すべてに足を運んだことのある人間。そのなかでも、シャロン、アニエス、ポーラの三人と接点のある人間ということになれば、割り出せるかどうかは別としても、かなり絞しぼりこめるはずだ。

「えらい場所に住んでやがるな」

　第七区。一号区とも呼ばれる。瓦が礫れきだらけの、街まち並なみどころか廃はい墟きょ以下だ。



　ベティからもらったポーラの指名客リストと夢女島で仕入れたシャロンの帳面に名があり、それからミケランジェロの常連客でもある男の住すみ処かが、どうもこのあたりにあるようだ。そう聞き及およんできてみたのだが、住居らしきものは見あたらなかった。それでいて、瓦礫と瓦礫の合間を縫ぬうようにして歩いている人ひと影かげをちらほら目にするので、一人とっつかまえて尋たずねて

みたら、種と仕し掛かけを教えてくれた。崩ほう壊かいした建物の地下だ。なんでも、そうとう昔、とてつもなく強力な魔ま術じゆつによってぶち壊こわされたという一号区の、このあたりは端はしのほうだから、地上部分はほとんど駄だ目めだが、地下は無事らしい。魔導王時代の技術がまだ生きていたころの建物なので、結構丈じよう夫ぶで快適だし、何より安全なのだという。男はそんな地下の一室で身をひそめるように暮らしている、稀少物レア・蒐集家ハンターの侵クラ入ツカ者ーというふれこみだった。

「おい、マッキー。俺だ。クラニィだ。わかるか」

　倒たおれてもたれあっている壁かべと壁の間にもぐりこんで、床ゆかに敷しかれた鉄板を思いきりガンガン叩たたいた。

「ミケランジェロで何度か顔をあわせたことがあるだろう。クラニィだ。取り立て屋だよ。いるのか。いるなら開けてくれ」

　この下にいるはずの男とよく組んで仕事をしている侵クラ入ツカ者ーに、ベンテン・カフェで会って話を聞いた。仕事にはそう熱心ではなく、あまりいい相棒とは言えないので、そろそろ見切りをつけようと考えている。そいつはそう語ってこの場所を教えてくれた。腕うでは悪かねえんだがな。頭がいかれてる。潮時だよ。

　そうして一分か二分は叫さけんだり鉄板を殴なぐったりしていただろうか。一向に反応がないので、鉄板の端に溶よう接せつされている把とっ手てを握にぎって引っぱってみた。びくともしない。内側にかんぬきでもかけているのだろう。外側には錠じよう前まえらしきものはないから、やはり中にいるということだ。面めん倒どうだから居留守を決めこんでいるのか。それとも、何か出てきたくない理由でもあるのか。ともあれ、黙もく々もくと酒しゆ杯はいを重ねながら女たちをねちっこく眺ながめている陰いん気きそうな男というのがやつの印象だ。相棒の証言も気になる。頭がいかれてる。どういう意味かと問い質ただしたが、言葉の綾あやだとかわされた。いずれにせよ、じつはお尋ねしたいことがあるのですがと低姿勢で出ても、はいはいそうですかと素す直なおに応じる相手ではなさそうだ。

「マッキー。ここのことはベラミーに聞いた。お前さん、このところ何度も仕事の約束を破ってるらしいな。ずいぶん腹を立ててたぞ。いかれ野や郎ろうとはこれ以上、一いつ緒しよにやってけないとさ。もちろん、お前さんのことだ。いったいどういかれてるの

か、きいてみたよ。興味があったんでな」

　鉄板の下で微かに音がした。きやがったか。

「人は見かけによらないって言葉がある。お前さんは違ちがうな。見たまんまだ」

　鉄板が動いた。ずらされて、ぼさぼさのくすんだ金髪がのぞいた瞬しゅん間かんだった。

　クラニィは左手で髪かみの毛をひっつかんで、鉄板を足で押しやり、右手でそいつの首をわしづかみにした。腕ずくで引きずり上げて押し倒すなり、足で相手の腕を封ふうじながら両手で首を絞しめた。

「ききたいことがある。黙だまって答えろ。いいな？」

「……な……で、お……」

「答えろ」

　マッキーは目を剝むいて何度もうなずいた。

　クラニィは少しだけ手の力をゆるめた。

「アニエスを知ってるな。ミケランジェロにいた」

「……し、知ってる」

「シャロンは。夢女島の」

「……し──」

　マッキーは赤黒い顔を縦に振ふりかけたが、やめた。

「し、知らない」

「ほう」

　クラニィは右手で首を押さえたまま、左手でマッキーの右耳を思いきり引っぱった。

「いいぞ。嘘うそをついても。ただそのぶん痛い目に遭あうだけ

だ。俺はかまわん。痛いのは俺じゃないからな」

「──し、しっ、知ってる！　シャロンは……何回か、買ったことがあって！」

「個人的な客でもあったってわけか」

「お、俺じゃない！　俺は殺やってない！」

「誰だれもそんなことはきいてねえよ」

　先に言いだすとは。よっぽど脇わきが甘いのか。ここはサンランド無統治王国だ。他ほかの国ならたいてい殺人は重罪だが、この国では違う。犯罪を追つい及きゅうして裁きを下すための仕組みはないし、そもそも法がないのだから、犯罪というもの自体が存在しない。仮にマッキーが四人の女を殺したとしても、罪人ではないのだ。そのかわりに、多くの国で法的には禁止されている復ふく讐しゅうも、この国はごく普ふ通つうに行われている。誰かを殺せば、恨うらみを買って殺されることも覚かく悟ごしなければならない。金で仕返しの代行を請うけ負う者もいて、それ専門のクランさえある。もし女たちの復讐代理人がいたとして、今のマッキーの台詞せりふを聞いたらどうするか。とりあえず殺すかもしれない。もし人違いでも、相棒にさえ愛想をつかされたちんけな侵クラ入ツカ者ーが一人消えるだけだ。リスクは少ない。俺がただの取り立て屋でよかったな。

「ポーラも知ってるな。ゲッコの女だ」

「……こ、殺されたんだろ」

「らしいな」

「お、俺が、や、殺ったと思ってるのか」

「そう見えるか？」

「だ、だって──」

　まあ、マッキーにしてみれば、状じよう況きようからしてそう思うしかないだろう。やつは涙なみだぐんでいる。目玉が今にも飛びだしそうだ。死にたくない。いやだ。やめてくれ。必死なのか。

「お、俺の話……ベラミーの野郎に聞いたんだろ！　俺は、ち、違う！　女を殺す趣しゅ味みなんかない！　俺は女を見て楽しむ！　い、イマジネーションだ！　そ、想像力は無限なんだ！　アニエスも、シャロンも、ポーラも、そ、それぞれいい女だった！　三人が死んで誰よりも悲しんでるのは俺だ！　あいつらは、お、俺の恋こい人びとだった！　俺の、あ、頭の中で──」

「頭の中で、ね」

「俺と、ほ、本気でつきあってくれる女が、い、いると思うか？」

「物好きってのはいるもんだぞ」

「お、俺にだって好みがある！」

「まあ、そりゃあそうだろうが」

　三人か。

　クラニィは手を放して立ちあがった。

「レジーナも殺された」

「……え──」

「三日前だ。お前さんもあいつのことは知ってるだろう」

　演技だとしたらたいしたものだ。マッキーは起きあがりもせずに、自分の首を押さえたまま両りよう眼めを見開いた。口が半開きになっている。顔面全体の筋肉が完全に硬こう直ちよくしていて、声も出ないといった様子だ。あるいは、レジーナも恋人の一人だったのかもしれない。クラニィは天を仰あおいだ。薄うす曇ぐもりだった。ため息が出た。

11

「悩なやみ事でもあるのかい」

　向かいで例のかなり値の張るカスクストレングスをぐいぐい飲ん

でやがるいやになるほどきれいな顔をした黒ずくめの男が、いかにも退たい屈くつしのぎといったかんじのまるで関心がなさそうな冷たすぎる口調でそうきいてきた。

　クラニィとしては、意地でも「そんなことはない、断じてない」と返したいところだが、正直、悩んではいる。だいたい、貸した金を回収するのと人殺しを捜さがすのとでは大おお違ちがいだ。畑違いで思うように勘かんが働かない面もあるし、治安維い持じ騎き士し団だん時代のように、あやしいやつを片かたっ端ぱしからしょっぴいて尋じん問もんするなどという方法は通用しない。仮に何か決定的な証しよう拠こがあったとしても、それをもとに誰かを断罪することさえできないのだ。

　じゃあ、どうすりゃいいんだ。

　どうにかして犯人を捜し当てることができたとしても、それで俺はどうする？

　いったい何がしたい？

　悔くい改めさせるか。それはどだい無理な話だろうから、ぶっ殺してあの世でたっぷり反省させるか。エルデンの流りゅう儀ぎに従えば、そのあたりがおそらく妥だ当とうなところだが、取り立て屋の主義には必ずしも合がつ致ちしない。

　結局、そいつを目の前にするまでは、自分がどうするかわからないというのが本音だ。

　今はその前の段階でつまずいているのだから、捕とらぬ狸たぬきの皮算用になりかねない。

「まあな」

「そう」

「……って、それだけかよ」

「ああ」

　アジアンはまたもや一息で空けたグラスをテーブルに置いて、やや前方へ、つまり向かいあって座っているクラニィのほうへと押しやった。こめかみあたりの血管がちょっぴりぶち切れかけたが、こ

いつは一応、命の恩人で、好きなだけ飲めと言ったのはクラニィだ。取り立て屋の信条として前言をひるがえしたくはない。それに、こっちが先に両手を挙げたりしたら、それ見たことかとアジアンは冷れい笑しようするだろう。べつに虚こ仮けにされようが愛想を尽つかされようがかまわないが、その蔑さげすみはクラニィよりもむしろアジアン自身を傷つけるのではないか。

　余計なお世話に違いない。

　ただ、虐殺カーネイ人形ジドールなどというご大層な二つ名と稀け有うな美び貌ぼうを持つこの男は、最高級の芸術品のような仮面をかぶって正体をわかりづらくしているだけの、とてつもなくひねくれた餓が鬼きなのかもしれない。

　お前さん、実際、何歳いくつなんだ、とききそうになったが、やめておいた。クラニィはアジアンのグラスに惜おしみなくマッケンレーのカスクストレングスをついでやった。

「悩み事でもあるのかと言ってきたのはお前さんだろう。じゃあ、何を悩んでるんだとかな。普ふ通つう、きいてみるもんだろうが」

「どうしてもきいて欲しいのなら、きいてやらないこともない」

「お前さんにはたぶんまるっきり関係ないことだし、話すつもりは毛頭なかったんだがな。だんだんきいてもらいたくてたまらなくなってきたよ」

「悩みは何」

「よくぞきいてくれた。よし、気合いが入ってきたぞ。見ろ」

　クラニィは手帳に挟はさんであった四枚の紙切れをテーブルの上に置いた。紙切れにはそれぞれ四人の女の身体的特とく徴ちようや経歴、死体発見時の状じよう況きよう等々をびっしり書き入れてある。アジアンは右からアニエス、シャロン、ポーラ、レジーナの順に並べられた紙切れをざっと見て、細い顎あごを指でつまんだ。

「誰だれが殺やったか調べているわけか」

「そういうことだ」

「何のために」

「そいつは話せば長くなる。というより、正直、自信がなくてな。おそらく自分でもはっきりとは説明できん」

「不思議なことを言う人だな、キミは」

　アジアンはほんの少しだけ目を瞠みはった。お前さんのほうがよっぽど不思議だがな。

「ただ──」

　クラニィはウイスキーを一口飲んだ。俺はどうもこの男の前では率そつ直ちよくすぎる。まだ互たがいのことをよく知ってるわけでもないってのに。

「レジーナに相談された。お前さんがここにきた日だ。三人は誰に殺されたと思うかってな。あいつは怯おびえてた。いやなかんじがする。誰かに見られてるような気がする。たしかそんなことも言ってたな」

「キミと幸せな家庭を築きたがっていた娘こかい」

「可能性の話だったな」

「ゼロになってしまった」

「奪うばったやつがいる。いろいろあったに違いないすべての可能性を、だ。死ぬってのはそういうことだからな。誰かをぶっ殺して切り開ける未来もあるんだろうが、閉ざされる未来も確実にある」

「キミは人殺しが嫌きらいなんだ」

「好きとか嫌いとかな。そういう問題じゃない。命なんてものはそこらじゅうにごろごろ転がってやがって、ほとんど無む駄だにも思えるが、一つの例外もなくちゃんとぜんぶに重さがある。それだけの話さ」

「ボクにはわからないな」

「わかるときがくる。きっとな」

「虐殺カーネイ人形ジドールのボクに？」

「お前さんは人形なんかじゃない」

　薄うす青あお色の瞳ひとみは表情よりも遥はるかに多くのことを物語っていた。

　それを悟さとられまいとするかのように、アジアンは目をそらした。

　唇くちびるがわずかにゆがんでいた。

　人形にはとても真ま似ねのできない芸当だ。

「何かわかったことはあるのかい」

「少しはな」

　クラニィは手帳からもう一枚、八人の名前が書かれている紙切れを出した。あいにくミケランジェロには女を指名するというシステムがないので、とりあえずシャロンとポーラ関連で浮うかんだ男たちの名だ。ただ、八人中マッキーをふくめた三人は線を引いて消してある。調べたところ、マッキーはポーラとレジーナが殺された時間帯のアリバイがあったし、心証的にも黒とは思えなかったので、消すしかなかった。他ほかの二人も直接話を聞いたうえで外した。

「現時点での容疑者リストってとこだ。ただ四人のうち二人と接点があったってだけだけどな。しかも、友人知人のたぐいは入ってないから、不完全なんてもんじゃない」

「増えることはあっても減ることはなさそうだ」

「一つずつ潰つぶしていくしかないさ」

「気が長いんだな」

「商売柄がら、いちいち短気を起こしてたらやっていけないんでね」

　結局、落ちつくところはそこになる。あきらめず、焦じれずに、考えられるかぎりの選せん択たく肢しを洗いだして、適切な方法で消去してゆき、最後に残った答えをすくいあげる。その適切な方法とやらが問題で、アリバイの有う無むを確かめるだけでも一苦労どころではすまないが、面めん倒どうくさいからという理由で放ほう

りだすわけにもゆかない。ようするに、仕事と同じだ。やると決めたからには、少なくとも区切りがつくまではやり通す。おそらく性しよう分ぶんなのだろう。厄やつ介かいな性質だが、今さら変えられるものではない。

　捨てるのは一度で十分だ。

　治安維い持じ騎き士し団だんを辞やめて、逃にげだすように国を出た。

　後こう悔かいはしていないが、所しよ詮せん、何もかもを帳消しにしてやり直すことなどできないということは思い知らされた。自分が自分以外のものになれるだなんて、錯さつ覚かく以外の何ものでもないのだと痛感させられもした。人によりけりだとしても、クラニィには無理だった。

「でも、あまり似てない」

「何がだ」

「この四人」

　アジアンは四枚の紙切れのほうを手にとって見比べた。

「強しいて言えば、目が青いことくらいか」

「お前さんの目も青だな。べつに珍めずらしくない。色合いがそれぞれちょっと違ちがうしな」

「体型も性格もばらばらだ」

「何かあるんじゃないかってな。俺も考えたよ。同じやつが四人とも殺やったんだとしたら、まあ、控ひかえめに言ってもまともじゃない。そういうやつはたいてい癖くせがある。当然、悪い癖だ。やり口。女のタイプ。判で押したように似たような女を同じような方法で殺すこともままある。それ自体が重要な手がかりになる場合も少なくない」

「見落としているだけかもしれない」

「じつは俺もそう思ってる。何かを間違えてるか、知らないことが何かあるのか。たとえば、全員同じ医術士にかかったことがあると

かな」

「で、その医術士が犯人なわけか」

　アジアンはほんの少しだけ口くち許もとをゆるめてみせた。そんな簡単な話だといいんだがな、と応じてグラスを傾かたむけたら、もうほとんど氷が溶とけてしまっていて、ロックではなく薄うすい水割りになっていた。アジアンのせいでボトルも空きかけている。仕方なく、キヌコがちょうどそばを通りかかったので、新しいボトルを頼たのんだ。キヌコはいつもどおり無愛想だった。うんともすんとも言わず、だが、仕事は早くて、すぐにボトルを持ってきてくれた。

「ヅラはやめたんだな」

「ウィッグ」

　冷たく訂てい正せいされたうえに頬ほおをつねられた。やはりキヌコにはベリーショートが似合っている。黒いロングヘアといえばアニエスだった。二人は仲がよかったのだ。

12

　背せ丈たけも百八十サンチくらいはあるだろうし、体重はおそらく百キルグラハムをゆうに超こえているに違いない。太っているのではなく、筋きん骨こつ隆りゆう々りゆうといったかんじだ。モヒカンや数えきれないほどの鼻ピアス、めくれあがった唇の周りをぐるりと一ひと巡めぐりしている短く整えられた髭ひげだけでもそうとうインパクトが強いのに、顔面をふくめた全身に刺青いれずみを入れている。おそらく、それを見せびらかすためだろう、上半身裸はだかで革かわパンツにサスペンダー、ごつい編あみ上げ靴ぐつという服装のマッチョ男には、はっきりいってあまり近づきたくない。いや、この男に接近したくない理由は他にもあるのだが。

　攻こう撃げき的な体たい臭しゆうだ。

　鼻というよりも目にくる。

　ミケランジェロで見かけたときは、どうも香こう水すいと体臭が入り混じったようなひどい臭気をふりまいているやつがいるな、と思った程度だったが、あれは一応、本人も気にしているということなのか。女の目というか鼻をまったく気にしていない昼間のエドモンドは、ある意味、怖こわいもの知らずだった。そりゃあそうだ。これでは鼻がきかないやつ以外は道を空けるしかない。エドモンドがやたらと自信ありげに振ふる舞まっているのは、もしかしてそういう理由からか。なんだかもうよくわからないが、尻尾しつぽを巻いて逃げるわけにもゆかない。

「夢女島にはよく行ってるぜ。ゲッコは最近ご無ぶ沙さ汰ただな。最近っつってもホントに最近だけどよ。ミケランジェロは言うまでもねえだろう。あんたとも結構顔をあわせるしな」

「ああ、そうだな」

　クラニィは迷っていた。鼻をつまんでいいものかどうか。そもそも、ソフトクリームなんぞをぺろぺろ舐なめてやがるこんなガタイのいい半はん裸らの男と並んで鉄てつ鎖さの憩いこい場ばの公園のベンチに腰こしかけてるってのはどういうシチュエーションだ。しょうがない。そうだ。やむをえない。エドモンドは鉄鎖の憩い場の市場に露ろ店てんを出していて、話を聞かせて欲しいと声をかけたら、じゃあ、と公園に誘さそわれた。ソフトクリームが食いてえなあ、と言われれば、そんなことで最初からへそを曲げられても面倒なので、買い与あたえるしかなかった。

「わざわざそんなことをききにきたのかよ」

「ん……いや、それだけじゃないんだがね」

「だったら何だよ。言ってみろって。俺とおまえの仲じゃねえか」

　たいした意味もなく口にした言葉なのだろうが、少々かちんときた。かなり頭がくらくらしている。その原因が他ほかでもないエドモンドだ。諸悪の根源と言ってもいい。そのてめえと俺がいったいどんな仲だって？

「ポーラが死んでからみたいだな。お前さんがゲッコに行かなくなったのは」

「ああ。何しろ、あいつは俺の女だったからな」

「つきあってたってことか」

「形はぜんぜん重要じゃねえ。もっとも重要なのは愛だろ。愛」

　愛か。よりにもよって、愛ときたか。どう答えりゃいいんだ。とりあえず、ああ、そうだな、とおざなりの返事をしておいたが、エドモンドは満足そうにうなずいている。

「あいつは俺を愛してたぜ。心の底からな。残念ながら、あいつだけじゃねえけどな。俺は博愛主義者なんだ。俺を愛してくれる女はみいんな愛してる。差別はしねえ。すべて同じ愛だ。愛には愛でこたえるってのが俺のやり方よ」

「ずいぶん変わった博愛主義だな」

「おいおい。愛のエキスパートたる俺を相手に、愛について議論しようってのか？」

「いや、そんなつもりはない」

　時間の無む駄だだ、とは言わないでおいた。まともに口をきいたのはこれが初めてだが、見てくれにそう引けをとらないくらい頭の中身にも問題がありそうな男だ。ただ、そのいかれた頭の中で考えていること、思っていることが露ろ骨こつなくらいはっきりと表情に出るタイプであることは間ま違ちがいない。

「じつはな。お前さんの女だったポーラを殺したやつを捜さがしてる」

「おお」

　エドモンドは両りよう眼めを見開いてソフトクリームのコーンを握にぎり潰つぶした。

「それだったら俺も協力するぜ。是ぜ非ひさせてくれ。俺もあいつのことはかわいそうだと思っててな。たいしたことはしてやれなかったしよ。せいぜい物をやったくらいでな」

「……物？」

「たいしたもんじゃねえよ。指輪だのネックレスだの。何百万ダラーもする品物じゃなくてな。いっても百万とかそんなもんだろ。

玩具おもちゃみてえなもんだ」

「……儲もうかってるんだな。お前さんの店」

「店？　あんなもんは趣しゅ味みだよ、趣味。金は腐くさるほどあってな。とはいえ、自じ慢まんできるような話じゃねえんだ。俺が稼かせいだわけじゃなくて、親の遺産だからよ。だけどな。あるもんはある。しょうがねえから、せめて俺を愛してくれる女に少しずつ分けてやってるわけよ。何せ、俺は博愛主義者だからな」

　どうも女たちの愛とやらの正体がわかりかけてきたような気もするが、エドモンドがそれを愛だと見なしているのなら、わざわざ否定することもあるまい。エドモンドは夢女島やゲッコ、ミケランジェロだけでなく、かなりたくさんの店で夜な夜な遊び歩いているようだし、シャロンとポーラ、それにアニエスとも何度か店外で会っている模様だが、ようするに玩具を与えるかわりに彼女らから愛を受けとっていたということだろう。クァラナドでも本当に景気のいい連中が行く店はかぎられているから、八丁目界かい隈わいだと湯水のように金を遣つかいそうなエドモンドは上客の部類に入るはずだ。攻撃的な体臭がネックだろうが、我が慢まんしていればそのうち嗅きゆう覚かくも麻ま痺ひしてくる。それも仕事のうちだと思えばいい。つらくて面めん倒どうでおもしろくなくて、それを乗り越こえた果てにわずかばかりの達成感を味わい、なんとなく満足しているうちにまた憂ゆう鬱うつな明日がやってくる。仕事といえば、たいていそんなものだ。

「夢女島のシャロンは知ってるな」

「もちろんだ。あいつも俺の女だったからな。かわいいやつだったのに、殺されちまってよ。どうせそのへんの変態野や郎ろうの仕し業わざだろうな」

「アニエスも──」

「当然、俺の女だったぜ。あいつはかわいそうなやつでよ。餓が鬼きのころ、人買いに売られてな。実の親にだぜ？　カリオサークの魔ま術じゆつ士しの家で召めし使つかいか何かやってたんだが、そいつが死んじまったもんで、夜の商売に鞍くら替がえしてエルデンに流れついたらしい」

「故郷がどこか辺へん鄙ぴな田舎いなかのほうだって話は俺も聞い

たことがあるな」

「聞くも涙なみだ、語るも涙ってやつだ。今は思いっきり端は折しよりまくって話したけどな。思い出すと泣けてくるぜ」

　エドモンドは鼻をぐしぐしさせはじめた。嘘うそ泣きかと思ったが、どうやらそうでもないらしい。ただ、アニエスの死を悼いたんでいるようだからといって、こいつが白だとはかぎらない。愛する男や女を手にかける者の話など古今東西枚挙にいとまがないほどだし、単純そうに見えるが、そのぶんものすごく簡単に嘘をついてしまえる男だという可能性もある。まあ、その場合、調べればすぐにボロが出るだろう。それを確かめるためにも、いろいろ問い質ただしたいところだが、エドモンドの人目をはばからない涙まじりのアニエス話はなかなか終わりそうになかった。あいつはいい女だった。夜の女には珍めずらしく清せい楚そなかんじだった。あいつは俺だけに秘密を明かしてくれたんだ。あれも愛だな。愛。俺への愛だ。秘密。秘密、だと……？

13

　誰だれだって秘密の一つや二つ抱かかえて生きている。何があっても他人には言えないこと。相手のために、または自分のために、言わないほうがよかろうと思われること。あえて言わずに黙だまっていること。種類はさまざまだろうが、一つとして隠かくしごとのない人間がいるというのなら、是非とも会ってみたい。そんなやつを捜しだすのはかなり手間だろう。ひょっとしたら、四人の女を殺した男を見つけるより困難かもしれない。

　アニエスにも秘密があった。

　たわいもない秘密だった。

　日が暮れてからミケランジェロに行ってキヌコに確かく認にんすると、あっさりうなずいた。

「そうだけど。だから何？」

「いや、知らなかったもんでな」

「目が節穴」

「かもしれん」

「よく見れば気づいたはず」

「そうだな」

「で、それが何？」

　クラニィが曖あい昧まいにうなずくだけで答えずにいると、キヌコは何か罵ば声せいを残して去っていった。つんとしたその背中を見送りながら舐なめるように飲む麦酒ビアはもうぬるくてまずい。こんなものは水と大差ないし、身体からだがいつものウイスキーを欲ほつしていたが、今日はやめておいた。

　ミケランジェロは、だいたい二十時をすぎたあたりからだんだんと混こみはじめる。日付が変わって一時くらいになるとだいぶ落ちついて、二時には客の姿がまばらになり、閉店は三時か四時だ。

　間もなく二十時になる。

　今のところ、客の入りは四割といったところか。いや、すでに半分ほど埋うまっているかもしれない。ついさっきも、三人連れの男たちが陽気な赤毛のイレーヌに迎むかえ入れられた。ちょうど今、入ってきたばかりの二人連れを席に案内しようとしているマリリンは、とてもきれいな銀ぎん髪ぱつの持ち主だが、それより度を超こして豊満すぎる身体が人目を引いてやまない。曄ヨウ蓮レンは東部系の美人だ。あれでひどい酒乱でなければ、高級店に引き抜ぬかれてもおかしくないだろう。新人のベラは波打つ茶色い髪かみと唇くちびるの右みぎ脇わきにあるほくろがそこそこ印象的だが、この店の従業員にしてはやや普ふ通つうすぎるか。

　まあ、本当のところはわからない。

　殺されたアニエスとは何度も話をしたし、一度、男に貸した金を取り立ててやったこともあるが、ミケランジェロにはあまり似合わない女だと思っていた。少し陰かげがあるものの、まっとうな女だと。今もそう思っている。

　ただ、髪をあえて染めずに常に黒いウィッグをつけて、眉まゆ墨ずみで黒い眉まで描かいていた彼女も、心の奥底に何か他人には見

せられないものを抱えていたのかもしれない。

　いや、あったに違ちがいない。

　当然だ。

　ないはずがない。

　クラニィはカウンターの隅すみで麦酒ビアをちびちび飲やりながら店内に目を配っていた。というよりも、正確には、一人の女とその周辺だけを注意深く観察していればよかった。

　ジェシリア。

　自じ称しよう十六歳だが、実じつ年ねん齢れいは二十一歳で、童顔なこともあってたしかに十代には見える。男には積極的に媚こびを売り、女には冷れい淡たんで、生まれつき女全ぜん般ぱんと相あい性しようが悪いと公言してはばからない。おかげで同どう僚りようには嫌きらわれているようだが、あまり気にしていない様子だし、男たちには人気がある。

　ジェシリアはどうすれば男に気に入られるか知り抜いているようだ。また、自分を疎うとんじるようなタイプの男には最初から近寄らない。賢かしこい女だ。男どもを手玉にとって金を巻きあげる商売には向いている。

　そのよく手入れされた金髪に、やたらと熱っぽくねばっこい視線をそそぐ男がいる。

　男は一人きりだというのに奥のボックス席に陣じん取どって、ウイスキーの水割りをほとんど一定のペースで味わうでもなくただ消費していた。

　名前だけは知っている。

　その名は例のリストにはふくまれていない。

　ベティから入手したゲッコのポーラに関かかわる名めい簿ぼには載のっていた名だ。

　もっとも、夢女島のシャロンとの繫つながりは今のところ見いだせていなかった。ミケランジェロの常連客でもあるが、女たちとは

ろくに話をせず、酒を飲むだけ飲んだら帰ってしまうという変わり種で、とくにアニエスやレジーナと接点があるとは思えなかった。現時点では、頭の隅のほうには置いてあるが、真ん中からは遠い。そういう男だった。

　男が手を挙げてそばを通りかかったジェシリアを呼んだ。

　小声で何か注文したようだ。

　ジェシリアが笑え顔がおでうなずいてカウンターに近づいてくる。

　もし彼女がやつのねっとりした眼まな差ざしに気づいていたとしても、とりたてて何とも思わないだろう。全身を舐めまわされるように見つめられることも仕事のうちだ。見るなと言って許されるのは、この店でもキヌコくらいのもので、たまには気色が悪いと感じることもあるに違いないが、皆みな、しょうがないと我が慢まんする。そのうち慣れて、そんなものだと考えるようになる。どこか無む警けい戒かいになる。この街を舞まう夜の蝶ちょうたちは、あでやかな衣い装しょうの上に独特の無防備さをまとっている。昼間の女たちには手が出なくても、夜の女たちには指一本くらいならふれられるかもしれない。馬ば鹿かな男たちが舌なめずりしながらそう思う。

　たぶん幻げん想そうだ。その幻想を金で買える。

　ただ、買ったとしても、たいてい自分のものにはならない。所しょ詮せん、幻まぼろしは幻だからだ。承知の上で幻とたわむれていればいい。それがこの街の不文律だ。現実を手に入れたければ、女たちの無防備さを剝はぎとって、その下から出てくる警戒心の氷をゆっくり溶とかし、相手を信じて、自分を信じてもらい、何かを共有し、育はぐくまなければならない。それが面めん倒どうだったり困難だったりするから、幻と酒に酔よってこの街で夜を明かす愚おろかでものぐさでろくでなしの男たちがいる。そう。たとえば、俺だ。

　やつは違う。

　幻を見ている目つきじゃない。

　あれは獲え物ものを狙ねらう獣けものの目だ。

　クラニィは椅い子すから立ちあがってゆっくりとやつに近づいていった。

　それでもやつはこっちには目もくれない。

　腫はれぼったい瞼まぶたの奥でぎらぎらと光っているやつの両りよう眼めは、ジェシリアだけを見ている。

　長い鼻だ。

　ささくれだった唇はだらしなくゆるみ、黄ばんだ歯がのぞいている。

　いったいこの男は何歳なんだ。

　肌はだには奇き妙みようなほど張りがあるものの、茶色い髪の毛は半分以上白髪しらがで、量はやけに多い。どうも好感が持てないのは、顔全体がゆがんでいるせいか。そうはいっても、凶きよう悪あくそうだとか、頭がおかしそうだとか、ぱっと見て判断されるような面めん貌ぼうではない。

　ごく普ふ通つう、よくあるとまではゆかないにせよ、とりたてて目立つ外見とは言えないだろう。

　この店にいても、わざわざ気にとめるような存在ではない。あの尋じん常じようじゃない目つきに多少気味の悪さを覚えたとしても、すぐに忘れてしまう。目つきの悪い男なんぞ、それこそ掃はいて捨てるほどいる。そう思ってやってもいい。

　二、三、尋たずねて、望ましい返答がえられれば、だが。

「アーサー」

　テーブルに手をついて名を呼ぶと、やつはようやくクラニィを見て舌打ちをした。

「……何か用か。取り立て屋」

「お見知りおきいただいて光栄ってやつだな」

「この店にはお互たがいよくきてるだろう。それくらい、いやでも耳に入る」

「そうかい。まあ、貸したまま返ってこない金があったら、いつでも言ってくれ」

「取り分はいくらだ」

「四割もらう」

「ぼったくりだな」

「一ダラーも返ってこないよりはましだろう」

「あいにく他人に金は貸さない主義だ。親の遺ゆい言ごんでな」

「お前さんみたいな人間ばかりだと商売あがったりだが、貸したっきり戻もどってこない金がいかに多いか知ってる身としてはそいつが正解だと思わなくもない」

「正解なんかに興味はない。糞くそ食くらえだ」

　アーサーはクラニィから目をそらし、喉のどを鳴らして水割りを飲み干した。

　表情に動きはない。むしろ、無表情すぎるくらいだ。

　案外、必死で頭を回転させているのかもしれない。

　目の前の男はどうして突とつ然ぜん、声をかけてきたのか。何を企たくらんでいるのか。自分はいったいどうするべきか。

　クラニィは顎あごでジェシリアを示してみせた。

「女はやっぱり金きん髪ぱつにかぎるよな」

　その瞬しゅん間かんだった。

　アーサーが息をつめて全身を強こわ張ばらせた。

　よくよく注意して観察していなければ気づかない程度の変化だったが、それはつまり、多少なりとも予期していて、心構えをしていたのだとも考えられる。

「俺がどんな女を好もうと貴様には関係ねえ」

　アーサーはちょうどこっちを見たジェシリアに向かって手を挙げた。

「勘かん定じようだ」

「あ、はあい、ありがとうございまあす」

　ジェシリアがしなをつくって尻しりを振ふりながら近づいてくる。

　アーサーは椅子から腰こしを浮うかした。

　野や郎ろう、逃にげるつもりか。逃がすものかよ。

　クラニィはアーサーから目を離はなさなかった。たとえやつが店から出ていっても追うつもりだった。どこまでも追いかけて必ずつかまえてやる。

　アーサーがポケットに手を突つっこんだ。

　ジェシリアはもうすぐそこだ。

　目の裏あたりで火花のようなものが散ったような気がした。

　しまった、と思った。

　動こうとしたときにはすでに、アーサーはジェシリアを羽は交がい締じめにして喉もとにナイフを突きつけていた。

「動くなよ」

　クラニィに対して言ったのか、それともジェシリアに囁ささやいたのか。アーサーの顔は青ざめているものの、動どう揺ようしている様子はない。こんな真ま似ねはしたくないが、しょうがない、とすっかり腹を据すえている顔つきだ。まだ何が起こっているのかよくわかっていないのだろう、ジェシリアがぽかんと口を開けたままおとなしくしてくれているのはいくらか助かる。ジェシリアに大おお騒さわぎされると、状じよう況きようがさらに複雑化する。それこそやむをえないが、くそったれ。なんてすばしっこい野郎だ。俺はやつを舐なめてたのか。そうかもしれない。こいつは俺のミスだ。考えが甘かった。甘すぎた。で、どうする。どう切り抜ぬける。ジェシリアは好きなタイプじゃないが、レジーナがポーラにつ

いて言っていたように、殺されるほど悪い女じゃない。

　ジェシリアを助ける。

　アーサーをとっつかまえる。

　どちらか一方の目的を達成するだけでいいなら、おそらくなんとかなる。

　とくに、後者は難しくない。カウンターの奥にはローガンもいる。あいつと二人がかりなら、いくらアーサーが素す早ばやくても取り逃がすことはないだろう。アーサーも人ひと質じちまでとったからには生きのびたいだろうし、交こう渉しよう次し第だいではジェシリアの身み柄がらを取り返すこともできるはずだ。

　ただ、一挙両得となると、少なくとも簡単ではない。第一、本当のところはアーサーが何を望んでいるのかさえ、現時点ではわからないのだ。最終的にやつがどういう行動に出るか予想がつかなければ、判断しようがない。

　店内は静まりかえっている。

　クラニィはカウンターの奥にいるローガンに視線を送った。それだけでどうやらローガンは察してくれたようだ。ふいていたグラスを置いて、そっとカウンターの下に差し入れたその手には、おそらく包丁が握にぎられている。クラニィが何か指示を出せば、ローガンはすぐに反応してくれるだろう。

「まあ、落ちつけよ」

　クラニィは両手を挙げて半歩下がってみせた。

「何もとって食おうってわけじゃない」

「だったらなんで野の良ら犬いぬみたいに嗅かぎ回ってやがる」

「遺ゆい言ごんでな」

「誰だれのだ」

「お前さんも知ってる女さ」

「レジーナか。仲がよさそうだったものな。あいつは今も俺の部屋にいるよ。会いたいなら会わせてやってもいい」

　アーサーは小鼻をぴくぴくさせながらせせら笑ってみせた。

　レジーナは首から上がない無残な姿をさらして死んだ。頭部は持ち去られた模様だった。

　何のためか知らないし、知りたくもないが、そんな鬼き畜ちくにも劣おとる所業に及およんだ外げ道どうがすぐ目と鼻の先にいる。

　とらえた女の金髪に鼻はな面づらを突っこみ、舌をのばして髪かみの毛を味わい、血走った目を陶とう然ぜんとして細めている。

　気色の悪い下げ衆す野郎だ。

「三人殺やってから気づいた。ずいぶんもったいないことをしたってな。最初からちゃんと保存しておくべきだった」

「保存、ね」

「そうだ。俺は生きのいい金色の髪の毛にしか興味がなかった。正直、女は邪じゃ魔まだ。付属品にすぎない。だが、女が死ねば髪の毛も途と端たんに艶つやを失う。なんでだ。俺は気づいたんだ。女と髪はセットだ。花は土がないと育たないし、生きていけねえ。女は欠かせない部品だ」

「そいつは斬ざん新しんなとらえ方だな」

「俺もそう思うよ。革新的だとさえ思う。むしろ革命だ」

「そうかい」

「そうだ。俺は革命を起こす。まずは首から上ごと保存して状態を見てるところだ。ちゃんと観察してる。それで駄だ目めなら胴どう体たいも残してみるか。いろいろ考えてるんだ。だが、今のところ、あの髪の毛はまだ大だい丈じよう夫ぶだ。ずっと大丈夫だといいんだがな。どっちにしても、完かん璧ぺきな保存方法が見つかるまで研究はつづける」

「よくわからんが、さぞかし有意義な研究なんだろうな。お前さんにとっては」

「当然だ。だから俺を邪魔するんじゃねえ。おかしな真ま似ねをしやがったらこいつを殺す」

　アーサーが手に力をこめると、ジェシリアの首にナイフが食いこんで真っ赤な液体が白い肌はだを伝い落ちた。ジェシリアがようやく初めて短い悲鳴をあげた。両りよう眼めを一いつ杯ぱいに見開いて、何これ信じられない、とでも言いたそうな表情だ。

「……た、たす、け……」

「ああ、わかってる。大丈夫だ。絶対助けてやる。安心しろ」

　クラニィはジェシリアをなだめながらアーサーの顔をうかがった。やつのひび割れた唇くちびるの両りよう端はしがわずかにつりあがったように見える。しめた、とでも思ってやがるのか。たしかに主導権を握っているのは完全にアーサーだ。人質をとられている以上、こっちはどうしても受け身にならざるをえない。

「いいか。誰も俺に近づくな」

　アーサーはジェシリアを引きずるようにして出口へ向かおうとしている。

　そこまで広い店じゃない。もうすぐドアだ。

　やつはどの時点でジェシリアを解放するつもりだろう。いや、最初から解放する気などさらさらないのかもしれない。女にナイフを突つきつけたまま逃にげるとなると骨だ。外に出るなり、ジェシリアを殺して逃げる。やつとしてはしっかり保存したいところだろうが、今回ばかりは身の安全を第一に考えてやむなくあきらめる。ありうる話だ。そうしてみすみす取り逃がせば、やつも本気で身を隠かくそうとするだろうし、こっちはもっと本気でやつを捜さがしまわらなければならない。借金踏ふみ倒たおしの常習犯を見つけだすのと、果たしてどっちが簡単か。そういう相手を捜す仕事も何件か抱かかえているが、とにかく時間がかかるし、時間をかけたところで首しゆ尾びよく見つけられるとはかぎらない。正直、割りにあわない、少なくとも安やす請うけ合いはできないたぐいの仕事だ。

　逃がしてたまるかよ。

　だが、どうしたものか。

　考えている間にも、アーサーとジェシリアはドアにたどりつこうとしている。

「殺せば？」

　それがミケランジェロの声だということはすぐにわかった。

　思わず壁かべ際ぎわのアトリエスペースに目をやった。

「べつに平気でしょう？」

　ミケランジェロは笑え顔がおで肩かたをすくめて絵筆を振ふってみせた。

「死んだってすぐ高層寺院に連れていって生き返らせてあげるし。それに、長い人生の中で一回ぐらい死んでみるのもきっと悪くない経験ジェロ」

「……て、て、店長ひどおい！　そんな人だなんてえ……思ってたけどお……」

　ジェシリアの気持ちはわかるが、じつのところクラニィもその方法は考こう慮りよに入れていた。最悪の場合、うまく殺されてもらうしかない。ただ、エルデンには金さえ払はらえば蘇そ生せい式しきを受けられる環かん境きようが整っているとはいえ、死は死だ。蘇生式が失敗することもあるし、たいてい事前にたとえ僧そう侶りよどもがしくじっても一いつ切さい補ほ償しようしない旨むねの契けい約やく書しよにサインさせられるので、望み通りの結果が出なくても、ご愁しゆう傷しよう様さまです、で終わってしまう。よほど図太い神経の持ち主でないかぎり、生き返らせてやるから安心して死んでくれ、とは言えない。死にかけているやつに、生き返らせてやるから安心しろ、と声をかけて慰なぐさめてやるのとはわけが違ちがう。それに、これまで少なくとも四人の女を殺したアーサーはよく知っているはずだ。

　死にたてほやほやでも、蘇生式ではどうにもできない場合がある。

「人生が長いなんて誰が決めた？」

　アーサーはナイフを移動させて、ジェシリアの右の目め尻じりあたりに突つきつけた。

「とりあえず、今、この女の人生の長さを決められるのは俺だ。他ほかの誰でもねえ。一いつ瞬しゆんで終わらせることだってできる」

「……い……いや……」

「俺に言ってるのか、ジェシリア。それは間違いだ。俺じゃなくてあいつらに言え。死にたくないから、誰だれも手出ししないでくれってな」

「……お……ねがい、だから……」

　ジェシリアは引きつった顔でクラニィを見た。これで選せん択たく肢しが狭せばまった。ナイフに狙ねらわれているのが喉のどなら、不意をついてアーサーに組みついてゆけば、もみあいの中でジェシリアが致ち命めい傷しようを負わされたとしても、蘇生不能な傷には至らない可能性だってなくはない。しかし、こうなってしまうとリスクが大きすぎる。ミケランジェロが余計なことを言ったせいだが、悔くやんでも仕方ないだろう。まごまごしていたら、やつが逃げてしまう。

　クラニィの予想では、やつは店の外に出て少し距きよ離りをとってからジェシリアを殺し、身軽になって逃とう走そうする。その際、クラニィが店の中にいたとすると、追つい跡せきはきわめて困難だ。何しろ、クァラナドは複雑に入り組んでいる。この時間帯だと人通りも多いから、逃げまわる場所としては最高だ。追っ手を振りきってしまえば、あとはほとぼりがさめるまでこの広いエルデンのどこかに潜せん伏ぷくしていればいい。実際そうやって借金を踏み倒す者が数かぎりなくいる。

　とにかく、やつから目を離はなさないことだ。

　間違いなく不利な状じよう況きようだが、これ以上、やつを図に乗らせて余よ裕ゆうを与あたえてしまえば、次々と打つ手が封ふうじられてしまいかねない。

　こっちから動く必要がある。

　賭かけに出るか。

　クラニィは一歩前に出た。

　ナイフの切っ先がジェシリアの皮ひ膚ふをかすかに突き破やぶって、珠たまのように血がにじんだが、覚かく悟ごの上だ。ジェシリアには我が慢まんしてもらうしかない。

「動くなと言ったはずだ」

「ああ、聞いた。でもな。お前さんがここでその女を殺すとはどうしても思えん。もし女を殺したら、お前さんの命はない。俺だけじゃなくて、ローガンもいるしな。それこそ一瞬だ。お前さんだってそれくらいわかってるだろう」

　話しながらじりじりと距離をつめていっても、アーサーがそれ以上、ナイフに力をこめる気配はない。とはいえ、一突きでおしまいだ。ジェシリアがぼろぼろ泣きだすのも無理はない。さぞかし怖こわいだろうが、頼たのむから自や棄けだけは起こさないでくれ。

　クラニィは祈いのるような気分で足を進めた。

　アーサーが下がる。

　もうドアまで一メーテルとない。

「女を放せ。そうしたら逃にがしてやる。言っただろう。べつにとって食おうってわけじゃない。俺はただ知りたかっただけだ。誰が殺やったのかをな。レジーナにきかれて、俺はろくに答えなかった。どうもすっきりしなくてな。それだけだ。俺は正義の味方じゃない」

「……信じると思うか」

「思わんね。だが、お前さん自身のために信じたほうがいいぞ。そして、この店にはもう顔を出すな。二度とだ。俺はこの店が気に入ってるんでね」

「俺だってそうだ」

「奇き遇ぐうだな。嬉うれしくも何ともないが」

「ただ、もう用はない。金きん髪ぱつはこの女が最後だからな」

　アーサーがナイフの柄つかを握にぎりなおした。表情に変化はない。変化がなさすぎるような気もする。やつの言葉をどう解かい釈

しゃくするべきだろう。俺はしくじったのか。賭けに出て、まんまと負けたのか。だとしたら、今度こそ一か八ばちかの大おお博打ばくちだ。ローガンに合図をしながらやつに襲おそいかかる。ジェシリアの確保が最優先だが、アーサーまでは五メーテルほどある。カウンターの奥にいるローガンだと八メーテルくらいか。そうとう厳しい。無理かもしれない。それでも他ほかに手がなければ、やるしかない。まず腰こしの後ろにくくりつけてあるバディエドを抜ぬく。金属の芯しんが仕込まれているだけの棍こん棒ぼうだが、取り回しがいいし、何より慣れ親しんでいる。それから、背中に特とく殊しゅな装具で斜ななめ下向きに収めてある無む銘めいの短いモトロール刀を抜く。捨て身でやつに肉にく薄はくして、急所に打だ撃げきを加える。殺す。やつがジェシリアの人生の長さを勝手に決めるつもりなら、やつの人生を終わらせるのはこの俺だ。ためらうな、クラニィ・アルスェンルド。やつは手に負えない変態で糞くそ憎にくたらしい女殺しの万ばん死しに値あたいするクソ野郎モウフオだ。レジーナ。いい女だったとは言わない。そんな言葉は面と向かって言ってやるものだ。せめて手た向むけに仇かたきを討うってやれ。殺せ。やつを殺やれ。

クラニィはすっと重心を低くして両手を腰の後ろに回した。

アーサーが目を剝むいて何か叫さけぼうとしたが、声は出なかった。

ドアが開いたせいだ。

黒ずくめで細身の男が開いたドアの向こうに立っていた。

アジアンだ。

おそらくこの場に居あわせた者すべての時間が一いつ瞬しゅん、静止した。

いや、例外が一人だけいた。

アーサーだ。

まるで前もってそうすることを決めていたかのようだった。やつはジェシリアを突つき飛ばすなり、アジアンの脇わきをすり抜けて店から駆かけ出ていった。どうやら予想以上に大だい胆たんで機転がきく男らしい。あるいは、身の危険を感じて生存本能に火がつい

たのか。いずれにしても、ジェシリアは無事だが、やつは逃げた。
アジアンが首を傾かしげてみせた。

「何事だい？」

「──説明はあとだ！　ローガン！　こい……！」

　クラニィはアジアンを押しのけてミケランジェロを飛びだした。右にも左にもやつの姿はない。クァラナドは迷宮だ。ここは自分の庭だと言い放つような者でさえ、小道の一本一本に至るまで完全に把は握あくしているわけではない。ミケランジェロの周りも路地だらけで、大きめの通りも曲がりくねっている。見通しが悪くてかなわない。どこだ。やつはどっちへ逃げた。



「右だ」

　振ふり返ると、アジアンが右のほうを指さしていた。

「微かすかにだけど、あの路地に入っていく後ろ姿が見えた。もしかして、捜さがしていた相手が見つかったのかい」

「そういうことだ。あの路地だな。恩に着る。行くぞ、ローガン」

「うん」

　クラニィはローガンを従えて走りだした。路地。この路地か。なんて狭せまい。身体からだを横にしないと通れないような道だ。長さはそれほどでもない。先が見える。かつて七丁目と呼ばれていたが、道のど真ん中に建物を無理やり建てるやつがいたり、その建物を破は壊かいして違ちがう建物を建てようとして殺しあいが起こったりして、雑然を通り越こしてめちゃくちゃになっている一帯だ。厄やつ介かいな。だが、文句を言っている暇ひまはない。どうにかして旧七丁目に出て、問題はこれからだ。まっすぐとはとても言えない細い道が左右にのびている。人通りも多い。

「二手に分かれるぞ。お前さんは左だ。俺は右を捜す。やつを見つけたら──」

「いいんだよね。始末して」

　ローガンはやや頼たよりなげにさえ見える笑え顔がおのままだ。エプロンをつけていることもあって、その手に握られている包丁は料理用としか思えない。

「いや。できれば生かしておいてくれ。俺がやる」

「わかった。できそうだったら、そうするよ」

「頼たのむ」

「クラニィのことだから大だい丈じよう夫ぶだろうけど、気をつけてね」

　お前さんもな、と声をかける前にローガンは雑ざつ踏とうに紛まぎれこんでいった。見かけは冴さえない中年男以外の何者でもないから、自然と街に溶とけこんでしまえる。とくにエルデンでは、あんな大おお振ぶりの包丁を持っていてもさして奇き異いには思われまい。左はローガンに任せる。右は俺だ。とはいえ、少し進むごとに入ってゆけそうな路地があって、ぜんぶ調べていたらきりがない。ある程度の当たりをつける必要がある。俺がやつなら、どうする。逃にげる。離はなれる。そうだ。逃げるからには、ミケランジェロから離れようとするはずだ。できるだけ遠くへ。裏をかくという可能性もあるが、そこまで考えていたら身動きがとれなくなる

から、とりあえず八丁目に戻もどる道は捨てる。これで約三分の一の選せん択たく肢しが消えて、残りの三分の二のうち、思いきって路地も捨てる。やつは慣れている。未熟か気の弱い犯罪者はだいたい暗い場所に逃げこもうとし、熟練か図太い犯罪者は明るい道を堂々と、悠ゆう然ぜんと歩いて去る。やつは大胆だ。冷静でもある。一度、路地を通って、あとはあえて大きめの道を選ぶ。もちろん、確証があるわけではない。またもや賭かけだが、やむをえない。クラニィは人波をかきわけるようにして、ごてごてした建物に沿って曲がる道を進んでいった。すれ違う者。先を行く者。やつを捜す。やつの特とく徴ちよう。半分白髪しらがの茶ちや髪ぱつ。撫なで肩がた。腫はれぼったい目。ひび割れてだらしない唇くちびる。たるみ気味の皮ひ膚ふ。服装は上が茶色のシャツで下がベージュのパンツ。痩やせ型がただが、少し腹が出ている。普ふ通つうより頭を上下させる歩き方。やつはいないか。

「ここで会ったが百年目ってやつだな」

　いきなり後ろから肩をつかまれた。

　迂う闊かつだった。

　やつを捜すほうに注意力のすべてをそそいでいて、まさかこっちが誰だれかに捜されているなんて考えてもいなかった。

　しかも、思わず「あ？」と間ま抜ぬけな声を出しながら振り向いてしまい、その途と端たん、頭全体が激しく揺ゆれて視界が急転した。おい、俺、もしかして殴なぐられたんじゃねえのか。どうやらそのとおりらしい。そうとうきつい一発だった。ふらふらしてやがる。何がなんだかわからねえ。俺は倒たおれてるのか。そうだ。通りがかりを巻きこんでぶっ倒れた。起きあがれるか。手をついた地面が泡あわみたいに頼りない。いや。しっかりしろ。そんなはずがない。こいつは間違いなく地面だ。待ってくれ。ちょっと待てよ。もうすぐマシになるから。

「塵ゴミ屑クズ野や郎ろうが！　不意をつかれりゃあこんなものかよ……！」

　そりゃあそうだ。ご期待に添そえなくて申し訳ないけどな。人が立ちあがろうとしてるってのに蹴けるんじゃねえよ。顔面かよ。やめてくれよな。おかげでまたぞろ地べたに這はいつくばる羽目になっちまった。こんなことをしてる場合じゃないってのに。鼻血が

すげえ。歯も何本か折れたか。口の中が血だらけだ。だから、痛えって。髪かみの毛をわしづかみにされた。よせよ。無理やり持ちあげるなって。ローガンみたいに禿はげちまうだろうが。

「雑ざ魚こいな。てめぇ、本当にあの取り立て屋か。偽にせ者ものじゃねぇだろうな」

「□□…………」

「あ？　何だ？　聞こえねぇよ。もっとはっきり喋しゃべってみろ」

「……ひ……」

「ひ？」

「人違いだ」

　後ろから髪の毛をつかまれているので、やつが青い右目と黒い左目を剝むいて真っ白い頭髪を逆立てる姿は残念ながら拝めなかった。そもそもクラニィのふざけた答えを聞いてかっとなる前に、やつは「くふっ」と息を吐はいて一いつ瞬しゆん全身を沈しずませた。手首と肘ひじの俗ぞくに壺つぼと呼ばれる場所を適切な方法で同時に刺し激げきされると身体からだの力が抜ぬける。むろんクラニィの仕し業わざだし、そうしてせっかく作った隙すきをいかさない手はない。〝蛇だ蝎かつ〟のダリエロ。あのあとクランを解散してしまったという噂うわさを耳にした。例の一件が原因か。それとも他ほかにも理由があるのか。よくわからないが、とにかく甘っちょろい相手じゃない。

　クラニィは身体が動くに任せて脇わきの下にするりと入りこんだ。

　やつの手首をがっちりつかんだ左手は下へ、肘の少し上あたりを押さえた右手はねじりながら突つきあげた。

　やつが短く悲鳴をあげた。

　折れたか。

　少なくとも靭じん帯たいは損傷したはずだが、まだだ。

　おそらく使いものにならなくなっただろうやつの右みぎ腕うでを抱かかえこむようにして背負い投げを食くらわせ、それも背中ではなく頭から地面に叩たたきつけてやって、一安心したつもりはなかったのに、ぐらっときた。なんとか転ばずにすんだものの、一難去ってまた一難どころか、この困難はなかなか去ってもくれない。くそったれ。頑がん丈じょうな野郎だ。

　蛇へびのような手が右の足首に絡からみついてきた。

　その手首を踏ふんづけてやろうと左足を上げたら、片足立ちになった瞬間に軸じく足あしを思いっきり引っぱられてバランスが崩くずれた。

「──くっ……！」

　やばい。無ぶ様ざまにこけたらダリエロの思う壺だ。しかし、何をやってるんだ、俺は。マジでこんなことやってる場合じゃねえってのに。野次馬どものうざったい視線やら歓かん声せいやら罵ば声せいやらのなか、いくつもの思考が交こう錯さくした。地面に尻しり餅もちをつく寸前だった。素すっ頓とん狂きような声が口から飛びだした。

「あっ」

　そりゃあ声くらい出る。

　いた。

　やつだ。アーサー。野次馬の中にやつがいた。間ま違ちがいない。目があった。やつはぎくっとしたように顔を引きつらせたが、すぐに笑えみらしきものを浮うかべて背中を向けた。やつが行っちまう。逃げられる。

「あとだ！」

　クラニィは組みついてこようとしていたダリエロに向かって叫さけんだ。

「悪いが、今はお前さんと遊んでやってる暇ひまがない！　お前さんとの勝負はあとできっちりつけてやる！　いつだっていい！　今以外ならな！」

「わけのわからねぇことをぐだぐだと……！」

「だったらわからせてやる！　俺についてこい！　お前さんの相手はそっちが片づいたあとでいくらでもしてやる！」

　ダリエロはいきなり頭部からの出血で真っ赤に染まった凄せい惨さんな顔を盛大にゆがませた。最初、それがどういう表情か見当もつかなかったが、どうも笑ったらしい。なんで笑ったりするのやら、まったくもって意味不明だが、どうせ生きていれば理解できないことだらけだ。ただそれが新しく一つ増えただけだと思えば、何ということもない。

「殺すまでやるぞ」

「ああ、好きにしろ。畜ちく生しよう、見失った。どこへ行きやがった、あの野郎……！」

　少々ふらつく足に活を入れて、どうにかこうにかアーサーが向かったほうへと走りだした。ついてくるダリエロの足どりはクラニィよりもよほど元気そうだ。なんだか妙みようなことになったが、仕方ない。とりあえず後回しにすることができた厄やつ介かい事ごとについてはあとで考えろ。落らく胆たんと失望と身勝手きわまりない怒いかりの声をあげている野次馬どもをかきわけ、突き飛ばして、やつを追え。アーサー。どこだ。いるはずだ。方向は間違いなくこっちだ。

　足を動かしていると、すぐに口の中が血で一いつ杯ぱいになる。

　折れた歯がまだ歯は茎ぐきにぶら下がっていて痛い。

　頭にきたので、指でつまんでねじ切った歯をポケットに突っこみ、丁てい字じ路ろの突きあたりで左右どちらを選ぶべきか迷った。

　いずれの道も八丁目には向かっていない。

「てめぇ、誰だれを追ってやがる」

「話せば長い」

　ダリエロにきかれて、じつはこれこれでと打ち明けるような事情でもない。だが、中ちゆう途と半はん端ぱにかわそうとすれば、ど

こまでも食いついてきそうな男だ。

「仕事じゃあないんだがな」

「ふん。プライベートってわけか」

「そんなところだ」

「女か、餓が鬼きか」

「……なんでそう思う」

「てめぇは他人のためなんぞに身体ァ張る甘ちゃんの大おお馬ば鹿か塵ゴミ屑クズ野や郎ろうだ。とくに女子供にはすこぶる弱ぇ。そういうツラしてやがるんだよ。気にくわねぇ。反へ吐どが出るぜ。どうせてめぇみてぇな奴やつは長生きしねぇだろうがな」

「余計なお世話だ。最低でも百までは生きるつもりなんでね」

「無理だ。てめぇは今日死ぬ。もうすぐな」

「命いのち乞ごいしたら見み逃のがしてくれるか」

「そんな惨みじめな様ざまァさらしやがったら、殺して生き返らせてもう一度ぶっ殺してやる」

　着ている服は左右非ひ対たい称しようだし、目の色もそれぞれ違い、顔立ちもいびつなので、怒おこっているのか、嘆なげいているのか、うっとうしがっているのか、どうもつかみづらい。声こわ音ねからするとなんだか楽しそうだが、いったい何がおもしろいというのか。

　クラニィは口の周りを指でぬぐった。

　二者択たく一いつだ。

　どっちだ。

　さあ、決めろ。

　根こん拠きよなどなかった。考えるだけの材料もない。クラニィは勘かんに従って左の道へ進もうとした。その足が止まった。

　気配とでもいえばいいか。

　後ろだ。

　音もした。

　何かが地面に落ちたような、だが、落ちたというほど大きな物音ではなかった。

　クラニィはダリエロとほぼ同時に振ふり返った。

「そっちじゃない」

　なんでお前さんが、と尋たずねるより早くクラニィの身体からだは動いていた。左ではなく右の道へ向かって駆かけだすと、アジアンの背中は前にあった。速いなんてものじゃない。軽快を通り越こして電光石火だ。それでもわざと速度をゆるめて、こっちにあわせてくれているのか。あらためて、なんでここに、と叫ぶと、アジアンは右上を指さして質問とは関係のないことを答えた。上から捜さがしてみただけだ。ダリエロが眉まゆをひそめていた。まあ、俺も狐きつねにつままれたみたいな気分だけどな。ひどい顔だ、とアジアンに言われて、お前さんのツラと比べられるとな、と返したら、最初から比ひ較かくにならないものを比べても意味がない、ときた。そのとおりだとは思うが、そこまではっきり言うかね。不意にダリエロが大声を出した。虐殺カーネイ人形ジドール！　アジアンはちらりと顔を振り向かせただけで、返事はしなかった。なんだか知らねぇが今日は大漁だ、とダリエロは笑った。おい、人形野郎。てめぇもあとで殺してやる。覚かく悟ごしやがれ。アジアンはやはり答えなかった。そのかわりにクラニィを一いち瞥べつしてから前方を示した。いた。たしかにやつだ。だが、やつは十五メーテルくらい先の路地に飛びこんでいって、すぐに見えなくなった。アジアンが足を速めた。置いてゆかれた。あっという間だった。ものすごい加速力だ。一足以上遅おくれで突つっこんだ路地は短かった。抜ぬけた先にアジアンが立っている。追いついてあたりを見まわした。左右に道がのびているが、クァラナドにしてはわりと見通しがきく。どちらかに逃にげたとは考えづらい。ダリエロが近くにあった店の立て看板を蹴け飛とばした。

「そのへんの店にでも逃げこみやがったか」

「だろうな」

　路地を出た先の正面に一いつ軒けん。やつの後ろに迫せまっていたアジアンからはっきり見える位置なので、これはない。今、ダリエロが蹴飛ばした看板の店と、路地を挟はさんでその向かい側に一軒。さらに、道を挟んでそれぞれ一軒ずつ。どれも傾かたむきかけた古い平屋だ。ひとまずはこの四軒が有力な候補だろう。もっとも、悠ゆう長ちように一軒ずつ順番に調べている余よ裕ゆうはない。裏口があるかもしれないし、そうでなくても手洗いに窓くらいあるはずだ。もたもたしている間に逃げられてはかなわない。ここは一つ手分けして、と頼たのむまでもなかった。アジアンとダリエロはすでに別々の店の前まで移動してこっちを見ている。察しのいい連中で助かるものの、国を出て以来、群れをさけて一人で生きてきた身としては少々薄うす気き味みが悪い。そう悪い気はしないが。

「一人足りねぇぞ」

「いや、そうでもないさ」

　右の道から小太りの中年男がすたすた歩いてきて、すまなそうに頭を掻かいてみせた。エプロンぐらい外せばいいものを、まだつけたままで、包丁を手に持っているというのにほとんど人目を引かない。本人にとって有益かどうかは微び妙みようなところだが、あれはあれで特異な才能ってやつかもな。

　クラニィはローガンに一軒の店を指し示して、やつを捜してくれとだけ言いつけた。ローガンは黙だまって従ってくれた。これで四軒を一いつ斉せいに調べられる。

　クラニィも自分が受け持つ店のドアの前に立った。

　四人で視線を交かわした。

「やつがいたら合図しろ」

「俺は後ろ姿しか見てねぇがな」

　ダリエロがまずそう言いながらドアを開けた。つづいて、アジアン。それから、ローガン。クラニィはノブに手をかけた瞬しゆん間かん、ある予感に襲おそわれた。いや。予感なんかじゃない。静かすぎる。このいかにも薄そうなドアの向こうに、酔すい客きやくどもがたむろし、彼らをあやしている女たちがいるとはとても思えな

い。

　ノブを回してドアを開けた。

　案の定だった。

　そこはまぎれもなく酒と女を出す店で、カウンターの他ほかにボックス席が四つあるだけのせせこましい店内には従業員とおぼしき数名の他に十人かそこらの客もいたが、少なくとも今は誰だれもグラスを傾けていなかった。そんな雰ふん囲い気きじゃない。「有トキシ毒ツク旋メロ律デイー」という店の名に関連しているのか、奥にピアノが置いてあって、奏者もいるのに、肝かん心じんの演奏はやんでいる。したくてもできないだろう。悪いことに、奏者は真っ赤なドレスを身にまとった女で、顔形やスタイルはともかく、美しい金きん髪ぱつの持ち主だった。

　やつはその金髪に指をからめ、女の首筋にナイフを突きつけていた。

　おそらく、普ふ通つうではない様子でやつが店に駆けこんできたことで、何か騒さわぎでも起きたのだろう。やつは実力行使でそれを収めようとし、とっさに金髪が目に入って女を人ひと質じちにした。そこにクラニィが踏ふみこんだ。だいたいそんなところか。

「しつこい野や郎ろうだ」

　アーサーは息を乱しているが、口ぶりはいやに落ちついている。

「くるんじゃねえぞ。近づいたらこの女を殺す」

「顔も知らん女だ」

「だからって見捨てられるのかよ、取り立て屋。無理だな。貴様は評判どおりのとんだお人ひと好よしだ。そうでもなけりゃあ、情を交わしたわけでもない女の仇かたきをとろうなんて考えねえ」

「そんなものかね」

「動くなよ。いや、両手を挙げて壁かべ際ぎわによれ。俺がやれと言ったこと以外はするな。貴様だけじゃない。ここにいる全員だ。いいな」

　クラニィはおとなしく言うとおりにした。

　女が怯おびえきってすがるような目でこっちを見ている。

　お人好しか。自分ではそう思わない。ただ自分を偽いつわらず、裏切らずに、たまに悔くいたりもがいたりしながら、好き勝手に生きているだけだ。

「大だい丈じよう夫ぶだ」

　女に言ってやった。

　微笑ほほえんでみたつもりだが、ちゃんと笑顔に見えたかどうか。

　アーサーが女の金髪をつかんでいる手に力をこめた。

　女が顔をゆがめた。

「余計なことはするなと言ったはずだ」

　わかった、もうしない、と声に出すだけでも、アーサーは過か剰じように反応しそうだ。どうやら口調ほど平常心を保っているわけではないらしい。やつはだいぶ汗あせをかいている。走ったからか。脂あぶら汗あせか。よく見るとやつの指先が震ふるえている。やはりかなり動転しているようだ。

　やつは女を引きずるようにして開いたままの出入口のドアへと向かってゆく。

　クラニィはわざと舌打ちをしてみせた。

　アーサーが薄く笑った。嘲あざけるような、だが、余裕のない笑みだった。

　行け。

　そのまま行っちまえ。

　もうすぐドアだった。

　アーサーが足を止めてドアの向こうを一いち瞥べつした。

「貴様、一人じゃなかったな」

　すぐには返事が出てこなかった。

　俺は何を期待していた？

　やつが外に出れば、三人のうちの誰かがきっと気づく。連中がやつをどうにかしてくれる。そうでなくとも、付け入る隙すきができるはずだ。もしかして、俺はそんなことを考えてやがったのか。ローガンはともかく、アジアンとは顔見知りから一歩進んだ程度だし、ダリエロにいたっては敵といってもいい。あいつらをあてにするなんてな。俺も焼きが回ったか。

「ああ、お前さんを捜さがしてるよ」

「何人だ」

「百人くらいかな」

「貴様──」

　顔面を引きつらせて声を荒あららげかけたアーサーの後ろに影かげがさした。

「その塵ゴミ屑クズ野や郎ろうが言ったことはあながち間ま違ちがいじゃねぇ」

　白はく髪はつのちぐはぐ男は、青い右目を見開いて首を左右に曲げながら、いかにも酷こくく薄はくそうな唇くちびるを奇き妙みょうなほど細長い舌で舐なめてみせた。

「百人力って意味ではな」

「……な──」

「何だ、その女アマァ。人質のつもりかよ。いいぜ。殺せよ。俺も殺す犯すは大好物だ。ぐずぐずするんじゃねぇ。てめぇが殺さねぇんなら俺が代わりに殺やってやる。ほら、寄よ越こせよ」

「く、くるな……！」

　アーサーはダリエロがのばした手から逃のがれて後ずさった。

格が違う。そんな言葉がぴったりだった。

たとえ女を何人殺そうが、アーサーは他の国であれば単なる残ざん忍にんな凶きよう悪あく犯罪者でしかない。ダリエロは違う。やつはそうした薄うす汚ぎたない犯罪者どもを薙なぎ倒たおして、どんな清潔な国にも存在する暗黒街の頭目に上りつめることだってできそうな男だ。

アーサーもその差を肌はだで感じただろう。欲望のままに女を餌え食じきにしていた自分が、今はダリエロの獲え物ものに成り下がろうとしている。そう実感しても、納なつ得とくしたくはなかったのかもしれない。やつは証明しようとしているかのようだった。大声で何か喚わめき、両目を剝むいて顔を真っ赤に染め、自己の力を誇こ示じしようとしていた。それはむなしい行こう為いだった。そんなことをしてもダリエロには対たい抗こうしえない。だからよせ、と言ったところで、アーサーは聞き入れようとしないだろう。力で止めるしかない。

クラニィは駆かけだした。やつに飛びつこうとした。

とうてい間に合いそうもなかった。

なんてことだ。

あの小太りの身体からだがどうやったらあんなふうに動くんだ。

ローガンがダリエロの脇わきをすり抜ぬけてアーサーに突とつ進しんし、ひょう、という妙な声を出して包丁を振ふり回した。

女はいつの間にかアジアンがかっさらっていた。

いやはや、世界は広いってやつだ。

あまりに速すぎて、まったく見えなかった。

すぐさま床ゆかに放ほうりだされた女も、アジアンを見上げてぽかんとしている。

クラニィとしても似たような気持ちだが、ローガンの包丁できれいに右手を切り落とされたアーサーはひょっとしたらそれ以上かもしれない。

　やつは床にへたりこんで血が噴ふきだす右手の断面を呆ぼう然ぜんと眺ながめていた。

　ちんけな野郎だ。

　女たちはこんな男に殺られたのか。

　身み震ぶるいがした。

「アーサー、よく聞け」

　クラニィは床に転がっていたアーサーの右手を踏ふみにじった。アーサーの顔は見なかった。やつの意志など関係ない。どうでもいい。俺は俺が思うようにする。それだけだ。国を出てからはだいたいそうしてきたし、これからだって同じだろう。胃だの腸だのがぶるぶる震ふるえて吐はきそうだ。眩暈めまいがする。それでもこれが俺のやり方だ。

「二度と俺の目の届く場所に現れるな。次にお前さんの姿を見かけたら殺す。何があろうと絶対に息の根を止めてやる。お前さんにとって一番安全な方法を教えてやる。今すぐこの街から出て行けばいい。わかったか、とは言わん。お前さんがわからなくても俺はそうするんでな。さあ、立て」

　アーサーはクラニィを見上げた。すべてを見失ったようながらんどうの目だった。それでもこいつは生きている。

　やりきれない思いもあるが、無情の雨にさらされて、無常の風に吹ふかれながら、俺たちは歩いてゆくしかないのだろう。

　クラニィは一つため息をついた。

「立てないなら手を貸してやってもいいぞ。利子は高くつくがね」

　アーサーは首を振って大おお慌あわてで立ちあがった。まるで厳格な親おや父じに叱しかられた餓が鬼きみたいだった。自分の右手を拾おうとするどころか目もくれなかった。アーサーが這ほう々ほうの体ていで店から飛びだしてゆこうとすると、ダリエロが通せんぼうをした。

「行かせてやれ」

「てめぇに指図される覚えはねぇ」

　そう言いながらも、ダリエロはアーサーを通してやった。苦にが虫むしを噛かみ潰つぶしたような顔をしているが、普ふ段だんからそんなふうに見えるので、何を考えているのかわからない。ただ、クラニィをじっとにらんでいる。忘れていないというわけか。面めん倒どうだが、勝負はあとでつけると言ってしまった手前、とぼけるわけにもゆかない。外に出るか、とドアの向こうを顎あごで示そうとしたら、ダリエロがもともとひん曲がった唇くちびるをさらにゆがめて笑った。

「殺す前に貸しは返してもらわねぇとな」

　どうやらこの一件で借りを作ったことになってしまったらしい。ダリエロはカウンターの席に腰こしを下ろして、次々と酒を注文しはじめた。いったい一人で何なん杯ばい飲むつもりなんだ。ボクはボトルを、とその隣となりに座ったのはもちろんアジアンだ。勘かん弁べんしてくれ。如じよオさいなく店の人間に声をかけて、後始末のための袋ふくろやら雑ぞう巾きんやらを持ってくるよう頼たのんでいるローガンだけが味方に思えた。手伝おうとすると、いいよ、こういうことはおれのほうが慣れてるからね、と断られて、不覚にも少しばかり感動してしまいそうになった。しそうになっただけで、しなかった。

　ローガンは人のよさそうな笑え顔がおのままで、アーサーの右手をひょいと袋に放りこんだ。

「これでしばらくはただ酒が飲めるのかな」

「……ああ。そうだな。俺も仕事に精が出そうだ。何しろ、頑がん張ばってお前さんたちの酒代を稼かせがなけりゃならんからな」

「冗じよう談だんだよ。おれはね。あの人たちはどうか知らないけど」

「あいつらは間ま違ちがいなく本気だ。それに、酒を奢おごってやらなけりゃならないやつがもう一人いるしな。考えるだけで──」

　クラニィは掌てのひらで顔をこすりながら天てん井じようを仰あおいだ。

「まあ、いいか」

　飯を食うために働く。安酒を飲む。形のない夢やとるにたらない雑事を語らう。誰だれかと出会う。そして別れる。今日が終わる。明日がやってくる。時間が流れてゆく。

　死ぬまでこんなことを繰くり返すんだろうさ。

　それがたまらなくいとおしい。

　レジーナ。お前さんがいなくなって残念だよ。残念としか言いようがない。俺はお前さんを忘れることはないだろうが、やがて寂さびしさは薄うすれて消え、たまにしか思い出さなくなるだろう。俺がお前さんにしてやれることはもうない。だから、残念だ。

　それでも俺は生きる。

　何か変わることはあるかもしれないが、生きてゆく。

　クラニィはアジアンの隣の席に腰を下ろした。

　アジアンが優ゆう雅がな手つきでボトルを持ってグラスにウイスキーをそそいでくれた。

「悪いな」

「どうせキミの奢りだ」

「それもそうか」

　口にふくんだ熱い液体はいつもよりほんの少し苦く、傷に沁しみた。

「人生の味ってやつだな」

　ダリエロが、気どるんじゃねぇよ、とカウンターを蹴け飛とばした。まったくだと思いながら、うるせえ、と怒ど鳴なり返してやった。アジアンは何か考えこんでいるようだ。ローガンはせっせと立ち働いている。

　悪かねえな、と思った。

　何が悪くないのだか自分でもよくわからないが、こういうのも悪くない。

　クラニィは喉のどを低く鳴らして笑った。疲つかれているせいか。どうやらもう酒がききはじめているらしい。

nebula story

ネビュラ・ストーリー

有情編

1

　夢を見ていたわけではないと思う。

　あたたかな午後の日ひ射ざしが差しこむn'ebula四階の大部屋ホールでソファに腰かけ、膝ひざの上にふわふわした長毛種の猫ねこを抱だいていても、まどろむことなどありえないはずだ。

　見いつけた。

　まだずいぶん小さかったけれど、お姉様に顔をのぞきこまれたときのことをはっきりと覚えている。

　わたくしにはちゃあんとわかるのよ。あなたには見込みがあるのだわ。

　さあ。

　わたくしと一いつ緒しよに行きましょう。

　あたしはお姉様の手を握にぎった。お姉様が笑いかけてくれた。幼心に、何かが始まるのだ、と思った。それが何かはわからないけれど、小さなあたしは自分が進む道を自分で決めたことに誇ほこらしさを感じていた。父や母や兄、祖父母のことは頭の隅すみをよぎりもしなかった。胸むな苦ぐるしいまでに彼らを恋こいしく思う日はしばらくあとで訪おとずれた。それでもあたしは後こう悔かいしなかった。小さなあたしはいつも退たい屈くつしていた。三百ほどの家々とそこに住む人々と田畑と森とたまに子供が溺おぼれ死ぬ川だけで完成してしまっていたあの街は、あたしにとってまるで手の中に軽々と収まるちっちゃな箱のようだった。あたしは箱の蓋ふたを開けてその中身を隅すみ々ずみまで観察することに飽あきていた。いくら飽き飽きしていても、それしかすることがなかった。その箱はあたしを閉じこめている檻おりでもあったからだ。あたしは箱の中にいるのに、箱の外から箱の中すべてを見み渡わたすことができた。少なくともそう感じていた。祖父母はよくあたしの頭を撫なでて、お利口さんね、と誉ほめてくれた。兄は、生意気なんだよ、とあたしをなじった。父や母はときに困こん惑わくしていた。あたしは祖父母を味方につけて兄をやりこめ、たまには父や母に甘

えてみせて彼らを安心させてあげた。もしかして、こんなことがいつまでもつづくのだろうか、とあたしは考えていた。それってとってもつらいわ。つまらなくて死んじゃうわ。あたしは箱の中から飛びだしたかった。お姉様があたしを見いだしてくれたことは渡りに船だった。

　どこへ行くの、ともきかなかった。

　どこでもよかった。

　とにかく、ここじゃない、どこかへ。

　夢を見ていたわけではないと思う。

　頭が重い。頭だけではない。全身だ。熱っぽい。関節というよりも骨が疼うずきだした。身体からだの奥から響ひびいてくるようなこの痛みにはもう慣れているものの、慣れたからといって楽になるわけでもない。身じろぎすると猫が逃にげていった。首筋をさわってみた。リンパ節がひどく腫はれている。すべてを拒きょ絶ぜつするかのような吐はき気がして、思わず呻うめいてしまいそうになり、なんとかこらえたけれど、勝手に涙なみだがにじみだしてきた。寒い。ひどく寒い。発熱しているせいだ。震ふるえが止まらない。

　まさか、こんなときに、こんな場所で。

　いや、否定しても意味がない。これは現実だ。油断があったのだろう。この発ほつ作さはじつに抜ぬけ目がない。少しでも気を緩ゆるめると、その隙すきを決して見み逃のがさずに猛もう然ぜんと襲おそいかかってくる。わかっていたはずだ。警けい戒かいしてもいた。定期的に身も心も完全に弛し緩かんさせる時間を作り、発作を待ち受ける。そんなこともしていたし、その試みは成功して、発作を制せい御ぎょすることができていた。そのつもりだった。

　あるいは、それこそが油断だったのかもしれない。

　座っていることさえつらくなり、ソファに身を横たえた。さいわい大部屋ホールには猫しかいない。だから寝ね転ころんでも平気だろうと考えてしまう今の自分は、間ま違ちがいなく無ぶ様ざまだ。視野が狭せまくなり、視界全体がぼんやりとしている。心しん拍ぱく数すうが急激に上じよう昇しようして、呼吸が乱れている自覚も

ある。平静を保っているのは、わずかに思考だけだ。それさえも鈍にぶり、混乱しはじめるだろう。

　安心なさい。あなたは天才よ。わたくしが言うのだから間違いないのだわ。

　お姉様に天才と呼ばれた者は不幸だ。それはつまり、遥はるか前を行くお姉様の背中を追いつづけなければならないことを意味する。追いつくことができないのなら、せめて離はなされないようについてゆかなければ。可能なら少しでも距きょ離りを縮めなければ。そのためにできることがあるのなら、何でもしなければ。それは強きよう迫はく観かん念ねんだ。お姉様はありとあらゆる技法を用いて自分自身への忠誠を弟で子したちに植えつける。お姉様に破門を言い渡されて自死する者がいる。当然だと弟子たちは思う。お姉様に見捨てられてしまったのであれば、命を絶つしかない。この先一生お姉様に認められることがないのであれば、死んだほうがましだ。それは呪じゆ縛ばくだ。お姉様がかけた呪のろいだ。多くの弟子たちはそのことに気づきもしない。ごく少数の者たちだけが、おそらく運よく資質に恵めぐまれた者だけが、自分がお姉様の実験道具であり、手て駒ごまであり、ときには手て慰なぐさみの玩具おもちゃであり、飽きられてしまえば、もしくは不要になれば捨てられるだけの、魔ま術じゆつ士しの形をした人形でしかないのだと悟さとる。それでも、お姉様から完全に自由になることはできない。あのトモヨでさえ、そっぽを向いて逆らうふりをしながら、結局のところは誰だれよりもお姉様を意識していた。サフィニア。あれは強い娘こだ。お姉様に匙さじを投げられてもちゃんと生きている。あまつさえ、お姉様の指図を聞かずに、このエルデンへ。自分で自分の道を切り開こうとしている。あたしはどうだろう。お姉様を超こえる。夢だ。それこそ夢のような目標を掲かかげて、あたしは走っていた。お姉様を追いかけていた。お姉様がやらないことを。できないことを。考えもしないことを。あたしはお姉様を追いかけていた。そのツケが、これだ。

　あたしは風か邪ぜを引いて寝こんでいた。どうやらただの風邪ではなさそうだった。父はめったに手に入らない果くだ物ものを冷やしたから食べろと言い、母は甲か斐い甲が斐いしく看病してくれ、いつもあたしに意地悪な兄までが変にやさしくて、大だい丈じよう夫ぶかい、苦しくないかい、水を持ってきてあげようか、どこか痛いところはないかい、と何度もきいてきた。きっと流行はやり病やまいだろうと思った。少し前から何人も死者が出ていた。とくに小

さな子供や老人はたいてい病魔に打ち克かてずに死んでしまった。あたしは、だめかもしれない、と考えていた。そう考えざるをえないほど苦しかった。とても苦しかったのだ。でも、弱音を吐くことはできなかった。無意味だと思った。たすけて、くるしいよ、どこもかしこもいたいよ、どうにかしてよ、おにいちゃん、おかあさん、おとうさん。そんなふうに泣きわめいたところで、いったい何になるというのだろう。それで病気が治るわけじゃない。症しよう状じようが軽くなることもない。あたしにできることは、運を天に任せて、あとは幸運を祈いのるかのように、無む駄だな体力を使わず、じっとしていることだ。せっかくやさしくしてくれる兄に、だいじょうぶ、と答えてあげることだ。父が手に入れてきた食べ物をなんとか口に入れて、吐きださずにのみこんで、うん、おいしい、と笑ってみせることだ。母を心配させないことだ。病気がうつってしまったら大変だからと、あたしに会うこともできない祖父母に、あたしはだいじょうぶだから、と兄に頼たのんで伝えてもらうことだ。

　だけど、くるしくって。

　もうだめだと思うのはつらくって。

　泣きたかった。泣けなかった。あたしを、たすけてよ。

　夢を見ているわけではないと思う。

　額に何かがふれた。

　目を開けると、そのときになって初めて自分が目を閉じていたことに気づいたのだけれど、そこにあいつがいた。

「具合が悪そうだネ」

「……見れば、わかるでしょう」

　違う。

　そうじゃないはずだ。

　大丈夫、と言わないと。

　あたしは平気だから、放ほうっておいて。

だめだ。この有あり様さまで言っても説得力がない。熱がある。かなり高い熱だ。手まで赤らんでいる。顔はもっとひどいことになっているだろう。

「すぐ……よくなるから。休んでいれば。だから……」

どこかへ行って。いなくなって。一人にして。あたしを見ないで。こんなに弱っているあたしを見たりしないで。

いやなの。

見られていたくないの。

そばにいて。

願ってしまった途と端たん、堰せき止めていた何かが音を立てて呆あっ気けなく崩くずれ落ちてしまった。おかしいでしょう。あたしがこんな。ちっともあたしらしくないでしょう。ぼろぼろ泣いたりして。自分でもどうして泣いているのかよくわからなくて。頭を抱かかえたりして。髪かみの毛をぐしゃぐしゃにしてみたりして。何の解決にもならないのに。それなのに。

「誰だれかきそうだヨ」

嘘うそでしょう。嘘だと言って。やめてよ。冗じよう談だんじゃないわよ。これ以上、誰かに見られるなんてごめんだわ。もう限界を超えかけているのに。超えてしまっているのに。ああ、でも、たしかに、足音が聞こえるような気がする。あたしは取り繕つくろうことができるだろうか。馬ば鹿からしい。遅おそい。手て遅おくれだ。もう見られているのに。

よりにもよって、こいつに。

憎にくたらしくて、思いきり叩たたきたくて、たまらなかった。

その力さえ今のあたしにはないのだけれど。

「わかった。少し我が慢まんして」

あらがうことなんて、できるはずもないのだけれど。

もしできたとしても、あたしはあらがわなかったかもしれない。

　抱だきあげられた。男にしては細身なくせに、あたしを軽々と持ちあげて、どうするつもり？　尋たずねるよりも早く風を感じた。窓を開けて外に出たようだった。つかまって、とあいつが言った。言われなくてもしがみついていた。夢を見ているわけじゃないとあたしは思った。

2

　音のしない部屋だった。

　殺風景にもほどがある。

　どこか高い建物の上層なのだろうが、仕切りのない広い空間の隅すみに寝しん台だいが置かれているだけで、あとは見事なくらい何もない。

　あいつは壁かべに背をもたれさせて立っていて、あたしは寝台の上で毛布にくるまって横になっている。

「何か必要なものはあるかい」

　ふと、思い出したようにあいつがきいてきた。

「あいにく経験がなくてネ。病人の看病は。何をしたらいいのか見当がつかない」

「……いらないわ。何も」

「そう」

「じっとしていれば……そのうち、おさまるから」

「無理はしないほうがいいヨ」

　とってつけたような言い方だった。

　いつものことだ。

　あいつはいつだってどこかから借りてきたような言葉を口にし

て、十分には中身が伴ともなっていないことに自分で気づいて、当とう惑わくして目を伏ふせる。

　誰も気にしてやいないのよ。

　一片の偽いつわりもない真心のこもった言葉なんてそうそうあるものじゃないのに。

　誰も彼も、移ろいやすいその場限りの気持ちと、上手か下手かの違ちがいしかない言葉遊びで自分自身と他人とをごまかして、なんとなく日々をすごすことに汲きゅう々きゅうとしている。

　もちろん、例外は常にあるけれど、誠実さは金ダイ剛ヤモ石ンドよりも遥はるかに貴重で、しかもそれが永続するものだとしたら、虚きょ飾しょくと猜さい疑ぎ心しんにまみれた世界中の王おう侯こう貴族が国を売り渡わたしてでも欲しがるだろう。

　信じられるものがないのなら、それを作ってしまおうだなんて、呆あきれて物も言えないわ。

　何かを信じなければ生きてゆけないだなんて、単なる思いこみなのよ。

　何もなくったって、人は生きてゆけるのよ。

　たとえあんたがいなくたって、あたしは生きてゆけるわ。

　そう考えると、ちょっぴり寂さびしいけれど。

　胸が痛むけれど。

　すごく、痛いけれど。

「……ここ、どこなの」

　とても痛くて、黙だまっているのに耐たえられなくなった。

「移動した距きょ離りとか、周りの風景から考えると……第二区あたり？」

「ご名答」

　少しほっとしたような、あいつの声だった。

　あたしも、ほっとしている。

　普ふ通つうに喋しやべることができて、安あん堵どしている。

「……あんたの、部屋？」

「まあネ。隠かくれ家がの一つだヨ」

「何も、ないわね」

「必要ないからネ。それに、ここは寝ねるだけの場所だからサ」

「あんたでも、寝るのね」

「キミでも風か邪ぜを引いたりするんだ」

「……風邪じゃ、ないわ」

「だと思ったヨ」

「そう」

「かなりきつそうだ」

「……平気よ。毎度のことだから」

　本当は、違う。いつもとはぜんぜん違う。いつもより苦しくて、同時に楽でもある。

　一人ではないからだ。

　あいつがそばにいるから。

　毛布を引っぱり上げて顔を隠した。寒気がして仕方ないけれど、かなり汗あせをかいている。やだな。汗、かいちゃってる。あいつが使っている布ふ団とんを汗まみれにして。でも、匂においがしない。自分の匂いだけだ。あいつには匂いらしきものがない。匂いだけじゃない。存在感がどうも希き薄はくだ。いつもではないけれど、あれだけきれいな顔をしていて、いつも黒ずくめで、目立つはずなのに、黙っていると消える瞬しゅん間かんがある。いるのかいないのかわからなくなる。そういうとき、あいつは自分でもそう感じているに違いない。

自分はここにいるのか、いないのか。

ここにいていいのか、いなくてもいいのか。

だいたい無表情なあいつの顔がそのまま凍こおりついてゆく場面を、あたしは何度も目にした。

不安なのでしょう。心細いのでしょう。

あたしは声をかけようとして、逡しゆん巡じゆんする。

そんなことをしたら、引き返せなくなりそうで。

ぐずぐずしているうちに、誰かがあいつの名を呼ぶのだ。

そうすると、あいつの薄うすい青の目に微かすかな光がともって、まるで息を吹ふき返したかのようで、あたしは少しだけがっかりして、やっぱり安心する。

「何か」

あいつがそばにいる気配がした。いつの間に近づいてきたのだろう。気づかなかった。

「何か、かけるものを持ってこようか」

「……いい」

「寒がっているように見えるけどネ」

「そう、ね……でも、ただ、熱があるせいだから。汗は、出てるし。我が慢まんできないほどじゃないし、大だい丈じよう夫ぶよ」

「我慢する必要はないヨ」

「本当に？」

「ああ」

「じゃあ」

そうじゃない。

不安なのは、あたしだ。

心細いのは、あたしだ。

今だけ、だけれど。

あいつがやさしい言葉をかけたりするせいだけれど。

「そこにいて」

あいつの、わかった、という短い答えを聞いた途と端たん、暗くら闇やみが急速に意識を浸しん食しよくしはじめた。あたしはだいぶまいっているようだ。ねえ、あたし、いたくて、さむくて、くるしいわ。口の中で呟つぶやいてみて、そっと笑った。言えるわけ、ないじゃない。

3

お姉様は化ばけ物ものだった。

本来、魔ま術じゆつ士しらしい魔術士とはそういうものだ。魔術に正道はない。人じん倫りんを語る魔術士にろくな魔術士はいない。常じよう軌きを逸いつしていることは魔術士の必要条件だ。

つかみどころのない化物だった。

たとえば、くじ引きで弟で子しの中から古代呪じゆ式しきの実験に必要な生いけ贄にえを選んで命を奪うばった翌日に、突とつ然ぜん、全員であてのない旅に出ると言いだして、何もない草原に別べつ荘そうを建てるのだと騒さわぎだし、その場で図面を引いて、弟子たちに慣れない大工仕事を命じたりする。そうして、これもまた修しゆ行ぎようなのだわ、とうそぶいたかと思えば、半分ほどできあがったところで、こんなことをしていったい何になるというのかしら、まったく時間の無む駄だなのだわ、といきなり計画をとりやめてしまう。結局あれは何だったのか、と呆あきれている弟子たちに内ない緒しよで別荘を完成させて、誇ほこらしげにお披ひ露ろ目めし、皆みなを驚おどろかせた次の瞬間、魔術で爆ばく破はしてさらに仰ぎよう天てんさせ、このように形あるものはいつでも滅ほろ

ぼすことができるのだわ、滅びは魔術の神しん髄ずいの一いつ端たんであることを肝きもに銘めいじておくがいいのよ、おわかり、お馬ば鹿かさんたち、などと言い放ったあげく、さあ、急いで建てなおすのよ、とくる。魔術の神髄のもう一端は創造なのだわ、それを実じつ践せんしてみせなさい、わたくしのために、このお姉様のために、汗水垂らして馬車馬のごとく働きなさいな。

　ベティ、わたくしたちにとってもっとも御ぎょしがたい敵とは何かわかるかしら。

　お姉様はよくお気に入りの弟子たちを寝しん室しつに呼び入れて、膝ひざ枕まくらや腕うで枕まくらをさせたり、抱だかせたりした。

　それはね、おのれの欲望なのだわ。

　欲望はたやすくわたくしたちを押し流してしまおうとするわ。

　わたくしたちは欲望に弱くできている。我慢することはもちろん可能だわ。でも、我慢しようというその意志さえも、何らかの結果を期待して何かをなそうとする欲望に他ほかならないのよ。つまり、わたくしたちは欲望から逃のがれることはできないのだわ。極論すれば、わたくしたちは常に内在する敵に対処しつづけるためだけに生きていると言うこともできるのよ。

　けれど、その敵こそがわたくしたちを生かしているのだとも言える。

　そもそも、その敵とわたくしたちとは不可分の存在で、それはわたくしたちを形づくる一つの機能でしかなく、わたくしたちは対立するべきではなくて、共存共栄するべきもので、かつてこの認識の王国が世界を覆おおう以前は、誰だれもがただ思うままに物事をなして、その影えい響きようにとらわれることなく、自在に恐おそれ、昂たかぶり、迸ほとばしらせていたのだわ。

　自由になりなさいな、ベティ。

　そうしなければ、わたくしを超こえることなどできなくてよ。

　欲望に身を任せなさい。

　お馬鹿さんね。怖こわいのでしょう？

そう。

怖い。

ベティ、それがあなたの欠点なのだわ。小こ賢ざかしいのよ。進む道の先が見えるような気がするのでしょう。この向こうに崖がけ崩くずれしそうな場所があるからさけようと思うのでしょう。たとえその先に目的地があるのだとしても、あきらめて回り道をしようとするのでしょう。つまらない。つまらないわ。

あたしには、あたしのやり方があるのよ。

利口なやり方が？

悪い？

悪いっていうかさぁ、やりたいんならやればいいしぃ、やりたくないならやらなきゃいいでしょぉ？　煮にえ切らないってゆ～かぁ、あんたのそぉゆうとこ、すっごく嫌きらい。

うるさい。トモヨ。あんたにだけは言われたくない。あんたはずるい。お姉様にあれだけ見こまれていたのに、逃にげて、逃げ回って、それでいて自分はお姉様のことをよくわかっている、他の連中のこともよく見えている、みたいな顔をして。何がわかる。あんたに何が。

わたしは……お姉様には……拾っていただいた、恩があるので……。

そうじゃない。サフィニア。そうじゃないでしょう。お姉様は自分のためにあなたを魔術士にした。あなたのことなんかこれっぽっちも考えていない。だから、あなたもあなたのために生きるべきなのよ。

自分のために。

自分を突つき動かす欲望のために。

欲しい、と思った。

喉のどから手が出るほど欲しくてたまらない。

　からからに干ひからびた、この喉から。

「……あっつ」

　毛布から顔を出すまでもなく、暗くなっていることはわかった。それにしても、暑い。まるでなまぬるい泥どろの中で泳いでいるようなかんじで、とてつもなく不快だ。もっとも、寒気ではなく暑さを感じるということは、だいぶ体調がよくなってきているのだろう。喉にしても、目が覚めた瞬しゆん間かんのひりつくような感覚はすぐに消えて、今は純じゆん粋すいに身体からだが水分を求めているのだと自覚できる。

「起きたみたいだネ」

　声が聞こえてからあいつがいることを思い出して、まったく心構えができていなかったので、心臓がひとしきり滑こつ稽けいなほど暴れ放題に暴れた。

　なんとか呼吸だけは整えて毛布を引き下げると、やはりもう日が暮れきったあとの暗さで、この部屋とも呼びづらい部屋には照明すらないのだと思い知らされた。お姉様の部屋は脱ぬぎ散らかされた衣類や雑多な玩具おもちゃや得体の知れない道具であふれていて、弟子たちに掃そう除じさせてはあれがないこれがないと怒おこっていた。なぜかそんなことを思い出した。

「……あたし、どれくらい寝ねてた？」

「六時間くらいかな」

　窓から射さしこむ街の明かりに照らされたあいつの横顔に、一瞬、見とれそうになった。それ以上に、おそらく感動してしまっていた。あいつは寝しん台だいのすぐ近くにいた。たぶん、そこにいて、と言われて、わかった、と答えたときの場所だった。いくらなんでも律りち儀ぎすぎる。でも、そういう男だとも思う。思った途と端たん、あいつが手に透とう明めいの容器を持っていることに気づいた。なんだ。ずっとそこにいたわけじゃないのね。どうやら容器の中身は水らしい。ご丁てい寧ねいにグラスまで用意してある。あいつが容器からグラスに水をそそいで、飲むかい、ときいてきて、あたしはうなずきながら、自分でも不思議なくらい落らく胆たんしていることに少しだけ戸と惑まどっていた。病人が寝ている間に水を調達してきて、目が覚めるのと同時に差しだしてみせる。ど

う考えても、ただ黙だまって突っ立っているよりも気が利きいている。落胆するような要素はないはずだ。

　そばにいて、って言ったのに。

　わかった、って答えたくせに。

　子供みたいな理り屈くつだ。

　上半身を半分くらい起こして水を飲んだ。

　つめたい水だった。

「ありがと」

「さっきよりはいくらかましそうだネ」

「ええ。だいぶいいわ」

「着き替がえでもあればいいのかな」

「あんたに女物の服を買ってきてもらうわけにもいかないでしょう」

　苦く笑しようしながらグラスを返すと、あいつは怯ひるむ様子もなくかすかに首をかしげた。

「買ってくるのはべつにかまわないが、どこで買えばいいのかわからない」

「……やめてよ。噂うわさになっちゃうわよ？　昼ラン飯チタ時イムの頭領マスターには女装趣しゅ味みがあるらしい、とか」

「言いたい者には言わせておけばいいサ」

「まあね。そうかもしれないけど、おもしろすぎるわ。さすがに、それは」

「そうかい」

「あたしだって、これ以上あんたに借りを作りたくないわよ」

「もう手て遅おくれだヨ」

「たしかにそうね。どうやって返せばいいかしら」

　肩かたをすくめてため息をついてみせようとした。

　できなかった。

　あいつの瞳ひとみを正面から見つめてしまったのが失敗だった。

　なんだかこれじゃあ、本気みたいじゃない。

　困ったように黙りこんだりしないでよ。

　悲しくなっちゃうじゃない。

「見られちゃったから、一応説明しておくけど」

　先に目をそらすと、負けた気分になり、少し安あん堵どして、もっと困らせてやればよかったと後こう悔かいした。どれも本音に違ちがいなくて、もう少しだけあいつと見つめあっていれば、あたしは今まで口走ったことのないようなことを言ってしまっただろうし、さんざん戸惑ったあげく、借りなんて、とか何とか、やけに生き真ま面じ目めに答えるあいつを見たかったとも思う。

「たいてい無茶をしているものなのよ。魔あた術し士たちはね。単にどこまでやるかの問題で。才能があれば何もしなくていいということでもないから。むしろ、高い場所に上れる者ほど、より高く飛ぶためにありとあらゆることを考える。当然、それ相応の代だい償しようを払はらうことになるわ。何も犠ぎ牲せいにせず手に入れられるものは、たいていそう多くをもたらさないしね」

「つまり、キミはたまにそんなふうになることと引き替えに、その力をえたわけか」

「まあ、そういうことね。空間転位は誰だれもなしえなかった魔ま術じゆつだから。魔術にどっぷり浸つかっている者以外にとっては、くだらない意地としか思えないでしょうけど」

「知らなかったヨ」

「何を？」

「キミにそんな弱みがあったなんてネ」

「言いふらしても、いいことはないでしょう。知られないに越こしたことはないわ。お姉様にはばれちゃってたと思うけどね。あとは、おそらく──」

　顔を上げると、またあいつと目があった。



「あんただけよ」

　だから、秘密よ、と言ったら、あいつは事もなげにうなずくだろう。

　だから、特別よ、と言ったら、あいつはいったいどうするだろう。

　言ってみようか。

　言ってみて、あいつがやっぱり困り果てるようなら、冗じよう談だんよ、とからかってやったふりをすればいい。

　そうしたら、あたしの胸はちくりと痛むだろうか。

　きっと痛むだろう。

　何しろ、今もちょっぴり痛いくらいだから。

「帰るわ」

　寝台から起きあがると、少しふらついたけれど、自分の足で立って歩けないほどではなかった。身体からだ中が湿しめっているので、夜気がつめたく感じられる。頭が冴さえてちょうどいいくらいだ。胸の痛みは消えていた。もっとも、最初からなかったわけではない。あると思えばあり、ないと思えばないものだとしても、記き憶おくの襞ひだにその痕こん跡せきを見つけることができるのなら、存在を否定する前に疑うことから始めるべきだろう。疑いつくしても消えることがないのだとすれば、それは間違いなくそこにあるのだ。

「ねえ」

　今、あたしの中でそっと眠ねむりについた思いを、でも、みだりに呼び覚ましたりはしない。

「あんた、ここを引き払うつもりでしょう」

「よくわかったネ」

「それくらいお見通しよ。あたしを誰だと思ってるの？」

　あたしは短く笑いながら第三脳に接続して、魔術士衣のポケットから触しよく媒ばいをとりだした。

「羅栖Ｂａｌ弩」

　標的は寝しん台だいだった。

　下級魔術でも使いようによっては有用だ。

　頭より少し大きいくらいの火球が毛布だのシーツだの枕まくらだのを燃えあがらせて、あっという間に焼きつくした。

　炎ほのおに照らしだされたあいつの顔は、驚おどろいているというよりも呆ぼう然ぜんとしているようだった。

　ちょっとだけ愉ゆ快かいだった。

「看病してくれて、感謝してるわ、頭領マスター」

nebula story

ネビュラ・ストーリー

恋情編

1

昼飯時をすぎた十五時くらいの定食屋「n'ebula」は静かだ。

この時間帯だとめったに客はこないし、この店に棲せい息そくしている常連のジジイも並べた椅い子すの上で横になって昼ひる寝ねしていることが多いし、店主で割かつ烹ぽう着ぎがトレードマークのオトミばあさんや従業員のカツヲもだいたいそれぞれ休きゆう憩けいをとっている。

ナツコは基本的に、ちょっとやかましいくらいが寂さびしくなくていいと思っている。ただ、集中したいときに限れば、やはり雑音はないに越したことはない。

たとえば、姉の髪かみを切ったり染めたりセットしたり、化け粧しようをしてあげたりするときがそうだ。まあ、医術式の施せ式しき中も、うるさいよりは静かなほうがいい。それから、何といっても裁さい縫ほうだ。服を作っているときに周りが騒さわがしいと、マジでかなり頭にくる。

失礼なことに、よく意外だと言われるのだが、ナツコは昔から裁縫が好きだ。ナツコ自身と姉の服はすべて手作りだし、正直、医術士なんかじゃなくて、デザイナーを目指していればよかったと思ったりもする。でも、その道を選んでいたら、昼ラン飯チタ時イムには加入していなかったかもしれないし、アジアンにも会えなかっただろう。そう考えると、ちょっと微び妙みようだ。美形だもんなぁ、アジアン。うぅぅー。やりてー。やらしてくれそうな気がぜんぜんしないけど。そこがまた萌もえるってゆーかぁ燃えるってゆーかぁ、まぁ、とりあえず今は裁縫しよっと。

ナツコはくっつけたテーブルに生き地じを広げて、その上に昨夜作っておいた型紙をのせた。手早く型紙を待ち針でとめてゆき、縫ぬいしろをとってチャコで印をつけるまでの作業は、目をつぶっていてもできる。いや、それはさすがにムリだけど。裁たちばさみを操あやつっての裁断も、手先が器用なナツコにとってはお手のものだ。慎しん重ちようというか臆おく病びような姉とは正反対で、生まれつき大だい胆たんだから、ラインを決めたら躊ちゆう躇ちよせ

ずにスイスイ切ってしまう。

「……やっべぇー。ナツコ、天才かも」

　うっとりするような出で来き栄ばえだ。いや、まだ裁断が終わっただけで出来てないけど。これから布端をきちきちっと始末して、それからいよいよ縫う作業だ。ナツコは唇くちびるを舌先でなめて、気合いを入れなおした。

「ヴィクトリアの服かい？」

「ひゃあっ！」

　泡あわを食って振ふり返った。心臓が激しく踊おどりだした。

「……あ、ああああ、アジアン」

　至近距きよ離りとまではゆかない。自分からはあまり他人に近づかない男だ。さわられるのも、さわるのも嫌きらいなのかもしれない。ナツコも、興味のない男には指一本ふれられたくないけれど、アジアンの場合、そういう問題でもない気がする。

「熱心だネ」

「え、ええ、えええええ、そ、そぉ？」

「意外と姉思いなんだ」

　アジアンはめったに笑わない。今も無表情だし、その眼まな差ざしは冷たいといってもいいくらいだ。でも、声をかけてくれるなんて珍めずらしい。話しかければ、無視することはないものの、愛想のいい受け答えとは程ほど遠い「何か用かい」が返ってくる。べつに用なんかなくても、話すくらいよくない？　内心そう思っても、あの視線にさらされると、とても言えない。だいたい何か適当に用件をでっちあげて、当然どうでもいいようなことだから、冷れい淡たんにあしらわれておしまいだ。結局さぁ。惚ほれたほうが負けなんだよねぇ。ナツコの小こ柄がらながらピリリと辛から口くちボディもさっぱり効果ないっぽいしぃ。でも、そんなアジアンが声かけてくれたってことは、機き嫌げんいいのかな。てゆーかぁ、もしかして、ついにナツコの魅み力りよくに気づいちゃったとか？

「い、意外って何よぉ。ナツコ、いつも姉さんのことは──」

「そうみたいだネ」

「ほら、何？　たった二人のきょうだいだしぃ。あ、あの通り、ちょっと頼たよりない人だしぃ」

「きょうだい、か」

「あ、ああアジアンはぁ？　そ、そういえば、きょ、きょうだいとかぁ──」

「いないヨ」

　アジアンはふっと背中を向けてしまった。

「頑がん張ばって」

　気のせいだろうか。一いつ瞬しゆん、アジアンの顔に何かの表情が浮うかんだように見えた。うつむき加減になって、薄うす青あお色の目が微かすかに細められて、形のいい唇の端はしが少しだけ持ちあげられて、あれって──あの表情って、いったい何だろう。気のせいだったのだろうか。目の錯さつ覚かくか。いや、違ちがう。気のせいでも錯覚でもない。

　だって、めちゃめちゃ萌えた。

　あの物もの憂うげ系な顔つきは超ちよう弩ど級きゆうの殺人兵器だ。

　やばいやばいやばい。

　マージやばいって。

　てゆーかぁ、行かないでよぉ。人をこぉーんな目め一いつ杯ぱいドキドキさせといて、放置？　ひょっとして、アジアンってＳ？　そぉゆー趣しゆ味みですか？　まぁ、それならそれでナツコ的にはぜんぜん対応可だけど、でも、もし毎日そんなことをされたら、きっと心臓がもたない。今も鼓こ動どうが高まりすぎて痛いくらいだ。顔面だけでじゃなく、全身が熱い。なんだかふわふわして、腰こしが砕くだけてしまいそうだ。アジアン。あぁーアジアンアジアンアジアンアジアンアジアンアジアン。

　アジアンは、カウンターの奥で椅い子すに座って舟ふねを漕こい

でいたオトミばあさんに声をかけてうるさがられ、だるそうに何か話しかけてきたカツヲに返事をしてやっている。無愛想だが、無礼な男ではないのだ。だから、アジアンはオトミばあさんには挨あい拶さつを欠かさない。n'ebulaの三階と四階は昼ラン飯チタ時イムが借りているので、建物の持ち主であるオトミばあさんは大家にあたるからだ。n'ebulaで食事をとるメンバーも多いから、グータラ従業員カツヲの相手もしてやる。常連客の変なじいさんＢ□Ｂも粗そ略りやくには扱あつかわない。

　いや、アジアンが最低限の礼れい儀ぎを守って接する相手は、彼らだけだろうか。少なくとも、仲間に対してはそうではないか。昼ラン飯チタ時イムは、頭領マスターが直接会って許可しないかぎり加入できない決まりになっているので、当然、アジアンは全員の顔と名前を知っている。仲間であれば、街ですれ違っただけでも「やあ」くらいは言うのだ。本当に「やあ」だけかもしれないが、とりあえず、仲間内でアジアンに無視されたなんて話は聞いたことがない。さっきナツコに声をかけたのも、たまたまオトミばあさんたちに挨拶をしにきて、そのついでだろう。

　まったく、何が、声をかけてくれるなんて珍しい、だ。機嫌なんか関係ない。ナツコの魅力に気づいたなんてこともありえない。ここ数日、顔を見ていなかったので、ついつい都合のいい解かい釈しやくをしてしまった。でも、しょーがなくない？　毎晩アジアンを思ってシーツを、じゃなくて枕まくらをぬらすだけではつらすぎる。せめて×××××したい。させてくれるわけないけど。

　とにかく、アジアンは普ふ段だんどおりだ。

　いつものように、義務だけはちゃんと果たして、そっけない。

　そこがまた、たまらないんだけどね。

　あー好き。好き。好き。好き。いっちゃいそう。嘘うそ。いかないって。いきたいけど。

　ダメ。とてもじゃないけど、裁さい縫ほうに集中なんてできない。

　ナツコは大急ぎで裁断した生き地じやら型紙やら裁縫道具やらを手て提さげに突つっこんだ。アジアンはもうn'ebulaから出てゆこうとしている。ということは、三階か四階にいて、何か用をすませて

下りてきて、大家たちに挨拶をして、今、どこかへ行くつもりなのか。どこへ行くのか。だいたい、アジアンの行動は謎なぞにつつまれている。一いつ緒しよにアンダーグラウンドで一ひと稼かせぎしようと誰だれかが誘さそえば、つきあってくれることもたまにあるけれど、普段は何をしているのか。古参のクラニィやダリエロやローガンやリキエルやニセ乳ベティはどうかわからないが、ナツコはアジアンのねぐらさえ知らない。きいても教えてくれない。不明だ。不明だらけだ。

　もちろん、ナツコとしては大いに興味がある。知りたい。知れるものなら、何でも知りたい。とくに、女性関係とか。もてないはずがないわけだし。今も、女に会いに行くんだったりして。うっそぉ。それマジ耐たえらんない。やだやだやだぁー。ナツコのアジアンがぁー。いや、それはそれで萌もえるけど、って、そこまで変態じゃないってば。できることならナツコだけのアジアンになって欲しいけれど、それが無理なら、少なくとも誰のものでもないアジアンでいて欲しい。そうだということを確かめたい。てゆーかぁ、そんなこともどうでもよくて、とにかくアジアンのことが知りたい。もっと、もっともっと知りたい。

「カツヲ！　これ預かっといて！　あ、ちなみにぐちゃぐちゃにしたら死なす！」

「えぇぇ～……な～んでおれが～……」

「うっせえ今殺すぞいいのかオラァ？　黙だまって預かっとけこの包ほう茎けい童どう貞ていインポ三重苦野や郎ろう」

「……わ、わ～ったよ……」

　カツヲは渋しぶ々しぶといったかんじで手提げを受けとった。いやでもおれ童貞じゃね～しインポでもね～よ……とか何とかブツクサ言っているが、ナツコの知ったことではない。オークリッド人に多いチョコレート色の肌はだをしたカツヲは、不細工ではないものの、いい男というほどでもなく、金持ちでもなさそうだし、とりたててあっちが強そうにも見えないので、ナツコにとっては対象外だ。いい顔。たくさんの金。いい身体からだ。最低でもこのうち一つは欲しい。二つあれば上。三つそろっていたら特上。ただし、一つでも図ず抜ぬけていれば、極ごく上じようと見なされる場合もなきにしもあらずだ。

アジアンは、とにかく顔がものすごくいい。この時点で極上だけれど、単独行動が多いので、寂さびしがりではないと思うが、どこか寂しげなところもいい。大勢の仲間に囲まれていて、しかも頭領マスターなのに、いつも孤こ独どくの気配を漂ただよわせているように思えてならないのだ。なぁーんかこぉ、抱だきしめたぁい、ってかんじじゃない？　いや、抱きしめさせてなんかくれないけど。抱きつこうとしても、よけられちゃうし。

だから、せめて、日ひ頃ごろ何をしているのかくらい、知りたい。

きいてもどうせ教えてくれないだろうから、自力で突き止めてやる。

追え。追うんだ。

ナツコは走った。n'ebulaを飛びだして左右を見ると、右の道にアジアンの後ろ姿があった。もう結構遠い。急がないと。気づかれてもいい。というか、ごちゃごちゃ考えずに全力疾しつ走そうしないと、見失ってしまいかねない。アジアンは角を曲がった。ナツコは必死で追いかけた。あそこだ。あそこを曲がっていった。少しスピードをゆるめて角に飛びこむと、いた。アジアン。確実に近づいている。あたりまえだ。アジアンは歩いていて、ナツコは走っているのだ。でも、これ以上距きよ離りをつめたら、さすがにやばいかもしれない。せっかく尾び行こうできそうな態勢にまで持ちこむことができたのだから、この期ごに及およんで気づかれたくない。ナツコは建物の外がい壁へきに身をよせて、呼吸を整えようとした。アジアンから目を離はなしたのは、ほんの一いつ瞬しゆんだった。

「……え？」

いない。

十五メーテルくらい前方だったろうか。今の今まであそこにいたのに。消えた？　いや、いくらアジアンでも、そんなバカな。じゃあ、どこへ……？　ナツコはあちこちに視線を巡めぐらせたが、やはり見あたらない。もしや、と思った。

アジアンが消えた地点から、そのまま目線を上げてみた。

「あ」

　ナツコはたしかに建物の屋上から屋上へと飛び移ってゆく小さな黒い人ひと影かげを視界にとらえた。すぐに見えなくなってしまったが、あれは間ま違ちがいなくアジアンだった。てゆーかぁ、あんなのどーやって追えっつーの。追えるわけないじゃん。無理だって絶対。超最低ＳＵＣＫ。

2

「ちょっとさぁ。話あんだけどぉ。つきあってくんない？」

　そうナツコに言われて、何事かと思い夕方のn'ebulaにきてみれば、とてもくだらなくはあるものの、少しばかり興味がわかないでもない話だった。

「──ようするに、あの方が常日頃何をしてらっしゃるのか、どこによくいらっしゃるのか、つけまわして調べたいとおっしゃるのね」

　クララは豊かな胸の前で白い長なが手て袋ぶくろをつけた両手をあわせ、微び笑しようを浮うかべてみせた。

「あらあらまあまあ、お下品なナツコさんらしい、じつにお下げ劣れつな思いつきですこと。わたくしにはとてもとても考えつきませんわ」

「……ねぇ、こいつむかつくからいっぺんぶっ殺していいぃ？」

「だ、だめよ、ナツコちゃん、そんな、こ、殺すなんて……」

　小こ柄がらでむちむちしている妹ナツコを弱々しくたしなめた姉ヴィクトリアは、男でもなかなかいないほどの長身を誇ほこっている。いや、恥はじているのか。だから、やたらと姿勢が悪いし、顔半分が隠かくれるくらいまで前まえ髪がみをのばしているのだろう。フリル付きの黒い女性用ナース医術士服・ユニは結構似合っているし、巨きよ大だいなお人形さんみたいでかわいいとクララは思うのだが、所しよ詮せん、他ひ人と事ごとだ。自分の身長が百九十サンチ超ちようだったら、やはりさんざん悩なやんで悩み抜くに違いない。

「でも、そうね、たしかにあの方の行動には謎なぞが多くてらっしゃるわね。そこがまた魅み力りよく的てきでもあるのだけれど、知りたいか知りたくないかといえば、知りたくないとは口が裂さけても申しあげられないわ」

「なんっかぁ、まだるっこしいんですけどぉ。知りたいなら知りたいってはっきり言えっつーの、この金持ち気どりのクソビッチ」

「あら。わたくし、気どっているわけではなくて、実際、お金持ちでしてよ」

「しゃーくしゃーく！　ちゃはははははは！　しゃーく！」

　ミシーリャがテーブルをばんばん叩たたきながら甲かん高だかい笑い声をあげた。頭の左右で束ねられたキャラメル色の髪の毛がぴょんぴょん跳はねている。妙みようちきりんな形をした白黒の衣い装しようは、ナツコが自分とヴィクトリアの服を作る際にあまった生き地じであつらえてあげたものらしい。身体も小さいが、言動も幼くて、クララはどうもこの子には弱い。

「……はいはい、そうですわね。たしかに、陰かげでわたくしを高利ローン貸しシヤーククララと呼ぶ者もいらっしゃるようですけれど、それより、ミシーリャさん、いけませんわ、お口がだらしなくておいでよ。よだれが垂れてらっしゃるわ。ふいてさしあげますから、ここへいらっしゃいまし」

「みゃっはー！　よだれよだれー！　ぴーぽぽぽりーん」

「さあさ、お黙りなさいな。じっとするのです。はい、よろしくてよ」

「にんにりにゅーん。れーろりんりんれーるろー」

「……あら、もう口の周りがべちょべちょですわ。せっかくふいてさしあげましたのに」

「ひっしゃしゃしゃしゃー！　しゃーくぴろーん」

「仕方ありませんわね。このハンカチーフをさしあげます。これを持っておいでなさい。折にふれてちゃんとご自分でおふきになってくださいましね」

「……ムダじゃないのぉ。ミシーリャはぁ、服もすーぐでろっでろにしちゃうんだからぁ。てゆーかぁ、そんなのどぉーでもいーっつーのぉ。話の腰こし折らないでよぉ、むかつくぅ」

「わたくしとしては、ナツコさんの間延びしたお話の仕方が不ふ愉ゆ快かいでなりませんわ。どうにかなりませんの、その気色の悪い品性下劣な喋しゃべり方」

「ならねーよバーカ。いっぺん死ぬかぁ？　この腐くされメスブタがぁ」

「な、ナツコちゃん……だ、だめよ、親しい仲にも礼れい儀ぎありっていう、言葉が……」

「最初っから親しくないもぉーん。こぉーんなヤツ」

「そうですわね。その点については同意させていただきますわ」

「……お、同じ昼ラン飯チタ時イムの、お友だちなのに……」

「友だちぃー？」「お友だちですって？」

　ハモり気味だった。

　少々気まずくなって、クララは一つ咳せき払ばらいをした。横目で見ると、ナツコもばつが悪そうにしている。ヴィクトリアも哀あわれだし、そろそろ潮時かもしれない。第一、時間の浪ろう費ひだ。

「では、お話を戻もどしましょう。あの方が常つね日ひ頃ごろ何をしてらっしゃるのか、是ぜ非ひとも知りたい、調べたい、そのためにあの方を尾び行こうしたいというお話でしたわね」

「まぁ、そぉーゆーこと」

「目的や行こう為いの是非はともかく、難なん儀ぎですわよ」

「だからぁ。ちゃあんとそれ用に人選考えたってぇーの。まずぅ、クララ、あんたは作戦立案担当とまとめ役みたいかんじぃ。ずる賢がしこくて他人こき使うのが得意だからぁ」

「頭脳明めい晰せきで人望が厚いの間ま違ちがいではありませんこ

と」

「あとぉ」

　ナツコはクララの訂てい正せいを無視してミシーリャを顎あごで示した。

「ミシーリャならぁ、いざってときアジアンを追っかけられるでしょぉ？」

「ぷりぴぴぽぽろりん？」

　ミシーリャは自分を指さして首を傾かしげている。話を理解しているのか、いないのか。道みち端ばたに転がって餓が死ししかけていたところを拾われたらしいが、年ねん齢れいも出身地も不明で、名前はどういうわけかあのダリエロがつけてあげたのだという。

「──なるほど。たしかに、ミシーリャさんなら、あの方にもそう引けをとらないかもしれませんわね」

「んでぇ、こいつはぁ」

　と、ナツコがテーブルの下にガツンと蹴けりを入れた。クララとミシーリャ、ナツコとヴィクトリアの凸でこ凹ぼこ姉し妹まいはn'ebulaの一番奥のテーブル席に陣じん取どっているのだが、集まったのは四人だけではなかった。もう一人いた。五人目はずっとテーブルの下に隠かくれていたのだ。

「……いたい……っす……」

　ナツコの蹴りが見事ヒットしたらしい。彼女は腰のあたりをさすりながらテーブルの下から出てきた。黒くろ髪かみを結ゆいあげて、東部風の緑と青の着物を痩そう身しんにまとい、うつむいて赤面しているので今はよく見えないが、顔立ちもやはり東部風だ。もとは凰おう州しゆう難民で、正しよう真しん正しよう銘めい、東部人以外の何者でもなく、名は祝ノリ花カという。常に何かの匂においを嗅かいでいないと落ちつかないようで、だいたい袖そでを鼻にくっつけてクンクンやっている。

「犬がわりぃ。祝ノリ花カちんがいればぁ、見失っても匂いで追えるかもでしょぉ？」

「……や……それはさすがに無理……かな……」

「ああん？　じゃー役立たずじゃん、てめぇー」

「……す、すみせん……っす……」

「す、じゃねぇーよボケェッ」

「な、ナツコちゃん、やめて、やめなさい」

「だって姉さん、このメス犬がぁ」

「そ、そういう言い方はよくないよ。ご、ごめんね、祝ノリ花カちゃん。ナツコちゃん、悪気はないと思うんだけど……少し、その……凶きよう暴ぼうで」

「……いや……だ、大だい丈じよう夫ぶ……っす……」

「ちょっとぉ、凶暴ってそれ、フォローになってないってぇ、姉さんひっどぉーいぃ」

「きゃぴゃぱぱぱぱー！　きょーぼーきょーぼー！　にゃはははははー！」

「……毎度のことながら、騒そう々ぞうしいですわね」

　クララは目をつぶってこめかみ付近を指で押した。上流階級で生まれ育ったクララにとって、下げ賤せんの者たちとのつきあいは大変だし、苦痛──だったはずだが、慣れとは恐おそろしいものだ。

「ともあれ、よろしいですわ。ミシーリャさんと祝ノリ花カさんはたしかに有ゆう為いの人材と申しあげても差し支つかえありませんでしょう。むろん、わたくしも。けれど、ナツコさん、肝かん心じんのあなたはいかがかしら」

「ナツコは言い出しっぺだから当然参加でしょーがぁ」

「ヴィクトリアさんは？」

「ナツコの姉さんなんだからぁ、参加は義務でしょぉ？」

「……本当に、ごめんね、みんな……ナツコちゃん、昔からめちゃくちゃで……」

「お察ししますわ」

　まったく、ナツコのような妹を持ったヴィクトリアは不運としかいいようがない。ただ、ナツコはナツコなりに姉思いのところがあって、巨きょ大だいといってはかわいそうだが、非常に背が高いせいでほとんどの既き製せい服ふくはサイズがあわないだろう姉のために服を作ってやり、髪の毛を光を織ったような美しい金色に染めてやり、ウェーブをかけてやり、丹たん念ねんにメイクを施ほどこしてやっている。肉親の情というものに恵めぐまれなかったクララは、内心うらやましく思わないでもない。とはいえ、もちろん、妬ねたんだりはしない。そのような愚ぐ劣れつきわまりない感情は、人品の卑いやしい人間以下の下等生物が抱いだくものと相場が決まっている。たとえば、そう──、

「──チッ。きやがったよ、あの貧ひん乳にゆうがぁ」

　どれだけ嫌きらいなのか知らないが、来店者を見て醜みにくく顔をゆがめ、そんなふうに舌打ちをしてみせたナツコなどは、間違いなく下等生物の部類に入るだろう。他ひ人と様さまの身体的特とく徴ちようをそのような侮ぶ蔑べつ的てきな表現でおとしめようとする行為は、下等生物ならではだ。当然、クララはそんな下品なことはしない。

「あら、ベティさん、御ご機き嫌げん麗うるわしく」

「Hiyas.」

　胸むなもとが大きく開いているサン・ティエンヌ・ドゥ・シボーの蠱こ惑わく的な魔ま術じゆつ士し衣いを身にまとった〝垂ベテイれ・ザ・目のドウルーベピングティアイズ〟は、軽く手を振ふってクララの挨あい拶さつにこたえた。思わずその胸もとに視線をそそいでしまいそうになったが、なんとかこらえた。ここで我が慢まんできるかどうかが気品のあるなしを分けるのだ。所しよ詮せん、下等生物には期待するべくもないわけだが。

「……ケッ。相変わらず思いっきりよせて上げて、そぉーんな無理してもちっせーもんはちっせぇーんだから無意味だっつーのぉ」

「ＤｅＹ煤ＲａＹ」

　ベティがナツコに向けた右手の人差し指から、白色の光線のよう

なものが発射された。光線はナツコの頬ほおに命中した。

「あ──ぢぃっ……！」

　ナツコはすぐに飛びのいたが、光線があたった箇か所しよが赤くなっている。火傷やけどだろうか。

「──こらベティ！　店の中で魔ま術じゆつなんざ使うんじゃないよ！　たたっ殺すよ！」

「はいはい、ごめんなさい。謝るわ、オトミさん。でも、ちゃんと手加減したから」

　ベティはカウンターの中から雷かみなりのような大声で怒ど鳴なったオトミばあさんにさっと頭を下げて、ナツコに冷たい一いち瞥べつをくれた。

「忠告しておくわ。次はそれじゃすまないわよ」

「……てんめー、女の顔に何してくれんだぁっ」

「大おお袈げ裟さね。たかが火傷じゃない」

「たかがぁ？　てめぇ、やられたほうの身にもなってみろ、このナイチッチ」

「あたし、馬ば鹿かは嫌いなのよ。言ってもわからないから」

　ベティがまたナツコを指さした。さっきよりも派手な魔術を使ったら、今度こそオトミばあさんが大だい爆ばく発はつするかもしれないが、それでもベティを止められるかどうか。何しろ、ベティは一いつ介かいの魔術士ではない。あの閃せん光こうの魔女マチルダを師し匠しように持つ魔ウイ導ザー士ドだ。半はん端ぱ医術士のナツコが喧けん嘩かを売るには、あまりにも相手が悪すぎる。ナツコとてそれくらいわかっているだろうに、どうしていちいち突つっかかるのか。ベティが言うとおり、単に馬鹿なのだろうか。

「ま、待って！　ベティちゃん、お、お願い、やめて！　ナツコちゃんにはちゃんと言って聞かせるから！　悪い子じゃないの！　く、口が悪いだけで！　誤解されやすいんだけど、本当は、すごくやさしくて、い、いい、いい子で！　だから、お願い！」

　それとも、いざとなれば姉が命いのち懸がけで仲裁に入ってくれることを見み越こしているのか。

　まあ、そうでなくとも、昼ラン飯チタ時イムにおいて仲間内での殺しあいは御ご法はつ度とだ。命まではとられないだろうという計算はあるのかもしれない。実際、あれだけ癖くせのある性格で、今までなんとか姉とともに生き抜ぬいてきたのだから、それなりにしたたかなのだろう。

「妹思いの姉を持って幸せね」

　ベティはため息をつきながら肩かたをすくめて、カウンターの席に座った。茶でも頼たのんだようだ。オトミばあさんがカツヲに何か命じている。姉の顔を立てたわけではないだろうが、ナツコもこれ以上、事を荒あら立だてる気はないらしく、少しの間、おとなしくしていた。本当に短い間ではあったが。

「あ、そーだ」

　下賤の者なら、この女アマいったいどの面ツラ下げて、と言いたくなるだろう。ナツコは椅い子すに座って卑ひ猥わいに足を組んだまま、カウンターのほうへ身体からだを向けた。

「ベティさぁ、あんたも手伝ってくんない？　アジアンを尾び行こうすんの」

「……さっぱり話が見えないんだけど」

　さしものベティも呆あきれ顔だ。クララも呆あつ気けにとられてしまったが、ナツコにはこういった物事にあまりこだわらないというか、支し離り滅めつ裂れつなところがある。つい先ほどヴィクトリアが言ったとおり、ようするに、めちゃくちゃなのだ。

「だからぁ、アジアンって謎なぞ多いじゃん？　人として。気になるでしょぉ？　知りたいとか思わないぃ？　思うじゃん、フツー」

「そういうものかしらね」

「そーゆーもんでしょーがぁ。でぇ、あんたならぁ、魔術でぱぱって移動できるしさぁ。アジアンのあとつけるのだって簡単でしょぉ？」

「馬鹿馬鹿しい」

「なんでよぉ」

「そんなくだらないことのためにあれを使うなんてごめんだわ。何か勘かん違ちがいしてるみたいだけど、何の代だい償しようもなく使える魔術なんてないのよ。大きい力を生みだそうと思えば、当然、それ相応の何かが必要になる。べつに、魔術に限ったことじゃないでしょう。何だってそうだわ。だいたい──」

　ベティは顔だけ振り向かせてナツコをちらりと見た。

「あたしがわざわざそんなことをする必要が、どこに？」

　笑え顔がおだった。その笑みも、言葉も、いくつか解かい釈しやくのしようがありそうだ。たとえば、何の含ふくみもない純じゅん粋すいな笑い。あるいは、冷れい笑しよう、嘲ちよう笑しようのたぐい。必要性のなさについては、そもそも興味がない。または、よく知っているから、今さら探さぐるような真ま似ねをする必要がない。

　クララは一つ息をついて、にっこりと微笑ほほえんだ。頭にきたときは、気持ちを落ちつけて、笑うことにしている。あらあら、ずいぶん余よ裕ゆうがおありのようですわね、ベティさん。

「作戦を練りましょう」

　はっきり申しあげて、むかつきますわ。生意気ですのよ。ニセチチのくせに。



　アジアンの匂においは、好きだ。あまり人間っぽい匂いがしない、それどころか、匂い自体かなり薄うすいところが、すごくいい。

　祝ノリ花カはどうも他人より鼻が利きくようで、匂いには敏びん感かんだ。だからそう思うのかもしれないが、この世にはじつに悪あく臭しゆうが多い。なかには慣れてしまえばどうでもよくなる匂いや、逆に好きになってしまう匂いもあるけれど、ダメなものはやっぱりダメだ。男のきつい体臭はとくに耐たえがたい。吐はきたくなる。そうでなくとも、いろいろな匂いを嗅かいでいると、頭がごちゃごちゃになって、わけがわからなくなるので、いつも袖そでにお気に入りの匂いをしみこませて、それを嗅いでいる。好きな匂いを嗅いでいるときが一番幸せだ。あまり他人には理解してもらえないが、同郷の雷ライ切キリはわかってくれているみたいだし、昼ラン飯チタ時イムはちょっと変わった人が多いので、ここにいればそれほど変には思われない。祝ノリ花カにとって、昼ラン飯チタ時イムというクランはおおむね居い心ごこ地ちのいい場所だ。

　だから、たまにこうやって無理やり引っぱりまわされても、我が慢まんしようと思う。それに、アジアンのような匂いの持ち主には、祝ノリ花カも心が引かれる。みんな、アジアンの顔やスタイルや態度のことばかり言うけれど、どうして匂いのことが話題にならないのか不思議だ。いくら嗅いでも、もっと嗅ぎたくなるような、胸がせつなくなる、いい匂いなのに。

「さあ、準備はよろしくて、祝ノリ花カさん。そろそろ黒様がナツコさんのセクハラ攻こう撃げきに耐えかねて、店から出てゆかれる頃ころあいですわ。手て筈はずどおり、祝ノリ花カさんはその前に外へ」

「りょ、了りよう解かい……っす……」

　祝ノリ花カはクララの指令を受けてそろそろとn'ebulaをあとにした。クララの作戦によると、祝ノリ花カは追つい跡せき部隊Ａで、クララとミシーリャが追跡部隊Ｂ、ナツコとヴィクトリアは支し援えん部隊としてそれ以外の仕事を受け持つ。尾行は、暗コー号ドネ名ーム〝黒様〟ことアジアンに不ふ審しんがられないよう、二手に分かれて行い、最初はＡがやや先行、Ｂはあとを追う形をとって黒様を前後から挟はさみこみ、それぞれ散策を装よそおって移動する。その後、状じよう況きように応じてＡとＢが位置を変えつつ、黒様を捕ほ捉そくしつづけ、決して監かん視しの目を絶やさない。

尾行に参加できないナツコは不満そうだったが、匂いの面からいっても、順当な役割分担だろう。ナツコもヴィクトリアも香こう水すいをつけすぎている。姉に関してはたぶん妹の仕し業わざだろうが、あんなに強きよう烈れつな匂いをふりまかれては、何がなんだかわからなくなってしまう。黒様の匂いは、もちろんいい意味で、すごく微び妙みようなのだ。

n'ebulaを出た祝ノリ花カは右へ進んだ。作戦ではナツコ（と一応ヴィクトリア）がしつこく黒様に食くらいついて、こっちへ追いやることになっている。タイミングはわからないから、とりあえずできるだけゆっくり歩いて、黒様が出てきたら足を速めればいい。でも、なんだか緊きん張ちようしてきた。足が震ふるえている。顔が真っ赤になっているのが自分でもわかる。祝ノリ花カは袖で顔を隠かくすようにして、匂いをくんくん嗅いだ。まろやかな匂いだ。今日、袖にしみこませているのは、昔から嗅ぎ慣れている雷ライ切キリの匂いなので、すごく落ちつく。いい匂いだ。

少しだけ心に余裕が持てた。祝ノリ花カはちらりと後ろを見た。

転んでしまいそうになった。

ああ、もうダメだ。またダメだ。

黒様だ。黒様が出てきた。

ナツコが抱だいてとかやらせてとか言いながらしがみつこうとして、うまくかわされた。ヴィクトリアがナツコを慰なぐさめている。演技だろうか。それはいい。問題は黒様だ。黒様がこっちにくる。黒様の匂いが。

まずい。頭がぼうっとする。体温がいきなり二度くらい上がってしまったに違いない。どうしよう。どうしようも何もない。作戦どおりに動かなかったら、クララに怒おこられる。クララは怖こわい。クララがいつも持ち歩いている特とく殊しゆ鋼こう製の蛇じやの目め傘がさで殴なぐられたら無傷ではすまない。それよりもさらに、高利ローン貸しシヤーククララの客たちが怖い。彼らはクララの手足であり、用心棒であり、お金の力で支配されている奴ど隷れいだ。クララの命令であれば、少しでも利子を減らしてもらうために何でもする。

祝ノリ花カはおぼつかない足どりで歩きはじめた。もっと速く歩

くべきだろうか。振ふり向いて距きよ離りを確かく認にんしたいが、できない。ダメだ。この異常な熱っぽさからして、すでに顔中が真っ赤だ。今、黒様の顔を見てしまったら、おそらく動けなくなる。恥はずかしい。ダメだ。このままなんとなく歩くしかない。また袖の匂いを嗅ごうか。いや、いけない。匂いがよくわからなくなる。黒様の匂いが。というか、もうわからない。匂いがしない。

　いくらなんでも、おかしい。

　祝ノリ花カは振り返ってみた。

「……あ、れ……？」

　黒様がいない。追跡部隊Ｂ、つまり、クララとミシーリャは、ナツコ、ヴィクトリアと入れ替かわりに、ちょうどn'ebulaから出てきたところだ。けれども、肝かん心じんの黒様がどこにもいない。すぐにクララもその事実に気づいたようで、首を巡めぐらせて黒様を探している。ミシーリャはおもしろがってクララの真ま似ねをしているだけか。おそらく、祝ノリ花カが何かしくじったわけではないと思うのだが、だんだんと自分が悪いみたいな気がしてきた。いたたまれない。いっそ逃にげだしてしまいたいけれど、足がすくんでいる。

「祝ノリ花カさん！」

　クララが蛇の目傘の先せん端たんをこちらに向けて叫さけんだ。

「黒様を匂いで追って！　探すのです！」

「え……や……でも、それはさすがに……無理……っす……」

「ご自分の力をお信じなさい！　祝ノリ花カさんなら必ずおできになります！」

　ちょっとだけ嬉うれしかった。

　今までそんなふうに言ってもらったことがなかったからだ。

　自分の力を信じる。自分にはできる。できる──のだろうか？　わからないが、精せい一いつ杯ぱいやってみよう。それに、やらなかったら、クララの奴隷たちに何をされるか。怖い。怖すぎる。

祝ノリ花カは目をつぶって嗅きゆう覚かくだけに意識を集中させた。

匂におい。

黒様の匂い。

かすかな、かすかすぎる、匂い。

どれだ。

あれか。

違ちがう。

これも違う。

どれも違う。

匂い。黒様。黒様のほのかな匂い。アジアンの匂い。いい匂い。ああ──、

つかまえた。

それはもう、匂いとはいいがたいものだったかもしれない。いずれにしても、それをつかまえた祝ノリ花カの身体からだが勝手に動いた。北だ。北の方角だ。そうだ。この先を右へ曲がる。そして、ここを直進。黒様はいる。近くはないが、間違いなく黒様の匂い、いや、気配がする。祝ノリ花カは走る。体力には自信がないけれど、とにかく全力疾しつ走そうする。後ろから追いついてきそうなのはミシーリャか。クララはピンヒールを履はいているから、さすがに無理だろう。祝ノリ花カは前方右手の建物を指さした。

「──み、みみみ、ミシーリャ！　あ、あそこ……！　あの上……っす……！」

4

ミシーリャはダンッと跳とんで、建物の壁へき面めんをダダダダ

駆かけのぼって、あっという間に屋根の上まで達した。だが、これは祝ノリ花カが示した建物ではない。屋根伝いに隣となりの建物へ。さらに隣の建物へ。その次は高い建物だった。また外がい壁へきを跳びのぼった。この程度、窓や出っぱりなど足がかりになるものさえあれば、ミシーリャにとってはさして難しい仕事ではないが、屋上に出た途と端たん、何をすればいいのかわからなくなった。

「みょろりょん？」

　屋上にしゃがみこんで、頭の左右で束ねた髪かみの毛をギシギシ引っぱりながら考えた。

　でも、そもそも何を考えればいいんだっけ。

　めんどくさくなってきた。

　帰ろうかな。

「……やぴ？」

　思い出した。

　ずっと遠くに黒い人の後ろ姿がある。

　黒い人。そうだ。黒い人を追いかけるんだった。ええと、なんだっけ。追いかけて、見つからないように、黒い人を見る。黒い人。

「あじゅりゃん！」

　そう、あじゅりゃんだ。

　ミシーリャは駆けだした。

　けれども、なんだか遅おそい。

　そうか。

　足だけで走ったり跳んだりしているからだ。手足を使えばいい。足は二本で、手は二本だから、あわせると足だけよりも多くなる。速く走れるのは当然だ。

「ぴっ、ぽっ、ぽっ、ぴっ、あじゅりゃんたー！」

　四つ足走法に切りかえたミシーリャは、快調にあじゅりゃんとの距きょ離りをつめていった。ミシーリャが見たところ、あじゅりゃんは全力を出していない。追いつけそうだ。でも、追いついてしまってはいけないんだっけ。なんで？　あじゅりゃんと遊びたい。遊んでくれるだろうか。ダメかもしれない。あじゅりゃんはあまりミシーリャと遊んでくれないのだ。あじゅりゃん、遊ぶの嫌きらい？　たしか、以前そうきいてみたことがあるような気がする。あじゅりゃんは首をひねるばかりで、答えてくれなかった。つまり、あじゅりゃんをつかまえても、あまり遊んではもらえないということだ。だったら、誰だれかに言われたように、とにかくただ追いかけて、あじゅりゃんを見ていることにしよう。それはそれで楽しいかもしれない。実際、こうしてあじゅりゃんを追いかけるのは結構楽しい。

「あじゅりゃんたあじゅりゃんたー！」

　でも、それなら、こんなに大きな声を出してはいけない。あじゅりゃんに気づかれてしまうかもしれない。

「──はむぅっ」

　ミシーリャは左手で口を押さえて、屋根から屋根へとぴょんぴょん飛び移った。これで大だい丈じよう夫ぶだ。自分はなんてお利口さんなんだろうとミシーリャは思った。手が一本減ってしまったので、速度は少し落ちたが、先を行くあじゅりゃんもそれほど速くない。頻ひん繁ぱんに右を見て、左を見て──どうやら何か探しているようだ。あじゅりゃんともあろう者が、後ろへの警けい戒かいがおろそかになってしまうほど集中しているらしい。

　それならとばかりに、ミシーリャは思いきってぐっと接近してみた。といっても、まだずいぶん離はなれているが、ミシーリャは目がいいから、これくらいの距離だとかなりはっきり見える。あじゅりゃんには気づかれていない様子だ。もっと近づこうか。に、し、し、し、と含ふくみ笑いをしながら、ミシーリャがそう思ったときだった。

　突とつ然ぜん、あじゅりゃんが止まった。

　ミシーリャも急停止して、近くの煙えん突とつか何かの陰かげに

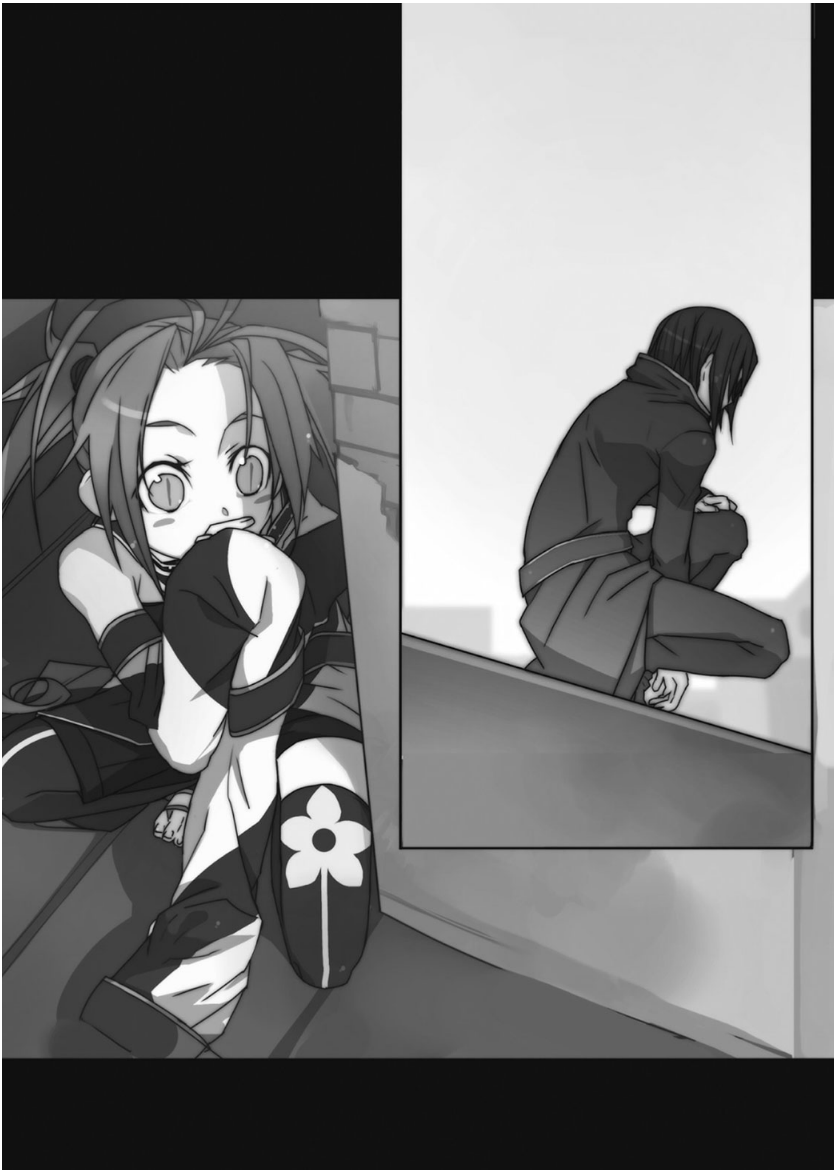
身を隠かくした。

　あじゅりゃんは屋根の縁ふちに立って下を見ているようだ。

　かがみこんで、食い入るように見ている。

　じっと見下ろしている。

　ミシーリャは、言われたとおり、そんなあじゅりゃんをやはりじっと見つめていた。



「……わたくしとしたことが、大失敗ですわ。たとえミシーリャさんが首しゅ尾びよく何かごらんになったとしても、それをあとで聞きだすことができなければ何の意味もありませんのに」

　クララはあやうく白い長なが手て袋ぶくろをはめた親指を噛かみそうになったが、我が慢まんした。まだ動どう揺ようが収まっていない。思い返すだけで、顔が引きつって全身が小刻みに震ふるえる。「あじゅりゃんにゃにょりんぴゃーぽろぴんぴょん」とまったく意味不明のことを話すミシーリャを前にして、ナツコは爆ばく笑しようし、ヴィクトリアも必死で笑いをこらえ、祝ノリ花カまで顔を真っ赤にして忍しのび笑いをもらしていた。クララは穴があったら入りたい気分だった。わたくしとしたことが。ああ、わたくしとしたことが。あれほどの大失態を演じてしまったことが、かつてありましたかしら。本当に恥はじですわ。末代までの大恥ですわ。

「と、ともあれ、くよくよしていても仕方ありませんわね。別の方法でアプローチしてみることに決めたのですから、頭を切りかえませんと」

　そうだ。雪せつ辱じょくしなければ。人は矜きよう持じを持たねばならないが、それが傷ついたからといって泣きわめいているだけでは赤子と変わらない。誇ほこりとは守るよりも鍛きたえ育はぐくむものだ。

　クララはとある建物の前で足を止め、差している蛇じやの目め傘がさを傾かたむけて、看板を仰あおぎ見た。

「――ここですわね」

-Klanny,Rogan/Clara-

「アジアンが普ふ段だん何してるかって？」

　クラニィはクァラナド八丁目と呼ばれる地域にある酒場バー「ミケランジェロ」の常連だ。とはいえ、所帯を持っているので、深酒はしないらしい。髪かみも目も黒で、東部人の顔立ちだが、年ねん齢れいよりも少し老ふけて見える。昼ラン飯チタ時イムではおそらく一番まともな部類に入る男だろう。

「さあな。飲む打つ買うには興味がなさそうだし──酒は飲めるがな。あいつは底なしなんだ。いくら飲んでもきかないみたいでな。じつにつまらなそうに、アホみたいなスピードでがんがんボトルを空けやがる」

　クラニィは喉のどを低く鳴らして静かに笑った。

「まあ、万ばん事じにつけそんなかんじのところはあるがね。退たい屈くつな日常ってやつに満足できないのか、何かおもしろくないことでもあるのか。たまに、どこかへ行っちまいそうな、遠い目をしてたりもする」

「遠い目、ですか」

　そう言われれば思いあたる節がある。アジアンの姿を心の中に描えがこうとすると、笑え顔がおではなく、不ふ機き嫌げんそうな表情でもなく、なぜかほとんど無表情だ。しかも、こちらではなく、どこか別の方向を見ている。

「あいつは我慢してるのかもな」

　クラニィもどこか遠くを見ているかのようだった。

「自分を必死で抑おさえこもうとしてるのかもしれない。もしかしたら、俺たちが鎖くさりに繋つないじまったんじゃないかって、な。そんなふうにも思うよ。だが、あいつを見てると、どうも危なっかしくてな。目を離せない」

「……わからなくもありませんわ。そこはかとなく、ですけれど」

「そうかい」

「ですが、目を離せないなどとおっしゃっておいて、あの方が常つね日ひ頃ごろ何をしてらっしゃるのかご存じありませんのね」

「あいつは餓が鬼きじゃないんだ。四六時中見張ってるわけにもいかんだろう。こう見えて、俺も暇ひまじゃあないしな。それに──」

　クラニィはグラスを呷あおって一つ息をついた。

「俺が言ってるのは、そういう意味の危なっかしさじゃない」

「どのような意味ですの」

「そうだな。お前さんみたいないい女が、思わず惚ほれちまうような、そんな危あやうさ、とでも言えばわかるか？」

「だ、だっ、誰だれが──」

「おい、ローガン、もう一いつ杯ぱいくれ」

　クラニィが空になったグラスを軽く振ふってみせると、カウンターの奥から小太りの男が出てきた。

　少し頭とう髪はつが薄うすくなってきた頭頂部を気にしている人のよさそうなおじさん、といった風ふう貌ぼうだが、彼も昼ラン飯チタ時イムだ。くわしいことは知らないが、何年もこの店で働いているらしい。年ねん齢れい不ふ詳しようで銀ぎん縁ぶちの眼鏡めがねをかけたマッシュルームカットの店主以外、他ほかの従業員は見たところ全員女性なので、少々違い和わ感かんを覚えずにはいられないが、この店自体、外装も内装も珍ちん妙みようだから、些さ細さいなことかもしれない。

「いいのかい、クラニィ。家でリリアが待っているんじゃないの」

「あと一杯だけだ。あいつはこれくらいでへそを曲げるような女じゃない。ああ、そうだ、ローガン、お前さんは何か知らないか」

「何？」

「アジアンのやつが普段何をしてるのかって話なんだが」

「うーん、いやあ、おれは知らないね。べつに知りたいとも思わないよ。人には知られたくないことってあるだろう。嘘うそをつかないと生きていけない人も、世の中にはいるんだよ」

「まあ、そうだな。脛すねに傷持つ身はお互たがい様だ。昼飯時うちはとくに、な」

　クラニィはクララに向かって片目をつぶってみせた。

　器用なウインクではなかったが、えもいわれぬ愛あい嬌きようと大人の色気があって、クララは不覚にもほんの少しだけときめいてしまった。

-Bro&Sis Rage/Natsuko-

「よぉー妹ぉ！　どぉーよ最近」

「どうもこうもねーよ最高だよ最高ＡＨＡＨＡ！」

　ナツコは窖アナグラと呼ばれる第六区の一角で、相変わらず派手というかトンガった恰かつ好こうをしているレイジ妹とハイタッチした。

「ナニナニこれから仕事ぉ？」

「だよ。仕事だっつーのーＡＨＡ」

「もしかしてぇ、また殺しとかだったりするぅ？」

「するよ。殺しだよ殺し。ヤバイって今日は三人殺やるっつーのマジでＧＩＨＩＨＩ」

「やだもぉ超ちよう怖こわいんですけどぉ」

「バッカ怖かねーよ楽しーよ。ナツコもやってみれってマジ癖くせになるって」

「ナツコ医術士だもーん」

「つってもモグリだべやー。いいって大だい丈じよう夫ぶだべヨシ、アチシと一いつ緒しよにやるべっ。殺やっぞー楽しーぞーＡＨＡＨＡ！」

「だからやんねーってぇ。それよりききたいことあんだけどぉ」

「あー？　何？」

「アジアンのこと」

「──アジアン、ねぇ。アジアンかよ。アジアンはなあ……」

　レイジ妹はウ●コ座りをして表情を引きしめた。

　刀身一・二メーテルのサハ・リドル作「道徳刀」を背中に斜ななめがけし、赤黒金の三色に染め分けた髪かみを攻こう撃げき的なスタイルにセットして、眉まゆ毛げをきれいに剃そり落としたこの女がそんな姿勢になると、冗じよう談だん抜ぬきでかなり怖い。

「ハンパなく強えーよ。アチシの〝ブルックリン流〟通じなかったのアイツが初めてだしね。アチシと兄が仕事しくったのもアレが初めてだし。つーかそれで惚れたけど。マジ惚ぼれしたべよ。つーかそれで昼ラン飯チタ時イム入ったけど。なあ兄、アジアン本気で強えーよな？」

「ああ。アジアンは強い」

　そう答えたレイジ兄は、百九十を超こえる巨きよ漢かんで、眉まゆがないのは妹と同じだが、スキンヘッドに黒縁の眼鏡をかけ、顎あご鬚ひげを生やしている。服装は年中Ｔシャツにジーンズ、スニーカーで、こだわりがあるのかまったくないのか。

　ちなみに、彼ら二人は兄きよう妹だいを名乗り、兄、妹と互いに呼びあっているが、血はこれっぽっちも繫がっていないらしい。

「俺の〝流派千百一夜〟もまるで歯が立たなかった。理由がわからないくらい強い」

「いやマジ強えーんだよなー」

　レイジ妹はポケットから茶色いシガレットを出して口にくわえ、燐寸マツチで火をつけた。

「ありえねーべよ。あの強さ」

「うむ。ありえない」

「だよなー。この世のモンとは思えねーよ」

「思えないな」

「ホンットマジ殺されっかと思ったもん」

「ああ。思った」

「なー。ノー武器素す手でで兄とかもうボッコボコだったし。あれ

ヤベーよなあ、兄？」

「うむ。だがやつは俺を殺さなかった」

「惚ほれたね」

「惚れた」

　レイジ兄妹は殺し屋だった。いや、今も現役バリバリの殺し屋だ。その筋では結構名が通っているらしい。二人がここまで言うのだから、アジアンはよほど強いのだろうが、そんなことが知りたいわけじゃない。

　ナツコは本題に入ろうとしたが、遅おそかった。

「仕事の時間だ。そろそろ行くぞ、妹よ」

「おーっす。んじゃーなーナツコ。したっけー」

「──あ、ちょ、待ってよぉ！」

　行っちゃった。

-Raikiri/Norika-

「御オ頭カシラの事だと？」

　四つ年上の雷ライ切キリとは同じ部屋に住んでいる。凰州から難民を乗せて大陸に渡わたる船で会って以来、今までずっと一緒だったので、たぶんこれからもそうだろう。

「あ、うん……いつも何してるのか、とか……知ってるかな、と」

「知りてえのか」

　雷ライ切キリはいつも祝ノリ花カに、何々が欲しいのか、何々したいのか、と尋たずねる。祝ノリ花カがうなずけば、あとは理由も事情もきかない。ただ望みを叶かなえようとしてくれる。

「う、うん」

　雷ライ切キリは「そうか」と呟つぶやいて袖そでに手を突つっこみ、目をつぶった。腹にさらしを巻いただけの素す肌はだの上に黒い褞袍ドテラを着て、柿かき色いろの内うち袴ばかまに足た袋びを履はくのが雷ライ切キリのスタイルだ。髪型は角かく刈がりで、眉は太く、左の頬ほおに「雷かみなり」の刺青いれずみがある。やや独特な風ふう貌ぼうだし、アジアンのことを御頭と呼ぶのも雷ライ切キリだけなので、変に思われることもあるけれど、そこは昼ラン飯チタ時イムだから、たいして問題にはされない。それに、少しつきあえば、雷ライ切キリが正直で度胸があって信しん頼らいできる人だということはすぐにわかる。嘘うそをつけないせいで損をすることも多い、本当にまっすぐな人なのだ。

「すまん。まるでわからねえ」

-Darierro/Micsilia-

「あじゅりゃんにょぱらりょんちょ」

「──ああ？　アジアンの野や郎ろうがどうしたって？」

「りうーぽりょりゅんぴんぷらぽー」

「知りてぇってか。ふん。アジアン、か……」

　だりゅりぇろが着ている服は変だ。右半分と左半分がちぐはぐで色も形も違う。なんだかおもしろくて好きなので、なちゅこに服をつくってもらうとき、だりゅりぇろみたいにバラバラにして欲しいと一生懸けん命めい頼たのんでみた。きちっとした服を作ろうとしたら邪じゃ魔まをして、だりゅりぇろを引っぱっていってこういうふうに、と言ったらなんとかわかってくれたみたいだ。それから、だりゅりぇろは顔もおもしろい。いつも何かおいしくないものでも食べているかのようにゆがんでいるのだ。右目が青で、左目は黒いところもおもしろい。髪の毛も、真っ白でふぁさふぁさしていておもしろい。何より、だりゅりぇろはミシーリャの話をすぐにわかってくれる。それに、今みたいに周りに誰だれもいないときは、抱だきついてもあまり嫌いやがらない。

「だりゅりぇろーたっこーたっこーぴゃーぴゃー」

「あ？　おい、てめぇ、アジアンはどうした。だっことかいってる場合かよ」

「たっこーぴんぴゅぴょりょーんあじゅりゃんにょー」

「どっちもかよ。二に兎とを追う者は一いつ兎とをも得ずってな──まぁ、いいけどよ」

「あじゅりゃんりょ？」

「わーったよ。アジアン、か。あの野郎は──何だろうな。わからねぇけどよ。やっぱカリスマみてぇのはあんじゃねぇのか。ここじゃあ強ぇってだけでも羽虫みてぇな糞くそ雑ざ魚こどもがワラワラよってきやがるけどな。そういうやつはウチにはほとんどいねぇ。なかにはとんでもねぇ、武ぶ闘とう派はのクランなら喉のどから手が出るような人材もいる。かと思えば、目糞ほども役に立たねぇ塵ゴミ屑クズもいやがるしな。ただ居場所を求めてここにすがるしかねぇやつもいれば、わざわざ好きこのんでこんな肥こえ溜だめ同然の掃はき溜めに居座る阿あ呆ほもいる。あの野郎、薄うす気き味み悪わるいぐらいやけにこぎれいなツラァしてやがるけどな。そのわりに薄うす汚ぎたねぇモノを拒きょ絶ぜつしねぇ。どうしようもなく無価値なモノにも平然と手をさしのべる。ニコリともしやがらねぇでな。変な野郎だ。周りは汚お物ぶつだらけで、目が痛むほどの悪あく臭しゅうと腐ふ臭しゅうで、やつの手もさんざん血で汚よごれてやがるはずなのに、やつ自身は一向に汚れる気配がねぇ。いつまでも冗じよう談だんみてぇにきれいに咲さいてやがる。そう──あいつは花なんだろうな。誰も彼もその花を眺ながめて、摘つんじまおうと手をのばしかけては引っこめ──って、何を言ってやがんだ、俺は。おい、ミシーリャ、今のは誰にも言うんじゃねぇぞ。ぺらぺら喋しやべりやがったら殺すからな。いいか──って」

　だりゅりぇろにくっついていると、あったかい。あったかくて、気持ちいい。

　気持ちよくて、気が遠くなってくる。

「……寝ねんじゃねぇよ、てめぇ……」

-Cherry/Clara-

「アジアンのことを知りたい──ですって？」

　チェリーはミケランジェロと同じクァラナド八丁目にある「スナック新世界」の経営者であり、昼ラン飯チタ時イムの一員でもある。髭ひげが濃こくて、それを少しでも隠かくすため厚あつ化げ粧しようをしているのだが、ブルドッグに似た顔がマシになるわけもなく、豹ひよう柄がらのワンピースも似合わないし、網あみタイツはやめて欲しいし、赤いハイヒールも滑こつ稽けいで、プラチナブロンド縦ロールのウィッグにいたっては冗談としか思えない。エルデンに掃いて捨てるほどいるドラッグクイーンの中でも、彼、いや、彼女というべきなのか、とにかくチェリーは最悪の部類に入る。不ふ愉ゆ快かいなほど醜みにくい。

「ええ。何かご存じでしたら、お教えいただけませんかしら」

「教えるも何も、アジアンのことならむしろあたいが知りたいくらいだよ。熟知したいよ」

「そうでしょうね。最初から期待はしておりませんでした」

「だったらなんでわざわざきたんだよ。うちはノンケはお断りなんだ。営業の邪魔だよ」

　本当に、見れば見るほど醜い。感情をあらわにすればするほど醜くなる。ただ、クララの仕事に美び醜しゆうは関係ない。じつは、アジアンのことはついでで、仕事の用があってきたのだ。

「意外と繁はん盛じようしてらっしゃいますわね。ですのに、なぜ返済が遅おくれてらっしゃるのかしら。もしかして、わたくしに喧けん嘩かを売ってらっしゃるの？　買わせていただきますわよ。高値で」

-Kay/Natsuko-

　面めん倒どうくさくなってn'ebulaに戻もどってきてみたのだが、オトミばあさんとカツヲと常連のじいさんしかいなかったので、四階に上がった。四階にある四つの部屋をぶち抜ぬいてつくった大部屋ホールは、昼ラン飯チタ時イムの暇ひま人じんやオトミばあさんが餌えさをやっている野の良ら猫ねこたちのたまり場になっている。きっと誰かいるだろうと思ってのぞいてみると、汗あせだくになって練習用の重そうな槌つちをぶんぶん振ふりまわしている若い女が一人いるだけだった。しかも、身につけているのはタンクトップとショーツのみだ。いつものことではあるが、呆あきれるしかない。

「……カイ、あんたさぁ。練習熱心なのはいーけどぉ、そーんなかっこでやるのはやっぱどーかと思うよぉ？　汗でヌレヌレスケスケエロエロじゃん。もしかして男誘さそってるわけぇ？」

「くだらないことを」

　カイはこっちを見もせずそう言っただけで、フッとかハッとか鋭するどい声を発しながら槌を振りつづけている。何が楽しいのか、いつもこんな調子だ。結構かわいい顔してんのになぁ。化粧とか髪かみとか服とかちゃんとしたらそれなりに男受けしそうじゃねぇ？　ナツコは基本的に美形の男が好きだが、女でも不細工よりはかわいいほうが好きだ。女として生まれたなら、やはりかわいくあるべきだし、カイを見ているともったいないと思う。カイならクァトロのハイウェストのワンピとか似合いそ。あれ欲しーけどぉ、ナツコには似合わねんだよなぁ。

「……いつまで見ているつもりだ」

「いーじゃん。ナツコの勝手でしょぉ？」

「邪じや魔まだ。用がないなら消えろ。それとも、粉ふん砕さいされたいか」

「されたいわけねぇーだろぉ？　あ、てゆーかさぁ、用はあるよぉ。あんたさぁ、アジアンが普ふ段だん何してるのかとか知ってたりしない？」

「あ、あ、アジアンが？」

　カイは槌を取り落として目を白黒させた。周しゆう章しよう狼ろう狽ばいしている。超ちようおもしろいんですけどぉ。

「あ、アジアンがな、何をしてるのかなんて、あ、あたしが知ってるわけがないだろう。知るか。あいつが何をしてようが、知ったことじゃない。あたしにはまったく関係ない」

「関係ないことないじゃーん」

「なななななんでだ！　お、おまお前な、わけがわからないことを言うと、粉砕するぞ！」

「だって頭領マスターでしょぉ？　あんただって昼ラン飯チタ時イムの一員なんだから、関係ありまくりじゃーん」

「……そう言われると、たしかにそうだな」

　カイはふと我に返ったように真顔になって、しばらく何か考えこんでいたが、やがてがっくりと肩かたを落として大きなため息をついた。

「──考えてみたら、あたしはアジアンのことを何も知らない。そういえば、もう何日も顔をあわせていない気がする。そんなものか。所しよ詮せん、あたしは仲間の一人にすぎないからな……」

　いや、そぉーんなマジで落ちこまれると、こっちも困るんですけどぉ……。

-Psychengren'Meiselch/Victoria-

「アジアンですか」

　ヨグ・フローヨ・メイドルフ・サイケングレンマイセルヒはいつも鉄てつ鎖さの憩いこい場ばあたりをぶらぶらしている。眼鏡めがねをかけていて、落ちついた雰ふん囲い気きで、いつも人好きのする笑えみを浮うかべているから、物もの怖おじしがちなヴィクトリアでもなんとか話しかけることができた。

「そうですね。彼はとても興味深い人間です。僕はいつもこうして人間たちを観察していますけれど、彼に匹ひつ敵てきするか凌りよう駕がするくらい興味を引かれる人間はそう多くありません。彼を一言で表すとするなら、特別、でしょうか。彼は混こん沌とんとしたいくつもの意思に引き裂さかれそうになりながら彼自身というひとつの精神のありようを保つためにあえて孤こ高こうを保つ選せん択たくをみずからの決断として絶えずしつづけているという点において非常に気高い人間であるということができると思います。僕は考えることがあります。彼はいったいどれほどの地じ獄ごくを見てきたのでしょう。もちろんこの地獄というのは比ひ喩ゆ的てきな意味の地獄ですが彼が目まのあたりにしてきた現実は少なくとも彼にとってはおそらく地獄そのものよりも遥はるかに厳しく恐おそろしく凄せい惨さんで絶望的なものだったのではないでしょうか。あ、そうそう、アジアンが日ひ頃ごろ何をしているのか知りたいというお話でしたね。プライバシーに関かかわる事こと柄がらですから、ただでお教えするわけにはゆきませんが──そうだ。この問題に答えることができたら教えてあげてもいいですよ」

-Mr.Mou/Victoria-

──答えられなかった。

サイケングレンマイセルヒが出した問題は、『地獄巡めぐりぶらり一人旅』を著あらわしたのは誰だれか、というものだった。ヴィクトリアもその書名は聞いたことがあった。有名な本だということも知っていた。考えればすぐに出てきそうだと最初は思った。ところが、三分経たっても五分経っても思い出せなかった。本当は、ここまで出かかっていたのだが、あまり時間をとらせては申し訳ないので、やむなく降参することにした。

決して意地悪な問題ではなかったと思う。答えられなかったヴィクトリアが悪いのだ。

サイケングレンマイセルヒと別れてとぼとぼ歩いていると、雑ざつ踏とうの中に知っている男の姿を見つけた。小こ柄がらだけれどがっちりしていて、迷めい彩さいの服を身につけ、異様に長い髪の毛を編んだり束ねたり首に巻いたりしている。かなり特とく徴ちよ

うがあるのですぐわかった。ミスター・毛モウだ。

　でも、毛モウとは一度も口をきいたことがない。なんだかとっつきにくいかんじの人でもある。迷っていると、不意に毛モウが足を止めてこっちを見た。ヴィクトリアに気づいたようだ。

　毛モウは恐ろしい上うわ目め遣づかいで不気味に唇くちびるをゆがめ、ニヤリと笑った。

　ものすごく怖こわかった。

　ヴィクトリアは思わず逃にげだしてしまった。

-Lykiel/Victoria-

　あれから日が暮れるまで街をうろつきまわった。たいしたあてはなかったのだが、それでもボダダグとシャマニとアンガルセンを見かけた。行き会ったとはいえない。本当に姿を見かけただけで、やはり声をかけることができなかったからだ。

　わたしはどうしてこんなに内気なんだろう。ナツコちゃんはあんなに積極的なのに。わたしは姉なのに。ナツコちゃんを守るべき立場なのに。しっかりしないといけないのに。

　小さいころから、人ひと並なみ外れて背が高いことがいやでいやで仕方なかった。同どう年ねん輩ぱいどころか年上の男の子たちよりもずっと大きい自分が恥はずかしかった。そのことでからかわれたり、いじめられたりもした。妹はよく「自信持ちなってぇ。姉さんは姉さんでいいとこいっぱいあるし超かっこいーしかわいーんだから」と言ってくれるけれど、自信なんて持ちようもなかった。他人と目をあわせることすら怖かった。妹が前まえ髪がみを短くカットしようとするたびに、それだけはやめてと頼たのむのは、せめて前髪で顔を隠かくさないと人前に出られないような気がするからだ。今も、すれ違ちがう人たちの視線が痛くて恐ろしくてたまらない。たまに、でっけぇー、とか、うわでかっ、とか、そんな声が耳に入ることがある。まったくそのとおりだと思うから、できるだけ身を縮めて恥じ入るしかない。反射的に謝ってしまいたくなるときもある。大きくてごめんなさい。邪魔ですよね。ここにいて息をし

ていてごめんなさい。

　ただ、やるべきことはちゃんとやらないといけない。アジアンの行動についての情報を集める。なぜそんなことをしなければならないのか、いまいちよく理解できていないけれど、クララがそう決めて、他ほかの皆みなも賛成し、ヴィクトリアも流れに身を任せるようにうなずいてしまった。経けい緯いはどうあれ、やると言ってしまった以上はしっかり役目を果たさないといけない。

　そうはいっても、もうどうすればいいのかわからなかった。ヴィクトリアは背中を丸めてどこへ向かうでもなく歩いた。妹によく「姉さんさぁ、そぉーんな下ばっか向いてちゃダメだってぇ」と叱しかられるのだが、どうしてもうつむいてしまい、ほとんど足あし許もとばかり見ていた。だから、意識したわけではない。気がつくとn'ebulaの近くにいて、自分でも少し驚おどろいた。

　見れば、一階だけでなく、四階の大部屋ホールにも明かりがついている。誰かいるのだ。話を聞けるかもしれない、けれど──いるのは誰だろう。ヴィクトリアが話しかけられそうな相手だろうか。いや、そもそも、誰なら気安く話しかけられるというのだろう。そんな相手がどれだけいるのか。いない。ほとんどいないのだ。

　怪け我がをした仲間に医術式を施ほどこすときは、それほど気き後おくれせずにいられるのに。これでも途と中ちゆうまでとはいえ医術士の修しゆ行ぎようをした身なので、負傷した仲間に医術式を施すのは自分の役目だと思っている。深手を負った仲間が目の前にいれば、背がどうしたとか、視線がどうだとか言っていられない。失敗しないだろうか。痛い思いをさせてしまわないだろうか。そうした恐きよう怖ふ感かんは当然あるけれど、手当てしてあげられないことのほうがもっと怖い。目の前で親しい人が死ぬのはいやだ。もう見たくない。そのために妹と一いつ緒しよに医術士になろうとしたのだ。

　でも、わたしよりナツコちゃんのほうが医術式の才能がある。ナツコちゃんは少しだけだらしないけど、器用だし、頭もいいし、集中力がある。それだけじゃなくて、ナツコちゃんは誰とでもすぐに仲よしになれる。喧けん嘩かもするけど、それは自分の意見をはっきりと言えるからだ。ぜんぜん似ていない姉し妹まいだとよく言われる。本当に、似ていない。ナツコちゃんは何でもできるし、わたしみたいに無む駄だにでっかくないし、小さくてかわいいし、しっかりしているし、わたしのことをいつも気にかけてくれて、妹なの

にまるでお姉さんみたいだ。

　膝ひざが震ふるえだした。身体からだに力が入らない。無理だ。たとえ相手が誰でも、今の自分では話しかけるなんてできっこない。立っているだけでやっとだ。

　ヴィクトリアはとにかくどこかに座りたくて、n'ebulaの裏手にある空き地へと向かった。空き地といっても半ば廃はい材ざいに埋うもれているのだが、あそこには野の良ら猫ねこがたくさんいる。犬みたいに気をつかわなくていいので、猫は好きだ。そうだ。猫を見にいこう。空き地に足を踏ふみ入れかけたヴィクトリアは、しかし、慌あわてて回れ右をして近くの建物の陰かげに身を隠した。

　誰かいる。高く積みあげられた廃材の上だ。暗くてよく見えないが、かなり大おお柄がらで━おそらく、ヴィクトリアよりも背が高い。すごく立派な体格だ。しかも、顔に仮面をかぶって、上半身裸はだかで、大きな剣けんを両手に一本ずつ持って片足立ちをしている。ゆっくりと、一見しただけでは止まっているようにしか見えない速度で剣を動かしているようだ。

　その手がぴたりと止まった。ヴィクトリアの心臓も止まりかけた。何者だ、と誰すい何かされる前に悲鳴がもれて、身体が動いていた。ヴィクトリアはまた逃げだしてしまった。

-Azian/Victoria-

　最低だ。

　あれはリキエルだった。昼ラン飯チタ時イムの仲間だ。わかっていた。あたりまえだ。あんな恰かつ好こうをしている人が他にいるはずがない。きっと、一人でトレーニングをしていたのだろう。何も逃にげることはなかった。見た目はアレだが、リキエルは決して怖こわい人ではない。むしろ、昼ラン飯チタ時イムの中ではかなりまともというか、常識的な人だ。風ふう貌ぼうは、正直、ちょっと非常識だけれど。でも、まるで変態に出くわしたときのように逃げるなんて失礼すぎる。あんまりだ。最低だ。

　走りながら、泣きたくなってきた。ほとんど泣きだす寸前だっ

た。

　前に出そうとした左足が、どういうわけか右足に引っかかった。

「□□あ゙ぐっ」

　ヴィクトリアは棒が倒たおれるように転んだ。

　わたし、どうなったんだろう。そんなことを思ったのが、転んでから数秒後か、数十秒後か、よくわからないが、いずれにしても間が抜ぬけている。だって、こんなに顔が痛いのに。顎あごとか、鼻とか。膝や肘ひじも痛い。ほとんど受け身をとることもできず、思いきり地面に打ったらしい。動けない。わたし、死ぬかも。いっそのこと、それでもいいかも……。

「大だい丈じよう夫ぶかい」

　即そく座ざに上半身を起こした。そのあとで、この声は、と思い、そのときにはもう、屈かがみこんでこちらを見ている彼の姿が目に映っていた。

「……あ、あ、あ、あじ、アジアン……」

「大丈夫じゃなさそうだネ。血が出ている」

「ち、ち、血……？　あー」

　ヴィクトリアは大おお慌あわてで顔中をさわってみた。血。たしかに出血している。どうしよう。どうにかしないと。気ばかり急せいて頭は働かず、袖そでででごしごし顔面をぬぐってみたが、何か間ま違ちがっているように思えてならない。でも、痛いのか痛くないのかもよくわからないし、とにかくアジアンを心配させたくないし、これくらいべつに平気なので、地面にぺたんこ座りをしたまま、とりあえず、にっこり笑ってみた。すぐにここで笑うのはおかしいと考えなおして、両手を握にぎりしめ、自分は大丈夫だという

ことをポーズで示してみた。

　アジアンはずっと無表情だった。

　半永久灯の弱い光に照らされているアジアンの顔は、目を疑うほどきれいだ。

　あのきめが細かすぎる肌はだは本当に人のものなのだろうか。これほど乱れのない整った目鼻立ちがこの世に存在するなんて信じられない。骨格自体が美しいのだ。睫まつ毛げが長い。そして、何よりも薄うす青あお色の瞳ひとみ。冬を迎むかえた森の奥で澄すみきった泉が凍いてつく寸前、その一いつ瞬しゅんが永遠となって形をなしたかのような瞳だ。遠くて、さみしくて、透とう明めいで、つめたくて──あたためてあげたくなる。届かないと知っていても、手をのばして、さわりたくて、たまらなくなる。

「無理しなくていいヨ」

　アジアンはヴィクトリアに手を貸して立たせてくれた。とはいえ、あっという間のことで、何をどうされたのかよくわからない。どうも腕うでのあたりをつかまれたらしい。正直、その程度の実感しかなくて、なんだかとても残念だった。立ちあがると、自分のほうがずっと背が高くて、それも少しだけせつない。女に見下ろされるなんて、きっといやだろうと思う。わたしがむやみにでっかいから。アジアンは平然としているというか、相変わらず無表情だけれど。

「服が汚よごれてしまったネ。ナツコが作ってくれているんだろう」

「……あ、え、と、そ、そう……な、ナツコちゃんは、器用だから……」

「洗えば落ちるのかな」

「ど、どう……かな。や、やってみないと……あ、ナツコちゃんは、シミ抜きとかも上手だから、やり方を教えてもらえば、たぶん、なんとか……」

「落ちるといいネ」

　ヴィクトリアがしゃっくりでもするように「う、うん」とうなず

くと、アジアンは一度踵きびすを返したが、すぐに振ふり向いて細い顎のあたりに指をあててみせた。

「ここ、早く治したほうがいいヨ。女性の顔が傷ついているのは少々見るに忍しのびない」

「……あっ！　う、うん……」

　言われるまで、医術式が使えることをすっかり忘れていた。このまましばらく忘れていようと思う。少なくとも、去りゆくアジアンの後ろ姿が見えなくなるまでは。

6

　ヴィクトリアは妹と一いつ緒しよにn'ebulaからほど近い集合住宅の一室を借りている。建物の持ち主はかつてユニオン・カバナの有名な賭博場カジノのオーナーだったという昼ラン飯チタ時イムのリー・ブラックだ。ブラックが財力にものを言わせて厳重な警備態勢を敷しかせているため、女二人でも安心して暮らせる素す敵てきな住まいなのだが、本当はそのぶん家賃も馬ば鹿か高だかい。姉し妹まいが格安で部屋を借りられているのは、同じクランの仲間だから──ではなく、妹のおかげだ。

　妹がどういう手を使ったのかは知らない。いや、なんとなく想像はつくけれど、とにかく、交こう渉しようの結果、妹は日当たりのいい三階の３ＬＤＫを一巡じゆん月げつたったの二万ダラーまで値切ってしまった。普ふ通つうなら貸し宿の狭せまい部屋を借りるのがやっとの金額だ。そんな値段でこの部屋を貸してもらっているなんて、他ほかの人には口が裂さけても言えない。知れ渡わたったら、誰だれかの妬ねたみを買うかもしれないし、また妹に悪い評判が立つかもしれない。今さらという気もしないではないけれど、やはり姉として、頼たよりない姉ではあるものの、妹のことが心配だ。誤解されやすくても、誤解されても仕方ないところがあっても、この先の人生を考えれば直したほうがいいと思う部分が多々あっても、素直で、本当はやさしくて、かわいらしい、姉思いのいい妹なのだ。

「──ちょっ……とぉ、姉さん！　どーしたのよ服ぅ！　汚れてるじゃんっ！」

　部屋に戻もどると妹が駆かけよってきた。服を汚したことを怒おこられたのかと思ったら、違った。

「何これぇ、血じゃん、血ぃ！　怪け我がしたのぉ？　どこ？　もう治した？　ちゃんと治したんでしょぉーね？　ダメ、ナツコがもっかい診みるから！　どこ？　ここ？　顔？　きゃー何してんのよ姉さんったらバッカじゃないの顔とか怪我すんなよ女は顔が命でしょ不注意なんだからもーいっつも気をつけれってゆってんのに何やってんのさぁーあー座ってそこに、はいっ」

　ヴィクトリアは正座をして妹に医術式を施ほどこしてもらいながら幸せを噛かみしめていた。両親を馬車の事故で亡くして以来、いつも心細かった。医術士を志してからも、要領のいい妹とは違い、失敗と挫ざ折せつの連続で、何度自分自身に絶望したことだろう。そのたびに元気づけてくれたのは妹だった。妹だけだった。一人っ子じゃなくて本当によかった。一人きりだったら、きっと生きてはこられなかった。妹に生を授けてくれた両親に感謝だ。妹にはそれ以上の感謝を。でも、だからこそ、不器用で臆おく病びようで何もできない自分が情けなくてたまらない。

「──あ、あのね、ナツコちゃん」

「あぁ？　何？　待って。もーすぐ視み終おわるから」

「う、うん……」

　ほら、またこのざまだ。せっかく妹が精神を集中させて内エンド視スコー系プスの医術式で傷がちゃんと治っているか確かく認にんしてくれているのに、邪じや魔まをして。

　ヴィクトリアは施せ式しきが終わるのを待ってから、ふたたび切りだした。

「あ、あの……ナツコちゃん、ごめんね。わたし、アジアンのこと、調べるの──ぜんぜんできなくて。うまく人に話しかけられなくて。何もわからなくて……ごめんなさい」

「なぁーんだ、そんなことぉ？」

　妹は呆あつ気けなく笑って許してくれた。

「いいってべつにぃ。最初っから姉さんにはそぉーゆーの期待してないしぃ」

「……そ、そう。それもちょっと、あれだけど……」

「いや、人にはさぁ。できることとできないことがあるでしょぉ？　姉さんには姉さんの得意なことがあるんだから、気にしなくていいって」

「う、うん……ある、のかな。あ、で、でもね、さっき、アジアンに会ったよ」

「──えええぇっ……！　ど、どこでぇ！」

「えと……n'ebulaの、近くで」

「うっそマジィ？　何それぇ、いーなぁ。何か話したぁ？」

「は、話は、べつに……転んで、起こしてもらっただけで」

「起こしてもらったぁ？　アジアンにぃ？　姉さんアジアンにさわられたわけぇ？」

「ちょ、ちょっとだけ、だよ。ちょっとだけ。ほ、本当に、ちょっとで──」

「でもさぁ、すっげぇーラッキーじゃん。アジアンってさぁ、さわらしてくんないよ？　やなのかなぁ。他人にさわられんの。いるよねぇ、たまーにそぉーゆー人」

「いるの……かな。わたしは、わからないけど……」

「けどさぁ、アジアンに会ったんなら、そのとき直接きけばよかったよねぇ？」

「え？　な、何を？」

「何をじゃねーよぉ。アジアンがいつも何してんのかとか。それ調べよぉって話でしょぉ？」

「……あ……そ、そうだね。ごめんなさい、わたし、忘れて

て……」

　馬ば鹿かだ。なんて馬鹿なんだろう。妹の言うとおりだ。他の人に尋たずねるよりも、アジアンにきいたほうが手っ取り早いに決まっている。クララが尾び行こうから情報収集に方針を切りかえた際も、チャンスがあればアジアン本人からもそれとなく聞きだしてみようという話が出ていた。忘れていた。それも忘れていた。忘れすぎだ。頭が悪いからだ。身体からだだけ大きくて脳みそはちっとも発達していない。まったくどうしようもない。なんてひどいダメ姉だろう。

「──ちょっ、な、何？　い、いきなり泣かないでよ。なんか、ナツコが姉さんのこといじめてるみたいじゃん」

「ごめんね……ごめんなさい……わたし、馬鹿で……」

「いや、だから泣くなって。泣くような話してなかったでしょぉ？」

「……わたしが、間ま抜ぬけだから……」

「誰もそんなこと言ってないじゃん。何それ、わけわかんねーよ。やめろって」

「……わたしの、せいで……」

「違ちがうでしょぉ！」

　妹が急に立ちあがって声を荒あららげた。ヴィクトリアはむしろ呆ぼう然ぜんとして妹を見た。

「ほんとはそんなこと思ってないくせに！　やめろよ！　あてつけがましいんだよ！　泣けばすむと思ってさぁ、ガキじゃあるまいし、いっつもいっつも！　てめぇ何歳いくつだよ！」

「……な、ナツコ、ちゃん……」

「違うだろぉ！　姉さんのせいじゃない！　あたしだよ！　事故のときだって、あたしがぎゃーぎゃー泣きわめいてたから、姉さんは助けを呼びに行けなかった！　あたしが騒さわいでなけりゃあ、姉さんが誰だれか呼んできて、パパもママも助かったかもしれないのに！　修しゆ行ぎようのときだってそうだよ！　あたしがもめごと

ばっかり起こして、腹いせに誰とでも寝ねまくったから、破門されちゃってさ！　姉さんは残ってもよかったのに、あたしについてきて！　あたしはいいよ、どうせ向いてないから！　医術士って柄がらじゃないし！　でも、姉さんはちゃんとした医術士になりたかったでしょ！　なれたはずでしょ！　あたしのせいでしょ！　何もかもさぁ！　姉さんだってそう思ってるんでしょ！　だって事実だもん！」

「……ち、ちが……そ、そんなこと、わたしは……」

「思ってないわけない！　だ、だから！　あたし、あたしは……姉さんに、悪くて──」

　ああ。なんてことだろう。ナツコちゃんが泣いている。あれはいつもの嘘うそ泣きじゃない。本当に泣いている。パパとママが死んでしまったとき以来だ。

「だから、姉さんにやさしくしないと、あたし──」

　これ以上、見ていられなかった。だって、ナツコちゃんは泣いているんじゃない。わたしが泣かせているんだ。ナツコちゃんはただやさしいだけの子じゃなかった。いつも罪の意識に押しつぶされそうになりながら、必死にわたしを気づかってくれていたんだ。つらかったんだ。苦しかったんだ。ぜんぶわたしのせいだ。そう思うと、身体が勝手に動いていた。

7

「──やっべぇー……超ちようやべぇーよぉ、どぉーしよ、うっわぁーマジやっべぇー……」

　どうしてあんなことを言ってしまったのか、自分でもわからない。あれが本心なのかどうか。そのあたりも微び妙みようだ。両親の死や破門について、自分に責任があると思っていることは本当だが、それとは関かかわりなく姉は大事だし、心配だし、そばにいて欲しいし、何かしてあげたい。これはさすがに誰にも言ったことがないけれど、姉と男とどっちをとるか、という選せん択たくを迫せまられたら、ナツコは迷わず姉をとる。星の数ほどいる男と違っ

て、ナツコの姉はヴィクトリアただ一人なのだ。それなのに、なんであんなことを。

「なるほど。お話は承うけたまわりましたわ」

　クララはナツコと同じ集合住宅の七階に住んでいる。ナツコはいろいろなサービスと引き換かえに家賃を割り引きしてもらっているが、高利ローン貸しシヤークララは目玉が飛びでるような正規の料金で借りているようだ。部屋も、間取りは同じだけれど広さは段違いで、この広大なスペースをいったい何に使っているのかと思えば、高そうな家具だの立派な絵画だの彫ちよう刻こくだの難しそうな書物だのでけっこう無む駄だなく占しめられている。さすが貴族の出で金持ちが板についている人間は違う。果たして、こんな女に相談してよかったのかどうか。でも、近くに住んでいてわりと気軽に声をかけられる相手といえば、まずこの女だった。

「──で、ナツコさん、あなた、部屋を飛びだしてゆかれたヴィクトリアさんの行く先に何か心当たりはありませんの」

「いや、それがさぁ……考えてみたら、n'ebulaくらいしかないんだよねぇ。だけどぉ、いっくら何でもn'ebulaはないでしょぉ。そりゃあとで行ってみるけどぉ。だいたい、姉さん、あーゆう人だから、外出て歩くのとかあんまり好きじゃないしぃ。買い物とかはだいたいナツコが連れてくしさぁ。友だちとかも、そんないないっぽいしぃ……」

「たしかに、ヴィクトリアさんがナツコさん以外のどなたかと歩いてらっしゃるところはお見受けしたことがありませんわね」

「そーなんだよねぇ。やっべぇーよなぁ。かえってさぁ、仲いい友だちでもいればぁ、こぉーゆーとき安心じゃん？　愚ぐ痴ちとか聞いてもらってさぁ。そしたら落ちついたりもするしぃ。ナツコ的にはちょっとむかつくけどぉ、姉さんにも必要だよねぇ、やっぱ。いつまでもナツコだけってのはよくねぇーよなぁ。わかってんだけどさぁ……」

「たったお一人の姉上様ですものね」

「……うん。そぉーなんだよねぇ。そぉーなのよぉ。なんだろ、独どく占せん欲よくぅ？　みたいなかんじのがたぶんあってさぁ……アジアンと会ったって、姉さんが話したときの顔が……何？　女の

顔ぉ？　てゆーかぁ、恋こいする乙おと女めみたいな。そんな顔つきでさぁ。あんま見たことなくて。そぉーゆーの疎うといから、あの人。ちょっと、ね……イラッときたかも。バカみてぇーだよ、ナツコ。姉さんじゃなくてアジアンに嫉しつ妬としたんだよ。はぁ……やべぇーよもぉー……」

　ナツコは頭を抱かかえて高級そうなテーブルに突つっ伏ぷした。もちろん姉のことはものすごく心配だけれど、クララ相手に本音トークをしてしまっているこの状じよう況きようもかなりショックだ。ただ、おかげで見えてきたこともある。姉は昔から引っ込み思案で押しに弱くて流されやすい性格で、それを自分でもわかっているから、あまり他人とは接したがらない。でも、いつまでもそれではいけないだろうとナツコは思っていた。思っていたつもりだが、本当は心のどこかで姉にはそのままでいて欲しいと望んでいたのかもしれない。姉の世話を焼いてあげるのはいつも自分で、誰よりも姉を大切にしてあげられるのは自分で、いつか姉にふさわしい最高の幸せを妹の自分が見つけてあげよう。自分の中にそんな考えがなかったとはいえない。というか、確実にあったと思う。

　姉は繊せん細さいだし、気がやさしくて人情の機き微びに敏びん感かんだから、ナツコのそうした願いを感じとって、妹の望む姉でいようとしたのではないか。姉自身は気づいていなくても、無意識のうちに妹の願望にこたえようとしていたのかもしれない。

　つまり、ナツコの押しつけがましい勝手な思いが、姉を縛しばりつけて、妹しか頼たよるものがいない状況に追いやっていた。

　それが、とんでもなくひとりよがりな思いだったとしても、ナツコなりの好意にもとづいていたのだとしたら、姉は今までのように微笑ほほえんで我が慢まんして許してくれるだろう。

　けれど、もしそうでなかったとしたら？

　罪悪感から逃のがれるためにそうしていたのだとしたら？

　そうじゃないのに。

　口からでまかせとまでは言わないけれど、あれはやはり本心からは遠い言葉だった。姉を傷つけようとしてわざとあんな言い方をしたのだ。アジアンのことを話しながら、あんな顔をしたりするから。それに、あれっぽっちのことで泣きだしたりして、ちょっと苛

いら々いらして。まあ、少しくらい言いすぎても、姉なら怒おこらない。怒ったとしても、最後には許してくれる。そんな甘えもたぶんあった。仲がいいといっても、喧けん嘩かは何度もしたことがある。どうせすぐに収まるのだ。いくらナツコのほうが悪くても、姉が先に折れる。そうすればナツコも気がすむ。今回だって同じだと思っていたのに、こんなことになるなんて。まさか、出てゆくなんて。そんなことはかつて一度もなかったので、追いかけるという当然のことさえとっさには思い浮うかばなかった。姉が律りち儀ぎに閉めていったドアを、どれくらいの時間、見つめていただろう。そのあと、パニックになった。今もまだ混乱している。おかげで、気づかわしげな態度を崩くずさず、それでいて落ち着きはらっているクララがやけに頼たのもしい。何こいつ。こんないいヤツだったっけ。友だちになってやってもいいかも。あぁーナツコってばすっげぇー血迷ってる……。

「ともかく」

　もはや友情すら感じはじめている高利貸しの金持ち女が豊かな胸の前で両手をあわせた。

「ヴィクトリアさんを捜さがしましょう。昼ラン飯チタ時イムの方々だけでなく、わたくしの個人的なドレ──いえ、お客様でお手て隙すきな方にも声をかけて手伝っていただけるよう手配いたします。さあ、時は金なり──もとい、善は急げですわ。ナツコさん、さっそく行動いたしましょう」

8

　オトミさんは結ゆいあげた白はく髪はつにいつも瑠る璃り色いろのかんざしをさしている。いつだったか、きれいなかんざしですね、と勇気を出して言ってみたら、もうずいぶん前に亡なくなった旦だん那なさんから贈おくられたもので、まあ、形見みたいなものさね、と教えてくれた。

「……しかし、なんだか大変なことになってきちまったみたいだねえ」

「は、はい……ご、ごめんなさい……」

「いいけどね。べつにあたしが困ることじゃなし」

　オトミさんは首を曲げてポキリと骨を鳴らし、わしづかみにした大きな酒さか瓶びんから無色透とう明めいのお酒を茶ちゃ碗わんについだ。さっきからすごいペースで飲んでいるけれど、大だい丈じょう夫ぶなのだろうか。褐かつ色しょくの肌はだには張りがあるし、動作も機き敏びんだし、いたって健康そうでもあるが、七十歳は間ま違ちがいなく超こえていると思う。何かの拍ひょう子しでいきなりがくんときてもおかしくない年ねん齢れいだ。

　もっとも、オトミさんに向かって分別顔で注意をする度胸なんてヴィクトリアにはない。この気持ちの弱さが、自分だけでなく、たぶん妹をも不幸にしているとわかっているのに、どうしても変わることができない。

　ダメな姉だ。

　人としてダメだ。

「……あ、あの、わたしも……一いっ杯ぱい、いただけませんか」

「あげないよ」

「……う……そ、そうですか、ごめんなさい……」

「冗じょう談だんさね。あたしがそんなケチくさいババアに見えるかい」

「い、いえ……そ、そんなことは……」

「ほら」

　オトミさんは棚たなから別の茶碗をとりだして、それにお酒をそそいでくれた。調理台を脇わきに、オトミさんと差し向かいになって背もたれのない丸椅い子すに座り、二人でお酒を飲むなんておかしな気分だ。まあ、ときおり従業員のカツヲがのれんをくぐって出入りするし、のれんの向こうはn'ebulaのカウンターで、つまり、何人も、いや、それ以上のお客が席を埋うめているホールと完全に隔へだてられているわけではないから、二人きりとはとてもいえない状況なのだが。

「あ、ありがとうございます」

　とくに耳を澄すまさなくても、声が聞こえてくる。

　どれも聞き覚えのある声、声、声だ。

　ヴィクトリアはきつく目をつぶって、両手でつつみこむように持った茶碗をぐいっと呷あおり、喉のどの奥へと一気にお酒を流しこんだ。

　目を開けた瞬しゅん間かん、何もかもが二重に見えた。

　すぐもとに戻もどったので、こんなものかと思った。

「……意外といける口なんだね。もう一杯いくかい」

「はい、ください。是ぜ非ひ」

「だ、大丈夫だろうね。ちょっと変だよ、あんた」

「平気です。初めて飲みましたけど、お酒っておいしいですね」

「初めてだって？」

「嘘うそです。本当はちょっとだけ飲んだことがあります。ちょっとだけですけど。こんなにたくさん飲んだのはこれが初めてです」

「どうも口調が変わっちまってるみたいだけど……」

「気のせいですよ」

「そ、そうかね」

　オトミさんはおそるおそるといった手つきでヴィクトリアの茶碗に酒をついだ。一杯目よりちょっと少ないように感じたが、さっさと飲み干して三杯目をもらえばいい。ヴィクトリアはまた一口で飲んでしまった。

「もう一杯お願いします」

「……いいけどさ。もし倒たおれちまったら、カツヲに介かい抱ほうさせるからね。あいつもああ見えて若い男だし、何か悪さされても、あたしゃ責任持たないよ」

「大丈夫ですよ。そういうときは、ナツコちゃんが──」

　ダメだ。もうダメなのに。

　わたし、まだナツコちゃんに頼たよろうとしている。骨の髄ずいまで頼りきって生きてきて、そのせいでナツコちゃんをさんざん苦しめてきたのに、まだ甘ったれた根こん性じようを捨て去ることができない。どれだけダメな姉なんだろう。どれほどダメなら気がすむのだろう。

　突とつ然ぜん、目の前がぐちゃぐちゃになった。

「……な、泣き上じよう戸ごかい、あんた」

「うう、な、ナツコ、ちゃん、う、う、ううう」

「知ったこっちゃあないけどね。あんまり大声出して泣いたら聞こえるよ。外に」

「わ、か、ってる、けど、う、うう、ううう」

「やれやれ。つきあいきれないねえ」

「も、も、もう、一杯、う、うう、ううう」

「……そんなになってまだ飲む気かい」

「こ、これ、が、うう、の、飲まない、で、ううう、い、いられ、ますか！」

「今度は怒おこり上戸ときた。酒乱の気があるね、あんた」

「い、いいから！」

「はいはい。まったく、そんなに飲みたきゃ自分でつぎゃあいいのにさ」

「うう、さ、酒を、て、手て酌じやくで、うう、の、飲めますか！」

「わかったよ。わかったから」

「さあ！　も、もう一杯！」

　ヴィクトリアは三杯目を舐なめるようにちびちび飲みながら、あふれだす涙なみだをこらえることができなかった。

　ナツコちゃん。どうしよう。ああ、ナツコちゃん。わたし、どうしたらいい？

　どうしようもない。

　思わず部屋を飛びだしてしまってから、はたと気づいた。

　わたしには行くところがない。どこに行ったらいいのかさっぱりわからない。

　結局、n'ebulaくらいしかなかった。もう閉店間ま際ぎわでお客さんはいなかったものの、それでもみっともないからと厨ちゆう房ぼうに入れてくれたオトミさんに、つっかえながらもどうにか事情を説明した。その少しあとだった。昼ラン飯チタ時イムの人たちが続々とn'ebulaに集まってきては出てゆき、また戻ってきた。カツヲが言うには、昼ラン飯チタ時イム以外の人も交じっているようだけれど、とにかく数人どころではなく、二十人、もしかしたら三十人以上かもしれない、そんな大勢がこぞって何をしているのかといえば、ヴィクトリアの捜そう索さくだった。ヴィクトリア自身が、のれんの脇で聞き耳を立てて、はっきりと聞いたのだ。あれは間ま違ちがいなくクララの声だった。

「──ヴィクトリアさんの性格を考えますと、ご自分ではお帰りになることができず、途と方ほうに暮れられたあげく、早まった行動をおとりになるという可能性も捨てきれません。事は一刻を争います。まずは身み柄がらの確保、あとのことは二の次として、とにかく最悪の事態をさけるために、各自全身全ぜん霊れいを捧ささげて最善をつくしてください。懸かかっているのは仲間の命です。よろしいですわね！」

　その後も、聞き知った声が「いなかった」とか「見つからなかった、そっちは」とか「いったいどこにいるのか」とか「そんなに遠くまで行っていないはずだが……」とか「やばいんじゃないか」とか「縁えん起ぎでもないこと言うな！」とか、もうヴィクトリアとしては聞いているだけで苦しくて、出てゆこうと何度も思ったのだが、皆みながどういう反応を示すか、考えるだけで恐おそろしくて足がすくんだ。ぐずぐずしているうちに、逆方向に腹がすわった。とにかく、情勢が落ちつくまでここでじっとしている。少し時間が

たってから、誰だれか適当な相手をつかまえてわけを話す。いや、本当はそこまで考えていない。先送りにしようしているだけだ。振ふり返れば、ずっとそうだった。いつだって、自分が何もできずおろおろしているうちに、妹がなんとかしてくれた。それに慣れていた。それでいいとさえ思っていた。いつまでもそうしていられるのだと、何の疑いもなく信じていた。

　姉し妹まいとはいえ、別々の人間なのに。

　いつまでも、永遠に、ナツコちゃんと一いつ緒しよにいられるわけじゃないのに。

　胸が張り裂さけてしまいそうだ。

　どんな怪け我がよりも痛い。

　痛くて死んじゃいそうだ。

「──う、うう、も、もう一いつ杯ぱい！」

「ま、まだ飲むつもりかい。よしといたほうがいいんじゃないのかね。このへんでさ」

「飲ばだいどぉ……飲ばだいどぉ、む、むでが、いだぐでえ、ううう……」

「しょうがないねえ。これで最後だよ。ババアと約束しな。いいね」

「ひっく」

　うん、と答えたつもりが、しゃっくりになってしまった。

　ともあれ、四杯目のお酒を確保することができた。この調子で酔よいつぶれるまで飲んでいられたら、いっそ楽かもしれない。飲んで、酔って、へべれけになって、寝ねてしまえば、痛みも涙もぜんぶどうでもよくなってしまいそうだ。

　ヴィクトリアはお酒で満たされている茶ちや碗わんをじっと見つめた。

　この一杯で泥でい酔すいできるだろうか。

　もうかなり酔っているような気もするけれど。

　一いつ瞬しゅんで醒さめてしまった。

「──うっせぇーんだよ！」

　思わず、茶碗を取り落としかけた。

　顔を上げると、オトミさんと目があった。

「何ぃ？　放ほっとけばそのうち帰ってくるだぁ？　ふっざけんじゃねぇーっつーの！　人の気も知らねぇーでよぉ！　言ってんじゃねぇーよ、ヘタな気休めをよぉ！　あたしの姉さんなんだ！　あたしだけの姉さんなんだ！　放っとけるかよぉ！　放っとけるわけねぇーだろぉ！　どうすりゃいーんだよぉ！　どこ行ったんだよぉ！　返せよぉ！　帰ってきてよぉ！　ナツコのこと一人にしないでよぉ！　どーなってんだよぉ！　もぉーこんなのやだよぉ……！」

　叫さけび声だった。絶ぜつ叫きようといってもいいくらいだった。よく大声を出す子ではあるけれど、こんなにまで声を荒あららげることはめったにない。

　オトミさんが肩かたをすくめて苦笑いらしきものを浮うかべてみせた。

　戻もどりたい、今すぐ出ていって、ナツコちゃんに謝りたい、と強く思った。

「──あたしもっかい行く！　あぁ？　わかんねぇーよ！　どこにいるかなんてわかるわけねぇーだろぉ！　わかってたらこんな苦労してねぇーっつーのぉ！　でも、黙だまってたってしゃーねぇーだろーがよぉ！　ここでダベってて何かいーことあんのかよぉ！」

　ご、ごめんなさい、ナツコちゃん。

　わたし──ここにいるの。ナツコちゃんのすぐそばに。

「だからぁ！　っせぇっつてんだろぉ……！」

　がちゃあんとコップか皿か何かが割れる音がした。ナツコちゃんが誰かを突つき飛ばしたらしい。男の人の声も聞こえる。低い声

だ。自信はないけれど、リー・ブラックかもしれない。だ、ダメだよ、ナツコちゃん、男の人相手に乱暴したら。危ないよ。わ、わたしのせいだけど。

「てめぇーらもなぁ、もっとキビキビ捜さがせよぉ！　何ぼけっとしてんだよぉ！　姉さんに何かあったら、てめぇーら全員チ●ポ引きちぎってやっからなぁ……！」

　そ、それはいくらなんでも言いすぎだよ、ナツコちゃん。しかも、下品だよ……。

　果たして、ヴィクトリアの心配は的中した。

　妹に反論する怒ど鳴なり声が鳴り響ひびき、妹を非難する怒ど号ごうが飛び交かいはじめたのだ。

「……勇ましい妹だねえ。あたしゃ嫌きらいじゃないけどさ、ああいう威い勢せいのいい娘むすめは」

　そんなことを言いながらも、オトミさんは半ば呆あきれ顔だ。

　しかし、もちろん、ヴィクトリアとしては悠ゆう長ちようように呆れてなんかいられない。妹は気が強いだけで、身体からだは小さいし体力も平均以下だ。いつもはそのあたりをちゃんとわきまえていて、適当なところで自制するのだが、今は完全にタガが外れている。「さわんなボケッ！」とか「やめろっつってんだろ！」とか「いだっ！　何すんだよ！」とか、ナツコちゃん、それ、無理だよ、男の人相手にやりあって勝ち目なんかあるわけないよ、怪我しちゃうよ、どうしよう、どうしようもこうしようもない、出ていかないと、今すぐ出ていって止めないと、ナツコちゃんを、みんなを止めないと──そうしたいし、そうしようと思うのだけれど、全身がガタガタ震ふるえて立ちあがることさえできないし、顔は勝手にうつむいてしまう。椅い子すに腰こしかけて、茶碗を落とさないように持っているだけで精一杯だ。いや、そんなことに命を賭かけてどうする。もっと建設的なことに全精力をそそがないと。わかっている。わかっているのだ。

　けれど、身体が動いてくれないのだ。

　まるで腰が抜ぬけてしまったかのようだ。あるいは、本当に抜けているのかもしれない。

お酒のせいだ。だって、こんなにお酒を飲んだのは初めてなのだ。酔いは醒めてなんかいない。醒めたような気がしただけだ。その証しよう拠こに、まだふらふらしている。頭もぐらぐらする。気持ち悪い。吐はきそう。もう限界かも。ごめん、ナツコちゃん。わたし、ダメなお姉さんだね。ごめんね。ヴィクトリアはしゃくりあげながら、なけなしの力をふりしぼって顔を上げた。

のれんをくぐって、誰だれかがすっと厨ちゆう房ぼうに入ってきた。

カツヲにしては立ち姿がやけにきれいで、肌はだは褐かつ色しよくではなくて白く、エプロンなんか着けていなくて、黒い服を身にまとっていた。

「おや、大将。あんたもきてたのかい」

オトミさんがさして驚おどろいたふうでもなくそう声をかけると、黒衣の男は無表情のままわずかに頭を下げた。

「うちの連中が迷めい惑わくをかけてすまない。こうして謝ってみせても、毎度のことだから、少しばかり白々しく聞こえるかもしれないけどネ」

「まったくだよ。わかってるなら、さっさとどうにかしとくれ。アジアン、あんたの手下どもの不始末だろう」

「手下とは思っていないヨ。まあ、善処しよう」

黒衣の男は足音も立てずにヴィクトリアの前まできた。

まともに顔を見ることができない。

心臓が騒そう々ぞうしいくらいに大きく速く鼓こ動どうしている。

「……どう、して」

「オトミさんが姿を見せないものだから、おかしいと思った。それでのぞいてみただけだヨ」

「──わたし……」

「飲んでいたんだネ」

「……う、うん……す、少し──け、結構……」

「立てるかい」

「た、たっ、たてっ、立て」

「無理そうだ」

　あのときと同じだった。ヴィクトリアはあっという間に立ちあがっていた。いや、違ちがっている点もあった。アジアンの手が、まだヴィクトリアの腕うでをがっちりとつかんでいる。どうしよう。嬉うれしい。なんでだろう。こんなときなのに、嬉しくてたまらない。ふらふらじゃなくて、ふわふわしている。雲の上を歩いているみたいだ。歩いたことないけど。アジアンに引っぱられているなんて、これは夢？　幻げん覚かく？　やっぱり酔よいすぎ？

　抵てい抗こうなんてできなかった。できるはずもなかった。

　ヴィクトリアが夢心ごこ地ちでアジアンにつづいてのれんをくぐると、店の中が水を打ったように静まりかえった。今度こそ、本当の本当に、酔いなんか吹ふき飛んだ。

　ナツコちゃん。

　ああ、ナツコちゃん。

　さんざん暴れたのだろう。リー・ブラックと雷ライ切キリに取り押さえられている最愛の妹は、着衣が乱れているし、髪かみもぐちゃぐちゃだ。割れ物か何かで切ったのか、手に怪け我がもしている。すぐに治してあげないと。わたしがやらないと。姉さんなんだから。ナツコちゃんはたった一人の妹なんだから。わたしの大事な大事な妹なんだから。

　ナツコちゃんが目を一いつ杯ぱいに見開いて、こっちを見ている。

　信じられない、とでも言いたそうな表情だ。

　いったい何が信じられないんだろう。

「──あ」

　ヴィクトリアは慌あわてててアジアンの手を振ふり払はらった。そうしなければならないような気がした。だって、ナツコちゃん、きっと怒おこってる。どうして？　そっか。そうだ。ナツコちゃんがアジアンを好きだからだ。

　そういえば、あのときだって、わたしがアジアンと会った話をした途と端たん、ナツコちゃんは少しだけ意地悪になった。パパとママが生きていたころは、何かにつけ、姉さんだけずるい、と言ってほっぺたをふくらませるのが、ナツコちゃんの得意技わざだったっけ。それがとってもかわいくて、わたしはたまに、いいもの見つけたんだ、とか、今日おもしろいことがあったよ、とか、わざとナツコちゃんに話して聞かせた。

　同じようなことをしたんだ。

　それなのに。

「──ねえ、さん……」

　リー・ブラックと雷ライ切キリが手を放した。

　ナツコちゃんがものすごい勢いで駆かけよってきた。

「姉さん……！」

　いつからだろう。ナツコちゃんが、姉さんだけずるい、と言わなくなったのは。ナツコちゃんはいつ大人になったんだろう。いつからわたしを守ってくれるようになったんだろう。わたしはずっと子供のままなのに。飛びついてきたナツコちゃんをこうして軽々と受け止めることができるくらい、身体からだだけは大きくて。思いっきり抱だきしめたナツコちゃんは、とてもとても小さくて。

「──な、ナツコちゃん、ご、ごめん、ね、わたし……」

「ご、ごめんは、あたし、だよぉ。あ、あんな、こと──お、思っても、ないの、に……」

「ううん、わ、わたしが、も、もとはと、いえば」

「いいの！　もぉやめよ！　い、いいから！　ナツコは、姉さん

が、いて、くれれば！」

「だ、だ、だづごぢゃん」

「で、でえざん」

　こうして二人で泣いたのはパパとママが死んでしまったとき以来だ。周りの目はぜんぜん気にならなかった──といったら嘘うそになるけれど、涙なみだが止まらなかった。我が慢まんする必要はないとも思った。クララがなぜか少しうらやましそうに目を細めている。雷ライ切キリの陰かげに隠かくれるようにして目を真っ赤にしている祝ノリ花カの脇わきで、ミシーリャがにしししと笑っていた。ダリエロはつまらなそうにローガンやリー・ブラック、シャマニ、リューヨルカらと酒を飲んでいる。クラニィもグラスを片手に微び苦く笑しようを浮うかべていた。ベティは店から出て行った。カイは少し怒っているような顔つきだ。リキエルの表情はうかがいしれない。他ほかにもたくさん、たくさんいる。

　でも、いいよね。

　恥はずかしいし、みんなに迷めい惑わくをかけて申し訳ない気持ちでいっぱいだけど、あとでちゃんと心をこめて一生懸けん命めい謝るから、今はいいよね。

　ヴィクトリアは妹を抱く腕にいっそう力をこめた。

　目を閉じようとして、思いとどまり、あの人を捜さがした。

　アジアンは出入口の近くの壁かべ際ぎわに立っていた。ちょうど店の全体が見み渡わたせる位置だ。一いつ瞬しゆん、ほんの少しだけ、かすかにその目め許もとがゆるんだように見えて、どきっとした。

　アジアンが笑った。

　たぶん、笑ったと思う。

　貴重な瞬間を見てしまった。

　ヴィクトリアは、その笑え顔がおを胸の奥にしまいこむように、急いで目を閉じた。

　そうだ。しまってしまおう。きっとまだ恋こいなんかじゃなくて、憧あこがれにすぎないこの想おもいを、どこかに隠しておこう。そして、出てきてしまわぬように鍵かぎをかけよう。鍵は遠くに捨ててしまおう。

　拾いにゆけぬくらい、遥はるか遠くへ。

nebula story
ネビュラ・ストーリー

余情編

　仕事を選ばないせいで、たまに餓が鬼きの使い走りと大差ない、というかまさしくそのもので、儲もうけもなければ達成感もその他のうまみも皆かい無むに近い依い頼らいを引き受けてしまい、ともあれ受けた以上は果たさないといけないから、やむなく何かと骨を折る羽目になる。

　しがない取り立て屋が陥おちいりやすい罠わなの一つだ。

「さあ、手を出せ」

　暮れなずむ第三区の街角に、フードを目ま深ぶかにかぶってたたずんでいる依頼人は、不満げな上うわ目め遣づかいで取り立て屋をにらみつけるだけで、ポケットに突つっこんだ手をなかなか出そうとしなかった。

　ため息が出た。自じ業ごう自得とはいえ、まったくやりきれねえな。

　しばらく唇くちびるをひん曲げて髪かみの毛を引っかきまわしていると、ずっと黙だまりこくっていた依頼人様がやっとこさ口を開いてくれた。

「なんでそいつ連れてきたんだよ」

　年とし端はもいかないとは言えないが、大人扱あつかいするにはあまりにも早すぎる依頼人にそいつ呼ばわりされたのは、取り立て屋ではない。さっきからずっと取り立て屋の後ろに隠れている、当の依頼人と同どう年ねん輩ぱいの、まあ、少年と表現しても差し支つかえあるまい、もっと言えば年ねん齢れいは十二歳、身長は百五十サンチメーテルそこそこで、やや痩やせていて、少し縮れた髪の毛は栗くり色いろで、生意気そうな褐かつ色しよくの目をした餓鬼だ。

　もっとも、今はずいぶん元気がないから、かわいらしいとまではさすがに思わないものの、蹴け飛とばしたくなるほど小こ憎にくらしくはない。

　この餓鬼は依頼人と幼おさな馴な染じみで、五日前まで親友同士だったのだが、ちょっとした行き違ちがいから、借りた金を返す返さないの話になって、五年だか六年だかかけて培つちかってきた二

人の友情は脆もろくも崩くずれ去った。

　少なくとも、依頼人はそう主張していて、元親友に貸したまま戻もどってこない十四ダラーを即そつ刻こくとりかえして欲しい、というのが依頼の内容だった。

「お前さんの望みは、友だちに貸した金を取り戻したい。そうだろう」

「違ちがう。元友だちだよ」

「そうだったな。まあ、とにかく問題は金で、金さえ戻ってくればいいわけだ。俺の仕事ってのもまさにそういうもんだしな」

「そりゃそうだけど。でも、だからってなんでそいつが」

「本来、借りた金は返すもんだ。誰だれも彼もがけなげにまっとうに生きてる世の中だったら、俺としては商売あがったりだがね」

　取り立て人に無理やり押しだされて、ようやく依頼人の元親友が前に出てきた。

　依頼人は元親友よりも少しだけ背が低くて、横よこ幅はばは似たようなものだが、頭が小さいぶん、頼たよりなげに見える。

　ただ、元親友はずっとおどおどしっぱなしで、ようやく依頼人と向かいあっても、目をあわせることさえできないような有あり様さまだ。きかん気が強いのは間ま違ちがいなく依頼人のほうだろうが、自分の手で金を返すと決めたのは元親友自身なのだから、まあ、頑がん張ばれよ。

「どうした。言いたいことがあるんだろう。言えよ。沈ちん黙もくは金で雄ゆう弁べんは銀とかいう言葉もあるらしいが、意外とな、言わないと伝わらんものだぞ」

「……あの」

　取り立て屋にうながされて口を開いた元親友は、だが、すぐに言いよどんでしまった。

　なかなか堂に入っている、依頼人の冷たい恫どう喝かつと憎ぞう悪おに満ちた目つきに怯ひるんだのか。

この街には、そんな目をした餓鬼が掃はいて捨てるほどいる。

まだ歯も生えそろわない時分から憎にくしみや蔑さげすみにさらされて、それに慣れなければ生きてゆけず、そうはいっても慣れることなんてできるはずもなくて、捌はけ口を求め、いっそのこと攻こう撃げきされるよりも攻撃する側につこうとして、傷つけ、奪うばい、やがて殺す。いったんその馬車に乗ってしまうと、途と中ちゅうで降りるのも一苦労だ。

それでもいいと本人は言うかもしれない。

他ほかにいい方法があるわけでもないし、たまに馬車に轢ひかれそうになりながら、地べたを這はいずりまわるみたいにちまちま歩いてゆくなんて御ご免めんだ。

たしかに、そのとおりかもしれないが。

「馬ば鹿か野や郎ろう」

取り立て屋は右手で依頼人の頭をわしづかみにした。

「餓鬼が。そんな目をするんじゃねえ。お前さんにはまだ早すぎる。タチの悪い連中とつきあいはじめた友だちの行く末を案じてくれる幼馴染みがいるうちはな」

「……い――てっ……な、何す――」

依頼人は取り立て屋の手を引き剝はがそうとして、顔を振ふり返らせて見上げた瞬しゅん間かん、凍こおりついた。九割方演技だけどな。年の功ってやつだ。眼ガンを飛ばして餓鬼を震ふるえあがらせるくらいの芸当はたやすい。取り立て屋は手を放して元親友を一いち瞥べつし、顎あごをしゃくってみせた。

「お前さんもぐずぐずしてないで、さっさとやることをやれ。こう見えて、俺もそう暇ひまを持てあましてるわけじゃない。少なくとも、一ダラーの儲けにもならない、こんな仕事とも呼べない馬鹿げた仕事にこれ以上かかずらってる暇はな」

「は、はい」

元親友は目を白黒させながらうなずいて、大急ぎで無理やりポケットから引っぱり出させた依頼人の手に硬こう貨かを何枚か握に

ぎらせた。

「こ、これ、返すから。ちゃんと、十四ダラーあるから。だから、さ、だから──」

「いらねえよ、金なんて！」

「でも、そのために、取り立て屋さんに頼たのんだんでしょ」

「そうだけど！　違うだろ！　もとはといえば、お前が──」

「それは、謝るから」

「遅おせえんだよ！　今さら謝ったって！」

　こうなるともう取り立て屋の出る幕はない。

　しばらくすると、責められ放題に責められる一方だった元親友がぶちキレて逆ぎやく襲しゆうに転じ、依い頼らい人にんがたじたじになって涙なみだ目めになり、それを見た元親友が先にわっと泣きだして、依頼人が慌あわてて慰なぐさめはじめるという怒ど濤とうの展開になって、もうこの場に立っていることさえつらくなってきた。

　元親友曰いわく、依頼人はこのごろストリートギャング気どりの悪わる餓が鬼きどもと昵じつ懇こんで、彼らの仲間に入りたがっていたらしく、元親友にも一いつ緒しよにどうかと持ちかけてきたのだという。元親友がその誘さそいを断ったことで、二人の仲はこじれた。ようするに、貸した金云うん々ぬんは後付けの理由にすぎないのだろうし、その金額にしてもたったの十四ダラーだ。そもそも引き受けるべき仕事ではなかった。気の迷いだ。それにしても、阿あ保ほらしいといったらない。

「まあ、持つべきものは何とやらってな。いつになるかはわからんが、そう実感できないよりはできたほうがいくらかマシな人生なんじゃないか。おっさんの戯たわ言ごとかもしれんがね」

　取り立て屋は餓鬼どもの頭をやや乱暴に撫なでて踵きびすを返した。

　あ、おい、待てよ、と依頼人が声をかけてきたが、立ち止まらなかった。取り分、いいのかよ、四割とるんだろ、とか何とか。こっ

ちとしても、それはそれ、これはこれで、いただくものはきっちりいただきたいところだが、残念ながら今回は依頼を果たすことができなかった。取り立てる前にちゃんと耳をそろえて返すというのだから、そもそも取り立て屋の出番はない。所しよ詮せんは卑いやしい商売だと後ろ指をさされることも多々あるが、何の成果も上げていないのにいけしゃあしゃあと報ほう酬しゆうを受けとるようになったら本当におしまいだ。まだそこまで落ちぶれちゃいないつもりだ。

「恰かつ好こういいな、取り立て屋」

　落ちぶれてはいないつもりだし、勘かんが鈍にぶるほど年をとってもいないはずだった。

　そうはいっても、この状じよう況きようを考えると、自分がとんだ間ま抜ぬけで迂う闊かつだという結論しか導きだせまい。

　取り立て屋はその声を聞いて振り向いたのだったか、それとも何かを感じて振り返る途中、その声を聞いたのだったか。

　同じことだ。

　やつは餓鬼どもを両りよう脇わきに抱かかえるようにして、その首筋に釘くぎみたいな得物を突つきつけていた。

　餓鬼どもは二人して何が起こっているのかよくわかっていないような顔つきだ。

　取り立て屋はどうだろう。

　俺は理解しているのか。把は握あくしているか。

　やつのことは知っている。

　身長は百七十五サンチ程度。痩やせているというよりも、余分な贅ぜい肉にくがすべて削そぎ落とされている身体からだつきだ。灰色の髪かみの毛を後ろに撫でつけ、ガルベル・ダの洒落しやれたストライプのスーツを着こなしていながら、伊だ達て男おとこ風には見えない。頭とう髪はつと同じ色の目があまりにも酷こく薄はくな眼光を宿していて、鉤かぎ鼻ばなで、唇くちびるが薄うすく、頰ほおのこけた顔立ちが老ろう獪かいな鷲わしにも似て不ふ吉きつだからだ。

　そんな悪相は忘れようにも忘れられないし、忘れてしまうほど遠い昔に見た顔でもない。話をしたこともある。好きになれそうな男ではないと思ったが、気にくわないやつを気にくわないからという理由で殴なぐり飛ばしてしまえるほど血気盛んでもない。殴りかかったら殴りかかったで、手痛いしっぺ返しを食いそうな予感もあった。

　並なみ大たい抵ていじゃない。当然だ。

　相手はあの悪名高いＳＩＸの腹心だ。

「殺すには少々惜おしい気もするが、いろいろ事情があってね。取り立て屋、貴様には死んでもらうことになったよ」

「せめてその事情ってやつくらいはきかせてもらいたいもんだな」

「これから死ぬ者が知っても意味はなかろう」

「まだ死ぬと決まったわけでもないがね」

「いいや、貴様は死ぬんだよ」

　やつは簡単に餓鬼どもの息の根を止めることができる。それが事実だ。餓鬼どもはようやく自分たちの置かれた状況がのみこめてきたのだろう。二人して顔面蒼そう白はくで目を大きく見開いて取り立て屋を凝ぎよう視していている。取り立て屋は軽口をたたくのが関の山で、まったく身動きがとれない。それも事実だ。

　まいったな。

　取り立て屋は唇をゆがめて両手を挙げた。

「餓鬼どもは放してやれ」

「ゆっくり歩いてこい。手を挙げたままだ」

「わかった」

　そう答えて肩かたをすくめてみせると、やつの手に少しだけ力がこもった。餓鬼どもは生きた心ここ地ちがしないだろう。余計なことは一いつ切さいするなというわけか。わからなくもないが、もうちょっと余よ裕ゆうってものを持ったらどうだ。

仕方なく、一歩、二歩と歩いていって、やつの一メーテル手前で足を止めた途と端たん、後ろを向け、と仰おおせつかった。

逆らう気はなかった。

「アジアンを恨うらめ、取り立て屋」

「そいつは無理な相談だな」

「本当に恰好いいよ」

腰こしの後ろに収めてあったバディエドを抜きとられた。そう感じた瞬しゅん間かんか、その直前か、身体が動いた。後頭部に重い衝しよう撃げきが走って気が遠くなりかけたが、どうってことはない。しゃがみながら振ふり向いて、足あし払ばらいをかけつつ、やつの顎あごに掌しよう底ていを見み舞まってやる程度の芸当は寝ねていてもできる。やつは脳のう震しん盪とうでふらふらしながらもお得意の釘ネイルを繰くりだしてきて、何本か肩やら腕うでやらをかすったが、痛くも痒かゆくもなかった。取り立て屋は餓鬼どもをがばっと抱えて飛びさがった。逃にげろ、と言おうとした。

いや、言った。

言ったつもりなのだが、うまく声が出ない。

妙みようだな。

餓が鬼きどもめ、何かわめいてやがる。それなのに、聞こえない。いいから、さっさと逃げろよ。これだから餓鬼は。しょうがないから、餓鬼どもを押しのけて前に出ようとした。足がふらついた。まずいな。どうしちまったんだ。物が二重どころか何重にも見える。しっかりしろ。やつは甘くねえ。あれくらいでくたばるわけはもちろんないし、あきらめてくれるはずもない。実際、やつはもう体勢を立てなおして、ただ、あの一いち撃げきがだいぶきいたのか、足あし許もとが覚おぼ束つかないみたいだ。ぐらぐらしてやがる。奇き遇ぐうだな。

こっちもだよ。

違ちがうな。

こっちがやたらとぐらぐらしてるだけか。

とはいえ、それがどうしたって話だ。倒たおれこむようにやつの懐ふところに飛びこんで、おい、やつをぶっ倒すぞと思うだけで、おもしろいように攻こう撃げきがきまった。火事場の馬ば鹿か力ぢからってやつか。いや、こう見えて、取り立て屋は今まで幾いく多たの修しゅ羅ら場ばをくぐってきたし、騎き士し見習い時代や治安維い持じ騎士団時代に叩たたきこまれた基き礎そもある。喧けん嘩かならそう負けない。懐なつかしいな。騎士見習いか。たしかに自分にもそんな初うい々ういしいころがあった。ハッツフォー。荒ぶるギアラン魂ドロウ、か。どうも性しようにあわなかった。教練所の隅すみから隅までが嫌きらいで嫌いで仕方なくて。あれだ。十五泊はく十六日の山さん岳がく地ち野戦特別演習。特演ってやつだ。最初の特演を経験して悟さとった。無理だ。兵隊にはなれない。それで、治安維持騎士団へ。でも、どうだろうな。もし根性出して独立剽ひよう騎き士し団に入っていたら、それなりにやっていたかもしれない。騎士様か。べつにどうでもいいな。今のほうがいい。ずっといい。カミさんがいて、娘むすめが二人もいて。何より、仲間がいる。友がいる。

リリア。

ジョゼ。

ユーリィ。

愛してるぞ。

気き恥はずかしくって、面と向かってはなかなか言えやしねえけどな。

愛してる。

なんでだろうな。

どうして、こんなことを。



疲つかれてるからか。

ああ、疲れたよ。

やけに疲れてる。

なんとか立ってるけどな。

目の前に、やつが座りこんでる。

見ろよ。

よく見えないが、やつは血ち塗まみれだろう。顔面なんか、きっとひどいざまだ。腕も一本折ってやった。だから言ったろうが。これでも喧嘩は結構強くてな。そうだな。したな。喧嘩。たくさんした。

ダリエロめ。あいつは強かったな。しつこくてな。

強いといえば、ローガンだ。あいつもやばかった。こっぴどくやられた。

リキエルとはやりあいたくねえな。あのガタイだしな。

ベティは女だ。女は殴なぐらねえ主義だしな。その前に魔ま術じゅつでどうにかされちまいそうだが。

ギャンガーだの、デ・ペドロだの、腕ずくでやりこめないとわからない手のかかる馬鹿どももいて。

毛モウと雷ライ切キリがとうとうおっぱじめたときは、止めるのが大変だった。

あいつも、こいつも。思い出せばきりがない。小生意気でかわいい女たち。愛すべきお茶目な男たち。転がりつづけて、ここにたどりついた、みんな仲間だ。

やつが、恰かっ好こうよすぎるんだよ、取り立て屋、と血ち反へ吐どを吐はきながら言ったみたいだ。

取り立て屋は、そうかい、と答えることができただろうか。

急に身体からだが恐おそろしいほど軽くなった。

天と地がひっくり返って、眼前に空が広がった。

晴はれ渡わたった薄い青の空だった。

──アジアン。

友よ、泣くことなかれ、と取り立て屋は最後に祈いのった。

お前さんは一人じゃない。

空はすぐに暗くなり、あとはもう何もわからなくなった。

nebula story
ネビュラ・ストーリー

純情編

1

　触さわったら手て垢あかどころか吐と瀉しゃ物ぶつがこびりつきそうな、小こぎ汚たない──いや、特大汚いドアを蹴け破やぶると、むっとする糞くそ不ふ愉ゆ快かいな悪あく臭しゅうが鼻び腔こう内に侵しん入にゅうしてきた。

　見れば、十席ほどのカウンターの他ほか、ボックス席が五つあって、けばけばしい女たちが穀ごく潰つぶしの助すけ平べい野や郎ろうどもに商売用の体をこすりつけて糞不ま味ずそうな酒をついでいる最中だった。

　糞忌いま々いましい酒場だ。酒を飲まないカイにとって、酒場なんかどれも反へ吐ど以下だが、「退屈ボーリン野郎グマン」はその中でもかなり超最低ＳＵＣＫな部類に入る。規模としては蓑みの虫むしの巣級の糞手て狭ぜまな店ではないはずだが、実際の面積よりも狭く感じられるのは、糞汚いせいだろう。清潔さとは、もちろん永年絶ぜつ縁えん状態で、床ゆかに散らばっている割れた瓶びんやらグラスやらの破は片へんさえ片づけられていない。店の端はしでだらしなくのびている牛ぎゅう糞ふん野郎もいる。

　のびていない男にしろ、接待女にしろ、すべて塵ゴミだ。

　粗そ大だい塵ゴミから埃ほこりまで、ありとあらゆる大きさの塵ゴミがここにはある。

　いったい、この連中は第九区〝クァラナド歓かん楽らく街がい〟の隅すみで塵ゴミの展覧会など催もよおして、何のつもりなのか。それほどまでに我々は塵ゴミですと自じ慢まんしたいのか。だいたい、どうして自分はこんな場所にいるのか。なぜ、糞ＳｍＣの糞手下みたいな真ま似ねをしないといけないのか。

　臭におい。腹が立つ。頭に血が上りすぎて、目が眩くらみそうだ。ふざけるな。ふざけるな。ふざけるな、畜生シツト。

「全員動くな」

　カイはロイヤル・ガールの朱しゅと白の重へヴ装イメ甲タル鎧

アー兜マーで全身をかため、同じ配色で塗と装そうしたＡＬＶの円形盾たてと、明けモーニンのグ・明星スターで完全武装している。そんな物ぶつ騒そうな恰好の者が突とつ然ぜん、乱入してきたのだ。退屈ボーリン野郎グマンの塵ゴミどもは一いつ斉せいに、塵ゴミなりに、塵ゴミとしては精せい一いつ杯ぱい、緊きん張ちようして、警けい戒かい心しんをあらわにした。その中でいち早くカイに近づいてきたのは、入口の脇わきでいかにも不味そうにウイスキーをラッパ飲みしていた半スキンヘッドの塵ゴミだった。

「動くなだァ……？　テメェ、ここがどこか知っ──デッ」

　もっとも、半スキンヘッドの台詞せりふは中断を余よ儀ぎなくされた。

　カイが円形盾で、半スキンヘッドの顔面をぶん殴ったのだ。

　それで怯ひるんだ、というか、よろめいて後退しかけた半スキンヘッドの左足の甲こうを、カイは右足の踵かかとで思いきり踏ふんづけてやった。

「動くなと言っただろうが」

「──ィィィッ……！」

「いいか、もう一度言う。動くな。わかったな」

「ッ、ッ、ッ」

　半スキンヘッドは顔を真っ赤にして、まともに声を出すこともできないまま、何度も首を縦に振ふった。

　退屈ボーリン野郎グマンは静まりかえっている。

　だいたいの塵ゴミはただ呆あつ気けにとられているようだが、油断のない目つきでカイをうかがっている者も、何人かいないことはない。

　一人はカウンターの奥でグラスを傾かたむけている、やたらと顎あごが長くて、青く染めた髪かみの毛を三つ編みにしている男。もう一人は、最さい奥おうのボックス席で両側に女を侍はべらせている、大おお柄がら、猪い首くびで、額に三本線の刺青いれずみをした男。それから、そのすぐ近くで、極きよく端たんに背中を丸めて

ソファに腰こしかけている、目の細い辛しん気きくさい顔立ちの男だ。身体的な特とく徴ちようと、前もって与あたえられた情報を突つきあわせれば、顎長がペズ、猪首がゴズ、糸目がセズだろう。

　ＨＰ。

　クラン亡国ホームレ愛国ス・パト者党リオツツのデルボア兄弟といえば、この界かい隈わいではちょっとした顔らしい。

　まあ、顔だろうと三段腹だろうと足の裏だろうと所しよ詮せんは塵ゴミだ。カイの知ったことではない。重要なのは、デルボア兄弟がどれだけ骨のある敵かということだ。

　戦いは大好きだ。

　悪あく魔まと人間の混血だといわれる鬼人オーガどもの谷で、少女期までを拳けん闘とう奴ど隷れいとしてすごしたカイは、物心がついたときにはもう、敵を壊こわす快感を知っていた。

　あの頃ころは、肉親の存在はもちろん、年ねん齢れいも知らず、名前すら与えられず、ただ肉を潰つぶし、骨を叩たたき割るすべだけを知る、一匹ぴきの共食獣だった。

　その後、人間らしく上辺を取り繕つくろうことだけは学んだ、あるいは学ばされたが、結局、根っこの部分は変わっていないのだろう。カイは今でも、苛いらついたとき、頭の奥がちりちりするとき、もっとも効果的に自分を静めるものが何かよくわかっている。

　血だ。

　それも、流しがたい、血。

　手て強ごわい敵から流れだす、噴ふきだす血が、何よりもカイを鎮ちん静せいさせる。

　陰いん気きそうな顎長のペズ・デルボア、筋肉質マツチヨで猪首のゴズ・デルボア、痩やせぎすで猫ねこ背ぜで細目のセズ・デルボア、果たしてやつらはカイを静めるほど強いのか。

　カイはもう一度半スキンヘッドの顔面を円形盾で殴おう打だして吹ふっ飛ばしてから、兜かぶとの奥で舌した舐なめずりをした。

「貴様ら、ＨＰで間ま違ちがいないな。理由なんかこの際、どうでもいい。これから、あたしが貴様らを残らず粉ふん砕さいしてやる。抵てい抗こうしたければするがいい。いや、むしろ必死に抵抗して──」

「カァイ」

　と、独特の抑よく揚ようでカイの名を呼び、後ろから肩かたを叩いてきた者がいる。

　棘ソーン闇ダークの黒衣に身を包んで、うざったい長めの黒髪を気き障ざったらしい嫌いや味みな仕草でかきあげてみせた、クラン昼ラン飯チタ時イムの頭領マスターだ。

　虐殺カーネイ人形ジドール、とも呼ばれる。

　アジアン。

「そんな前口上では、まるでボクら、押し込み強ごう盗とうみたいだヨ」

「……たいして違いはないだろ」

「だいぶ違うサ」

「どこが！」

　アジアンは首を傾けながら肩をすくめてみせ、カイの脇をすり抜ぬけて退屈ボーリン野郎グマンの中へと足を踏み入れた。

「ボクらは盗ぬすみなどやらない。殺すだけだ」

　挑ちよう発はつめいたアジアンの言葉に気色ばむ者は、だが、誰だれもいなかった。アジアンがみなぎらせている冷たい殺気に気づかない鈍どん感かんなうつけは、さすがにいなかったということか。女の従業員をのぞけば二十二人。ＨＰの屑くず野や郎ろうどもは、明らかにのまれている様子だ。

　とはいえ、皆みなが皆そうではない。油断なく臨戦態勢を整えた者が、デルボア三兄弟をふくめて数人いる。そのうちの一人、猪首のゴズ・デルボアが女どもを突き飛ばして立ち上がり、ボックス席に立てかけてあった得え物ものを手にした。

それは巨きよ大だいな肉切り包丁とでも形容するしかない、規格外の得物だった。いかにも剛ごう力りきそうなゴズが力任せに振るえば、カイの重ヘヴ装イメ甲タル鎧アー兜マーでも無事ではすまないだろう。

当たれば、だが。

「てめェ、アジアンだな」

ゴズが眉まゆをつり上げると、額に施ほどこされた三本の平行な直線の刺青がいびつな波線と化した。

「昼ラン飯チタ時イムが俺らのヤサにブッコミかけるたァ、いってェどういう了りよう見けんだ。俺の知ってるかぎりじゃあ、ウチがてめェンとことやりあったことは一度もねェはずなンだがな」

「たしかに」

アジアンは腰の泣きスクリー叫ぶミング・短剣ダガーに手をのばすそぶりも見せない。

「ボク個人としても、キミらに恨うらみなどないヨ」

「だったら何だ。まさか虐殺カーネイ人形ジドールともあろう者が、ＳＩＸの豚ぶた野や郎ろうなんぞに顎で使われる身分になったってェ噂うわさが、本当の話マジバナッつゥわけじゃあるめェな」

「フッ……」

唇くちびるに薄うす笑わらいをひらめかせたアジアンの姿が、いきなりかき消えた━と、カイが思ったときにはもう、アジアンはゴズの顎に膝ひざ蹴げりを叩きこみつつ、その頭頂部にも肘ひじ打うちを食らわせていた。

入口からゴズまで、六メーテルはあっただろうか。その距きよ離りを瞬またたく間まに縮めてみせたアジアンは、ゴズの両肩に手をつけて跳とび上がり、空中で一回転して着地した。

前のめりに倒たおれかかっている、ゴズの後頭部へ。

ゴズはボックス席のテーブルに突つっ伏ぷした。

　その上に、両手をポケットに突っこんで、アジアンが平然と立っている。

　アジアンの口くち許もとにはまだ笑えみが貼はりついているが、空の青を凍こおりつかせたような色の瞳ひとみは、まったく、少しも、笑っていない。

　あの瞳に自分は映っているんだろうか、と、カイはたまに考えてしまう。

　なんで、そんなことを。

「亡国ホームレ愛国ス・パト者党リオツツ」

　アジアンが店内をぐるりと見まわした。

「豚野郎ＳＩＸのご用命でネ。キミらを潰す。理由はわかるだろう」

「……堕おちたな、虐殺カーネイ人形ジドール」

　呻うめくような、ひどく酒焼けした低い声だった。

　細目のセズ・デルボアは、アジアンのすぐそばでまだソファに腰こしをうずめている。

　よく知らないし、どうでもいいことではあるが、デルボア兄弟は血が繋つながっておらず、義兄弟だという。そうはいっても、一応、兄弟を名乗っているゴズが目の前でやられたというのに、セズもペズも顔色一つ変えていない。カイの見立てでは、ゴズは典型的な見かけ倒しで、細目のセズと今ゆっくりとカウンター席から立った顎あご長ながのペズは多少使えそうだ。二人ともゴズとは違って得物を隠かくしているあたりからも、用心深さがうかがえる。

「あんたほどの男が……なぜ、ＳＩＸの尻穴を舐なめるような真ま似ねをしている」

「キミには関かかわりのないことだ、セズ・デルボア」

「ないわけがなかろう。あんたが踏ふんでいるのは……不出来とはいえ、俺の弟だ」

「出来の悪い弟を持つと苦労するネ」

「それこそ……余計なお世話だ……！」

　セズが立ち上がりざまに腿もも の鞘さやから大おお振ぶりのナイフを抜き放はなって繰くりだしたのと、アジアンがふわりと体を浮うかせたのとは、ほぼ同時だった。セズのナイフをかわしたアジアンは、ポケットから両手を出さず、黒衣を翻ひるがえして足を振りまわした。かろうじて軌き跡せきが見えるくらいの、鋭するどい空中ローリ回転ング・後ろソバ蹴りツトだった。セズは後ろへ倒れこむようにして、それをなんとかやりすごした。その瞬しゆん間かんだった。

　身体からだが勝手に動いた。

　カイは突とつ進しんしていた。

　頭で何か考えたわけではなかった。

　ただカイの抜き身の本能が命じている。

　粉こな微み塵じんに打ち砕くだけ、と。

　声がもれる。それは人の声ではない。かつて鬼人オーガの奴ど隷れいとして、生存のために無む我が夢中で同どう胞ほうたちの命を奪うばっていた、おそらく鬼人オーガ以下の、裸はだかになれば戦意と殺意と高こう揚ようしか残らない、獣けものの、共きよう食しよく獣じゆうの、いや、化ばけ物ものの声だ。

「ＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｗ……！」

　カイは盾たてと肩かた当あてで数人のＨＰを弾はじき飛ばしつつ突き進んだ。やつらは獲え物ものではない。障害物でしかなかった。標的はペズ・デルボアだ。笑えるほどに顎の長いデルボア兄弟の長ちよう兄けいは、腰の後ろから抜ぬいた短杖ワンドを両手で握にぎりしめ、薄い上唇と厚ぼったい下唇の合間から不ふ吉きつな言葉をつむぎだそうとしていた。それはたぶん、上古高ハイロメ位語オンに違ちがいない。ペズは魔ま術じゆつの呪じゆ文もんを詠えい唱しようしようとしている。デルボア兄弟の中に魔術士がいるなんて聞いたことはないが、能ある鷹たかは爪つめを隠す、というやつか。カイの頭の中には、だが、魔術を妨ぼう害がいするという明確

な意図さえなかった。とにかく、あいつは最優先で粉ふん砕さいすべき敵だ。そのことだけはわかっていて、カイはペズを間合いにとらえ、明けモーニンのグ・明星スターを振りかぶろうとした。遅おそかった。

　呪文がかなり短かったのだ。

「鞫Ｇｗａｎ」

　カイはとっさに盾を前に出して重心を低くした。呪文の短さから、たいした魔術ではないと思った。果たせるかな、ペズが発動させた魔術は、退屈ボーリン野郎グマンの中に突風を巻き起こすだけの単純なものにすぎなかった。もっとも、単純だからといって、無害なわけではない。

「──くっ！」

　一瞬、体が浮きかけた。悲鳴や、硝子ガラスか何かが割れる音が聞こえた。人型の塵ゴミどもが転てん倒とうし、床ゆかだの壁かべだのに叩たたきつけられる音もした。なかなかどうして、結構な風圧だった。重ヘヴ装イメ甲タル鎧アー兜マーの重量がなければ、カイも危なかったかもしれない。

　というか、まだ十分、危ない。

　店内をめちゃくちゃにした突風が一ひと吹ふきで失うせた途と端たん、カイは強きよう烈れつに両足を刈かられた。しゃがみこんで放ったペズの足あし払ばらいだった。たしか、ペズは素す手でで五、六人を一気に投げ飛ばすという体術使いで、つまり、奥の手として、魔術も使うというわけか。

　そんなふうに納なつ得とくしながら、すっ転ばされる気分ときたら、本当に最低で最高だった。

　床に尻しり餅もちをついたカイの明けモーニンのグ・明星スターを持った右手を、ペズが即そく座ざに極きめにきた。軟なん体たい生物めいた身のこなしで右みぎ腕うでに手足を絡からみつかせ、瞬時に全身を使ってねじり上げる鮮あざやかな手て並なみには、舌を巻くしかない。こういう手合いに密着された時点で、カイは限りなく敗北に近づいていた。だが、あくまで近づいただけだ。まだ終わってはいない。紙一ひと重えといえども、そこには大きな差が

あった。

　カイが身をよじりつつ左足でペズの顎を砕いたのと、ペズがカイの右みぎ肘ひじと右肩を一挙に破は壊かいしたのとは、どちらが早かっただろう。

　明けモーニンのグ・明星スターと円形盾が床に落ちた。激痛で気が遠くなりかけたが、それはお互たがい様に違いない。あとは気合いと根こん性じようだ。それならば負ける気がしなかった。痛みなんていくらでも乗り越こえられる。あのころは乗り越えなければ明日がなかった。カイは絶ぜつ叫きようしておのれの痛覚を黙だまらせ、動きだす寸前のペズの下腹部に容よう赦しやなく左の拳こぶしを叩きこんだ。ズボンの中に金的を保護する防具を仕込んでいたのか、硬かたい手て応ごたえだった。それでも、目めーいつ杯ぱいの力で殴なぐったのだ。男なら無事ですむはずがない。思わず顔を引きつらせたペズは、隙すきだらけだった。

「Ｓｈ……！」

　カイはペズの砕けた顎に再度、蹴りを見み舞まってやった。この一発でぶっ倒たおれたペズの喉のど仏ぼとけを踏んづけ、潰つぶして、わずか数秒間の攻こう防ぼうが幕を閉じた瞬間、カイは泣きだしたくなるくらいの快感とともに、ひりひりするような渇かわきを感じた。

　まだ足りない。

　もっとだ。

　もっと欲しい。

　病気だ。

　死ぬまで治らない、たぶん、あたしは病気だ。自覚してる。

　カイは絶望の刃やいばで胸の奥を斬きりつけ、自じ虐ぎやく的てきな悦よろこびに打ち震ふるえながら、渇きに突つき動かされて敵を探した。だが、残念ながら、この渇きを癒いやすことはできそうもなかった。突風と、人間どもの無知と、欲望と、暴ぼう虐ぎやくによって荒あらされた退屈ボーリン野郎グマンの中で、アジアンはすでにセズを昏こん倒とうさせ、他ほかの昼ラン飯チタ時イムの仲間たちも、次々と店内になだれこんできていた。

上半身裸で二本の大たい剣けんを操あやつる仮面をかぶった怪かい力りき巨きよ漢かんの戦士リキエルがいた。昼ラン飯チタ時イムでもっとも陰いん険けんで、残虐で、信用ならなくて、最悪な性格にふさわしい凶きよう相そうを持つ、悪あく趣しゆ味みなダリエロがいた。凶状持ちだが、お人ひと好よしで気のいいオッサンといった風ふう貌ぼうのローガンもいた。彼らの手によって、亡国ホームレ愛国ス・パト者党リオッツの塵ゴミどもは皆みな殺ごろしにされつつあった。右腕を壊こわされたカイがすることなんて、もう残っていなかった。

2

終わってみれば、退屈ボーリン野郎グマン襲しゆう撃げきに参加した昼ラン飯チタ時イム十五名のうちで、もっとも負傷の程度が重かったのはカイだった。

「くそ……無ぶ様ざまだ」

それだけでもこたえているのに、脂あぶら汗あせを流しながら退屈ボーリン野郎グマンの奥に目をやると、変に気どったスーツ姿の男三人が死体の検分をしている。

連中は昼ラン飯チタ時イムではない。悪名高いＳｍＣの構成員で、しかも、《殺Ｘ》の刺青いれずみ持ちだ。殺さつ戮りく戦隊ジェノシドマックスといえば、その筋では知らない者とていない、汚お物ぶつまみれの超最低ＳＵＣＫな壁蝨ダニ付き蛆うじ虫むしどもではないか。そんな連中が、耐たえがたい悪あく臭しゆうを撒まき散らしつつ鼻先で蠢うごめいているのを、どうして我が慢まんしなければならないのか。

そう思っているのは、入口の近くで治ち療りようを受けているカイだけではないのだろう。

退屈ボーリン野郎グマンの中は奇き妙みように静かだ。

蛆虫どもを無視して、カウンターから割れ残りの酒さか瓶びんを探しだし、ラッパ飲みしている者がいる。その筆頭は飲酒と乱交と殺人が趣味のダリエロで、ローガンらはそれに付き合わされている

といった風ふ情ぜいだ。アジアンとリキエルは、蛆虫どもの後ろに突っ立って、何をしているのやら。蛆虫の観察日記でもつけるつもりか。物好きというより、たわけの所業だ。

　まあ、まったく想定外だったとはいえ、まんまとショボイ魔ま術じゆつをまともに食くらわされたあげく、肘と肩かたを折られてしまったカイも、かなり間ま抜ぬけだが。

　床に腰こしを下ろしたカイの真ん前に、座っていても立っているかのごとき大おお柄がらな女が膝ひざをついている。

　女はフリル付きの黒い女性用ナース医術士服・ユニ（？）を身にまとい、同じく黒いリボン付きの女性用ナース・医術士帽キヤツプ（？）をかぶっていて、ウェーブのかかった金きん髪ぱつは光を織ったように美しいのだが、前まえ髪がみが顔半分を隠かくすほど長い。それに、身長を気にしてか、極きよく端たんな猫ねこ背ぜだ。

　実際、ヴィクトリアはそうとう背が高い。昼ラン飯チタ時イムーのガタイのよさを誇ほこるリキエルは二メーテル以上あるので、さすがにあの変態仮面男よりは低いものの、それでも百九十サンチは超こえているだろう。

　大きいけれども決して無骨ではなく、むしろきれいですべすべしたヴィクトリアの手が、鎧よろいと胴どう着ぎを脱ぬいで肌はだ着ぎ姿になったカイの肩口あたりに触ふれている。内エンド視スコー系プスの医術式で、負傷の状じよう況きようを慎しん重ちように、綿密に調べてくれているのだ。昼ラン飯チタ時イムには医術士が二人いて、ヴィクトリアはその片割れだった。

　ちなみに、ヴィクトリアの脇わきで面おも白しろくなさそうに腕組みをして、真っ赤なルージュを引いた唇くちびるを尖とがらせているのが、もう一人の医術士だ。

「てゆーかぁ。カイ、あんたのそうやって男の前でヘーゼンと肌着インナー一枚になる精メン神タリ性テイって、やっぱ女としてどーかと思うんだけどぉ」



　ナツコは黒い髪をショートカットにしている。頭とう髪はつの色や長さはカイとさほど変わらないが、ナツコはちゃんと手入れをして、セットしているし、メイクもバッチリだ。医術士なので、一応、女性用ナース医術士服・ユニを着てはいるものの、これが何と白い皮革製で、ナツコ本人曰いわく「小柄ながら、ピリリと辛から口くちボディ」にぴったりフィットしている。男どもにとっては、

さぞかし扇せんじ情よう的てきな眺ながめなのだろう、というのは、当然、カイ自身の感想ではなく、ナツコ自身や周囲の者たちの受け売りにすぎない。

　正直、カイにはピンとこないのだが、ナツコのはっきりした顔立ちや、大きな目や、バサバサの睫まつ毛げや、胸や尻しりはでかくて、腰回りは細い身体からだつきなどが、おそらくいかにもメスというかんじで、オスである男どもを欲情させるのだろう。つまり、ナツコは男の発情をうながすために、自じ慢まんの辛口ボディだかを強調するような服を着ているのだろうと推測されるわけで、そんなことをして何が楽しいんだか、やはりカイにはわからない。わかりたくもない。

「女とか、べつにどうでもいいだろ」

「ぜんぜんよくない。そんな恰かつ好こうになるんだったら、せめてブラくらいしてろって。乳ち首くび立ってるしぃ」

「それが何だっていうんだ」

「女なんだから恥はじらいくらい持てばぁ？」

「そんなもの、邪じや魔まになるだけだ」

「だいたい、あんたの肌、白すぎてむかつく。ナツコの玉のお肌より白いのが許せない」

「知るか。生まれつきだ」

「じゃあさぁ。今度、ナツコに化け粧しようさして」

「……はあ？」

「ナツコがかわいくしたげるから。カイ、素材はいーんだから、もったいないって。マジで」

「興味ない」

　ナツコの話は飛びまくる。もう慣れたが、真ま面じ目めに付き合っていると馬ば鹿かを見るだけだ。

　たぶん、この女にとって、同性との会話は暇ひまつぶしにすぎな

いのだろう。根っからの男好きなのだ。淫いん乱らんというやつか。見目形のいい男を見つけると、とりあえず性せい行こう為いの可能性を探さぐるのが、この女の習い性になっている。本人に言わせれば、本命は常に一人だけだが、恋こい人びとはいくらいてもいい、たくさんいればいるだけいいらしい。

　こんな妹を持つと、ヴィクトリアは大変だろう。

　似ても似つかないが、二人は姉し妹まいなのだ。

　しかし、見れば見るほど、本当に似ていない。

　どこもかしこも違ちがいすぎる。

「カイちゃん」

　ヴィクトリアが囁ささやくような声で、申し訳なさそうに言った。

「……少し痛むかも」

「ああ」

　ヴィクトリアの医術式が、内エンド視スコー系プスか施オペ術レーシ系ヨンズに変わった。外から見ただけではわからないが、右肩から右みぎ肘ひじにかけての、骨だの、腱けんだの、筋肉だのが弄いじくりまわされている。その感覚はある。どうやら、神経に作用して痛みを抑よく制せいする技術があるようで、緊きん急きゅうの手当て以外ではさして痛くないのだが、あまり気持ちいいものではない。また、失敗なのか何なのか、たまに顔をゆがめたくなるような強い痛みを感じることもある。

　じつは、カイが思うに、医術式の上う手まい下手で言えば、妹のナツコのほうが腕うではいい。

　それでも、安心して治ち療りようを任せられるのは、姉のヴィクトリアのほうだ。

　何せ、女や対象外の男相手の治療だと、ナツコはだいたい露ろ骨こつに手を抜く。そんなやつに自分の身体をあずけるのは御ご免めんだし、ナツコもめったなことではカイに医術式を施ほどこそうとはしない。それでいて、気まぐれにやたらとかまってきたりする。

なんともうざったい女だ。

「あの……カイちゃん」

　ヴィクトリアが顔を上げて手を引っこめた。治療が終わったらしい。要した時間は十分程度か。もっとかかったかもしれない。決して器用ではないし、手早くはないが、そのぶんヴィクトリアは仕上げが丁てい寧ねいで、同じ場所があとで痛みだすといったことはまずない。

「……どう？　痛いところ、他ほかには……」

「大だい丈じよう夫ぶだ。ありがとう、ヴィクトリア」

　カイが右腕を動かしながら礼を言うと、ヴィクトリアはうつむいて首を横に振ふった。

「ごめんなさい、わたし……上手じゃないから」

「そんなことはない。誰だれかみたいに、技量はあっても、雑なら何の意味もない」

「ちょっと、その誰かって誰のことよぉ？」

　ナツコが腕組みをして口を挟はさんできた。

「てゆーかぁ。よりにもよってあんたみたいな乱暴女に雑とか言われたくないんですけどぉ」

「あたしはべつにお前を名指ししてないが」

「名指ししなくたって、ウチには医術士、ナツコと姉さんしかいないじゃん。てことは、ナツコってことになるでしょぉ？　自分で言っといてそんなこともわかんないわけ、馬鹿カイ」

「お前に馬鹿呼ばわりされるのが一番頭にくる！　粉ふん砕さいされたいか！」

「やーん。暴力ハンターイ。助けて、姉さーん」

　ナツコはわざとらしく哀あわれっぽい声を出して、素す早ばやくヴィクトリアの後ろに隠かくれた。

　カイとナツコを隔へだてる壁かべとなった恰好のヴィクトリアは、すっかり困り果てている様子だ。

「この色しき情じよう狂きようの雌めす豚ぶたが」

「ふん。二は十た歳ちすぎて処女のあんたに言われてもねー。痛くも痒かゆくもないよぉ？」

「だ、だ、だだだ誰が処女だ！」

「あらぁ。顔まっかっかにしちゃってー。カイってば、ちょっとかわいいよぉ？　男が怖こわいなら、ナツコがディルドー使ってやさしく処女膜まくぶち抜ぬいたげよっかぁ？」

「ふっ、ふざけるな、変態ヤリマン女！　粉砕してやる！」

　カイが明けモーニンのグ・明星スターを手に立ち上がると、ナツコは姉を身代わりにして逃にげだそうとした。

　その必要はなかった。

　カイは開け放していた出入口のほうを見た。一人の女を先頭にして、チンピラ風の男どもがぞろぞろと店内に入ってきたところだった。下げ劣れつそうで柄がらの悪いＳｍＣの刺青いれずみ持ちの男どもは、そのまま死体が並べられている奥へと進んでいったが、女は立ち止まってカイとヴィクトリアに手を振ってみせた。

「Hiyas.」

　さりげなく、ナツコのことは完全に無視している。

　胸むな元もとが大きく開いている蠱こ惑わく的な魔ま術じゆつ士し衣いを身にまとった〝垂ベテイれ・ザ・目のドウルーベピングティアイズ〟は、かの閃せん光こうの魔女マチルダに天才と呼ばれた魔ウイ導ザー士ドで、ナツコとは犬けん猿えんの仲だ。まあ、ベティとしては、ある身体的な特とく徴ちようについて口くち汚ぎたなく罵ののしられたりしなければ、ナツコなんて眼中にないのだろうが、何しろ口から先に生まれたような女なので、いつもこうなる。

「ケッ。性しよう懲こりもなく、よせて上げて……フツーに不自然だしぃ。いーかげん無む駄だなことはやめろって、貧ひん乳にゆう

女」

「Ａｍｉｄ澪」

　ナツコの暴言に対して、ベティはいきなり魔術で報むくいた。通常、魔術を使うためには絶対に必要となる準備時間を、ほとんどゼロにする。どうやっているのか知らないが、そんな常識外れの芸当ができてしまうがゆえに、師し匠しようであるマチルダにも警けい戒かいされ、秘技を伝授されなかったという話すら漏もれ聞こえる、ベティは逸いつ材ざい中の逸材なのだ。

　その類たぐい希まれな才能を些さ細さいなことで浪ろう費ひしつつも、ちゃんと手加減してみせるあたり、ベティらしいといえばベティらしい。

　ベティの手から放たれた無色透とう明めいの小さな玉は、ナツコの顔をかすめていった。あたりはしなかったものの、髪かみの毛の数本くらいは吹ふき飛ばしていったかもしれない。玉はカウンターで一いつ杯ぱいやっていた連中の間をうまくすり抜けて、いや、ダリエロが手に持っていた酒さか瓶びんを撃うち抜いて砕くだき、壁にめりこんで霧む散さんした。

「──ベティ、てめぇ、いきなり何しやがる！　犯ヤられてえのか！」

　ベティはダリエロの抗こう議ぎなんてどこ吹く風でナツコを睨にらみつけ、ぷっくりした唇くちびるを舌先でぺろりと舐なめた。

「口に気をつけなさい、ナツコ。次はあてるわよ」

「……むぅ」

　当然、実力行使に出られれば、女医術士ナースのナツコはベティに敵かなうべくもない。というか、ナツコに限らず、ベティを打ち負かすことのできる者はそういないだろう。たとえば、さっき怒ど鳴なったダリエロだって、本気でベティとやりあったら、犯ヤる前に殺ヤられるのがオチだ。

　そうなると、ナツコの頼たのみの綱つなは姉しかいないわけだが、ナツコにしがみつかれ、盾たてにされたヴィクトリアは、体格と反比例してそうとう気弱ではあるが、必ずしもいつもいつも妹を甘やかしてばかりの姉ではなかった。結果的にはそうなるとして

も、妹に物事の理非を説こうとする分別くらいはあった。

「な、ナツコちゃん、だ、ダメだよ。ちゃんとベティに謝って。人には言っていいことと、悪いことがあるの。ナツコちゃんも、もう子供じゃないんだから、わかるでしょ……？」

「何よぉ。姉さんベティの味方するわけ？　たった一人の血を分けた妹なのにぃ。ナツコ、姉さんの服とか作ってあげてるし、髪だってきれいに染めて、毎朝ブローしてあげてるし、それなのにベティの肩かた持つのぉ？　ひっどーい」

「そ、それは……だ、だけど、この恰かつ好こう、わたし、恥はずかしいのに、無理やりさせてるの、ナツコちゃんだし……」

「えー？　姉さん、フリフリとか昔から好きじゃん。いーんだよ？　背おっきいからって、遠えん慮りよしなくても。自分が好きな服、着ればいーんだって。それに、ぜんぜん変じゃないよ。かわいいよ？　ねー、カイ。姉さん、似合ってるでしょぉ？」

「う……あ、ああ」

　はっきりいって、似合うとか似合わないとか、カイにはよくわからない。愛用の鎧よろいにしても、行きつけの武具屋で偶ぐう然ぜん顔をあわせたデザイナーだか何だかが、是ぜ非ひに、と頼みこむものだから好きに作らせて、金はいらないと言うし、物は悪くないから使っているだけだ。従って、否定するだけの論ろん拠きよも見あたらないので、うなずいてしまったのだが、どうもナツコにうまくのせられたかんじがする。げんに、ヴィクトリアはナツコを諌いさめようとしていたことなどすっかり忘れ、しきりと自分の衣類を気にしている。

　とはいえ、そんなことでごまかされるほど単純な人間ばかりではない。

　呆あきれ顔で肩をすくめてみせたベティは、ため息まじりで軽く逆ぎやく襲しゆうした。

「まったく、ユルユルのガバガバ女には付き合ってられないわ」

「ナツコ、ユルユルじゃないもん！」

「どうだか。これ、べつにあたしの想像じゃなくて、伝聞よ」

「んだとぉ？　どこの短小早そう漏ろう野や郎ろうだよ、そんな噂うわさ流しやがったの！　教えろベティ！　クソッタレがぁ、そいつのキ×タマ握にぎりつぶしてチ×コ引っこ抜ぬいてやる！」

「……な、ナツコちゃん、だ、ダメだよ、女の子なんだから、人前で大声でそんな……」

「だってさぁ！」

「ヴィクトリアも大変ね。妹の品性が下劣だと」

「あぁ？　てめ、ナイチチニセチチの分際で偉えらそうなことぬかしてんじゃねぇぞ？　やんのかこら？」

　ちなみに、昼ラン飯チタ時イムの男たちについていえば、よほどのことがない限りナツコと寝ねることはないらしい。皆みな、ナツコの本ほん性しようを知っているからだろうが、それにしても懲こりない女だ。

　ベティの顔から血の気が引いて、冷気に似た威プレ圧ツシ感ヤーが全身から発せられている。その手が腰こしにつるしてある魔導王時代の秘宝〝魔ドレツ術ドスタ士ーズ・のフア剣ング〟グリギュエンルの柄つかにのびた。よくない兆ちよう候こうだ。大きな魔術がきそうな予感がする。だとすると、危ないのはナツコだけではない。カイやヴィクトリアまでもが巻きこまれかねない。カイは慌あわてててヴィクトリアの手をとり、立ち上がらせて逃にげようとしたが、その前に黒衣の男がすっと割って入ってきた。

「ベティ、じゃれあうのはあとにしろ。後始末はＳｍＣの方々に任せてボクらは退ひくヨ」

「……アジアン」

　切り替かえが早いのもベティだ。ベティは忌いま々いましげにナツコを一いち瞥べつして、軽く頭を振ふっただけで、平素と変わらない態度に戻もどった。

「了りよう解かい」

「ね～えぇ、アジアン、ベティったらナツコのこと本気で殺そーとしてたんだよぉ？　信じらんなくない？　仲間なのにぃ。ナツコ、怖こわかったぁ」

　すかさずナツコがアジアンにしなだれかかろうとしたが、毎度のことながら、この試みは叶かなわなかった。アジアンは巧たくみに身をかわしてナツコと距きょ離りをとり、冷え冷えとした薄うす青あお色の目をわずかにすぼめた。

「ナツコ。キミは負傷者の手当てをヴィクトリアにやらせて、自分はほとんどサボっていただろう。そのうえボクの命令も聞けないのか」

　ナツコは凍こおりついたように身をすくませ、上うわ目め遣づかいでアジアンをうかがって、ごめんなさい、と頭を下げた。本当に反省しているのかどうかはあやしいところだが、常つね日ひ頃ごろナツコはアジアンをただ一人の本命だと公言して憚はばからない。アジアンに叱しつ責せきされるのは、ナツコにとって、姉との深刻な喧けん嘩かほどではないにしても、それなりにこたえるようだ。

　アジアンは、悄しよう然ぜんとしている──少なくとも、そう装よそおっているナツコにはもう目もくれず、カイを見て少しだけ口くち許もとをゆるめた。

「カァイ。いつものことだが、飢うえた男どもが大勢いるんだ。気軽にそういう恰好になるのはどうかと思うヨ」

「うるさいな、お前までそんなことを……」

　でも、おかしい。

　奇き妙みようだ。

　いったいどうしてしまったのだろう。

　アジアンの視線を感じた途と端たん、なぜだかカイは胸がどきどきして、顔が熱くなった。手が勝手に動いて胸のあたりを隠かくし、早く胴どう着ぎを、鎧を着けないと、そんなふうに焦あせっている自分に気づいて愕がく然ぜんとした。

「……き、着ればいいんだろ！　着れば！　くそ、いちいち面めん倒どうくさい！　生理とかうざったいし、いいことなんて一つもない！　なんで女なんかに生まれてきたんだあたしは！」

　カイは大急ぎで胴着を拾いあげて腕うでを通した。

そうだ。

もし、自分が男だったら。

相手が男なら、アジアンはもう少し心を開いてくれるだろうか。包つつみ隠さず何でも話してくれるだろうか。それとも、関係ないのか。どちらにしても、自分などではアジアンの相談相手にもなれないのか。ベティみたいに頭がよくないからか。だから頼たよりにされないのか。胴着を着ながら、そんなことを考えていた。

3

エルデン第三区には、新旧大小さまざまな集合住宅が建ち並んでいる。昼ラン飯チタ時イムのアジトは、その中に紛まぎれている頑がん丈じようさだけが取とり柄えといった感じの四階建てだ。一階が丸ごとオトミという婆ばあさんがやっている定食屋「n'ebula」で、そもそも彼女が建物自体の持ち主だから、仲間内ではだいたいその名前で呼ばれている。

オトミ婆さんが餌えさを与あたえるせいで、n'ebulaは昼ラン飯チタ時イムのみならず近きん隣りんの野の良ら猫ねこたちの本ほん拠きよ地ちだ。中には餌の時間以外はほとんど建物内から出ず、半ば飼い猫と化している猫もいる。そうした猫たちと昼ラン飯チタ時イムの暇ひま人じんがつどい、駄だ弁べる場所として、n'ebula四階の四部屋をぶち抜いて造られた大部屋ホールだが、最近は朝から晩までどの時間帯も人間より猫のほうが多い。

いつからだろう。

古参のクラニィが死んで、そのことにまつわる噂や憶おく測そくが仲間内で囁ささやかれるようになり、突とつ然ぜん、アジアンがＳｍＣとの正式な同盟締てい結けつを宣言したころからか。

あれ以来、昼ラン飯チタ時イムはおかしくなりはじめた。

それまでは、どこかのクランと一ひと悶もん着ちやくあろうと、ＳｍＣとの間で非戦の密約を取り交かわそうと、アジアンがどこの馬の骨とも知れない、小こ娘むすめみたいな小こ僧ぞうにうつつを

抜かしているらしいなんていうとんでもない話で持ちきりになろうと、昼ラン飯チタ時イムは昼ラン飯チタ時イムだったのに。

　今は違ちがう。

　安心して一いつ緒しよに昼飯を食える。その程度の結びつきとはいえ、皆みな、大事にしていたはずの何かが壊こわれかけている、とまでは言わないが、以前はなかったよそよそしさのようなものを感じることがままある。

　いや。

　やはり、壊れかけているのだろう。

　実際、この約一巡じゆん月げつで五人も抜ぬけた。

　ある者は置き手紙を残して姿をくらまし、ある者は面と向かってアジアンに不満をぶつけて去り、またある者は「潮時だ」とか何とか恰かつ好こうつけたことを言い残して、だが、本当に寂さびしそな背中をn'ebulaに向けて去っていった。カイの知る限りにおいては、今までかつてこんなことはなかったのだ。余よ所そはどうか知らないが、昼ラン飯チタ時イムは人の出入りが激しいクランではない。とくに、出るほうはきわめて少ない。ここ数年でも、やむにやまれぬ事情があって仕方なく、皆に見送られつつエルデンを出た者が一人、二人いたくらいだった。

「……アジアンめ」

　あいつのせいだ、とカイは思う。あいつの態度が、皆を惑まどわせて、動どう揺ようさせている。

　たとえば、クラニィの死について、カイはアジアンから直接、聞かされたわけではない。教えてくれたのはベティだ。どうやらアジアンは、クラニィと同じくらい古株のリキエル、ローガン、ダリエロとベティだけに自分の口で説明したらしい。そんなやり方ってあるか？

　昼ラン飯チタ時イムでは、目印というか旗印であり、クランを一つの体と見なした場合の頭である頭領マスターのアジアン以外は皆、平等だったはずだ。べつにそうしたルールが明文化されているわけではないが、他ほかの誰だれでもない、アジアンがずっとそうしてきた。だから、誰もがそう思っていた。それなのに、どうして

今さら区別する？

　アジアンは、皆をどこかに集めて、そこでちゃんと、きっちり言うべきだった。自分がとんだへまをしたせいで、クラニィが殺されてしまったあげく、やつらと手を組むしかなくなったのだと。そうしていたら、もっと違っていただろう。少なくとも、こんなわけのわからない状じよう況きようには陥おちいっていなかったはずだ。そんなふうに考えている者は、おそらく少なくあるまい。

　けれども、カイ自身、なぜだか思っていることを率そつ直ちよくにアジアンにぶつけることができない。最近、頻ひん繁ぱんにＳＩＸのもとへと足を運んでいるらしいアジアンと、顔をあわせる機会自体が少ないからか。それもあるのかもしれないが、それだけはないだろう。

　アジアンは変わった。

　昔から、どんなに近くにいても遠くにいるような、そんな雰ふん囲い気きのある男だったが、このごろはさらにはっきりした壁かべのごときものを感じる。

　何というか、以前は無意識に他人を遠ざけているかのようだった。

　でも、今は意識的に他人から距きよ離りをとって、遠ざかってゆこうとしているみたいで──、

「アジアンめ」

　苛いら々いらする。

　カイはソファに腰こしをうずめたまま、さして高くない天てん井じようを見上げた。

　大部屋ホールは、広さと日当たりだけは十分以上だが、床ゆかも壁も天井も合成コンク骨材リートが剝むき出しで、飾かざり気の乏とぼしい部屋だ。ソファやらカウンターテーブルやら椅い子すやらの家具も、どこからか適当にかき集めてきたものばかりだから、統一性も糞くそもない。人がたくさんいればそうでもないのだが、猫ばかりいる現状では、やけにがらんとしているような印象を受ける。

　なんだか今の昼ラン飯チタ時イムみたいだ。

「……アジアンめ」

「さっきから、アジアンアジアンって、どうしたのよ」

　声をかけてきたのは、カイが座っているソファのはす向かいに置かれたソファに腰かけて、膝ひざの上の三毛猫を撫なでているベティだった。大部屋ホールにいる人間は、そのベティとカイ、それから窓まど際ぎわで二本の大たい剣けんを手にごくゆっくりと型をなぞっているリキエルだけだ。

「もしかして、恋こい煩わずらい？」

「はあ？」

　カイは思わず身を乗りだしそうになった。

「──ばっ、馬ば鹿か馬鹿しい。くだらなすぎて、怒おこる気にもなれない」

「顔、微び妙みように赤いわよ」

「お前がわけのわからないことを言うから、頭にきてるんだ！」

「怒る気にもなれないんじゃなかったの？」

「う、うるさいな！　違う、そういうことじゃなくて……だいたい、お前は！」

　クラニィのことを、アジアンの口から直接、聞いたじゃないか。

　カイはそう言いかけて、口をつぐんだ。だから、それがどうしたって？　不公平だとか、ずるいとか？　そんな、嫉しつ妬としているわけでもあるまいし──嫉妬？

「ああ！　もう、何なんだ、いったい！」

「こっちがききたいわよ」

「きくな！　きかれて答えられるくらいなら、こんなふうになってない！　利口なお前に、あたしの気持ちなんかわかってたまるか！」

「そうね」

　ベティは猫ねこを撫でる手を止めて、一つ息をついた。

「人の気持ちはわからない。たまにわかったような気がするだけで」

「……何だよ、いきなり」

「アジアンのことじゃないの？」

　何のかの言って、ベティは人の頭の中を見通しているとしか思えない。それとも、ベティのように脳みその中が永久迷宮化している複雑怪かい奇きな女にしてみれば、カイみたいに単純な人間はわかりやすすぎるのか。

　いずれにせよ、この期ごに及およんで否定しても無ぶ様ざまなだけだろう。

「ベティ、お前は……どう思う」

「どうって」

「あいつのやっていることだ。やり方っていうか。変だろ。みんな、不安がってる。このままだと、昼飯時うちはばらばらになる」

「そうかしら」

「ならないって、お前は思うのか」

「それ以前に、ばらばらになろうとなるまいと、あたしにとってはどうでもいいから」

「何だと……？」

　ベティの言葉は自分でも驚おどろくほどカイの胸をかき乱した。

　昼ラン飯チタ時イムがばらばらになる。

　そんなことになってしまったら、どうなる？

　ともに戦い、ときに喧けん嘩かもする仲間がいなくなって。帰る場所がなくなって。もともと一人きりだったのだからべつに平気だ

なんて、とうてい言えない。

　怖こわい。

　失うことがこんなに恐おそろしいなんて、信じられない。

　身み震ぶるいしたカイを見て、ベティがそっと笑った。

「誰が抜ぬけても、離はなれていっても、あたしの昼ラン飯チタ時イムはここにあるもの。あたしは何があってもアジアンから離れるつもりはないし。あいつは昼ラン飯チタ時イムの象しよう徴ちようだから。ようするに、あいつがいる限り昼ラン飯チタ時イムはなくならないわけでしょう。あいつはそう簡単に死ぬタマでもないしね」

「でも……最近のアジアンは変だ。みんな、それで──」

「それで、前と何か違ちがうから、状じよう況きようが変わったから、何？」

「何、って」

「そんなことで放ほうりだしてしまえるのなら、所しよ詮せん、最初から大切じゃなかったってだけのことじゃないの。それはそれで仕方のないことよ。出る者は出ていく。残る者は残る。なるようにしかならない。カイ、あんたはどうなの？」

「あたしは……」

　振ふり返ってみると、自分がどうするのかなんて考えたこともなかった。自分が昼ラン飯チタ時イムから出るなどという選せん択たく肢しは、あまりにも非現実的すぎて想像することさえできない。だって、そんなことは万が一にもありえない。

　つまり、カイもベティと同じなのだ。

　ただ、見知った顔が一人いなくなって、二人抜け、仲間たちが微妙に浮うき足立っている。それでいて、そのことから目をそらしているかのように、皆みな、一応、アジアンに従いながらも、どこか空々しい。アジアンとどう接したらいいか、決めかねているみたいだ。

　カイは単にそれが嫌いやなのだ。

　なんだかはっきりしない仲間たちが、アジアンが、気持ち悪い。

　もやもやした空気が不快だ。

　何よりも、その空気に取りこまれて、身動きのとれない自分自身がもどかしい。

　足を組み、膝ひざに頬ほお杖づえをついて窓まど際ぎわに目をやると、リキエルが指立て伏ふせをしていた。

　片時も白い仮面を外さないこの巨きよ漢かんは、常に筋骨逞たくましい赤しやく銅どう色いろの上半身を外気にさらし、暇ひまがあれば剣けんの訓練やら筋トレやらに励はげんでいる。かといって、脳まで筋肉でできているような単たん細さい胞ぼう生物かというと、そうでもない。多弁なほうではないが、あれで意外と博識だったりするし、頑かたくななまでに一本気ではあるけれど、自分の生き方以外のことについては結構思し慮りよ深くて理性的だったりもするし、常識的な男でもある。もちろん、いつもあの仮面を着けたままで、真冬でも上半身裸はだかという点をのぞけば、だが。

「リキエル」

　カイに名を呼ばれたリキエルは、指立て伏せから右手の人差し指と親指を支えにしての倒とう立りつへと移行した。

「何だ」

「……相変わらず、人間離れしたことを軽々とやってのけるな」

「日々の鍛たん錬れんの成果だ。で、何だ」

「ああ」

　カイは安心したかったのかもしれない。たぶん、ベティとリキエルは、昼ラン飯チタ時イムの中でも鉄てつ壁ぺきだ。少なくとも、この二人だけは何があっても揺ゆるがない。自分だって同じだと思いたいが、こんなにも落ちつかない。自分は絶対ずっとここにいるんだと叫さけんでみても、手足をもがれてしまったら、どんなに心こころ許もとないだろうと怯おびえている。

「リキエル、お前は……どうだ。たとえば、これから何人抜けても、お前はここで同じように、そうやって筋トレしてるつもりか」

「ここかどうかはわからないが」

　そこまで聞いて、まさかリキエルまでも、と唇くちびるを噛かんでしまったのは、神経が過か敏びんになっているせいだろう。

　実際は、リキエルには珍めずらしく、冗じよう談だんを言っただけだった。

「オトミ婆ばあさんに追いだされるかもしれないからな。だが、俺はこの身が果てるまでアジアンから離れることはない。あいつに敗北した日、俺は〝彷ワ徨ンえダるリ星ン神グソオル〟にそう誓ちかった。それに、俺はあいつが好きだ」

　リキエルがそんな台詞せりふを臆おく面めんもなく口にできてしまうのは、きっと仮面のおかげに違いないとカイは思う。

　好き、か。

　好き。

　それは──カイだって、アジアンのことは好きだけど。

　だって、好きか嫌きらいでいえば、当然、好きに決まっているじゃないか。アジアンだけでなく、全員とはいわないものの、仲間たちのことはそれぞれ好きだ。虫の好かないやつも中にはいるが。ナツコとか。ダリエロとか。でも、アジアンに対する感情は、少し違うような気もする。やはり、頭領マスターだからか。

　アジアンは特別だ。アジアンがいないと、昼ラン飯チタ時イムは成り立たない。昼ラン飯チタ時イムの中には、仲のいい者同士もいれば、ほとんど口をきかない者同士もいるが、全員、アジアンとは何らかの接点がある。それがすべてではないとしても、皆を昼ラン飯チタ時イムに繫つなぎ止めているものを一つだけ挙げるとしたら、やはりアジアンの存在ということになるだろう。何かを共有しなければ一つ所に収まっていられないのかといえば、必ずしもそんなことはないのかもしれないが、何しろいろいろなやつがいる。いすぎるくらいだ。共通の話題すらほとんど持てないことが多い。それでも、皆、アジアンのことは知っている。あいつはあれだよな、と話して盛りあがることくらいはできる。アジアンは昼ラン飯チタ

時イムの象徴であり、要かなめだ。そのアジアンに不信感を抱いだく者は、昼ラン飯チタ時イムにいられない。

　ベティはまったくもって正しい。

　出てゆく者は出てゆく。残る者は残る。いったいどうなるのか、なんて考えても無む駄だだ。どうせなるようにしかならない。明日になればわかることだ。

　その今は見えない明日を、カイは恐おそれていて、ベティやリキエルは泰たい然ぜん自じ若じゃくと待ちかまえている。

　アジアンはどうなんだろう？

　ふと、そう思ったときだった。

　慌あわただしい足音がして、大部屋ホールのドアが開いた。

　大部屋ホールに駆かけこんできたのは、極きわめつきの悪相と表現するしかない顔の男だった。

「ベティ、カイ、リキエル。やっぱりここにいやがったか」

　こだわりなのか、ダリエロは色、形が左右非ひ対たい称しようの衣類や防具を好んで身につけている。よく見ると、瞳ひとみの色も左右で違ちがい、右は青で左は黒だ。髪かみの毛は老人みたいな白はく髪はつだが、頭髪がぜんぶ白くなるほど年をとってはいないだろう。

「てめぇら、全員ちょっとこい。手ぇ貸してくれ」

「突とつ然ぜん、何だ」

　カイはそう問いながらも、すでにソファから腰こしを浮うかせていた。手を貸せ、ならともかく、貸してくれ、なんて。ダリエロがそんな言い方をすることはめったにない。というよりも、今まで一度も聞いたことがない。それだけでなく、もとから苦にが虫むしを嚙みつぶしたようなダリエロの面ツラが、今は苦虫の代わりに便所虫をのみこんでしまったかのようにゆがんでいる。

　これで察するなと言うほうが無理な話だろう。

何か大変なことが起こったのだ。

そうに違いない。

でも、まさか、そんなことが起こるなんて。

よりにもよって、彼だなんて。

「あの塵ゴミ屑クズ野や郎ろう」

ダリエロの色違いの両りよう眼めからは殺気すらほとばしっていた。

「ローガンが逃にげやがった」

4

もっとも、逃げた、という言い方はおそらく適切ではなかった。n'ebulaを飛びだしたカイは、ダリエロ、ベティ、リキエルと別れてから五分もしないうちに、少し頭髪が薄うすくなりかけていて、ずんぐりした中年男の後ろ姿を見つけた。

「ローガン！」

呼び止めると、ローガンは散歩の途と中ちゆうのように立ち止まり、振ふり返って相好を崩くずした。

「やあ、カイじゃないか。どうしたのさ、大声を出して」

「どうした、って……」

カイは気が抜ぬけてしまい、やや覚おぼ束つかない足どりで、それでもなんとかまっすぐローガンに近づいていった。逃げられそうな気はしなかったし、実際、ローガンは逃げなかった。警けい戒かいするそぶりさえ見せなかった。もともと、人のよさそうな笑え顔がおを浮かべたまま、挨あい拶さつ同然の気軽さで人間の喉のど笛ぶえを掻かき切ってしまう物ぶつ騒そうな男ではあるのだが。

「お前──」

　けれども、こうして目の前で笑っている姿を見ていると、とうてい信じられない。

　この男がついさっき、退屈ボーリン野郎グマンからの帰り際ぎわに、昼ラン飯チタ時イムから抜ける旨むねをアジアンに伝えたばかりだなんて。

　ダリエロはn'ebulaに戻もどってからそのことを他ほかの仲間から耳打ちされ、口止めした上で、カイたちにローガンの捜そう索さくを手伝うよう求めたのだった。

「……本当、なのか」

「ん？　ああ」

　ローガンは少なくなってきた頭髪を愛いとおしむように、右手で頭頂部を撫なでた。

「そのことか。うん。本当だよ。アジアンには言ってあるし、もう二度とn'ebulaに顔を出すことはないだろうね」

　膝ひざの力が一気に抜けて、立っているのがつらくなった。

　ローガンは、リキエルや死んだクラニィ、ダリエロ、ベティと同じく、昼ラン飯チタ時イム創設以来のメンバーだ。とりわけ、カイをふくめた若い連中にとって、クラニィは皆みなの兄貴分で、それより年長のローガンは父親みたいな存在だった。肉親を知らないカイは、兄も父もよくわからないのだが、なんとなくそういうものだと思っていた。

　クラニィは、いつも落ちついていて、懐ふところが深くて、口ではどう言おうとお節せつ介かいなくらい面めん倒どう見みがよくて、やさしい、とにかく頼たよれる男だった。

　一方のローガンは、生まれつきの殺人者だが、常識人のふりをするのがうまくて、仲間は殺さず、傷つけず、笑みを絶やさず、何か揉もめ事でもあればすぐに仲裁に入ってくれた。

　その片方が欠けただけでも、昼ラン飯チタ時イムがこうむった打だ撃げきはとてつもなく大きかった。

　それが、もう片方も失われようとしている。

　カイはしばらく言葉が出てこなかった。拳こぶしをきつく握にぎりしめ、痛いほど下した唇くちびるを噛かんで、ようやく、どうして、と、それだけ言った。

「理由かい。うーん……そうだね、一口では説明できないんだけど……」

　ローガンは眉まゆを八の字にして、困り果てたように唸うなった。

「──まあ、おれがいても、みんなに迷めい惑わくをかけるだけのような気がしてね。クラニィもいなくなっちゃったしさ」

「クラニィがいなくなったからって、なんで迷惑になるんだ」

「カイ。おれはクラニィがいなかったら、きみの仲間になんてなることは決してなかった。どこかできみを殺すか、それとも、きみに殺されてたかもしれない。そういう男だよ。アジアンはそのことをよくわかってくれてる」

「あたしは……あたしには、わからない！」

「わかってもらおうとは思わないよ。認めてくれと言うつもりもない。ただ、おれを止められるなんて考えないほうがいい」

　ローガンはゆっくりと、だが、なぜか絶対に反応できないタイミングで、カイの肩かたに手を置いた。

　n'ebulaから急いで出てきたカイは鎧よろいを身につけていない。肌はだ着ぎの上に胴どう着ぎを着ているだけだ。つまり、その気になれば、ローガンはカイを殺すことができたということだ。

　笑顔のままで。

「自分でも不思議なんだよ。クラニィが生きてたときは、仲間を手にかけようなんて考えたこともなかったのにね。でも、今はさ。こうしてると、きみの血がどんな色をしてるのか、そんなことばかりが頭に浮うかぶんだ。きみを殺したいわけじゃないよ。いや、殺したいのかな」

「……ローガン」

「おれにもよくわからなくてね。だから、さ──」

「だから、何だ」

　突とつ然ぜん、何者かの手が後ろからローガンの肩をつかみ、力任せに振り向かせた。

　カイとローガンの声を聞きつけて、こっそり忍しのびよってきていたのか。

　ダリエロだった。

　悪あく趣しゆ味みなことに、この男は気配を消して人の背後をとるのが好きで、得意でもある。

　そして、そんな芸当以上に得意としているのが、おのれの力で思うままに相手を叩たたきのめして、ねじ伏ふせる、暴力だ。

「だからどうしたってんだ、ああ……！」

　ダリエロはローガンの頬ほおを殴なぐるだけにとどまらなかった。量の少ない髪かみの毛を引っつかんで、膝ひざに突つき下ろすような蹴けりをくれ、さらに腹部に膝をめりこませた。

「このゲテモノ野や郎ろうが！　てめぇ、さっきまで俺と一いつ緒しよに酒飲んでやがっただろうが！　ニヤニヤしてよ！　何事もねぇみてぇなツラで！　それが逃にげるだと？　冗じよう談だんじゃねぇ！　逃がすかよ、塵ゴミ屑クズが……！」

「や、やめろ、ダリエロ！」

　カイは慌あわてて二人の間に割って入ったが、ダリエロはそんなことを気にするような男ではない。思いきり突き飛ばされたカイが態勢を立てなおしている間に、ぶっ倒たおされ、下腹に爪つま先さきを見み舞まわれて、顔面をさんざん蹴飛ばされたローガンは、みるみるうちに血ち塗まみれになった。

「ふざけるな！　てめぇ、こんなときにケツまくるなんざ、許さねぇぞ！　許さねぇ！　俺は認めねぇ！　俺は、てめぇが！　てめぇが！　てめぇが、どれだけ……！」

「──ダリエロ……！」

　背中にしがみつくようにして再び制止しようとしたカイを、だが、ダリエロは振ふり払はらおうとはしなかった。そのままだった。ダリエロは地面に転がったローガンをむちゃくちゃに蹴りつづけた。ローガンはたまに呻うめき声をもらすだけで、甘んじてそれを受けた。

「死ね！　いっそ、死んじまえ！　てめぇなんか死ね……！　糞くそが、糞が、糞が……！」

　やがて、言葉とは裏腹に、ダリエロの勢いは次し第だいに弱まっていった。そもそも、本当に殺す気なら、もっと効率的でダリエロに相応ふさわしい手段がいくらでもある。今ならローガンも黙だまってダリエロに殺されてやるかもしれない。根こん拠きょはないが、なんとなくカイにはそう思えた。

　ようするに、去ろうとしているローガンをどうしても行かせまいとしたら、息の根を止めるしかないということだ。

　当然、それは中ちゆう途と半はん端ぱな死ではなく、完全な死でなくてはならない。

　クラニィと同じような。

　ダリエロは疲つかれ果てたようにがっくりと肩を落とした。

「放せ」

　らしくない、泣いているみたいな声だった。

　カイが腕うでをほどくと、ダリエロはローガンに背を向けて地面に座りこんでしまった。

「――てめぇのことなんざ……もう知らねぇ……死ね……」

「そう……」

　これだけこっぴどくやられておきながら、すぐにむくりと起き上がってみせるあたりが、ローガンという男の得体の知れなさだ。顔面がひどくゆがんでいるせいで、さすがに喋しやべりにくそうではあるが。

「おれが……死ねばよかった……クラニィじゃなくてね。だって

さ……クラニィは……必要な男だった……昼ラン飯チタ時イムに……アジアンにも……もちろん、おれにもね……」

「お前だって」

　どうしてだろう。目頭のあたりが熱い。胸がむかむかする。声が震ふるえそうになる。なんでこんなことになってしまったのか。カイは絞しぼりだすように、叩きつけるように叫さけんだ。

「お前だって、必要だ……！　あたしたちの、仲間だ！」

「カイ……」

　ローガンは何か答えようとして、力なく首を振った。

「──ああ……そうだ、これを」

　そして、ほとんど原形をとどめていない顔で、それでも無理に笑ってみせ、上着の懐ふところから何かとりだしてカイに差しだした。

「一つ、頼たのまれてくれないか、カイ……頼めた義理じゃないけどね」

「これって」

　ローガンから渡わたされたのは、薄うすっぺらい黒い金属片へんと、複雑な形状の鍵かぎのようなものだった。何度も見たことがある。第四区にあるオメガバンクの個Ｉ人Ｄ認カ識ー票ドと貸金庫の鍵だ。

「おれの財産だよ。いくつか……いい値段がつきそうな品物もある。クラニィの女にょう房ぼうに渡して欲しいんだ。これから家に寄って、自分で渡そうと思ってたんだけど……このざまじゃあね。ジョゼとユーリィをびっくりさせちゃうからさ」

「でも、お前だって金は」

　そう口走った瞬しゅん間かんだった。カイは、すでにローガンとの別れを受け入れようとしている自分がいることに気づいた。その事実を前にして呆ぼう然ぜんとしている間に、ローガンはゆっくりと立ち上がり、もう立ち去ろうとしていた。

「金は王立銀行にもあるし、当分不自由はしないよ。じゃあ、カイ。悪いけど、頼む」

　それだけだった。

　ローガンは散歩にでも出かけるように行ってしまった。カイは声をかけることもできず、その後ろ姿が見えなくなるまで、ただ立ちつくしていた。ダリエロが唾つばを吐はいて小声で何か言ったようだが、聞きとれなかった。

5

　クラニィの未亡人リリアと二人の娘むすめは、n'ebulaから二百メーテルほど離はなれた場所にある集合住宅の四階に住んでいて、カイも何度か訪おとずれたことがあった。

　チャイムを鳴らすと、ほどなくドアが開いて、髪かみの長い、全体的にやわらかい印象の女が出てくる、と思ったのだが、違ちがった。

「何だ、カイじゃないか」

　出てきたのは、リリアではなく、なぜかアジアンだった。

「キミがここにくるなんて珍めずらしいネ」

「……お前こそ、どうして」

　アジアンはその問いには答えず、首を振って中を示してみせた。

「何か用があってきたんだろう。入ったら」

「あ、ああ」

　どういうわけかアジアンに案内される恰かつ好こうで居間へ行くと、壁かべ際ぎわのソファに腰こしかけて赤子を抱だいていたリリアがカイを見て軽く頭を下げた。

「あら、カイさん、いらっしゃい。何のおもてなしもできませんけ

ど」

「い、いや……ええと、用がすんだら、すぐ帰るから」

　慣れない雰ふん囲い気きに戸と惑まどっているカイのすぐ横で、よちよち歩きで近づいてきた小さな女の子をアジアンが抱きあげた。やけに慣れた手つきだった。

「あーあん」

「ン？　ああ、ボクの名前を呼んでいるのかい、ジョゼ？」

「あーあん」

「フフッ、すごいネ。キミはどんどん言葉を覚えていく。そのうち、詩人にでもなるんじゃないのかな。ほら、ジョゼ、見てごらん。カイだ。カァイ。言ってみて」

「かーい」

　アジアンの腕の中で、ジョゼはカイを指さして、何度も「かーい」と繰くり返した。

　そんなふうに呼ばれると、カイも微笑ほほえんでしまったりして、やわらかそうなジョゼの頬ほおをつついてみたくなったりもしたが、ちょっと待て、というか、もっと待て、落ちつけ、考えろ、いったん考えてみないとよくわからないぞ、何なんだ、いったい、これは、この状じよう況きようは。まさか、アジアンが連れあいを失ったリリアと？　そんな馬ば鹿かな。

「アジアンは」

　まるでカイの胸のうちを見み透すかしたように、リリアが微笑んだ。

「よくジョゼとユーリィの相手をしにきてくれるんです。この子たちも、アジアンにはずいぶんなついていて」

「あ、なるほど」

　我ながら、なんだか間の抜ぬけた返事だ。カイは頭を掻かきつつ、ここはもうさっさと用件をすましてしまおうと考えた。

　だって、どうにもこうにも落ちつかないのだ。生活感があって、人が快適に暮らすために必要なものがそろっていて、生活のためだけなら不要な飾かざりがあって、あたたかみがあって、そんな人間らしい部屋というやつが、カイにとってはひどく居い心ごこ地ちが悪い。人間らしい暮らしどころか、親を知らず、兄弟もいない、家族のぬくもりというものをまったく知りもしないのだから、当然かもしれないが、そう、親が──親？

　カイはアジアンの横顔を見つめて、微かすかに下した唇くちびるを噛かんだ。

　そうだ。アジアンにだっこされているジョゼや、リリアに抱かれているユーリィの父親はクラニィなのだ。クラニィは死んだ。殺された。くわしい死に方までは知らないが、遺体は蘇そ生せい不可能な状態だったので、すでに火か葬そうされ、市外の墓地に埋まい葬そうされている。

　クラニィを殺したのはＳｍＣだという。

　アジアンがＳｍＣの下したっ端ぱを殺害したことに対する報復だったらしい。

　あえて言葉を飾らずに言えば、クラニィが死んだのはアジアンのせいだ。

　それなのに、クラニィの娘であるジョゼとユーリィは、ずいぶんアジアンになついているようだ。クラニィの女房であるリリアは、アジアンを快く迎むかえ入れているように見える。

　何だ、これは。おかしくないか？

　なんでアジアンは、リリアは、ジョゼは、ユーリィは、笑っていられるんだ……？

　そうとうひどい表情をしていたのかもしれない。ジョゼが顔を強こわ張ばらせてアジアンにしがみついた。

　カイは逃にげだしたくなった。たぶん、ここはあたしのいるべき場所じゃない。あたしの頭では理解できない。何がどうなっているのか。笑えない。笑うことなんて、できない。

「カイさん」

名を呼ばれて顔を上げると、リリアは赤子のユーリィをあやしていた。

「わたしはもう、他ほかの誰だれかと一いつ緒しよになるつもりはありません。この子たちの父親はあの人だけ。でも、欲張りかもしれないけど、わたしはこの子たちに誰よりも幸せになって欲しいの。幸せにしてあげたいの。わたし以外の笑え顔がおも見せてあげたいんです。わたし以外の人にも抱いてもらいたいんです。わたしが、それをアジアンに頼たのんだの」

カイはアジアンの様子をちらりとうかがった。

アジアンは笑っていた。ジョゼの背中をさすって、笑っていた。他人に触ふれられることを極きよく端たんに嫌いやがるアジアンが、笑顔を作っても薄うす青あおい瞳ひとみは冷たいままのアジアンが、目を細めて笑っていた。楽しそうに見えた。

「あの人は、誰かのせいで死んだんじゃない。誰かのために死んだんです。きっと、一番好きな人のために」

リリアも決して平へい坦たんな道を歩いてきたわけではない。あえて下手な詩めいた表現を試みれば、彼女は掃はき溜だめの中で奇き跡せき的てきにしおれず、ひっそりと静かに咲さいた花のような女性だった。

だが、リリアという名の花は、はかなく散ることを許されず、薄うす汚ぎたない手によって、乱暴に摘つみとられようとしていた。クラニィがアジアンの力を借りて救いださなければ、リリアは無残に手た折おられ、握にぎりつぶされていただろう。

そうしてこの血ち腥なまぐさい街で始まったクラニィとリリアのささやかな暮らしは、昼ラン飯チタ時イムの皆みなにとって、触れることも憚はばかられる宝石のごとき何かだった。二人の間に生まれたジョゼとユーリィは、きっと本物の宝石以上の何かだった。

「あの人、後こう悔かいしてないと思うわ」

今、クラニィを失ったリリアは、彼が残した大切なものを、必死に守ろうとしている。

後ろを向かずに。

前を向いて。

カイはローガンから託たくされたオメガバンクの個Ｉ人Ｄ認カ識ー票ドと貸金庫の鍵かぎをリリアに手て渡わたしたあと、勇気を出してユーリィを抱だかせてもらった。ジョゼとも少し遊んで、うまく笑ってみせようとしたら、ほっぺたをつねられた。とりあえず、名前は覚えてもらえたようだ。

アジアンを残して、一足先にクラニィの家をあとにするときには、二つばかり心の中で決めていた。

一つは、ジョゼとユーリィに会うため、またこの家を訪おとずれること。

もう一つは、何もかもをはっきりさせて、カイにとって居心地のいい場所を取り戻もどすための方策を実行に移すことだった。

6

翌日、ベティやリキエルらに手伝ってもらい、十時間ほどかけてn'ebulaの大部屋ホールにかき集めることができたのは、三十六名だった。ローガンの離り脱だつに影えい響きようされて、抜ける者がもっと出るだろうと予想したのだが、結局、後追いは三名にとどまったことになる。

今、大部屋ホールにひしめいている三十六名に、ベティとアジアンを加えて、三十八名だ。

一番多いときは四十八人いたので、ちょうど十人減った。

正しよう真しん正しよう銘めい、それが現在の昼ラン飯チタ時イムだ。

カイは、床ゆかに座ったり、寝ねそべったり、ソファに腰こしかけたり、壁かべにもたれかかって立ったりしている仲間たちを見まわした。

「あー……」

　むろん、いきなりこんなふうに集められて、おとなしくしているような連中ではない。皆、好き勝手にくっちゃべったり、金を賭かけて腕うで相ず撲もうやらカードゲームやらに興じたり、酒を飲んでいる者もいれば、何が原因か、喧けん嘩かをおっぱじめようとしている馬ば鹿かもいる。

「えー……」

　不安はあった。ありすぎるほどだ。これからやろうとしていることは、おそらく昼ラン飯チタ時イムの流りゆう儀ぎではない。うさんくさそうな顔をしている仲間たちもいる。その気持ちはわかる。

　それでも、カイはやるつもりだった。もう決めたのだ。その決意の表明として、カイはロイヤル・ガールの朱しゆと白の重ヘヴ装イメ甲タル鎧アー兜マーを着て、ＡＬＶの円形盾と明けモーニンのグ・明星スターで武装している。さすがに兜かぶとまではかぶっていないが、必要があれば実力行使も辞さないつもりだ。何はともあれ、まずはその点を強調しておくべきだろう。

「とりあえず、全員、黙だまれ。黙らないやつは粉ふん砕さいする」

「はーい」

　ナツコが挙手した。

「何だ」

「黙れとか偉えらっそうに言うけどぉ、あんたみたいな膜まく張はりっぱなし女にそんなこと命令する権利があるわけぇ？」

　すかさずナツコに同意する声がいくつもあがり、ヴィクトリアがひかえめに妹を叱しかった。

　だが、まあ、この程度なら予想の範はん囲い内だ。

「権利なんて関係ない。ただ、あたしは、黙れ、さもなくば粉砕すると言っている。粉砕されたくないのなら、黙れ。そうでないのなら、好きにしろ。それだけのことだ」

「暴力ハンターイ！」

「それがお前の判断か。わかった。ヴィクトリアに治してもらえる程度に粉砕してやる。手が滑すべって頭が潰つぶれたら、ちゃんと埋まい葬そうしてやるから心配するな」

「……埋葬ハンターイ」

　途と端たんに小声になった。そのうちまた何か言いだすかもしれないが、どうせナツコは茶々を入れたいだけなのだ。かまっていられるか。放ほうっておけばいい。やかましくてうざったいだけの糞くそ羽虫、口だけナツコなんか問題にならないくらい厄やつ介かいで、何をしでかすかわかったものではない、よくよく警けい戒かいしなければならない相手が昼ラン飯チ夕時イムにはいるのだ。

　たとえば、ダリエロあたりがその筆頭格ということになるはずだが、やつは、しかし、意外なことに、邪じや魔まするどころか先をうながした。

「で、今日はどういう集まりなんだ。まさか、宴えん会かいやろうってんじゃねぇだろう」

「もちろん、違ちがう」

　たぶん、ダリエロという男は、生まれつき反はん抗こう心が強いというか、生きつ粋すいのひねくれ者なのだろう。ナツコのようにおもしろがって冷やかし半分にケチをつけるのではなく、何でもかんでもとにかく逆らい、突つっぱねずにはいられない。そんなダリエロがこうまでおとなしいと、なんだかやや不気味ですらあるが、昨日の一件もある。やつはやつなりに、だいぶこたえているのかもしれない。

　何にせよ、ダリエロが喋しやべったあと、雑音の音量がぐっと下がったのはもっけの幸いだった。

「今日、お前たちに集まってもらったのは、確かめておきたいことがあるからだ」

　とはいっても、何もここまで静まりかえることはないだろうに。

　かえって話しづらい雰ふん囲い気きだが、カイは確信した。

　何だかんだ言って、皆みな、どうしてここに集められたのかわかっている。

　それはそうだろう。そうでもなければ、とくに人望があるわけでもないカイごときの呼びかけに、これだけの人数が応じてくれるはずがない。もしカイが言いださなくても、いずれ他ほかの誰だれかが動いただろうし、それが誰であろうと関係なくて、つまり、今の昼ラン飯チタ時イムに必要なものはただ一つ、きっかけなのだ。おそらく単なるタイミングの問題とか成り行きとかで、今回たまたま音おん頭どをとる役回りにあたったカイとしては、それを作るだけでいい。

「みんな、もう知っているだろうが、昨日、ローガンが抜ぬけた。それから、ギャンガーとデ・ペドロ、コリンの三人が、昨夜、そろってアジアンに脱だつ退たいを申し出たみたいだ。三人ともここにいないということは、つまり、そういうことだろう」

　当然、ギャンガーにしても、デ・ペドロやコリンにしても、個人的に親しくしていたと思われる者が、カイの知っている限りでも何人かいる。カイは彼らの表情をうかがってみたが、誰一人として目をそらしたりはしなかった。

「あたしはべつに、抜けていったやつらについて、何か言うつもりはない。正直、寂さびしいとか、どうしてだろうとか、そういう気持ちはある。でも、それは一人一人の選せん択たくだ。この中にも、抜けようかと迷っているやつがいるかもしれないが、しょうがないことなんだろう。そうしたければ、そうすればいいと思う」

　少しだけざわめいた。

「だけど──」

　カイはもう一度、全員を見まわした。

「今の状態じゃあ、みんなで安心して一いつ緒しよに昼飯を食えない」

　じつは、カイが前もって用意していた言葉はそれだけだった。

　自分なりに考えに考え抜いた結果、結局のところ、それしかなかったのだ。

「知ってる者も多いと思うが、あたしは鬼人オーガの谷で育った。そこでは、食料は奪うばいあいで、食い物のために殺しあう者もいた。鬼人オーガの谷が壊かい滅めつさせられて、人間の街に連れて

行かれてからも、誰かと飯を食うのは苦手だった。どうしても無防備になるから、すごく緊きん張ちようして。いつ襲おそわれるんじゃないかって、びくびくして。そんなことはないって、わかっていても、ダメなんだ。半分、本能みたいなものなのかもしれない」

　カイは深呼吸をして、天てん井じようを見上げた。

　目線を下げると、皆と目があった。

「お前たちだけだ。あたしが安心して一緒に飯を食えるのは」

　うなずく者はいなかった。首を振ふる者もいなかった。耳が痛いほど静かだった。

「──そう思ってた。でも、今は何だか違う。みんな、本音を言わない。誰かが何かするのを待って、それから動こうとする。お互たがいを探さぐるみたいな目で見てる。気がつけば、あたし自身もそうなんだ。誰も信じられない。そんな気分になって、苛いら々いらする。そりゃあそうだ。信じるなんて、ご大層なこと、簡単にできるはずがない。たとえば、あたしは鬼人オーガの谷で生きるために殺しあって、殺すことに快感を覚えるようになった殺人狂きようだ。こんなあたしのことなんて、誰が信じる……？」

「そいつを言ったら」

　ダリエロがどこか自じ嘲ちようめいた薄うすら笑いを浮うかべた。

「俺は盗ぬすむ犯す嬲なぶる殺すぜんぶ大好物だ。俺を信じる物好きなんざ、いやしねぇだろうな」

　次々と、悪いことは一通りやっただの、何人殺しただの、借金を作って女によう房ぼう子供捨てて逃にげてきただの、誰を裏切っただの、親兄弟を売っただの、きっと内輪以外の人間が聞いたら青ざめるようなことを、皆が口にしはじめた。

　むろん、全員が全員ではない。ただの旅行者あがりもいるし、リキエルのような純じゆん粋すいな戦士も、ベティみたいに筋目の正しい魔ウイ導ザー士ドもいる。ナツコは医術式の修しゆ行ぎよう中に兄弟弟で子しと寝ねまくって破門されたので、正式な医術士ではないし、それに巻きこまれた姉のヴィクトリアも妹と同じ身分だ。まともな国では、ちゃんとした医術士でないと開業できないから、

二人はサンランドに流れてきて、昼ランチ飯タ時イムに入ることになった。そういう者もいる。

　だが、元善良な一いつ般ぱん市民も、仲間内に元殺人者、あるいは現げん役えきの殺さつ人じん鬼きがいることは当然、承知している。そんなやつらと飯なんて食えるか、と思う者は、最初から昼ラン飯チタ時イムに入ったりしない。そうはいっても、人にもよるだろうが、皆が皆、とんでもない経歴を持つ人間を無条件で信用できるものではないだろう。

　昼ラン飯チタ時イムは奇き妙みょうな集団だ。

　互いを信しん頼らいしあうことなく、信じあっている。

　信用しているわけでもない連中と、安心して一緒に昼飯を食う。

　そのために、昼ラン飯チタ時イムにもルールがある。

　一つは、たまにみんなで一緒に昼飯を食うときは、必ず参加すること。

　一つは、仲間の過去をむやみに詮せん索さくしないこと。

　一つは、仲間を殺さないこと。

　それから、頭領マスターの命令には従うこと。

　そして、昼ラン飯チタ時イムへの加盟は頭領マスターを通してのみ行われる。

　カイをふくめた昼ラン飯チタ時イムの全員は、創設以来の面々をのぞけば一人の例外もなく、少なくとも最終的にはアジアンに声をかけられて、ルールを守ることを誓せい約やくした上で加盟した。

　皆、ボクはキミを受け入れる、とアジアンに言われて、昼ラン飯チタ時イムの一員となったのだ。

「昼ラン飯チタ時イムはアジアンだ」

　仲間たちの声がおさまってきたころあいを見計らって、カイはあえて断言した。

「アジアンを信じられないのなら、昼ランチ飯タ時イムを信じられない。仲間を信じることもできない。あたしだって、不満がないとは言わない。ある。たくさんあるさ。ありすぎて困るくらいだ。でも、不満があるなら、はっきりそのことを口に出せばいいんだ。糞くそＳｍＣの糞手下みたいな真ま似ねをするのは、たしかに腹が立つ。でも、そうしないとならない理由があるんだろう。きっと何かあるんだろう。そうやって想像してばかりいるから、何が何だかわからなくなってくるんだ。知りたいことがあるなら、黙だまっている必要はない、問い質ただせばいいんだ。それだけのことじゃないか」

　そうだ。

　あたしは何を迷っていたんだろう。

　こんなに簡単で、明めい瞭りようで、変わりようのないものが、この胸の中に息づいている。

　あたしはこれを抱だいて死ぬんだ。

　いつか、この想おもいを抱かかえたまま死んでいくんだ。

　──クラニィ。

　そうか。

　リリアの言うとおりだろう。お前は後こう悔かいしていないに違ちがいない。心残りはあるにしても。

　リリア。ジョゼ。ユーリィ。彼女らのことは心配だろうが、アジアンがいる。

　アジアンだけでなく、カイも含ふくめた昼ラン飯チタ時イムが、彼女らを守るだろう。

「クラニィはアジアンが殺したようなものだ」

　ありのままの事実を口にしてみると、呆あつ気けなく自分の気持ちに区切りがついてしまった。

　あとはそれをどう受け入れるかだ。皆みな、自分で決めればいい。あたしはもう決めた。

「でも、リリアが言っていた。クラニィはアジアンのせいで死んだんじゃない。アジアンのために死んだんだって。あたしは詭き弁べんだとは思わない。なぜなら、あたしだってきっとそう思うだろうからだ。あたしが死ぬときは、たとえどんな死に方をしようとも、昼ラン飯チタ時イムのせいで死ぬんじゃない。昼ラン飯チタ時イムのために死ぬんだ。あたしはアジアンを、昼ラン飯チタ時イムを信じる。お前たちはどうする？　それを確かめたい。いや、お前たち自身が、自分で、自分に、確かめて欲しい」

　返事は沈ちん黙もくだった。

　一分。

　三分。

　五分。

　正直、何人が去り、何人が残るのか、カイには見当もつかない。内心、不安もある。恐おそれもある。誰だれも彼もが自分のように単純ではいられないだろうとも思う。それぞれ、損得も考えるだろう。親友のクラニィを失ったローガンは、おそらくさんざん悩なやんだ末に、昼ラン飯チタ時イムを抜ぬけた。きっと抜けざるをえなかったのだろう。ローガンと同じ決断を下す者が、他ほかにもいるかもしれない。わからない。

　色々なことを考えれば考えるほど、心臓が破は裂れつしそうになる。

　カイは目を閉じて、思いきり息を吸いこんだ。

　大部屋ホールのドアが開く音がしたときは、本当に心臓が爆ばく発はつするかと思った。

「──アジアン……ベティ」

「あら、もしかして、ちょっと早かった？」

　舌をちろりと出して、しまった、という顔をしたベティの横で、アジアンはきょとんとしている。無理もない。アジアンには何も教えないで、もしいやがるようなら引っぱってでも連れてこいとベティには頼たのんでおいた。変に身構えられても困るし、各人の結論次し第だいではどう転ぶかわからないので、そうするしかなかっ

たのだ。

「何だヨ、これは。どういうことだい、ベティ」

「え？　ああ、それは……そう！　カイにきいて」

「カイに？」

「あ、あたしか！」

　矛ほこ先さきを向けられて、思わず叫さけんでしまったが、たしかに言い出しっぺはカイだ。説明する義務があるような気はするものの、どう言っていいものやら。もともと、口より腕わん力りよくでねじ伏ふせるほうが何百倍も得意だし、ぜんぜん整理がつかない。

「ええと、つまり、あたしは、だな……違う、そうじゃない、あたしたちは、何だ……ほら、あるだろ、何ていうか、どう言ったらいいのか、ええい、くそ！　だから……」

　それでもどうにか言葉を重ねようとしたのだが、やっぱり無理だ。だいたい、まだ皆の結論を聞いていない。それなのに何を話すべきかなんて、わかるはずもない。不可能だ。

「ああー！　もう……！」

　カイは頭を抱えてその場にしゃがみこんだ。

　それと入れ違いに誰かが立ちあがった。

　ダリエロだった。

　いや、ダリエロだけではない。

　大部屋ホールにいた者たちが、ぞくぞくと、先を争うように、一人残らず立ちあがって、皆、一いつ斉せいにアジアンを見た。

　これにはさすがのアジアンも、戸と惑まどいを通り越こして仰ぎよう天てんしているようだ。

　カイも驚おどろいていた。何だ、これは。何が始まろうとしているんだ。示しあわせていたわけでもないのに、いったいこれはどう

いうことだ。

「アジアン」

　口火を切ったのはダリエロだった。

　ダリエロはゆっくりと、足音を立てずにアジアンの真ん前まで歩いてゆき、首を傾かしげて顎あごをしゃくってみせた。

「手ぇ出しやがれ」

「手……？」

　昼ラン飯チタ時イムの中に、ダリエロに手を出せと言われて、おとなしく出す馬ば鹿かはまずいない。仲間を殺すことはないが、愉たのしみのために傷つけるくらいのことは平気でしてのける男だ。だいたい、アジアンは用心深い野生の獣けものみたいに他人を寄せつけず、ふれることも許さないような、少なくともそういう雰ふん囲い気きを漂ただよわせている。平気でアジアンの肩かたを抱いたり頭を軽く叩たたいたりするのはクラニィくらいだった。よくあんなことができるものだとカイは思っていた。クラニィは特別なのだろうとも。

　昼ラン飯チタ時イムにとって、クラニィの死はおそらく創設以来最悪の事件で、実際、それがきっかけで何人も抜け、クラン自体ばらばらになりかけていた。アジアンは平静を装よそおっていたが、まったくふだんどおりかといえば違った。ぜんぜん違っていた。

　アジアンはらしくない呆ほうけたような表情で、あっさり右手を差しだした。

　ダリエロが舌打ちをした。

「手て袋ぶくろぐらい脱ぬげ」

「あ、うん」

　あまつさえ、言われるがままに手袋まで外すなんて、アジアンはやっぱりおかしい。

　しかも、ダリエロもダリエロで、何のつもりか、その右手を自分の右手で握にぎった。

握あく手しゅだ。

ダリエロが誰かと握手をしているところなんて初めて見た。

「俺はべつに昼飯時ここが好きなわけじゃねぇ。ただ、他より嫌きらいじゃねぇだけだ」

アジアンは何も答えなかった。答えられなかったのかもしれない。

ダリエロは手を放すと、アジアンの脇わきをすり抜けてドアをくぐり、大部屋ホールから出る間ま際ぎわに言い捨てていった。

「婆ばあさんのとこで飯食ってくる。昼飯には遅おそすぎるけどな。まぁ、暇ひまなやつはあとできやがれ。ぜんぶアジアンの奢おごりだ」

「お……ちょっ、ダリエロ、いつボクが奢るなんて――」

「ケチクセェこと言いっこなしです」

と、ダリエロを追おうとしたアジアンの手を、すかさず別の者が握った。シュトレーハウゼンだった。自じ称しよう詩人の詐さ欺ぎ師しで、法ほ螺ら吹ふきで、両刀バイセク遣いシヤルの、元長弓兵だ。

「わたしみてェな者には、昼飯時ここ以外、行くところがねェもんで。これからもよろしくお願ねげェします」

大陸一の醜ぶ男おとこを自じ認にんするボダダグが、おれも他ほかに居場所なんかないからな、とシュトレーハウゼンにつづいた。しょうがないからいてやるよ、と偉えらそうに言い放ったのは、ボダダグに負けず劣おとらず不細工で化け粧しようが濃こい女装ドラッグ愛好者クイーンのチェリーだ。龍州人のミスター・毛モウは無言でアジアンと握手を交かわして不気味に微笑ほほえみ、毛モウと仲の悪い元凰州難民の雷ライ切キリは懐ふところからとりだした手て拭ぬぐいでアジアンの手を軽くふいてから握手をした。同じく元凰州難民で匂においフェチの祝ノリ花カは、握手したあとにアジアンの指先の匂いを嗅かいでうっとりしていた。

「生き方と死に方は自分で選びたいが、そのすべてがここにあるから、仕方ないな」

　そう言ったのは、顚てん聖せい虞ぐ出身の寂ジヤク星セイだった。昔、ユニオン・カバナの有名な賭博場カジノの支配人をやっていたという黒い肌はだのリー・ブラックは、アジアンと握手してから軽く抱ほう擁ようした。暗黒大陸出身のシャマニやリューヨルカも同じことをしたのは、それが彼らの習慣だからだろう。

　まあ、握手しつつ、愛してる、と熱っぽく囁ささやいて、抱だきつくばかりか、接せつ吻ぷんにまで及およぼうとしたナツコは、さすがにはねのけられていたが。

　ヴィクトリアは、限界を超こえているのではないかと思われるくらい背中を丸めて、なんとかアジアンとの身長差を縮めようと努力していた。長い前まえ髪がみに隠かくれて顔はあまり見えないが、アジアンの手を握ったヴィクトリアの手はものすごい勢いで震ふるえていた。

「ごめんなさい、アジアン……ナツコちゃんが、いつも迷めい惑わくかけて……」

　それから、ロロ。ミシーリャ。ヘンドリク。オーノ。ジャン・スタンバック。ラギィ。ドルゲイ。メツェルディ。キューレイ。ボンド。アルバート。ミョーチ。クルガイス。ポー。アンガルセン。サイケングレンマイセルヒ。トト。白シロ妙タエ。レイジ兄きよう妹だい。クララ。

　アジアンと握手をして大部屋ホールを出た者は、おそらく全員、オトミ婆さんの定食屋n'ebulaへと向かったに違ちがいない。オトミ婆さんの店には、昼ラン飯チタ時イムが全員で昼食がてら宴えん会かいをするくらいのスペースはある。オトミ婆さんと若い料理人が一人、それからほとんど住みついている常連のじいさんが一人いるだけで、じいさんはもちろん何の役にも立たないから、人数分の料理がそろうまでには少しばかり時間がかかるだろうが、待てばいいだけの話だ。

　結局、アジアンと握手をせずに大部屋ホールをあとにした者は、一人もいなかった。

　大部屋ホールにはもう、カイとベティ、リキエル、そしてアジアンしか残っていない。

「まあ」

ベティが腕うで組ぐみをして呆あきれたように一つため息をつき、がらんとした大部屋ホールを眺ながめた。

「もともと、よっぽどの物好きが残ってたってことかしらね」

「違いない」

リキエルは軽くうなずいて、あえてだろう、握手は求めず、アジアンの肩に馬鹿でかい手を置いただけだった。

「アジアン。俺はお前のために死ぬ誓ちかいを〝彷ワ徨ンえダるリ星ン神グソオル〟に立てている。俺の命が入り用なときはいつでも言うがいい」

アジアンは薄うす青あお色の瞳ひとみでぼんやりとリキエルの手を見つめた。ああ、と答えた蚊かが鳴くような声は、先に身を翻ひるがえしたベティの靴くつ音おとに半ばかき消された。すぐにリキエルもベティのあとを追い、ドアが閉まって──カイは大変なことに気づいた。

二人きりだ。

なんてことだ。

まるで魂たましいが抜ぬけてしまったかのような、いまだかつて見たことのないくらい無防備なアジアンと、二人きりじゃないか。

だが、二人きりだから、それがどうしたというのか。

今までだって二人きりになったことはある。べつになんでもなかった。何の問題もなかった。それなのに、なんで今回に限ってこんなに心しん拍ぱく数すうが上がっているのか。

「ボクは……」

不意に、アジアンが苦しそうに顔をゆがめて、かきむしるように胸に手をあてた。

「みんなが思っているような男じゃない」

カイは目を見開いた。手をのばしそうになった。一いつ瞬しゅん、馬ば鹿かなことを考えてしまった。アジアンを抱きしめてあげ

たい。そうしないと、アジアンが壊こわれてしまう。お笑い種ぐさだ。カイの力でぎゅっと抱きしめたりなんかしたら、それこそアジアンを壊してしまうだろう。しかも、この物々しい重ヘヴ装イメ甲タル鎧アー兜マー姿で。それ以前に、抱きしめるなんて。

「おい」

　気をとりなおして、アジアンに右手を差しだそうとしたが、手てつ甲こうが邪じゃ魔まか。手て袋ぶくろもいらない。まったく、内輪で話をするのに、なぜこんな恰かつ好こうをしてきたんだか。苛いら立だちながら、両手の手甲と手袋を外すカイを見て、ようやくアジアンはくすりと笑った。

「わ、笑うな！　粉ふん砕さいされたいか！」

「だって」

「いいから！　握あく手しゆしろ！」

「わかった、わかったヨ」

　アジアンの手はひんやりしていて、カイよりもずっと皮ひ膚ふのきめが細かいように感じた。

　なんだか少しみじめになり、すぐに放してしまいたかったが、放したくない。

　その気持ちを見み抜ぬかれたくなくて、カイは握手をしたまま、アジアンの目を睨にらみつけるように見み据すえた。

「あたしは……たとえお前が嫌いやがっても、お前から離はなれない。お前は昼ラン飯チタ時イムそのものだからだ。お前がいないと、昼ラン飯チタ時イムは成り立たない。お前がどういう男かなんて、関係ないんだ。だいたい、お前は勘かん違ちがいしてる。誰もお前をすごいやつだとか、偉い男だとか、そんなふうには思ってない。みんながお前のそばにいるのは、昼ラン飯チタ時イムが、お前が、す──」

　きだからだ、とつづけるつもりだったのに、いきなり顔から火が噴ふきだした。もちろん、本当に出火したわけではないが、最後まで言い終えるのはとうてい無理だった。カイはとっさに左手で顔の下半分を隠かくして、惜おしむ余よ裕ゆうもなくアジアンの右手を

放し、背中を向けた。



「と、とにかく！　そういうことだ！　早く行け！　婆ばあさんの店で、みんな待ってる！　今日はお前の奢おごりなんだから！」

「……ああ」

　アジアンが大部屋ホールから歩いて出てゆく音を、カイはじっと聞いていた。

　もういいかと思って振ふり返ると、いきなりドアが開いて、アジアンが顔を出した。

「カァイ。キミもきなヨ」

「い、行く！　すぐに行くから！　先に行ってろ！」

　再びドアが閉まって一人きりになると、どっと疲つかれが襲おそってきて床ゆかにへたりこんでしまった。

　顔が、熱い。

　アジアンと握手した右手も、熱い。

　アジアンの手は、つめたかったのに。

「──好き、か……」

　カイは両足を投げだして床に寝ね転ころび、右の掌てのひらを唇くちびるによせて目を閉じた。

　この右手はしばらく洗わないでおこうと思った。

　そう思ってはいても、たぶん、すぐに忘れて洗ってしまうのだろうけれど。

『薔薇のマリア Ver3 君在りし日の夢はつかの間に』了

あとがき

『VII』のあとがきで、『VIII』はしばらく本編で出番がなかったあの人メインのお話になる予定だと書きました。本巻は『VIII』ではありませんから、あの人メインのお話かというと微び妙みようです。ただ、ある意味、あの人を中心としたお話であるとも言えるかもしれません。『Ver』シリーズは基本的にすべてそうなのですが、本編を補完するというよりも、『薔薇のマリア』という物語を構成する、重要な、欠くべからざる要素の一つ一つとして書いています。『Ver0』に至っては実質的な１巻だとさえ言えます。本巻も、とりわけあの人を語るうえではなくてはならないお話なのですが、まあ、そんなことはどうでもよくて、とにかく単純に楽しんでいただければ幸いです。

　それでは、ＢＵＮＢＵＮさんをはじめ、本書の制作、出版、販はん売ばいに関かかわったすべての方々、そして今、本書を手にとってくださっている皆みな様さまへ、極大の愛と感謝をこめつつ、是美三々さんが愛たっぷりに描かいてくださった漫まん画が『薔薇のマリア①』もよろしくお願いします、とさりげなく宣伝して、筆を置きます。

十文字　青

カバー・口絵・本文イラスト / BUNBUN

デザイン / 朝倉哲也 + design CREST

MAP製作 / On Graphics

薔ば薇らのマリア Ver3

君きみ在ありし日ひの夢ゆめはつかの間まに

十じゅう文もん字じ　青あお

平成25年9月30日　発行

発行者　宍戸健司

発行所　株式会社角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見2-13-3

http://www.kadokawa.co.jp/

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『薔薇のマリア Ver3　君在りし日の夢はつかの間に』平成19年10月1日初版発行

平成20年9月25日4版発行

BOOK☆WALKER